

SK38 (第392図)

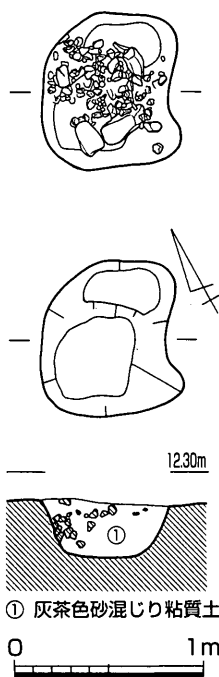
調査区西側の中央部の、旧G7区で検出した土坑である。平面形は長楕円形で、長径0.9m、短径0.4mである。掘り込みは緩やかで、深さ6cmと浅くなっている。埋土は灰茶色粘質土の単一層である。遺物は出土していない。

SK39 (第393図)

調査区西側の中央部の、旧G7区で検出した土坑で、SK38の東側に隣接している。平面形は長楕円形で、長径1.2m、短径0.5mである。掘り込みは緩やかで、深さ15cmである。埋土は灰茶色粘質土の単一層である。遺物は出土していない。

SK40 (第394図)

調査区西側の中央部の、旧G7区で検出した土坑で、SK39の東側に隣接している。東側部分は調査区外になり、全体の形状と規模は不明である。検出された部分から復元すると平面形は長楕円形になると考えられ、検出部分での長径0.7m、短径0.45mである。掘り込みは緩やかで、深さは15cmである。埋土は灰茶色粘質土の単一層である。遺物は出土していない。



SK41 (第395図)

調査区西側の中央部の、旧G7区で検出した土坑である。平面形は隅丸の長方形に近いが、南東隅が突出している。長辺0.8m、短辺は0.65mであるが突出部分で計測すると0.75mになる。掘り込みは北東部分が段になり、テラス状の面を形成している。深さは30cmで、埋土は灰茶色砂混じり粘質土の単一層である。長さ20cm程度の板状の礫が南側で、拳大の礫が北半分で出土している。主に埋土の上部での出土になっている。遺物は微細な遺物が少量出土している。

SK42 (第396図)

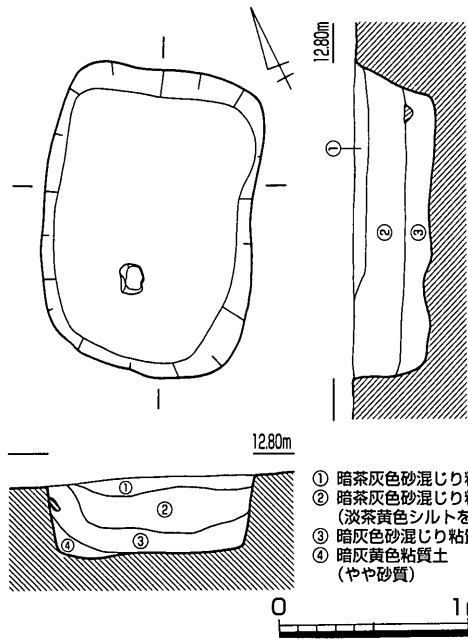
調査区南西隅の旧G8区で検出した土坑である。平面形は長方形で、長辺1.5m、短辺1.1mである。掘り込みは急で、垂直に近い部分が多い。底部は凹凸があり、西側隅の部分が少し深くなっている。深さは40cmで、埋土は暗茶灰～暗灰色砂混じり粘質土が中心で、最上層以外は粘土ブロックを含んでいる。遺物は細片が出土しているが、図化は出来なかった。

第395図 V区第2面SK41平・断面図(1/40)

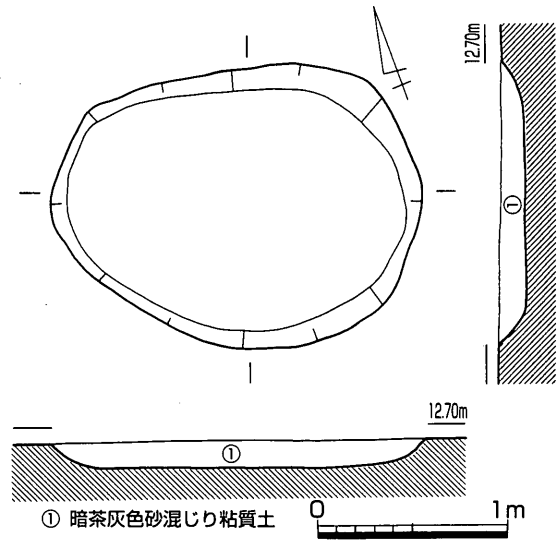
SK43 (第397図)

調査区南西隅の旧G8区で検出した土坑で、SK42の南西7mのところに位置している。

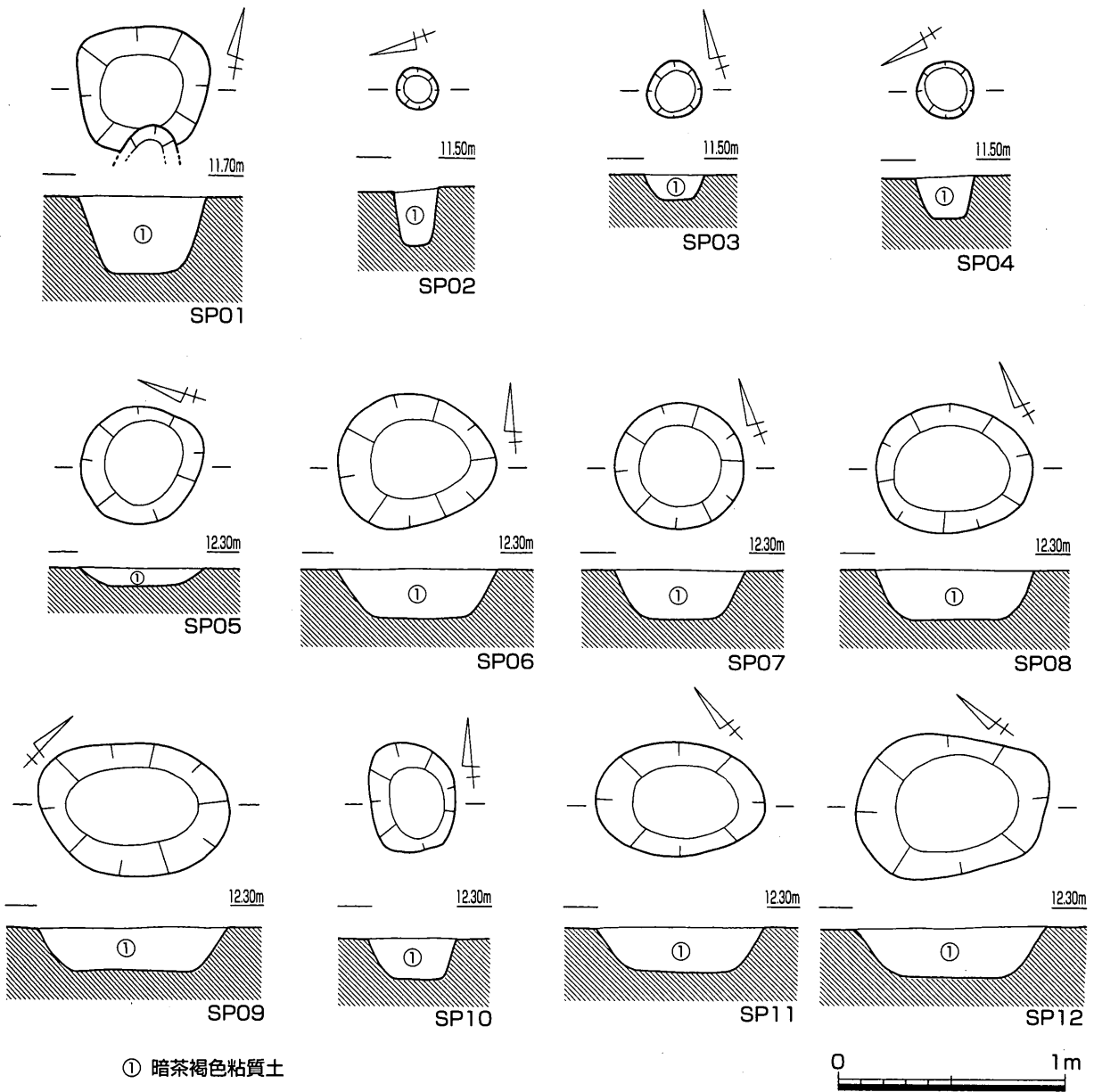
平面形は楕円形で、長径1.9m、短径1.4mである。掘り込みは緩やかで、底部は平坦である。深さは12cmで、埋土は暗茶灰色砂混じり粘質土の単一層である。遺物は出土していない。



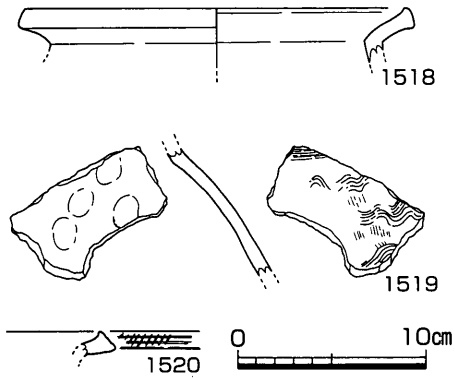
第396図 V区第2面SK42平・断面図 (1/40)



第397図 V区第2面SK43平・断面図 (1/40)



第398図 V区第2面SP01~12平・断面図 (1/30)

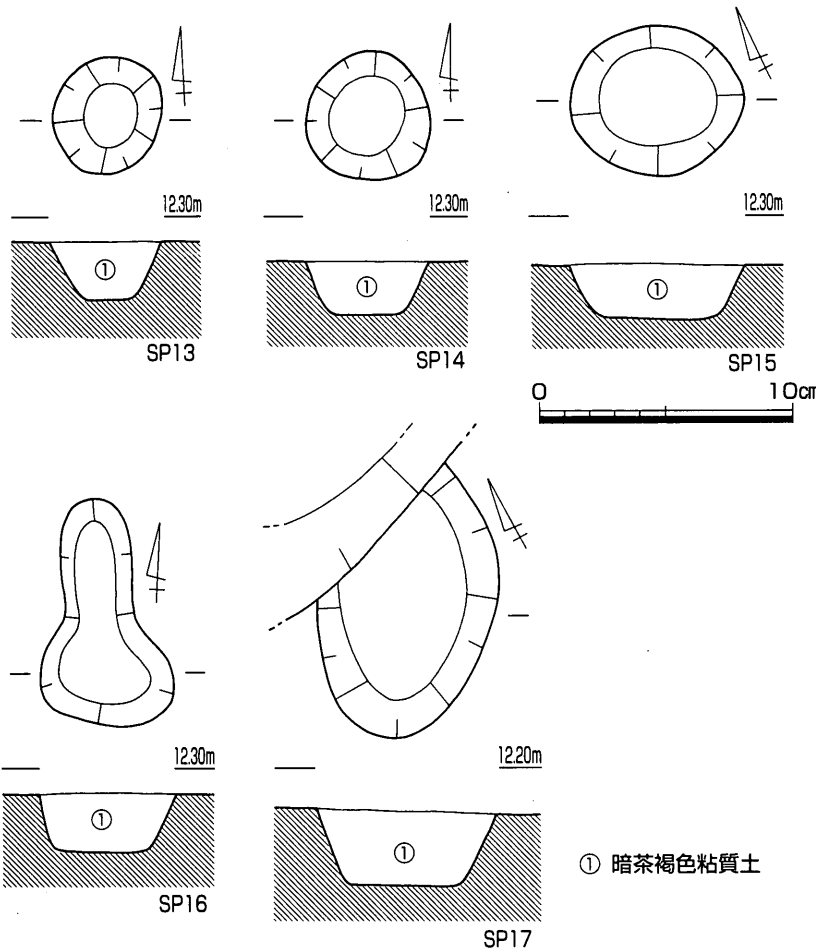


第399図 V区第2面SP01・02・10出土遺物(1/4)

SP01~17 (第398~400図)

いずれも調査区東側の、旧G 1区で検出した小穴である。平面形はSP01・10・12が隅丸方形、SP09・11・17が楕円形、SP16が不整形、それ以外は円形である。埋土はいずれも暗茶褐色粘質土の単一層である。

1518はSP01から出土した甕である。1519はSP02から出土した壺の体部である。外面には櫛描直線文と櫛描波状文を施している。1520はSP10から出土した壺の口縁部で、端部を上方に拡張し、外面には刻み目を施している。



第400図 V区第2面SP13~17平・断面図 (1/30)

に向かって下がっている。埋土は淡茶色粘質土の単一層である。

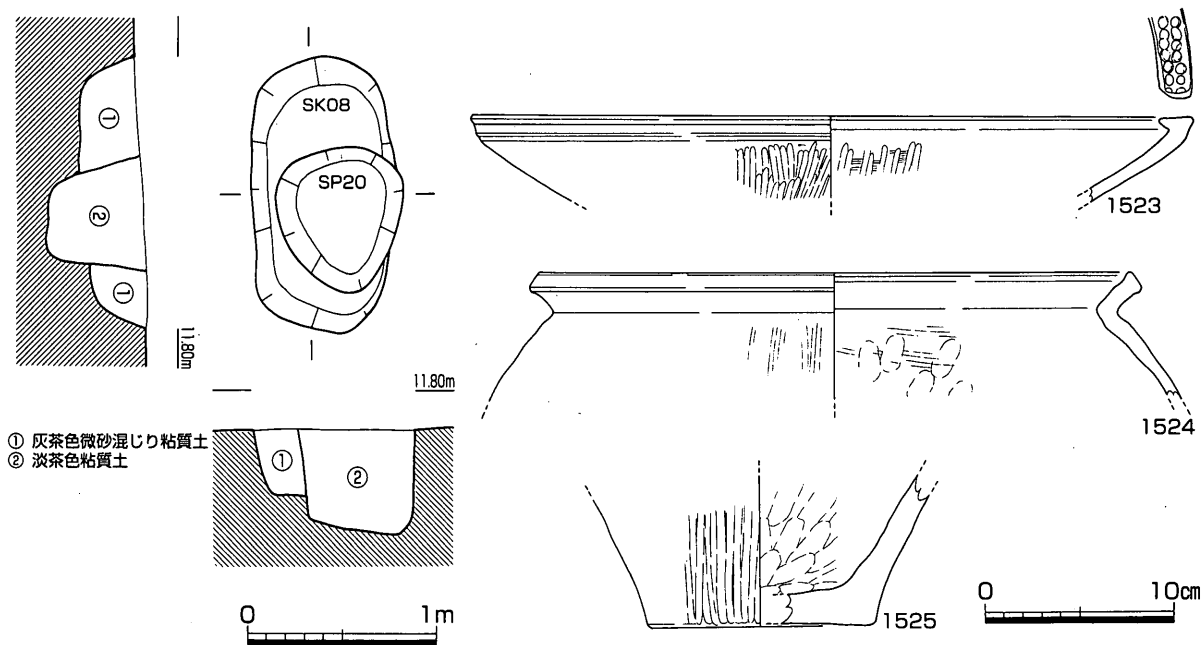
1523は高杯である。口縁部端部を内側に拡張し、上面の平坦な面には円形浮文を貼っている。杯部外面には全体にヘラミガキを施し、内面はハケ目の後にヘラミガキを加えている。この遺物は平成11年度調査概報 p 65で報告されているST03 (本報告遺構名: ST03) 出土遺物と同一個体で接合した。ST03出土のものは小片で、埋め戻し土からの出土であるので、本来はSP20に伴うものと考えた。なお、SP20

SP19

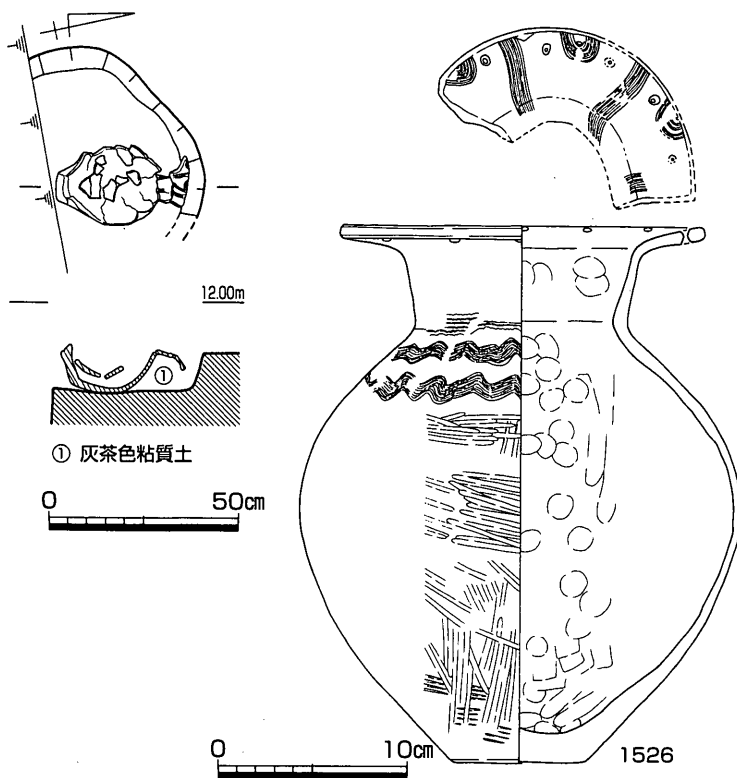
調査区北側のやや東寄りの、旧G 4区で検出した小穴である。平面形は直径0.5mの円形で、深さは40cmである。埋土は淡茶色粘質土の単一層で、遺物は出土していない。

SP20 (第359・401図)

調査区北側のやや東寄りの、旧G 4区で検出した小穴で、SP19の西側に隣接している。SK08と重なっており、SK08の埋没後に掘削されている。平面形は隅丸方形と楕円形の間形態である。南北方向は0.75m、東西方向は0.7mである。掘り込みは急で垂直に近い。底部は西側から東側



第401図 V区第2面SP20平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4)



第402図 V区第2面SP21平・断面図(1/20)、出土遺物(1/4)

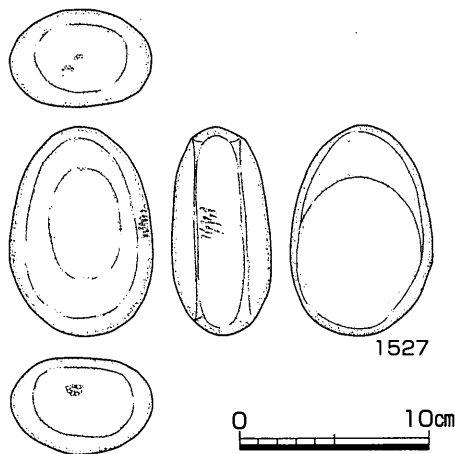
出土のものの方が破片は大きい。

1524は甕で、口縁部内面を強くナデている。体部の膨らみは強く、内・外面にハケ目を施している。1525は壺の底部と考えられる。外面には丁寧へラミガキを施し、内面には指でナデている。

SP21 (第402図)

調査区北側のやや東寄りの、旧G4区東壁際で検出した小穴である。南側は調査区外になるため、全体の形状と規模は不明である。東側の部分は不明瞭になっている。検出部分では長楕円形に近い。検出部分の東西は0.55m、南北は0.4mである。埋土は灰茶色粘質土の単一層である。埋土中からは縦に半分に割れたような状態で壺が1点横向きで出土している。

1526は壺で、口縁部は外傾する頸部から屈曲して、直線的に開く。口縁部と頸部はほぼ同じ長さになっている。口縁部内面には櫛描直線文を縦方向に、端部から頸部内面まで施している。その櫛描直線文の間に端部側に櫛描による円弧文を配置している。そしてこれらの文様の間に穿孔を施し、現存では5個ある。体部は最大径が中央にあり、外面の底部付近にはタタキが認められ、その後にヘラミガキを施している。内面は全体にナデているが、指押さえが顕著である。また体部上半部には櫛描波状文が巡り、その一部は頸部の屈曲部にもあるが不完全である。底部は中央部分が肥厚している。全体に装飾性に富んだ丁寧な作りである。



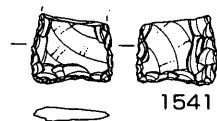
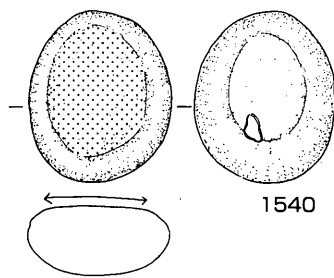
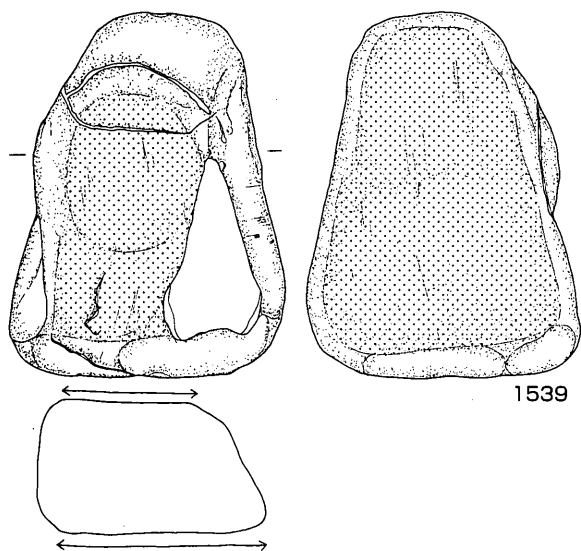
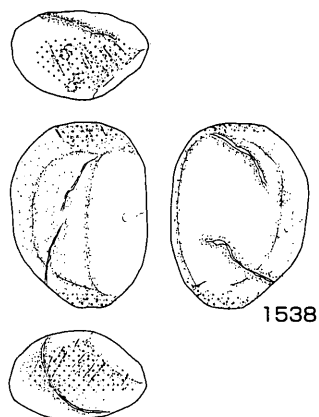
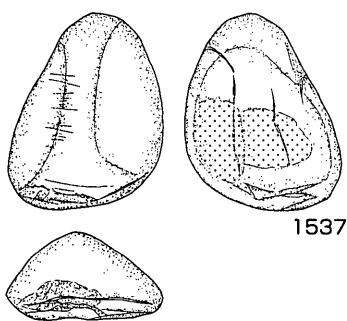
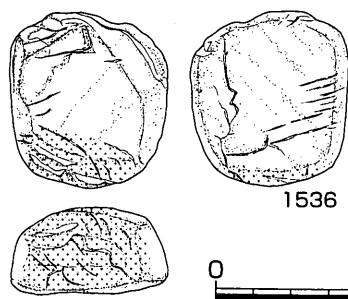
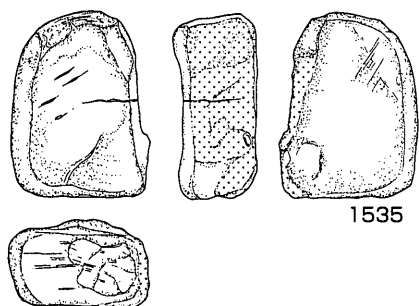
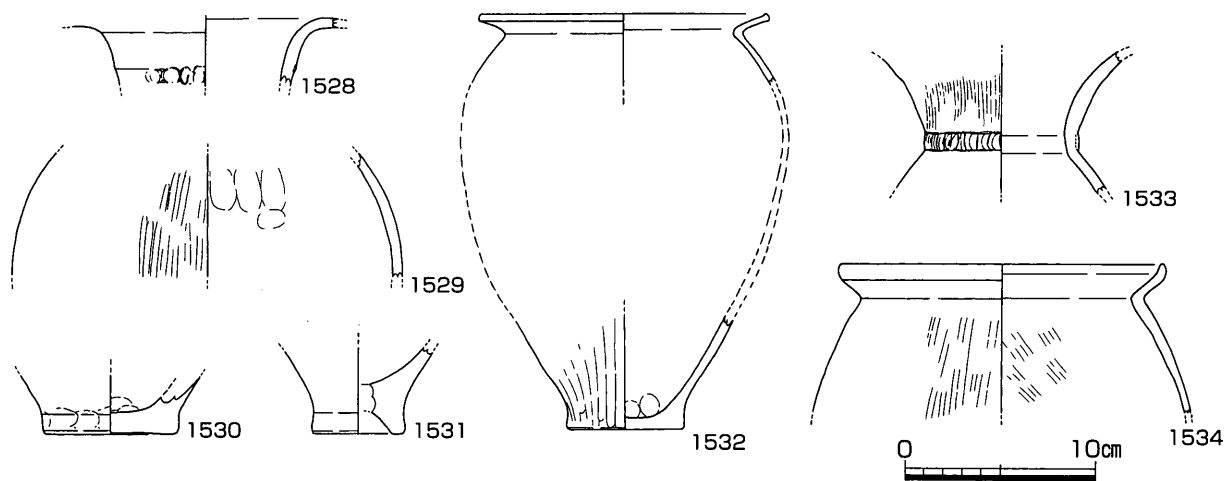
第403図 V区第2面SP22出土遺物 (1 / 4)

SP22～SP29 (第403～404図)

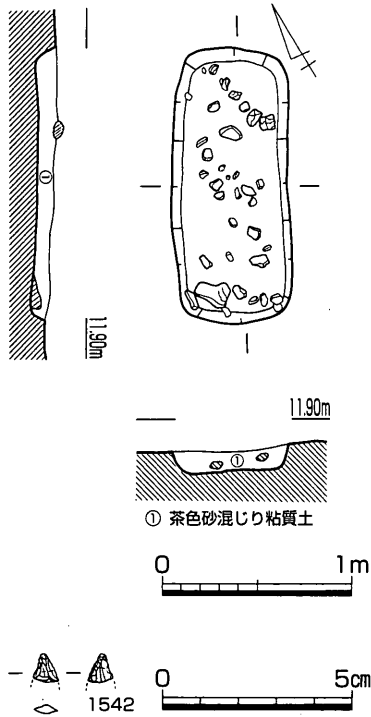
SP22は調査区北側の旧G 4区で、SP23～29は調査区西側中央部分の旧G 7区で検出した小穴である。いずれも平面形は円形で、直径20cm前後である。埋土は暗茶褐色～灰茶色粘質土の単一層である。

1527はSP22から出土した敲石である。上下両端と側面の1箇所に敲打を行った痕跡が認められるが、いずれも弱い。1529はSP23から出土した甕の体部である。外面にはヘラミガキを施している。1532はSP24から出土した甕である。口縁部は直線的に開いている。底部付近の外面にはヘラミガキが認められる。1531

はSP25から出土した甕の底部と考えられ、短い脚台が付いている。1528はSP26から出土した壺の頸部～口縁部である。口縁部は横に開き、頸部外面には刻目突帯を巡らせている。1541はSP27から出土した凹基の石鏃である。1533～1540はSP28から出土した遺物である。1533の壺は頸部に刻目突帯を巡らせている。1534の甕の口縁部端部は上方に拡張している。体部は内・外面共にハケ目を施している。1535～1538は磨石である。1535の側面の中央部分には手擦れ痕が認められる。1539・1540は砥石である。1530はSP29から出土した甕の底部である。



第404图 V区第2面SP23·24·25·26·27·28·29出土遗物 (1/4、1/2)



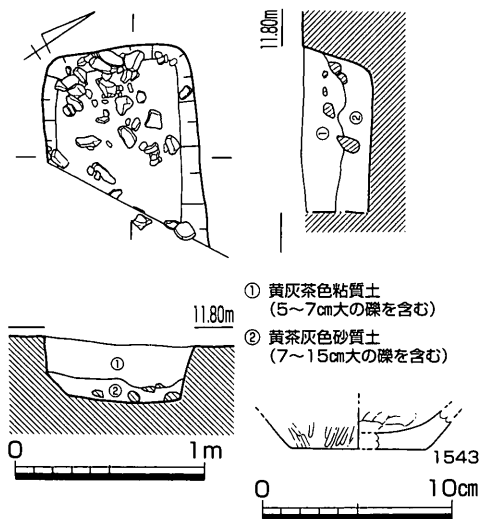
第405図 V区第2面ST01平・断面図(1/40)、出土遺物(1/2)

ST01 (第405図)

調査区北側のやや東寄りの、旧G4区で検出した土壌墓である。平面形は長方形で、長辺1.4m、短辺0.6mである。掘り込みは急で、底部は平坦になっている。深さは12cmと浅く、埋土は茶色砂混じり粘質土の単一層である。埋土には淡茶黄色粘土ブロックを含み、埋め戻された状況がうかがえる。また底部近くで5~10cm大の礫が量的には多くないが、敷かれたような状態で出土した。整った形状、掘り込みの角度、埋土の状況から土壌墓としたが、土壌墓にしては浅い。本来の掘り込み面は検出面より上部であったのかもしれない。

微細な遺物が少量出土している。1542は石鏃の先端部である。

遺物からの時期決定は困難であるが、検出面と周辺遺構との関連から、ST01は弥生時代中期中葉頃と考えておく。



第406図 V区第2面ST02平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4)

ST02 (第406図)

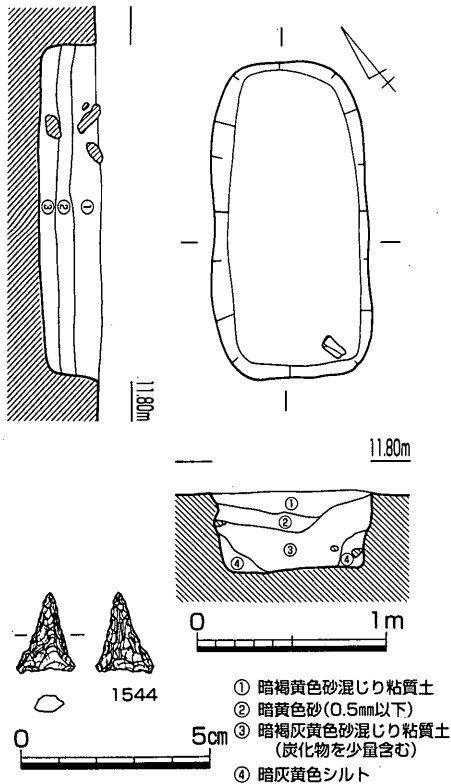
調査区北側のやや東寄りの、旧G4区の東壁際で検出した土壌墓である。東側は調査区外になるため、全体の形状と規模は不明である。検出した部分から復元すると、平面形は長方形になると考えられる。検出部分での長辺は1.05m、短辺0.8mである。掘り込みは急で、特に南西側は垂直に近い。底部は平坦になっている。深さは35cmで、埋土の上層は粘質土、下層は砂質土が堆積している。5~15cm大の礫が検出されたが、底面に敷いている状態ではなく、埋土中に含まれ、上層の礫ほど小さい傾向がある。

遺物の出土は少ない。1543は壺の底部と考えられる。外面にはヘラミガキを施している。内面はナデている。

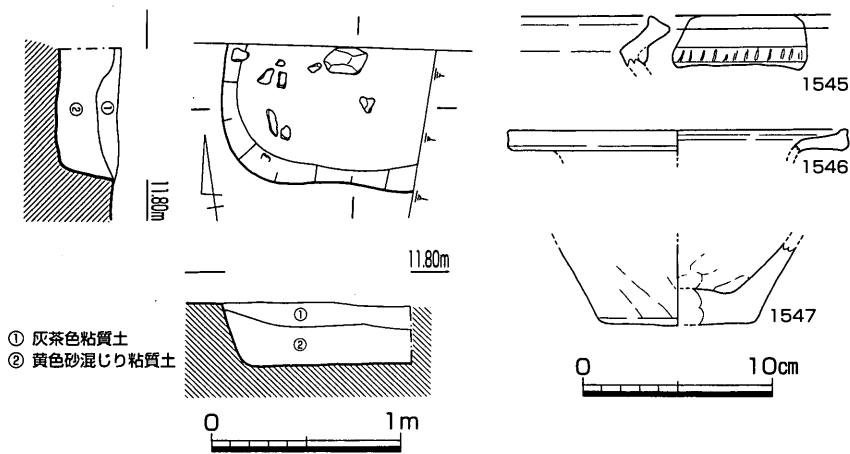
遺物からの時期決定は困難であるが、検出面と周辺遺構との関連から、ST01は弥生時代中期中葉頃と考えておく。

ST03 (第407図)

調査区北壁際の、中央やや北寄りの旧G4区で検出した土壌墓である。平面形は長方形であるが、北東隅は丸みを帯びている。長辺1.6m、短辺0.8mである。掘り込みは急で垂直に近く、底部は平坦になっている。深さは35~40cmで、埋土は暗褐色系の砂混じり粘質土が中心になっているが、中層部



第407図 V区第2面ST03平・断面図(1/40)、出土遺物(1/2)



第408図 V区第2面ST06平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4)

分には暗黄色砂が堆積している。

遺物の出土は少ない。1544は凹基の石鏃で、基部は不揃いである。このほか、平成11年度の調査概報 p 65 で報告した高杯の小片が出土しているが、SP20で報告したように、1523の高杯と接合している。検討の結果、SP20の遺物として報告している。

埋土に1523の一部が混じていたことから、ST03は弥生時代中期中葉以降に築かれたことが分かるが、検出面と周辺以降との関連で弥生時代中期中葉の所産と考えておく。

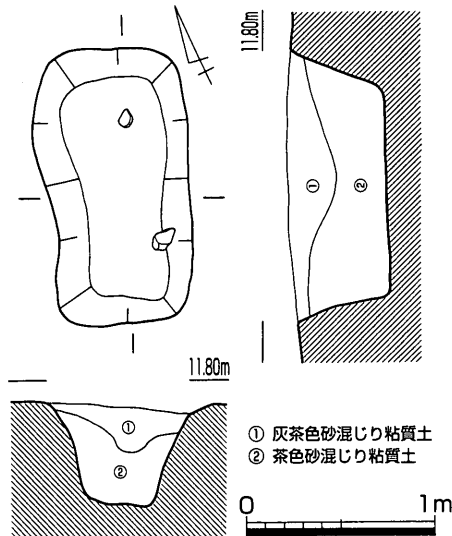
ST06 (第408図)

調査区北壁際の、中央やや北寄りの旧G 4区で検出した土壙墓で、ST03の北西側に隣接している。北側部分は調査区外で、東側部分は攪乱により削平されているため、全体の1/4しか検出されていない。平面形は長方形になると考えられる。長辺に相当するものは検出長で1.1m、短辺に相当する部分は検出長

で0.7mである。掘り込みは急で、底部は平坦になっている。深さは32cmで、埋土は茶色系の粘質土である。底部付近で20cm大の塊石が出土している。

遺物の出土は少ない。1545は甕で、口縁部端部を上方に拡張し、屈曲部外面には刻目突帯を巡らせている。1546は壺の口縁部で、真横に開き端部を上方に拡張している。1547は壺の底部である。

出土遺物からST06は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。



第409図 V区第2面ST07平・断面図 (1/40)

ST07 (第409図)

調査区北側のやや東寄りの、旧G 4区で検出した土壌墓である。SD03と重なり、SD03の埋没後に掘削されている。平面形は長方形で、長辺1.4m、短辺0.7~0.8mで北側のほうが少し幅が広がっている。掘り込みは急であるが、傾斜している。底部は若干北側のほうが高くなっている。深さは50cmで、埋土は灰茶色砂混じり粘質土と茶色砂混じり粘質土である。遺物は出土していない。

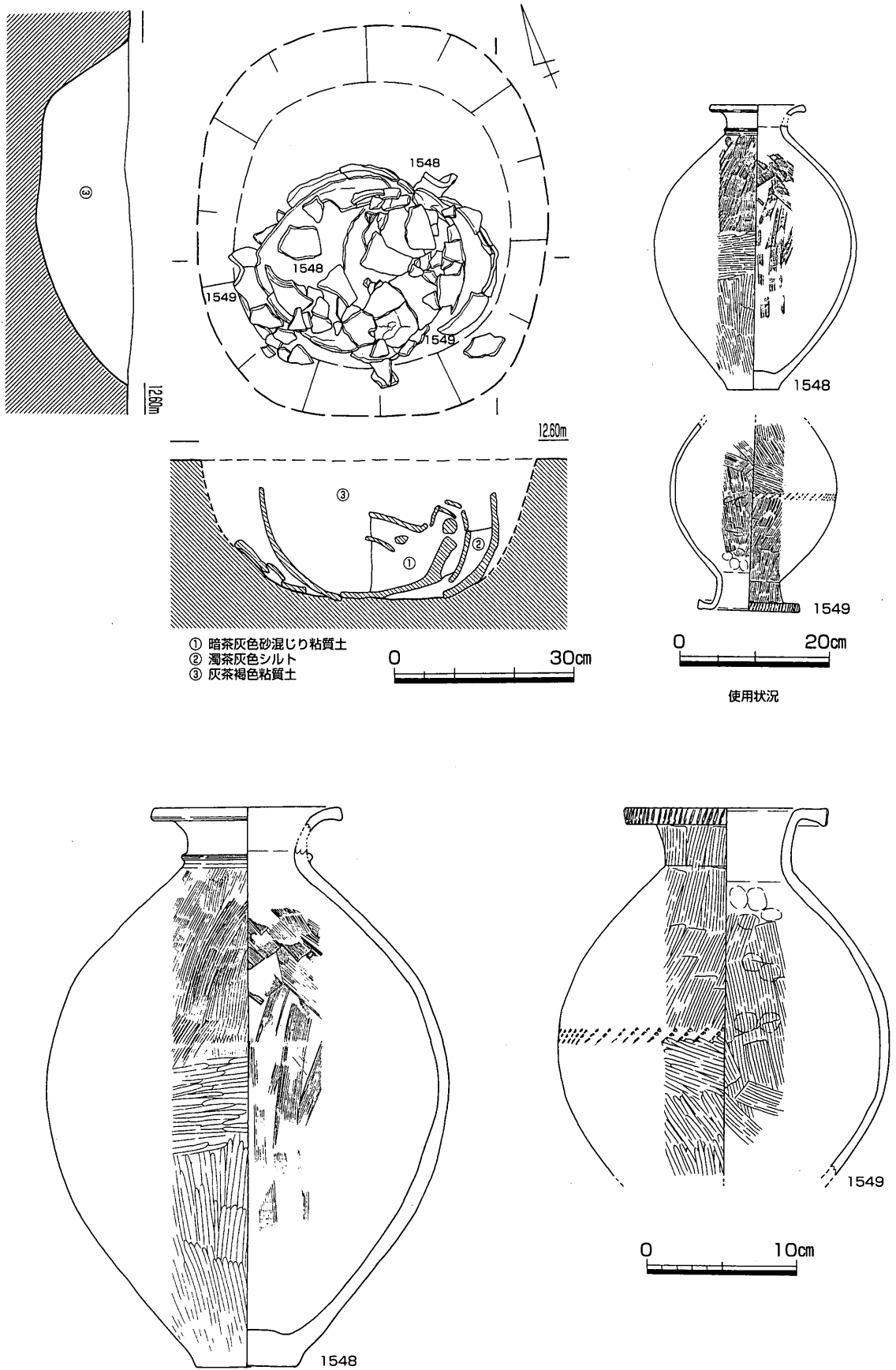
ST08 (第410図)

調査区南西部の旧G 6区で検出した土器棺墓である。旧G 6区の調査区際でトレンチ掘削中に検出したため、土壌を平面的に検出出来なかったものである。土壌の断面図も調査区壁の断面図から投影したものである。土壌の平面形は一辺0.6~0.65m程度の隅丸方形になりそうである。掘り込みは比較的緩やかで、北側部分が直線的であるのに対して、南側部分は湾曲している。深さは22cmで、埋土は灰褐色粘質土の単一層である。また土器の中には茶灰色系の砂混じり粘質土が堆積していた。

底部には2個体の壺が東西方向に置かれていた。1548の底部を東側に向けて、1549の底部を西側に向けて、両者の底部を合わせている。そして両者の頸部から上を割って、1548の口縁部を1549の体部の下に、逆に1549の口縁部を1548の体部の下に入れて、それぞれの体部の支えにしている。また図では反転復元しているが、1548の底部は半分しかなく、1548の底部もないことから、底部を合口するように加工している。

土器棺に使用した以外の遺物は出土していない。1548の口縁部は体部の大きさの割には小さい。全体に外反し、端部は下方に少し拡張している。頸部には貼付突帯が巡っている。体部の最大径は中央にあるが、上半部の膨らみはない。外面の上半にはハケ目を施し、下半には丁寧にヘラミガキを施しているが、中央部分のヘラミガキは横方向である。内面にはハケ目を施している。底部は肥厚している。1549の口縁部は外傾する頸部から屈曲して真横に開く。端部を下方に拡張して、外面には刻み目を施している。体部の最大径は中央にあり、中央部分には櫛状工具による圧痕文を巡らせている。外面の上半は頸部から引き続きハケ目を施し、下半にはヘラミガキを施している。内面はハケ目になっている。

土器棺に使用した土器から、ST08は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。

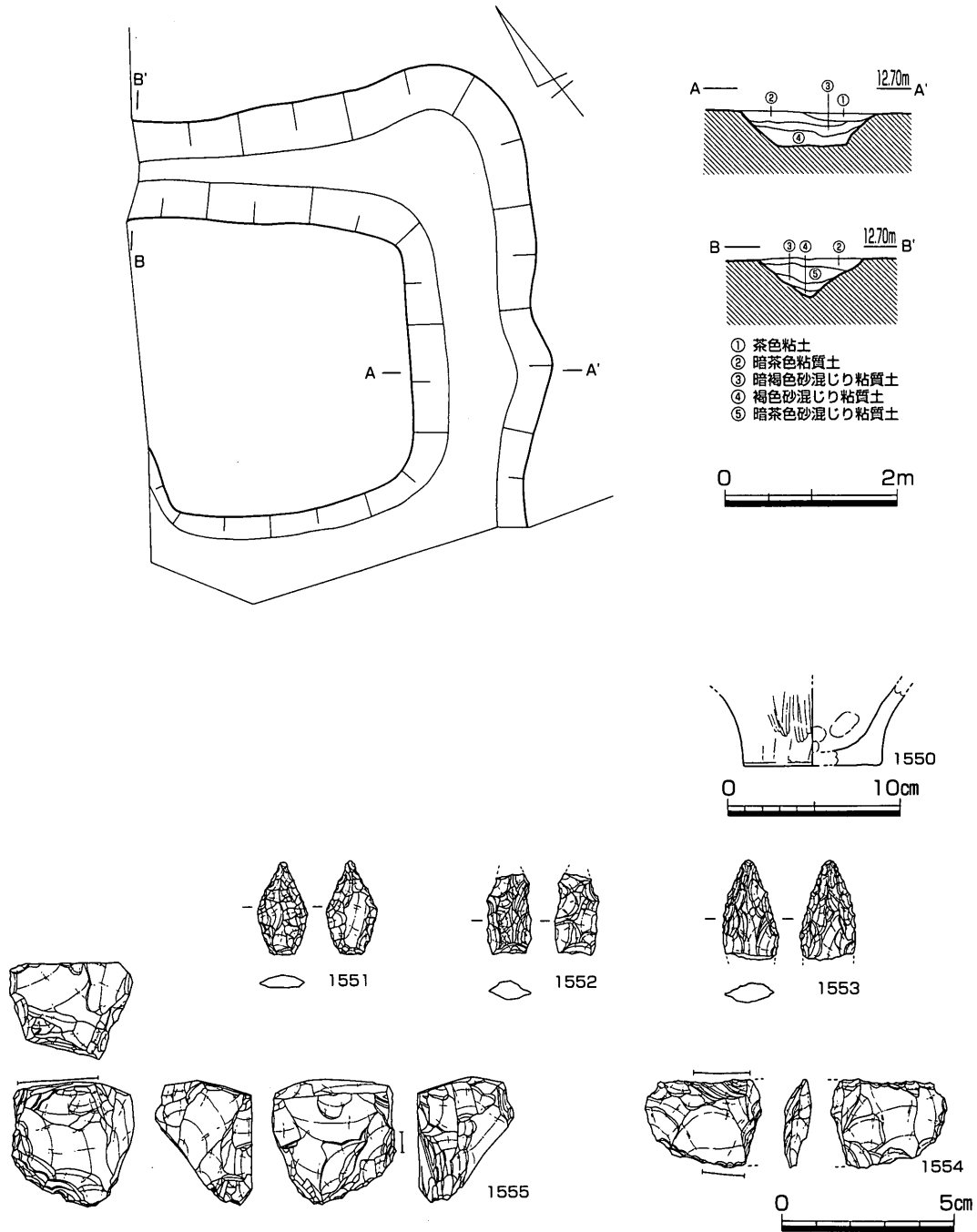


第410図 V区第2面ST08平・断面図 (1/10)、出土遺物 (1/4)、使用状況 (1/8)

SX01、SX01-D01 (第411図)

調査区南壁際の中央部の旧G 3区で検出した方形周溝墓 (SX01) 及びその周溝 (SX01-D01) である。西側部分と南側の周溝の一部が調査区外になるため、全体の形状と規模は不明である。周溝の西側は南側から北に向かって屈曲する部分が僅かながら検出されていることと、西側の調査区境のベルトを挟んで旧G 7区で検出されていないことから、このベルト内で収束すると考えられる。

墳丘の規模は周溝の内側で南北 (図の上下) 3.4m、東西 (図の左右) は検出部分で3.1mである。西側の周溝の屈曲部が僅かながら確認できることから、東西も南北と同様に3.4m近くになると思われ、正



第411図 V区第2面SX01、SX01-D01平・断面図 (1/80)、出土遺物 (1/4、1/2)

方形に近くなると考えられる。墳丘の上部は削平されて盛土は残っておらず、周溝の検出面と同じ高さである。主体部も検出されていない。

周溝は直線的に方形に巡っているが、南東側の外側が少し蛇行している。幅は北東部分が1.1～1.5m、南東部分が1.4～1.6mである。また東側屈曲部は幅2.1mと広がっている。周溝の掘り込みは比較的急であり、墳丘側のほうが直線的になっている。南東側の周溝は底部が平坦になっているが、北東部分では底部が狭く断面がV字形になっている。底部の標高は全体に12.1m前後であるが、南東側が少し低くなっている。検出面からの深さは40cm前後である。周溝の埋土は暗茶～褐色系の粘質土が主体となっている。周溝を含めた全体の規模は一辺6m前後の方形になると思われる。

周溝からの遺物の出土は少ない。1550は甕の底部と考えられる。外面にはヘラミガキを施している。1551～1553は石鏃で、このうち1551・1552は平基である。1551は鏃身中央部に最大幅がある。1554は楔形石器である。両極打撃の痕跡が顕著である。1555は石核である。打面を変えながら剥片を剥離している。部分的に弱い敲打痕が認められる。

出土遺物からの時期決定は困難であるが、後述する方形周溝墓SX03より後出することから、SX01は弥生時代中期中葉以降であるが、その下限は不明である。

SX02、SX02-D02（第412図）

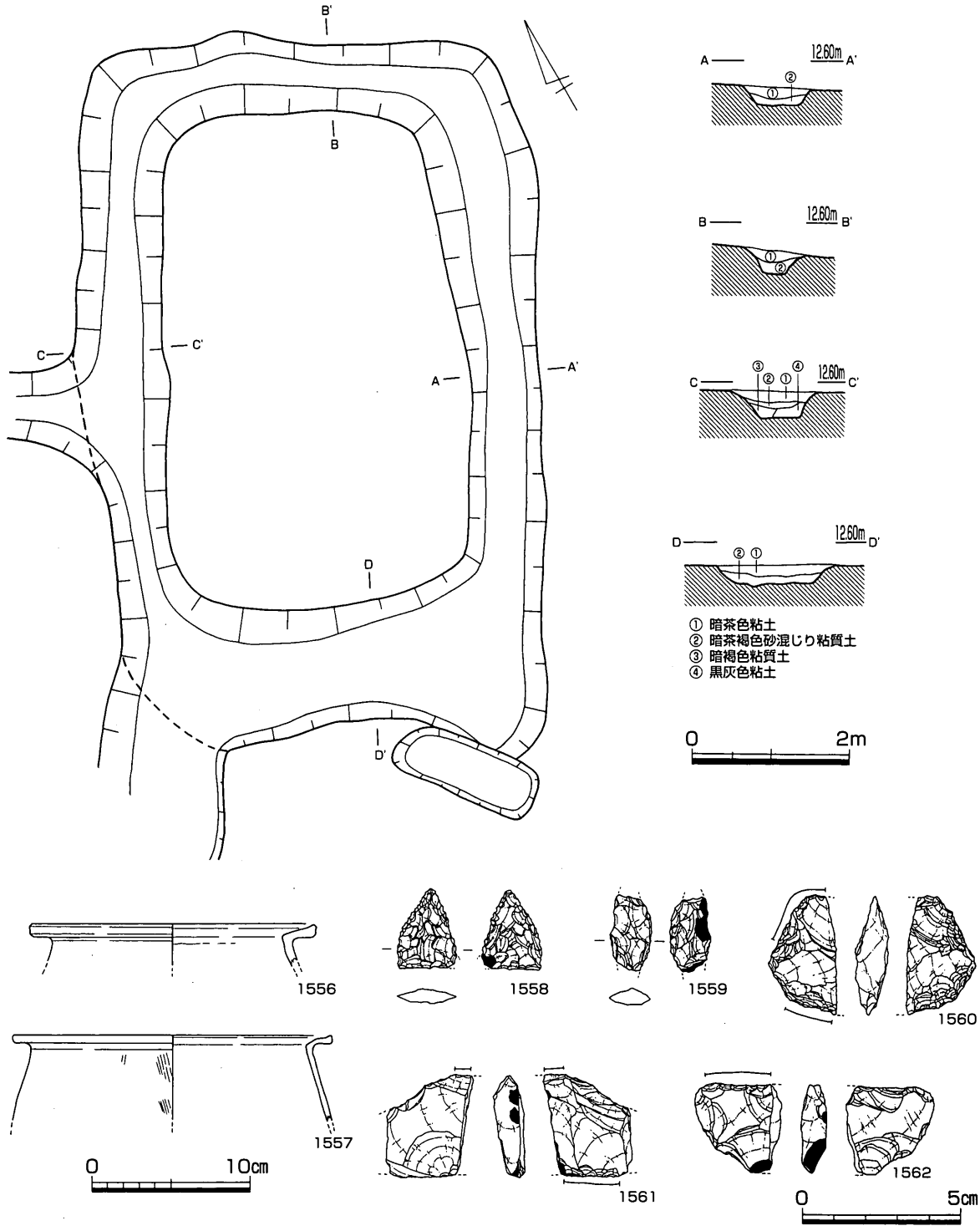
調査区南壁際の中央部の旧G3区で検出した方形周溝墓（SX02）及びその周溝（SX02-D02）で、SX01の北東部に隣接している。周溝の一部を方形周溝墓SX03と共有している。

墳丘の規模は周溝の内側で南北（図の上下）6.1m、東西（図の左右）3.5～3.8mで南北に長い長方形である。また東西は北側部分が少し狭くなっている。墳丘の上部は削平されて盛土は残っておらず、周溝の検出面と同じ高さである。主体部も検出されていない。また墳丘の下部には集石18があり、集石18を覆い隠すようにSX02は築かれている。また墳丘部分の検出面には集石18の頂部の礫が確認されたが、当然この礫は本来はSX02の盛土によって覆われているものである。

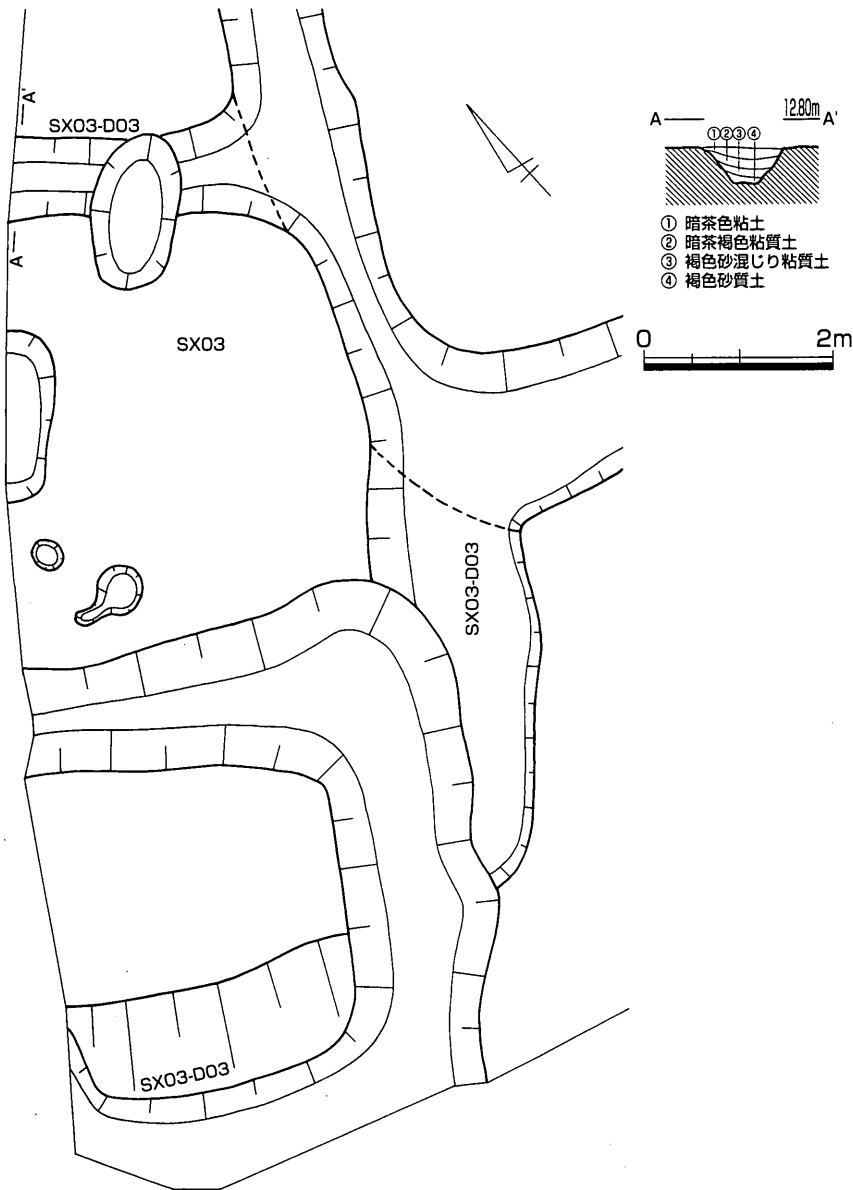
周溝は直線的に方形に巡っている。幅は南側が1.4～1.7mで他の部分より広がっている。他の部分は幅0.9～1.3mでほぼ同じ規模である。また南側隅の部分がやや突出している。周溝の掘り込みは大部分が湾曲している。墳丘側の掘り込みのほうが湾曲の度合いが強めになっている。底部はほぼ平坦であり、北側と西側の部分が狭くなっている。底部の標高は西側半分が12.15m前後、東側半分が12.0m前後で東側のほうが低くなっている。また東側の屈曲部付近の底部は標高11.9mで最も低くなっている。検出面からの深さは20～30cmである。周溝の埋土は基本的に下層に暗茶褐色砂混じり粘質土が、上層に暗茶色粘土が堆積しているが、下層に黒灰色粘土が堆積している部分もある。また西側の周溝の中央から少し北側の部分では、集石18の礫の一部が露出しており、集石18の遺物も量的には少ないが散乱していた。さらに南西部分では方形周溝墓SX03と周溝の一部を共有している。周溝を含めたSX02の全体の規模は南北8.4m、東西5.8mになる。

周溝からの遺物の出土は少なく、図示した遺物も北側の周溝からの出土で、集石18の遺物であった可能性は否定はできない。

1556・1557は甕である。両者とも口縁部屈曲部の内面は鋭い。1557は口縁部内面を強くナデており、体部外面は摩滅しているがハケ目が認められる。1558は平基の石鏃、1559の基部は欠損しているが凸基有茎式に近い。1560～1562は楔形石器である。いずれも両極打撃の痕跡が顕著である。



第412図 V区第2面SX02、SX02-D02平・断面図 (1/80)、出土遺物 (1/4、1/2)



第413図 V区第2面SX03、SX03-D03平・断面図 (1/80)

SX02は出土遺物からみると、弥生時代中期中葉が考えられるが、その南側で分かるようにSH02の後に築かれており、さらに集石18以降である。いずれにしても中期中葉の範囲の中であると考えられる。

SX03、SX03-D03
(第413図)

調査区南壁際の中央部の旧G3区で検出した方形周溝墓(SX03)及びその周溝(SX03-D03)で、SX01の南西側に隣接している。方形周溝墓SX02と周溝の一部を共有している。西側部分は調査区外になるが、調査区境のベルトを挟んで旧G7区で検出されていないことから、このベルト内で収束すると考えられる。また南側は方形周溝墓SX01の周溝により壊

されている。全体の形状と規模は不明である。

墳丘の規模は周溝の内側で、南北(図の上下)8.0m、東西(図の左右)は検出部分で3.8mである。平面形は方形あるいは長方形と考えられる。墳丘の上部は削平されて盛土は残っておらず、周溝の検出面と同じ高さである。墳丘上の調査区壁際で土坑SK34を検出したが、SX02とは無関係でSX02の埋没後に掘削されている。従って主体部は検出されていない。

周溝は直線的に方形に巡っている。幅は北東側が0.8~0.9m、南東側が1.6mである。南西部分は周溝の掘り込みの上部を検出しただけで、底部はSX01-D01によって壊されている。周溝の掘り込みは北東部分ではV字形に近いが、墳丘側が少し湾曲している。南東側部分は墳丘側が緩やかであるが、外側は急になっている。底部は北東側が狭く、南東側は広く平坦である。底部の標高は全体に12.15m前後で、検出面からの深さは40cm前後である。周溝の埋土は暗茶~褐色粘質土が主となっているが、最下層には褐色砂質土が堆積している。北東部分では方形周溝墓SX02と周溝を共有している。周溝から遺

物は出土していない。周溝を含めたSX03の全体の規模は不明である。

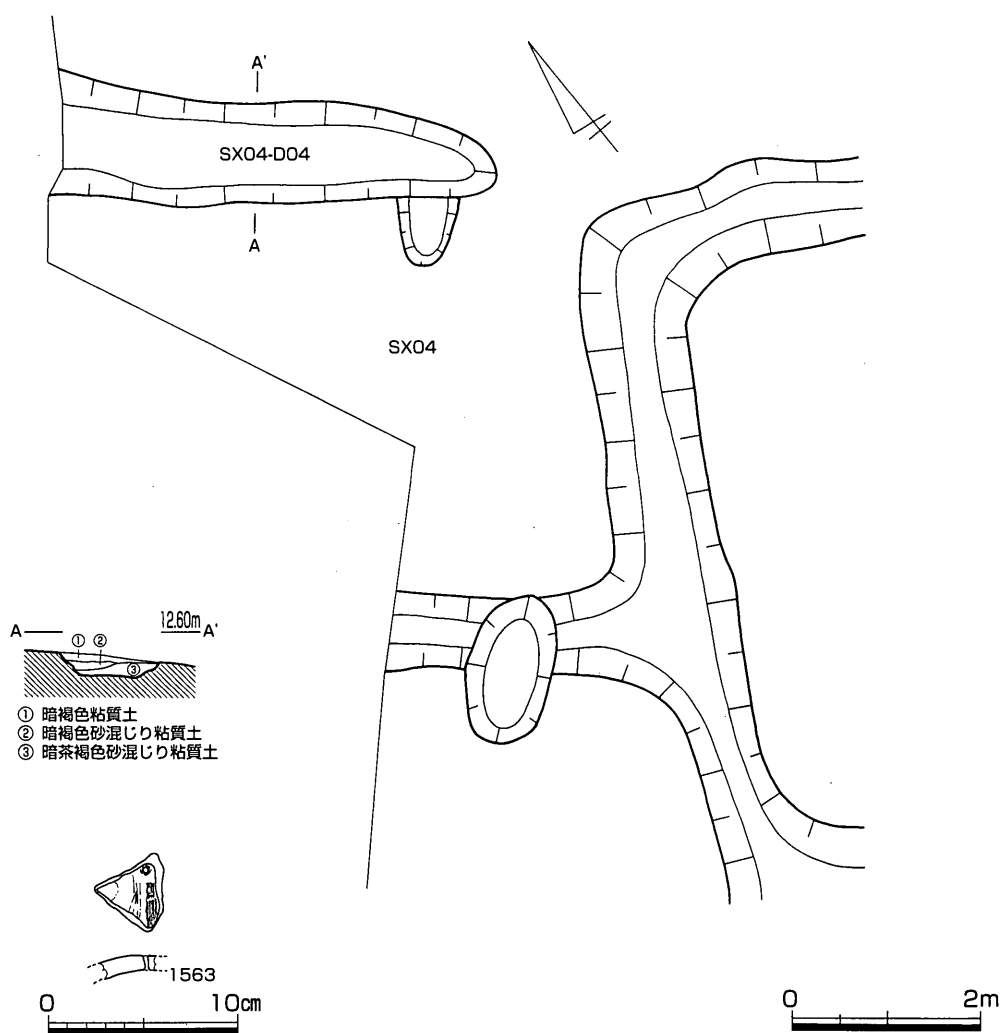
遺物は出土していないが、SX02と周溝を共有していることから、SX02と同時期の弥生時代中期中葉の所産と考えられる。

SX04、SX04-D04（第414図）

調査区南壁際の中央部の旧G 3区で検出した方形周溝墓（SX04）及びその周溝（SX04-D04）で、SX03の北東側に隣接している。方形周溝墓SX02・03と周溝を共有している。西側部分は調査区外になるが、調査区境のベルトを挟んで旧G 7区で検出されていないことから、このベルト内で収束すると考えられる。全体の形状と規模は不明である。

墳丘の規模は周溝の内側で、南北（図の上下）4.1m、東西（図の左右）は検出部分で5.6mである。平面形は長方形になる。墳丘の上部は削平されて盛土は残っておらず、周溝の検出面と同じ高さである。主体部も検出されていない。

周溝は直線的に方形に巡っているが、東側隅の部分は1.1mほど途切れている。幅は北東部分で1.1mである。また東側は方形周溝墓SX02の周溝と共有しており、幅は1.1mになる。さらに南西側は方形周

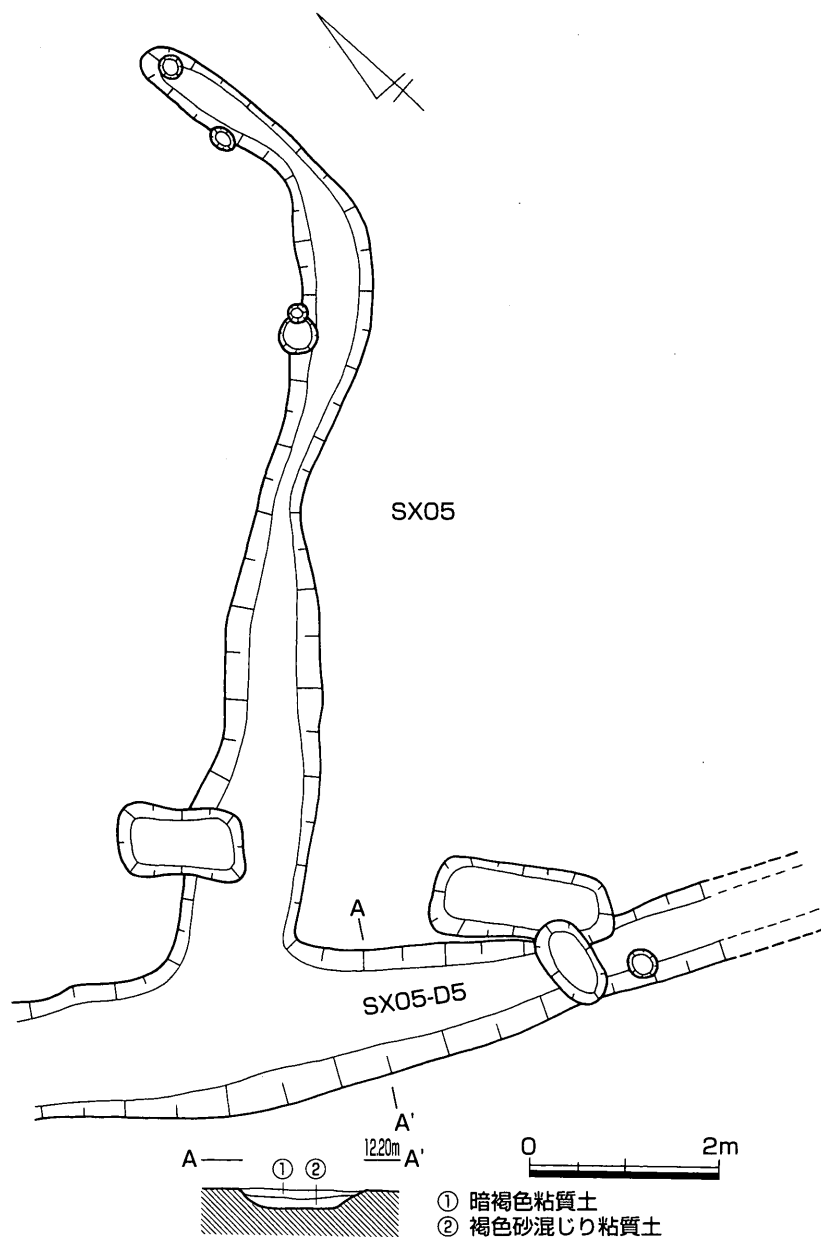


第414図 V区第2面SX04、SX04-D04平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）

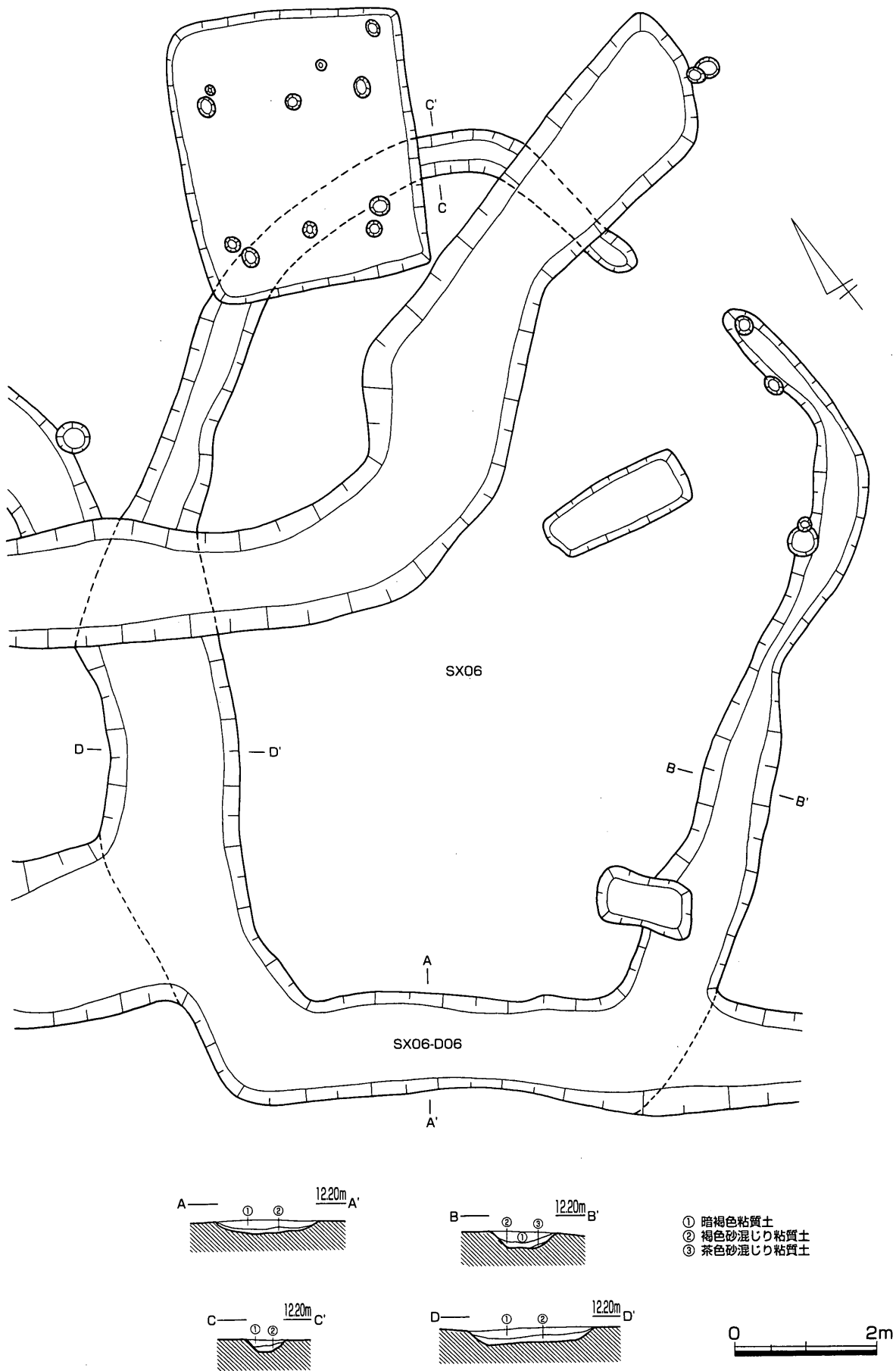
溝墓SX03の周溝と共有しており、幅は0.8~0.9mである。周溝の掘り込みは北東部分では僅かに段になっており、墳丘側の傾斜が急になっている。底部の標高は12.15mである。ほかの方形周溝墓と共有している周溝は底部の幅が狭く、北東部分より掘り込みの傾斜が急になっている。検出面からの深さは20cmである。北東部分の周溝の埋土は暗褐~暗茶褐色の粘質土が主体となっている。周溝を含めたSX04の全体の規模は南北5.9mであるが、東西は不明である。

周溝からは微細な遺物が少量出土している。1563は壺の口縁部の細片である。内面には櫛描波状文が施され、穿孔が現存で1個ある。また外面は摩滅しているが、内面にはヘラミガキが認められる。

SX04は出土遺物と、SX02・03と周溝を共有していることから、弥生時代中期中葉の所産と考えられる。



第415図 V区第2面SX05、SX05-D05平・断面図 (1/80)



第416図 V区第2面SX06、SX06-D06平・断面図 (1/80)

SX05、SX05-D05（第415図）

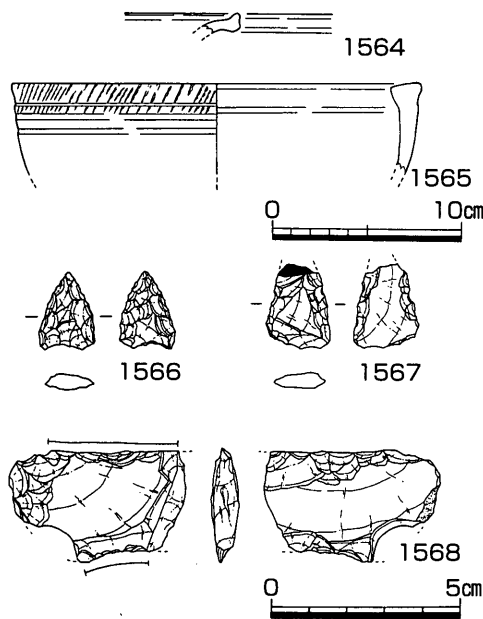
調査区中央部の旧G3区で検出した方形周溝墓（SX05）及びその周溝（SX05-D05）である。方形周溝墓SX04の東側13mのところにある。方形周溝墓SX06と周溝を共有している。

南西部分の周溝は4.2mしか検出されず、続きは不明瞭になる。また北-東-南側の周溝も検出されず、唯一完全に検出されたのは、方形周溝墓SX06と共有する部分の周溝である。周溝の巡りははなはだ不完全であるが、方形周溝墓SX06の周溝から連続して周溝と考えられる溝が伸びていることから、方形周溝墓と考えたものである。

検出された部分の周溝は、幅0.9~1.4mで、掘り込みは墳丘側が湾曲しているが、外側は直線的である。検出面からの深さは20cmで、埋土は暗褐色粘質土と褐色砂混じり粘質土である。

墳丘と全体の規模は不明であるが、共有する方形周溝墓SX06の規模から考えると、北東-南西（図の上下）で10mほどになりそうである。平面形は長方形と考えられる。墳丘の上部は削平されて盛土は残っておらず、周溝の検出面と同じ高さである。主体部も検出されていない。

周溝から遺物は出土していない。弥生時代中期中葉と考えられる方形周溝墓SX06と周溝を共有していることから、SX05はSX06と同時期の弥生時代中期中葉と考えられる。



第417図 V区第2面SX06-D06出土遺物(1/4、1/2)

SX06、SX06-D06（第416~417図）

調査区中央部の旧G3区で検出した方形周溝墓（SX06）及びその周溝（SX06-D06）である。方形周溝墓SX05の北西側に隣接している。方形周溝墓SX05・07と周溝を共有している。北側部分をSH12とSD14によって壊されている。

墳丘の規模は周溝の内側で、北東-南西（図の上下）11.3m、北西-南東（図の左右）5.7~8.2mである。平面形は概ね長方形と言えるが、南西部分（図の下側）より北東部分（図の上側）のほうが幅が広くなり、むしろ五角形に近くなっている。墳丘の上部は削平されて盛土は残っておらず、周溝の検出面と同じ高さである。墳丘上に土坑が検出されているが、SX06とは無関係でSX06の埋没後に掘削されている。従って主体部は検出されていない。

周溝は途中で屈曲しながら直線的に巡っているが、東側の部分が1.4mほど途切れている。幅は南西部分が1.2~1.4m、北西部分が0.7~1.8m、東側部分が0.5m、南東部分が0.4~1.3mである。全体的に東半分の周溝の幅が狭くなっている。周溝の掘り込みは、幅が広い部分は緩やかであるが、逆に幅の狭い部分は急になっている。幅の狭い部分は底部も狭く、底部の標高も他の部分が11.85m前後であるのに対して、11.75m前後と少しではあるが低くなっている。検出面からの深さは20cmである。埋土は暗褐色~褐色の粘質土が主体となっている。周溝を含めたSX06の全体の規模は北東-南西（図の上下）13.2m、北西-南東（図の左右）9.0~9.6mである。

周溝からの遺物の出土は少ない。1564は甕の口縁部で、端部を上方に拡張している。1565は鉢で、口

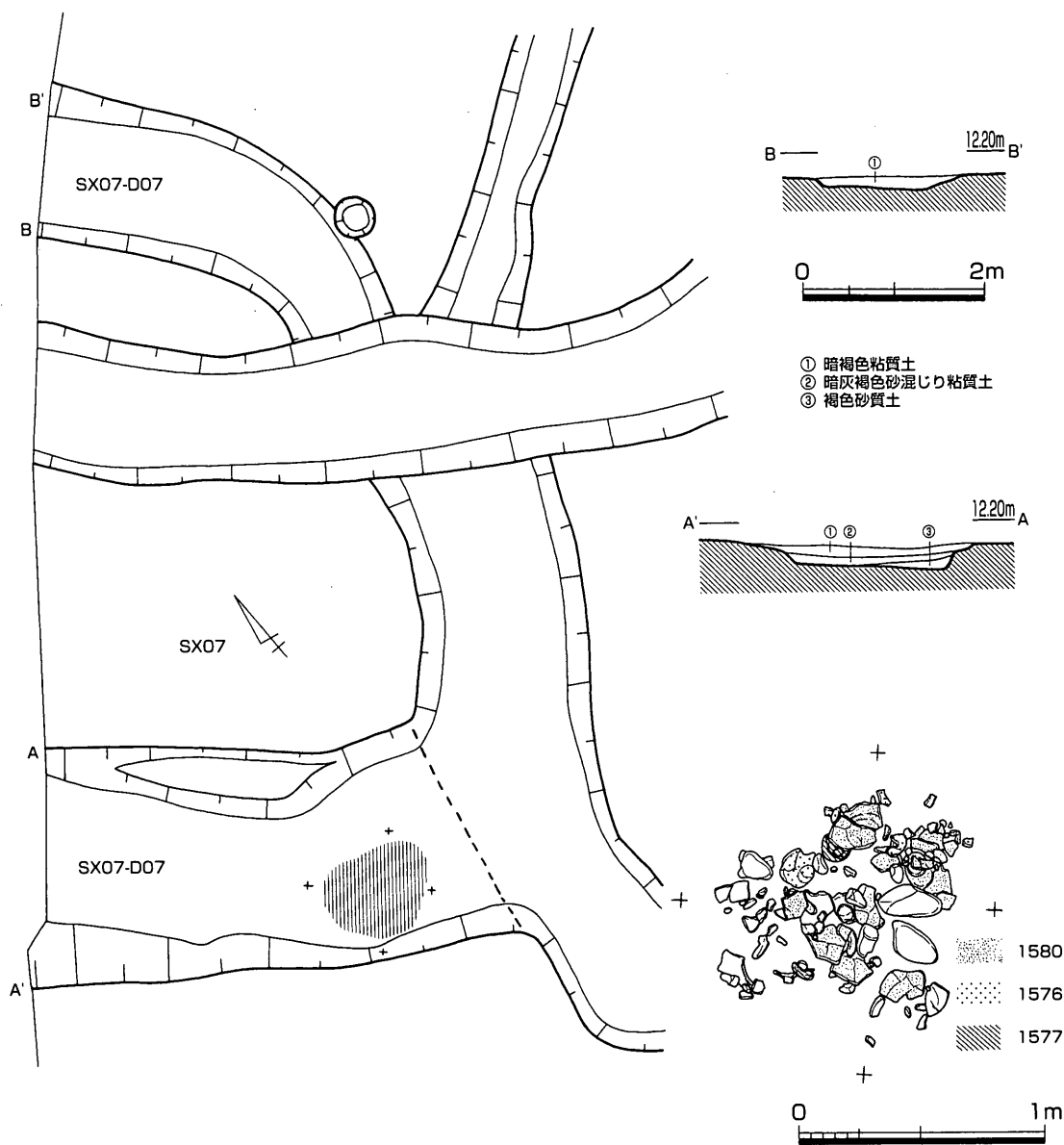
縁部端部を内・外面側に拡張させ、上面に内側に傾斜する面を作っている。外面には刻み目の後に凹線を巡らせている。1566は凹基の石鏃、1567は石鏃の未製品である。1568は楔形石器で、截断面には両極打撃の際の上下からのリングがぶつかっている。

出土遺物からSX06は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。

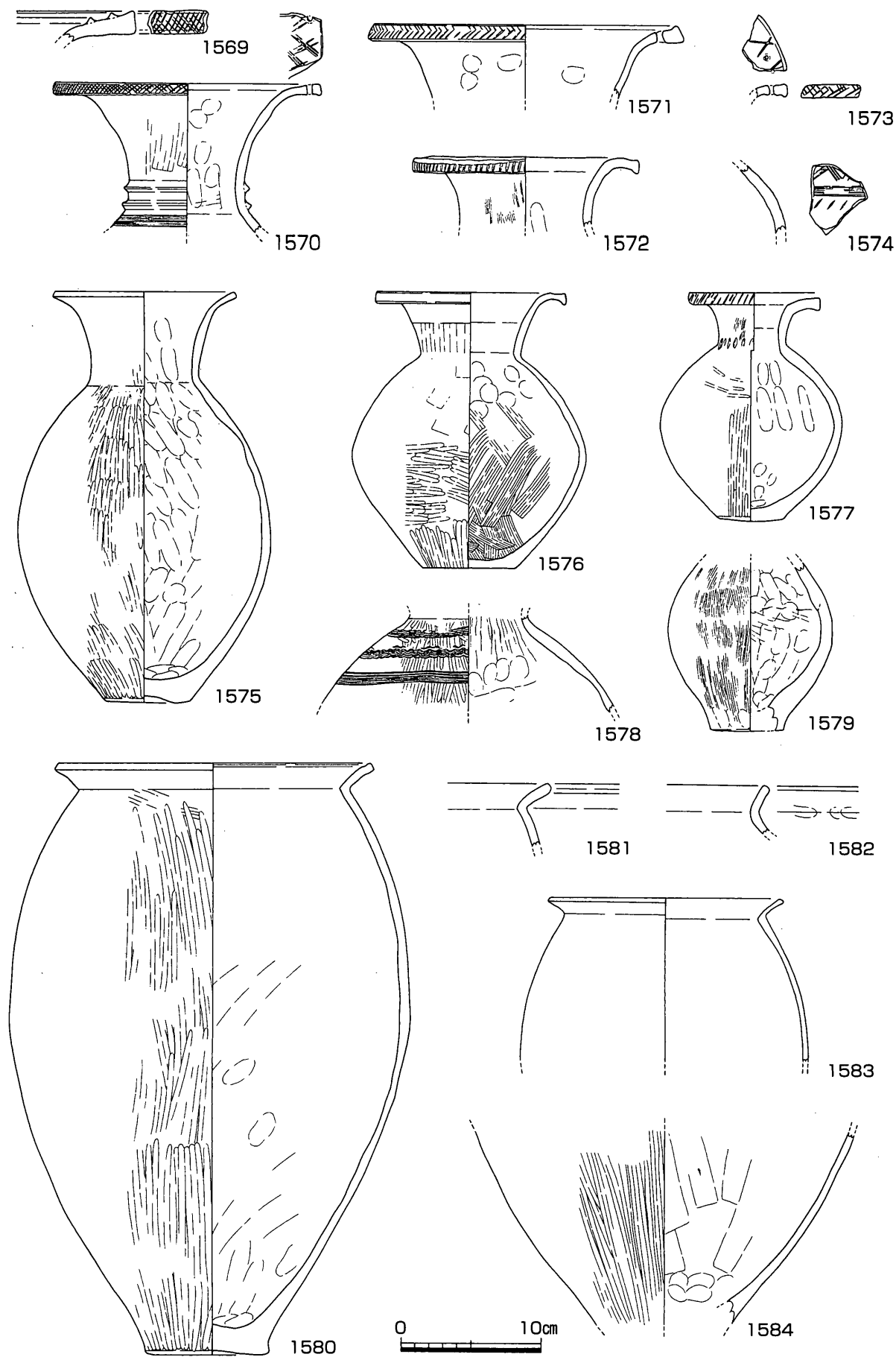
SX07、SX07-D07（第418～420図）

調査区中央部の旧G 3区で検出した方形周溝墓（SX07）及びその周溝（SX07-D07）である。方形周溝墓SX06の北西側に隣接している。方形周溝墓SX06と周溝の一部を共有している。北西部分は調査区外になるが、調査区境のベルトを挟んで旧G 7区で検出されていないことから、このベルト内で収束すると考えられる。また中央部分をSD14によって壊されている。

墳丘の規模は周溝の内側で、北東-南西（図の上下）5.5m、北西-南東（図の左右）は検出した部分で2.8~4.2mである。平面形は概ね方形と言えるが東側の部分が丸みを帯びている。墳丘の上部は削



第418図 V区第2面SX07、SX07-D07平・断面図（1/80）、遺物出土状況図（1/30）



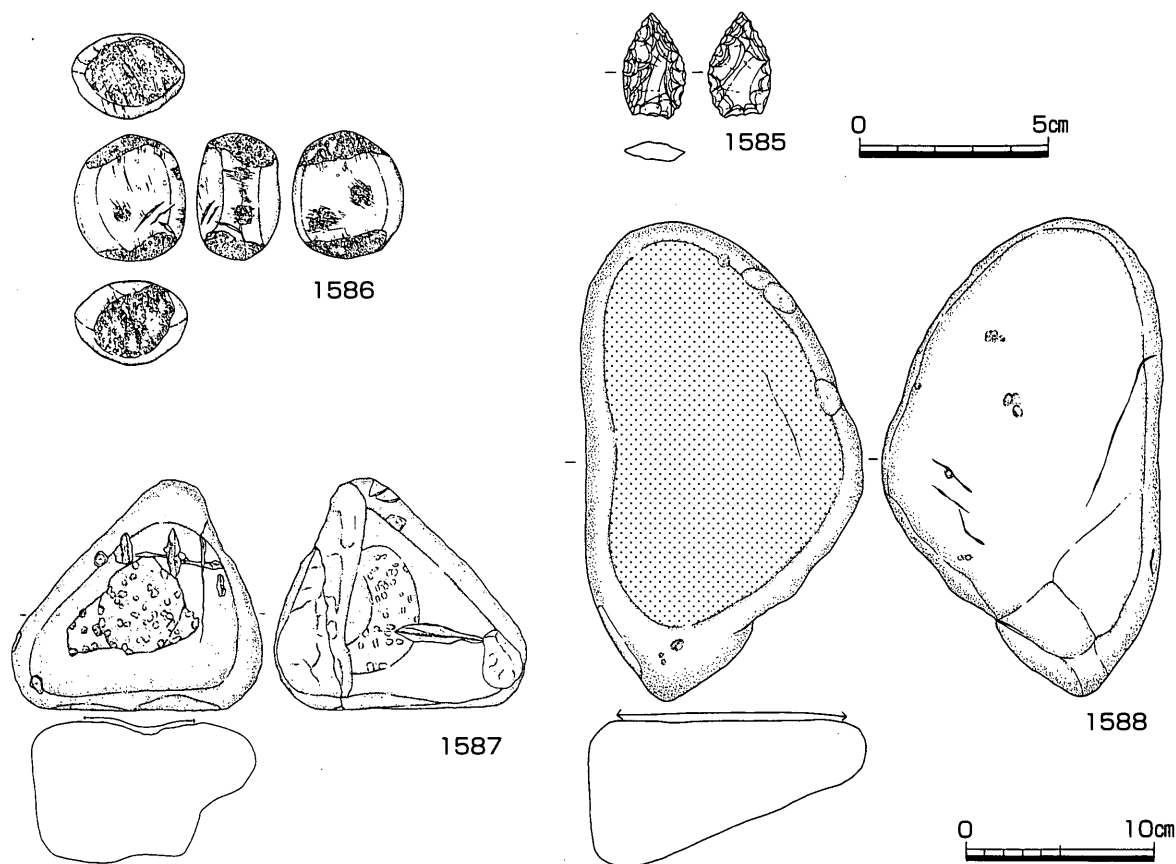
第419图 V区第2面SX07-D07出土遗物(1)(1/4)

平されて盛土は残っておらず、周溝の検出面と同じ高さである。主体部は検出されていない。

周溝の南西部分は直線的であるが、その他の部分は丸みを帯びて巡っている。幅は南西部分が2.5m、東側部分が1.8m、北東部分が1.6mである。掘り込みは南西部分の墳丘側が段になっており、部分的にテラス状の面を形成している。その他の部分は直線的である。底部の標高は北東～東側部分が11.8mであるのに対して、南西部分は11.7mと低くなっている。この南西部分の周溝の底部は墳丘側のほうが低い。検出面からの深さは20cm前後である。埋土は暗褐～暗茶褐色の粘質土が主体となっているが、部分的に褐色砂質土が堆積している。東側の周溝の形状などは、SX06の周溝断面D-D'と同じである。周溝を含めたSX07の全体の規模は北東-南西(図の上下)9.8m、北西-南東(図の左右)は検出部分で4.0~6.0mである。

周溝の南側で、SX06-D06との交点近くで、遺物が集中的に出土した。特に1576・1577の壺と、1580の甕がその場で潰れたような状態で出土した。出土した土器はすべて壺と甕である。

1569~1579は壺である。1569の口縁部内面には突帯が2条巡っている。1570の口縁部は外傾する頸部から真横に開いている。端部外面と内面に斜格子文を施している。穿孔が現存で1個ある。頸部は細く外面に突帯が2条巡っている。外面には粗いハケ目を施している。突帯の下部には櫛描直線文が見られる。1571の口縁部は肥厚し、端部を上方に拡張し、外面には刻み目を羽状に施している。1572の口縁部は強く外反し、端部は外反部分より下がっている。1575は頸部から口縁部にかけて全体に外反している。体部は最大径が下半にある卵形である。外面にはヘラミガキを全体に施し、内面は全体に指ナデとなっている。底部は上げ底である。1576の口縁部は外傾する頸部から真横に開いている。頸部上半から



第420図 V区第2面SX07-D07出土遺物(2)(1/2、1/4)

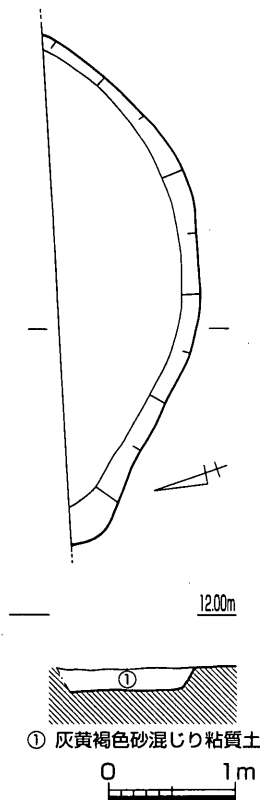
口縁部は全体にナデている。頸部外面下半は板ナデで面取りのようになっている。体部は最大径が中央にある球形である。外面の下半にはヘラミガキを施し、内面はハケ目になっている。1577の口縁部は直立気味の頸部から真横に開く。頸部の下部にはヘラ圧痕文が認められる。体部は最大径が中央にある球形である。外面にはヘラミガキを施し、内面はナデている。1578は体部上半の膨らみは強く、外面にはヘラミガキの後に櫛描波状文と櫛描直線文を巡らせている。

内面の上部には粘土の皸が見られる。1579の体部最大径は中央にあり、外面には全体にハケ目を施している。内面は指押さえが顕著である。底部は欠損しているがかなり肥厚している。

1580～1584は甕である。1580の口縁部屈曲部内面は鋭く、端部内面を強くナデている。体部最大径は中央にあり、縦に長い。外面にはハケ目の後に部分的にナデて、最後にヘラミガキを加えている。内面は摩滅しているが、下半部に板ナデを施している。1583の口縁部屈曲部内面は鋭い。全体に摩滅している。1584は甕の体部で、外面にはヘラミガキを施し、内面は板ナデであるが、僅かに砂粒が動いている。

1585は石鏃で凹基と平基の中間形態である。1586は敲石で、上下両端を使用している。1587は凹石、1588は砥石で被熱赤変している。

以上の出土遺物から、SX07は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。



第421図 V区第2面SX08平・断面図(1/60)

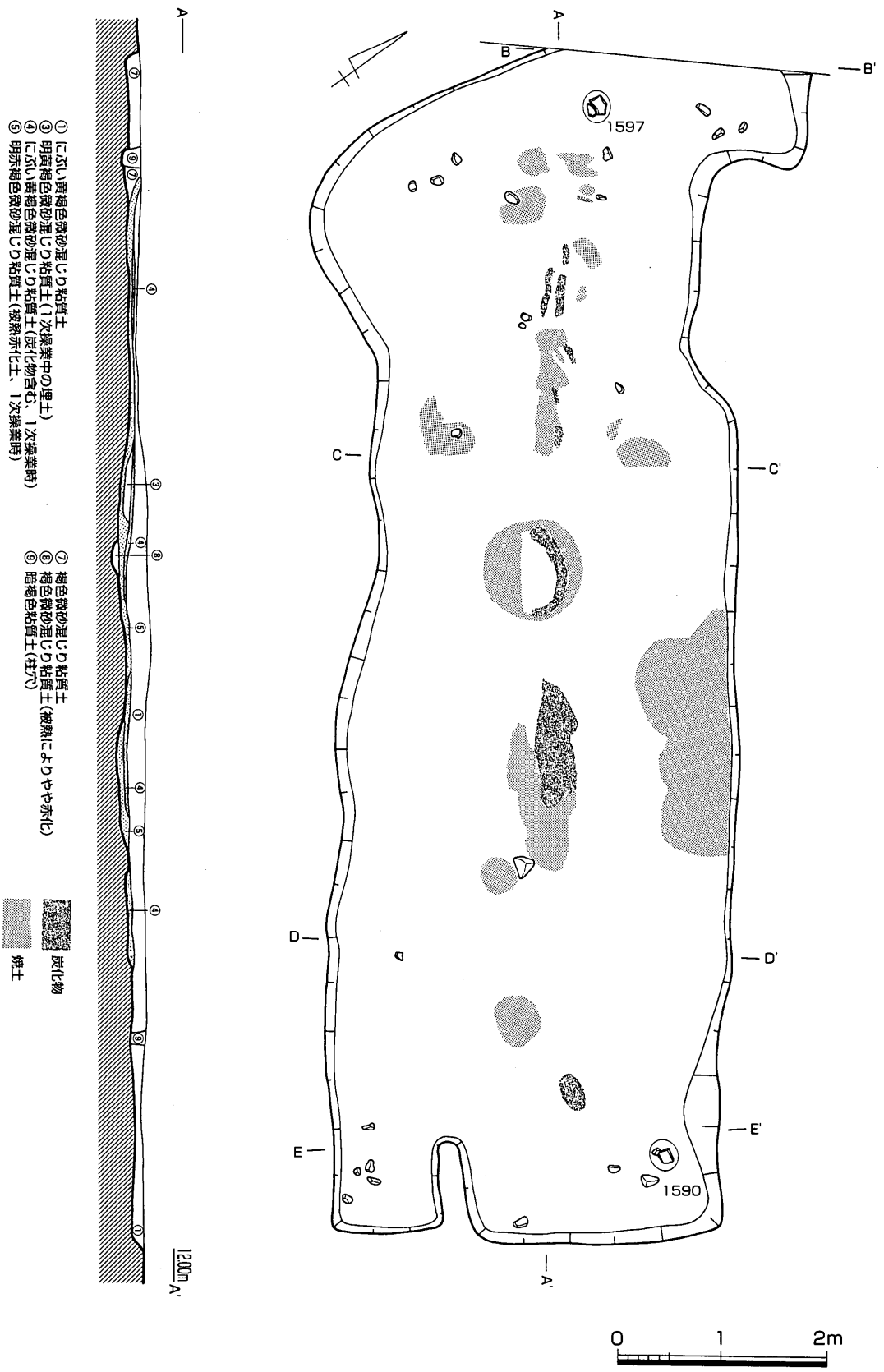
SX08 (第421図)

調査区北東隅の、旧G1区で検出した遺構である。北側部分は調査区外になるため、全体の形状と規模は不明である。検出した部分では、平面形は半円形である。東西4.0m、南北1.1mあり、大形の遺構になると考えられる。掘り込みは直線的で、底部は平坦である。深さは15cmで、埋土は灰黄褐色砂混じり粘質土の単一層である。遺物は出土していない。

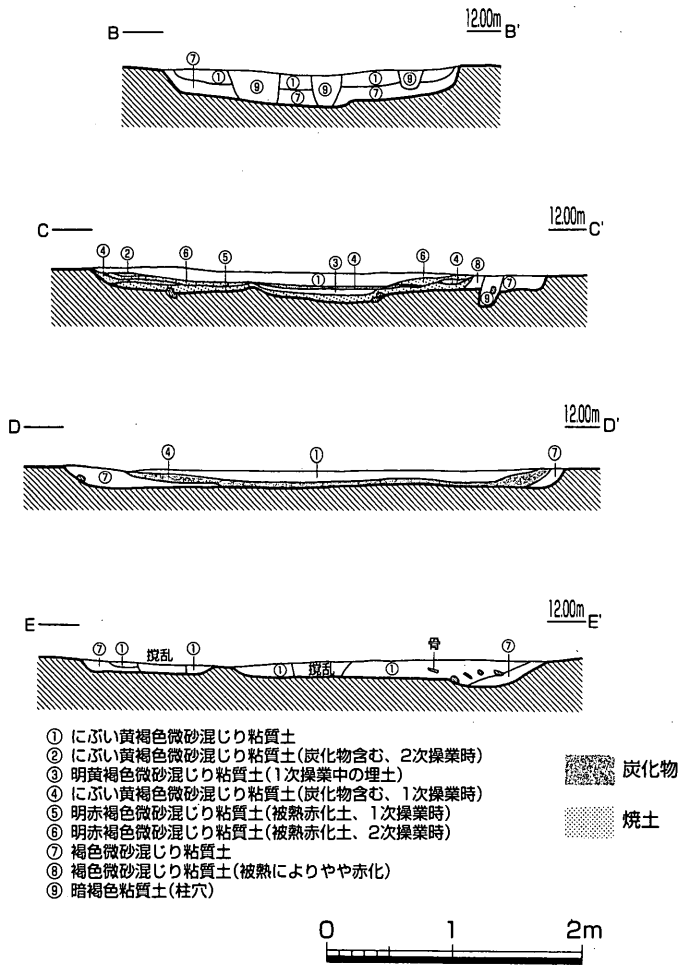
SX09 (第422～424図)

調査区北東部の、旧G1区西壁際で検出した遺構である。北西部分は調査区外になるため全体の形状と規模は不明である。平面形は長方形であるが、北西部分の調査区壁際では、不整形に湾曲している。また南東端では1mほど半島状に内側に入り込んでいる。長辺(A-A'方向)は検出部分で11.2m、短辺は整った長方形部分では3.5～3.9mであるが、調査区壁際のB-B'部分では2.5mになる。掘り込みは急な部分が多いが、北側長辺の両端付近では緩やかな部分がある。検出面からの底面までの深さは10～30cmである。底面はCラインとDラインの間の部分が低くなり凹凸が認められる。

底面の中央部分と中央北側部分には、被熱赤化した明赤褐色微砂混じり粘質土が広がっている。火の使用により土自体が焼けている。特にCラインとDラインの間の一段低い部分とその北西の平面形が不整形になっている部分で顕著である。この被熱赤化土の上には炭化物を多く含む、にぶい黄褐色微砂混じり粘質土が堆積している。さらにその上部にはC-C'部分を中心に



第422図 V区第2面SX09平・断面図(1/60)



第423図 V区第2面SX09断面図 (1/60)

は無頸壺で、外面には凹線を巡らせている。体部の内・外面にはヘラミガキを施している。1592~1597は甕である。1593の口縁部屈曲部の内面は鋭い。1594は如意形口縁である。1596は口縁部内面を強くナデている。1597の体部は外面にハケ目を施すが、上部では横方向にヘラミガキを雑に施している。1600は鉢あるいは甕の把手部分で、貫通していない2つの穿孔がある。

1601~1603は凹基の石鏃である。1604・1605は楔形石器である。1605は全体に両極打撃の痕跡が顕著である。1606はスクレイパーで、剥片の鋭利な部分を刃部にしている。刃部には僅かに調整を加えている。1607はチャートのチップである。

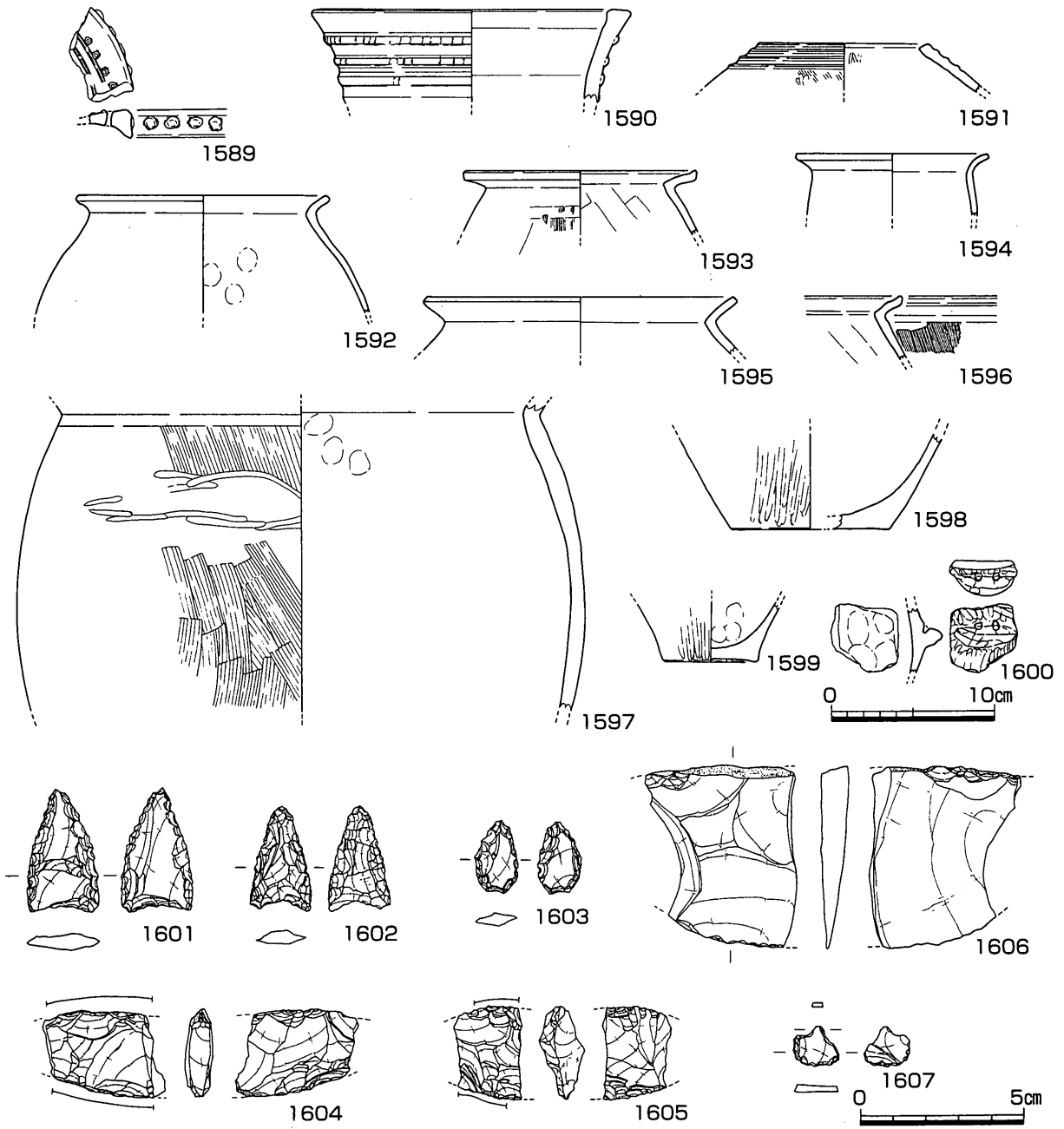
以上の遺物からSX09は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。SX09は窯状の焼成遺構であるが、何を焼成したかは不明である。

被熱赤化土と炭化物が交互に堆積している。これらのことから、SX09内で2回にわたり火を使用していたことが分かる。底面自体が強く焼けており、またその範囲も広いことから、かなり高温での焼成であったと考えられる。

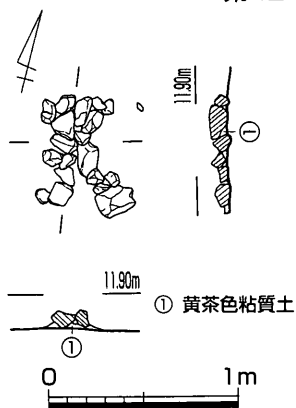
SX09からは土器・石器が出土しているが、特に土器は焼け歪み品や焼成不良品などの出土はなく、土器を焼成した痕跡は認められない。また北東部分のE-E'部分から骨片が5点出土している。出土した骨は細片であるが、いずれも被熱して焼けている。哺乳類の骨であるが、人骨か動物骨か不明であるという鑑定結果が出ている。

平面や底面の形状から平窯のような構造が考えられる。周囲には柱穴があるが、覆屋を復元できる柱穴はない。

1589~1591は壺である。1589は口縁部内面に突帯を2条巡らせ、突帯に沿って穿孔を施している。端部は下方に拡張し、外面に円形浮文を貼っている。1590は外面に刻目突帯を巡らせている。1591



第424図 V区第2面SX09出土遺物 (1/4、1/2)



SX10 (第425図)

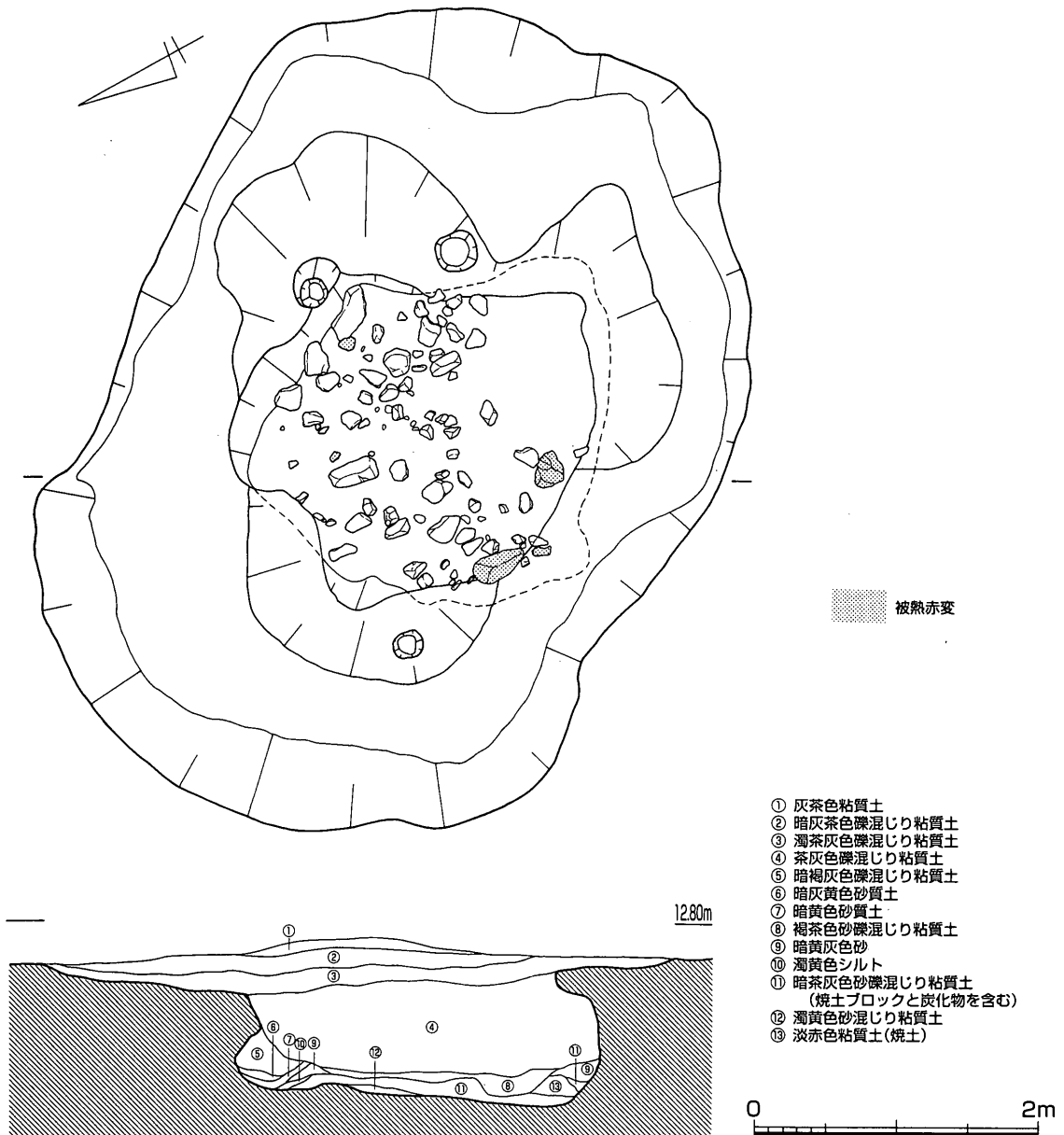
調査区北側のやや東寄りの、旧G4区東壁際で検出した遺構である。10~15cm大の礫を20個ほど集めている。礫の範囲は南北0.6m、東西0.5mで、平面的に配しているが特に規則性は認められない。礫の間には黄茶色粘質土が認められる。遺物は出土していない。

第425図 V区第2面SX10平・断面図(1/40)

SX11 (第426~430図)

調査区南西側の、旧G7区とG8区の境界部分で検出した遺構である。平面形は長方形と楕円形の間形態で、直線的な部分と丸みを帯びた部分が相對している。北西-南東方向は5.9m、北東-南西方向は4.2mである。検出面では中央から西側にかけて5~20cm前後の礫が密集していた。掘り込みは緩やかで10~25cmの深さでテラス状の面を形成した後に70~90cmほどの深さで急激に落ち込んでいる。下部の落ち込んだ部分は断面が袋状になり、東側以外の壁面が内側に抉れている。検出面から底部までの深さは1.05mある。底部は凹凸が少しあり、全体に北側から南側に向かって下がっている。

埋土は検出面から浅いテラス状の部分までの上層と、下部の袋状の落ち込み部分の下層に大別出来る。上層は灰茶色粘質土が主となり、拳大の礫を含んでいる。下層部分では、最下層に焼土と炭化物を含んだ暗茶灰色砂礫混じり粘質土が10cmほど堆積し、さらに底部では被熱赤変した礫も出土している。



第426図 V区第2面SX11平・断面図 (1/50)

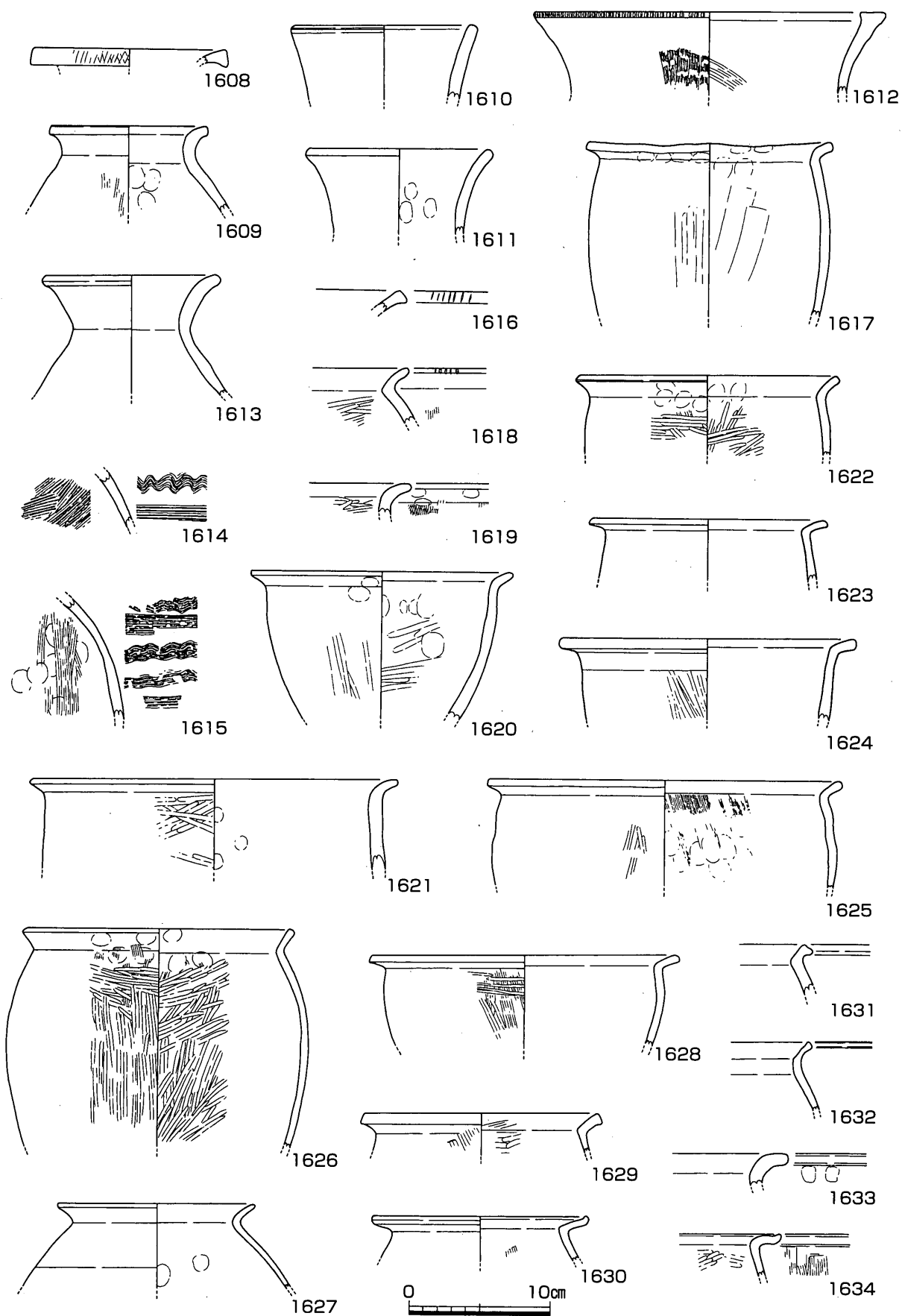


第427図 V区第2面SX11礫出土状況 (1/50)

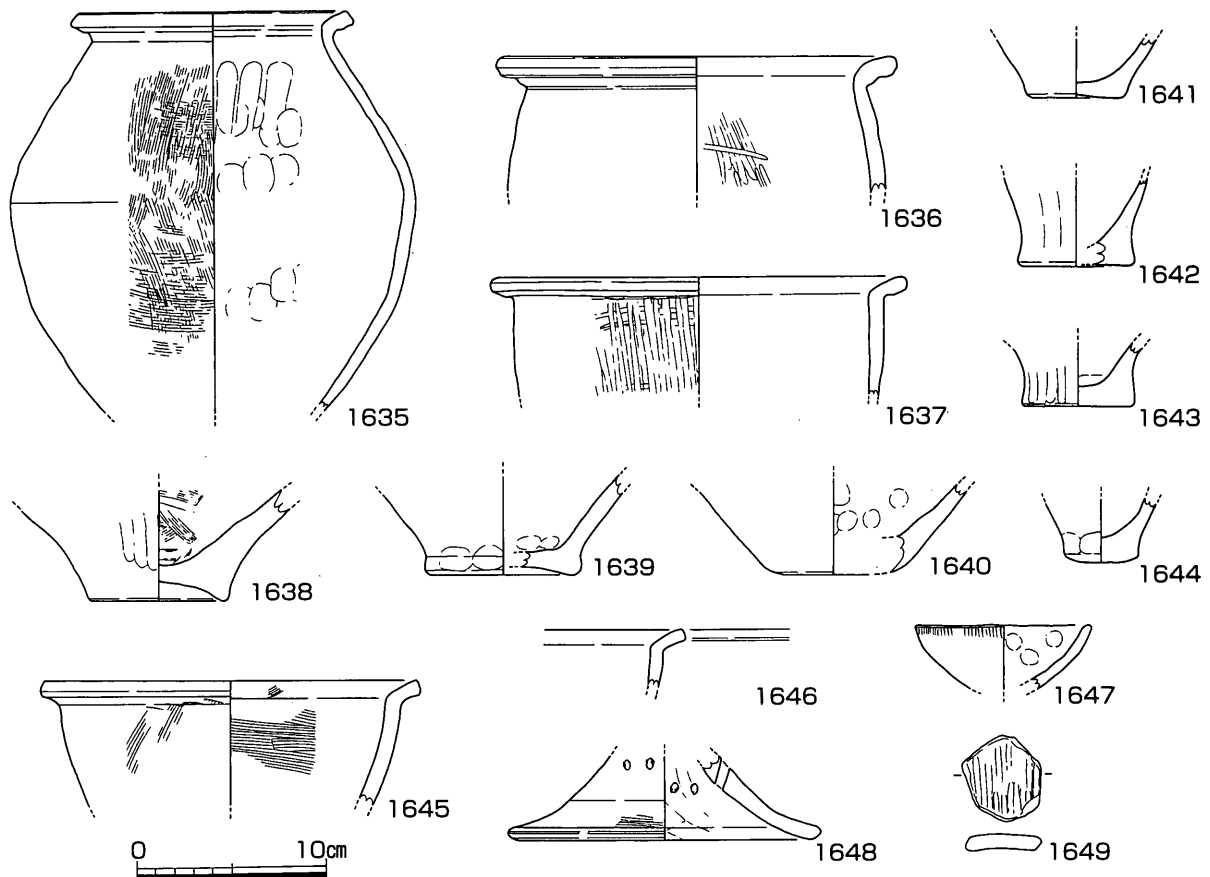
またこの層の上部に重なるようにして焼土層である淡赤色粘質土が堆積している箇所がある。そしてこの上に5~20cmほどの礫を多量に含む茶灰色礫混じり粘質土が、下部の袋状の落ち込み部分の上面まで厚く堆積している。この部分は礫を含みながら一気に埋めている状況である。この下部の落ち込み部分の壁面には地山である礫を含む暗黄灰色砂混じり粘質土と濁黄色砂が見られるが、SX11を掘削した時に出た礫を再び埋め戻したと考えるには量が多すぎる。

SX11は下部の落ち込みが袋状に挟れているが、この挟れた部分は、下部の壁面に露出している砂層からの湧水による壁面の崩落によると考えられる。調査時には砂層からの湧水はなかったが、SX11は井戸の可能性が高い。しかし最下層から焼土と炭化物、被熱赤変した礫が出土していることから単純に井戸と言い切れない部分がある。焼土の出土状況から焼土の混じった土を埋め戻したとは考えにくく、底部に一定の厚みをもって堆積していることから、底部で火を使用する行為を行ったと考えられる。焼土層の上部に厚い埋め戻し土があることから、廃絶時の祭祀的行為と考えるのが順当であるが、あるいは他の用途・目的があったのかも知れない。廃絶時の祭祀行為ならば、最上層の礫群はSX11を最終的に封印する役目であったのかもしれない。

1608~1615は壺である。1609の口縁部は短く直立する頸部から屈曲して開く。体部外面は摩滅しているがハケ目が認められる。1612は口縁部端部を内・外面側に拡張し、上部に平坦な面を作っている。端部外面には刻み目を施している。1613の体部上半は直線的である。1614・1645は体部外面に櫛描波状文



第428图 V区第2面SX11出土遗物(1)(1/4)



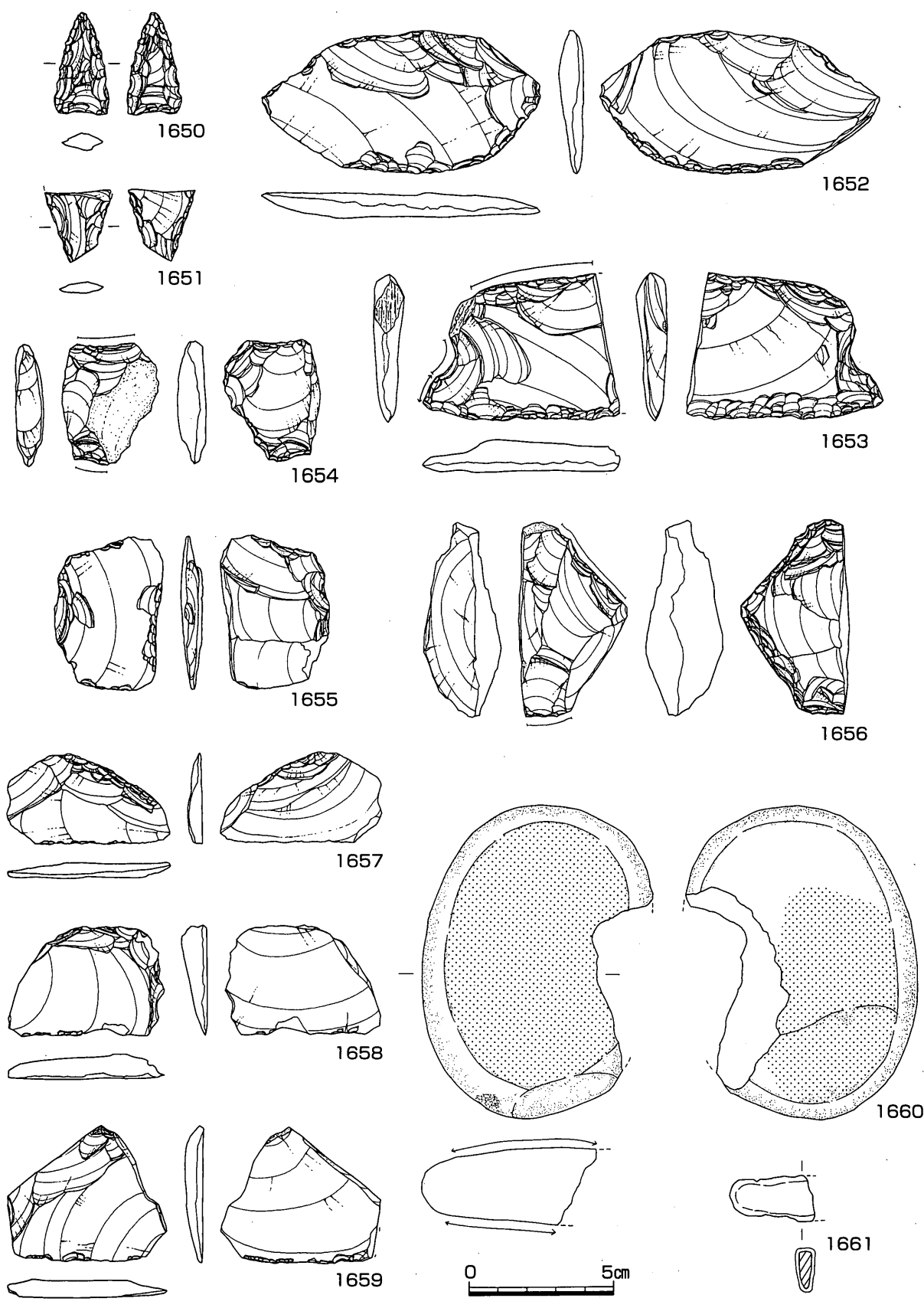
第429図 V区第2面SX11出土遺物(2)(1/4)

と櫛描直線文を施している。1616は壺か甕か判断がつかない。

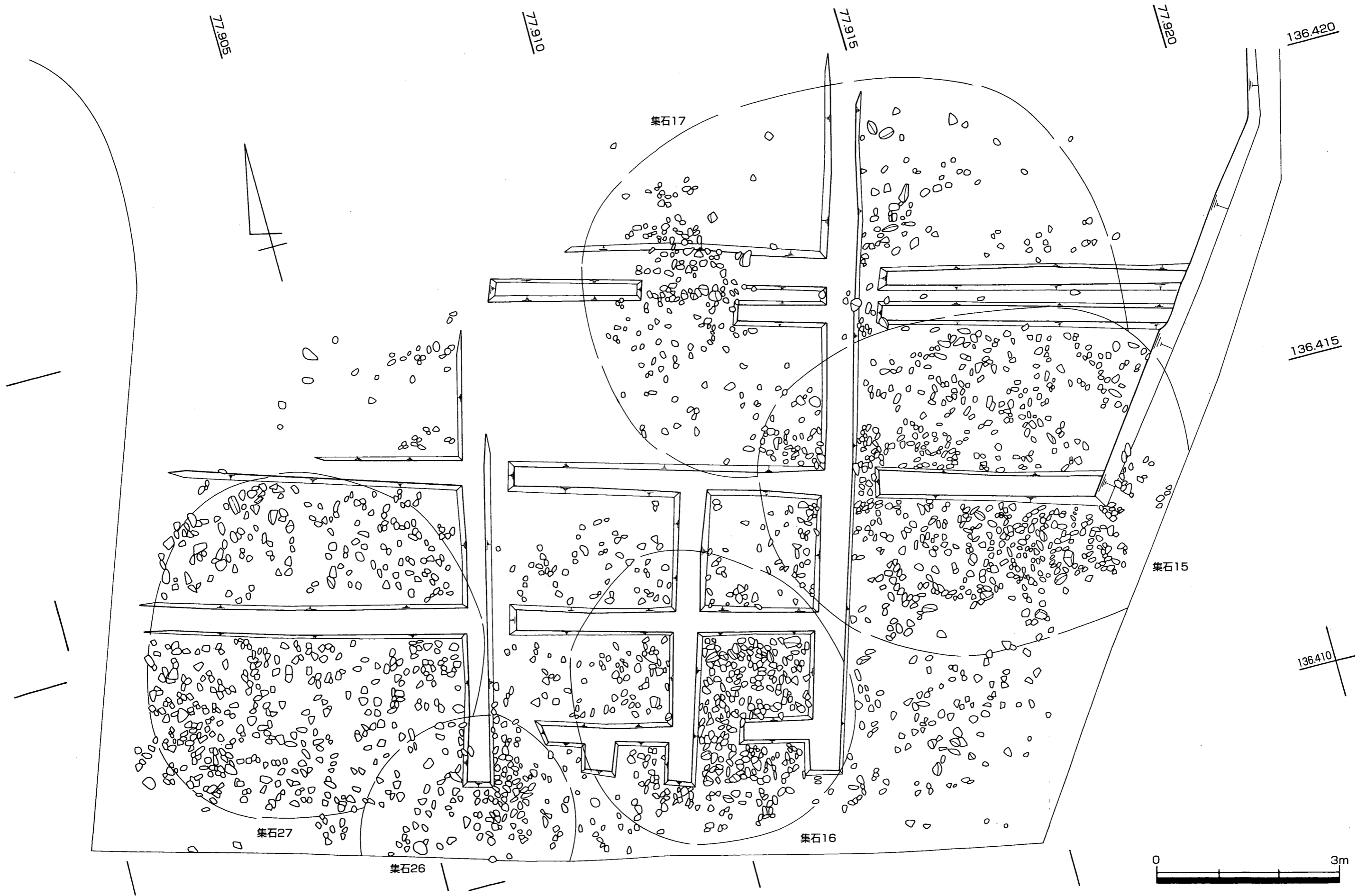
1617～1637は甕である。1617は内・外面の指押さえのため、口縁部は歪んでいる部分がある。1617・1619～1621の口縁部は如意形である。体部にはヘラミガキを施すものが多い。1622・1626は体部の内・外面にヘラミガキを丁寧に施している。1624の体部上半は直線的である。1627は最上部で出土しており、混入品と考えられる。1628の体部外面にはハケ目の後に間隔を開けてヘラミガキを施している。1634の口縁部内面は強いナデを施し、端部は斜め上方を向いている。1635の体部最大径は上半にあり、外面には横方向の後に縦方向にハケ目を施している。内面は指押さえと指ナデである。胎土には角閃石を含んでいる。最上部での出土である。1636の口縁部は肥厚している。1637の体部上半は直線的で、外面には横方向の後に縦方向のヘラミガキを施している。

1638～1643は壺および甕の底部である。1638・1639は上げ底である。1644は底部にしては丸みがあるが、蓋とするには体部の開きは弱い。1645～1647は鉢である。1645は体部内・外面にハケ目を施す。1646は甕かもしれない。1647は全体に内湾し、口縁部外面には刻み目を施す。1648は向かいあった位置に2個ずつの穿孔を施すことから蓋と考えられる。1649は紡錘車である。

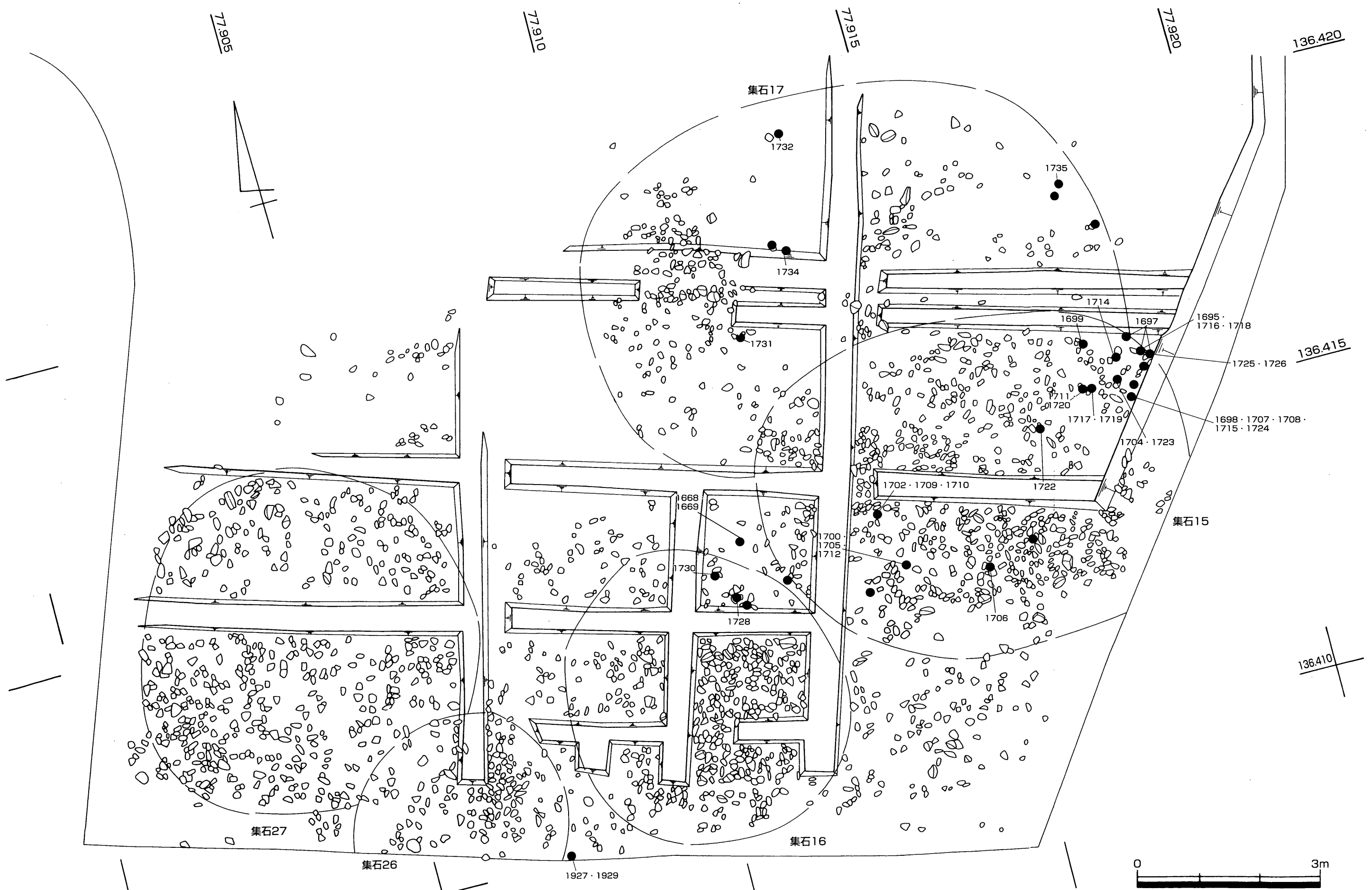
1650は凹基の石鏃、1651は凸基有茎式になると考えられる石鏃である。1652・1653は打製石庖丁である。1652は杏仁形で、刃部は両面から作り出している。1653は側縁部に挟りがあり、背部と挟り部分には敲打痕がある。挟りと刃部の間が僅かに摩滅している。1654～1656は楔形石器である。1655には敲打痕は認められない。1657～1659はスクレイパーで素材剥片の鋭利な部分を刃部に利用している。1660は砥石で両面とも使用している。1661は刀子で最上部から出土している。



第430图 V区第2面SX11出土遺物 (3) (1/2)



第431図 V区第2面南東部集石群配置図 (1/60)



第432図 V区第2面南東部集石群遺物出土状況平面図 (1/60)

以上の出土遺物で、1627・1635のように最上部では弥生時代後期～終末にかけての遺物が若干ではあるが出土しているが、出土部分から混入と考えられる。遺物は上層・下層とも出土しているが、上層からの出土のほうが多い。甕では如意形口縁のものが一定量含まれていることから、SX11は弥生時代中期中葉でも古い段階の所産と考えられる。

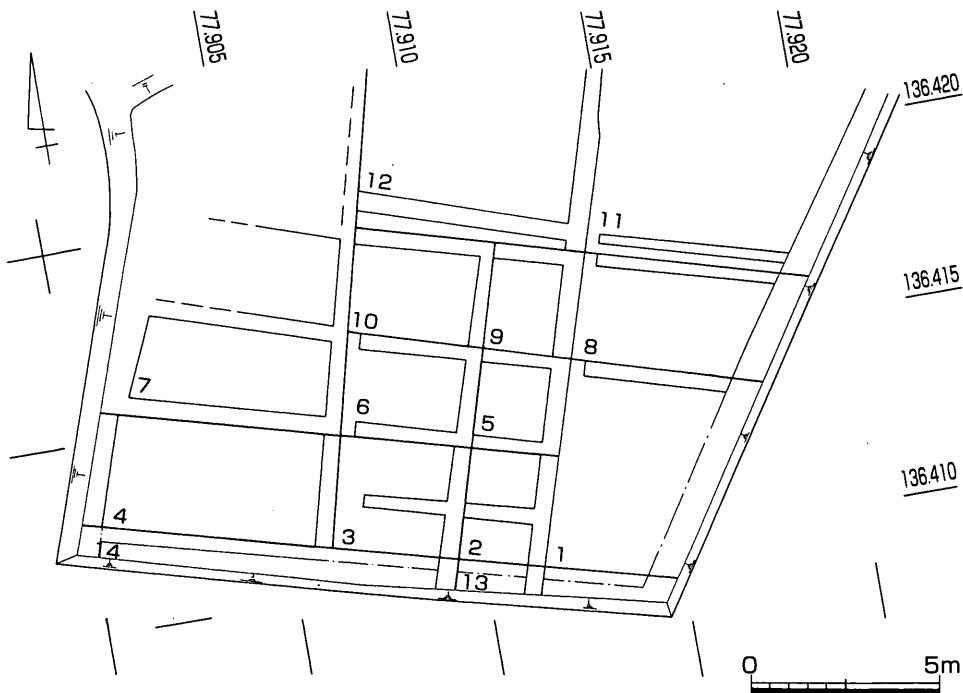
集石遺構（V区南東部集石群）（第431～433図）

調査区南東部の旧G1区の調査区壁際で検出された集石遺構群である。調査区南東隅から調査区壁に沿って北東方向に15m、北西方向に15mの範囲で、東西方向に検出している。第2面の遺構確認のため調査区東壁沿いにトレンチを設定して掘削したところ集石遺構を確認した。そのため調査区南壁に平行・直交するように土層観察用ベルトを残し、人力により上部の土を除去して集石遺構の検出に努めた。

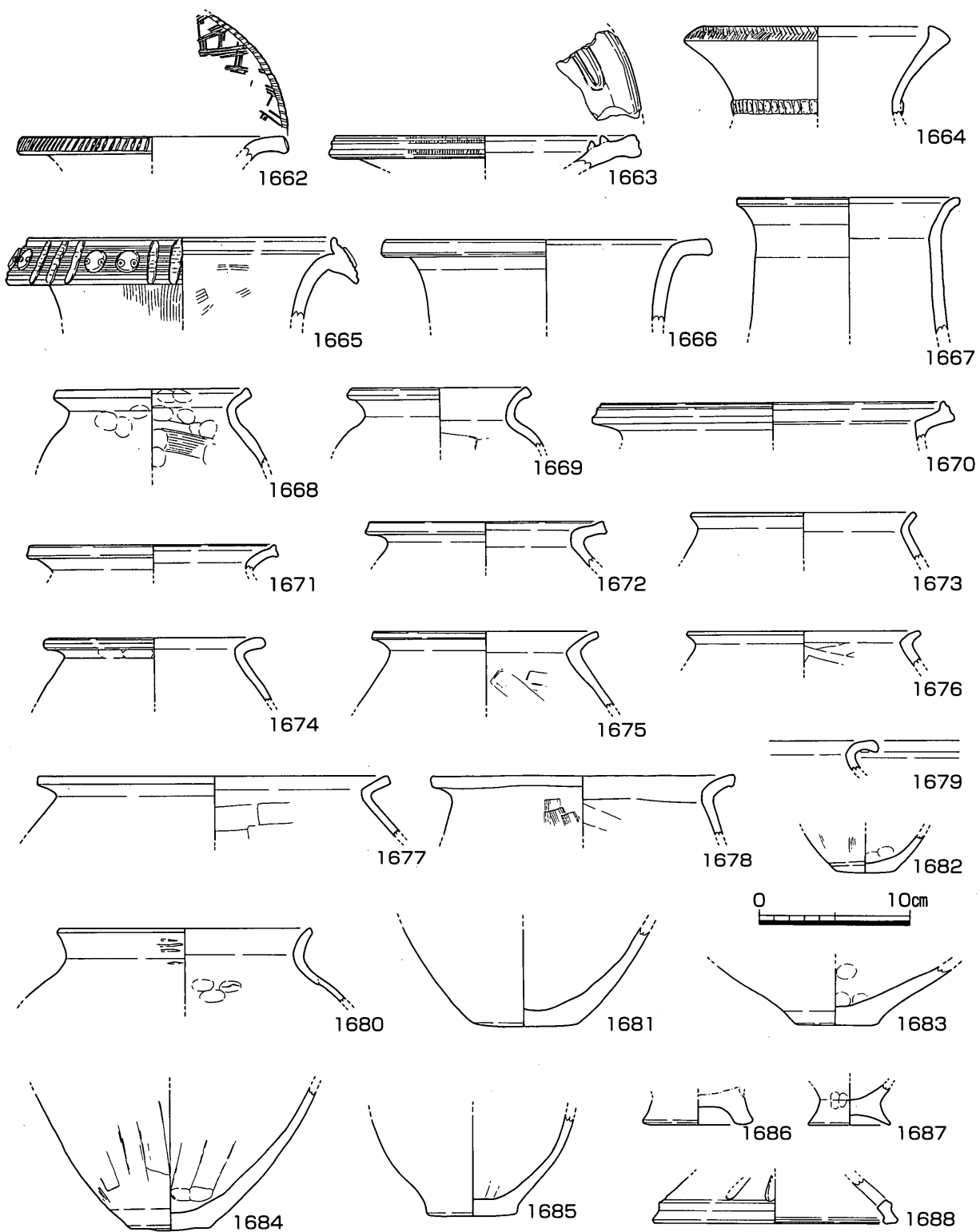
この旧G1区で検出された集石遺構は現状保存されることとなったので、その上面の検出に留まっている。従って全体を検出・調査していないので、内部や下部、築かれた遺構面の標高などの詳細は不明である。遺物についても上面を検出した段階までに出土した遺物のみ取上げている。

検出した礫の分布の濃淡により集石遺構を集石15～17・26・27の5基に分離したが、先述のとおり上面だけの検出によるので、各集石遺構の規模や形状は本来のものではなく、遺物もその一部に留まる。また下部まで調査すると分離した集石遺構の数も異なってくる可能性は十分にある。

集石遺構の多くはその上部を標高12.3～12.4mで検出している。第1遺構面の直下になり、第1遺構面を形成する暗茶褐色～茶褐色砂質土層中に含まれている。立地としては弥生時代中期中葉には埋没していたSD01の南岸部分にあり、弥生時代後期のSD10の南端に隣接する。時期は異なるがこのSD01とSD10の部分は、IV区からV区の中でも低地部分にあたり、SD01とSD10以外の遺構は検出されていない。この低地部分への落ち際に立地している。しかし調査区北側に比べると標高は全体に30cm前後高くなっている。この部分の集石遺構群はIV区の旧F2区部分の集石遺構群の延長に位置している。とく



第433図 V区第2面南東部集石群グリッド割図（1/200）



第434图 V区第2面南東部集石群出土遺物 (1) (1/4)

に北側のラインはIV区の旧F 2区部分の集石遺構群の北側ラインの延長に一致している。遺物は調査区東壁に近い部分に集中しており、集石15に相当する部分である。これに対して西側の集石26・27部分では遺物は細片が少量出土している程度である。

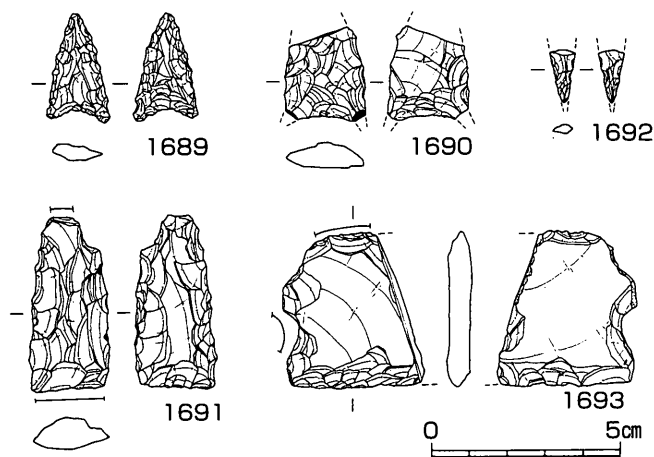
V区南東部集石群上面検出時出土遺物（第434～435図）

1662～1693はV区南東部集石群の上面検出時と、集石15～17・26・27に含まれない部分で出土した遺物である。

1662～1667は壺である。1662は口縁部内面に斜格子文を施し、端部には刻み目を加える。1663は口縁部内面に突帯を巡らせて装飾している。1664は口縁部端部を上方に拡張し、外面には刻み目を羽状に施している。頸部には指頭により押圧した突帯を巡らせている。1665は口縁部端部を上下に大きく拡張している。端部外面には3本1単位の棒状浮文と2個1単位の竹管文を配した円形浮文を交互に貼り付けて装飾している。1667は細長い頸部から口縁部は外反しているが、内面は強いナデのため直線的になっている。

1668～1680は甕である。1668・1669は壺に近い。1672は口縁部屈曲部の内面を強くナデている。1674の口縁部は肥厚し、端部を丸く収めている。1673・1676の口縁部は短い。1680の口縁部の開き方は鈍く、外面にはタタキを施している。

1681～1686は壺および甕の底部である。1687は甕あるいは鉢になると考えられる。1688は台付鉢の台



部あるいは高杯の脚部である。端部は全体に接地し、内・外面を強くナデている。現存で2個の透かし穴がある。

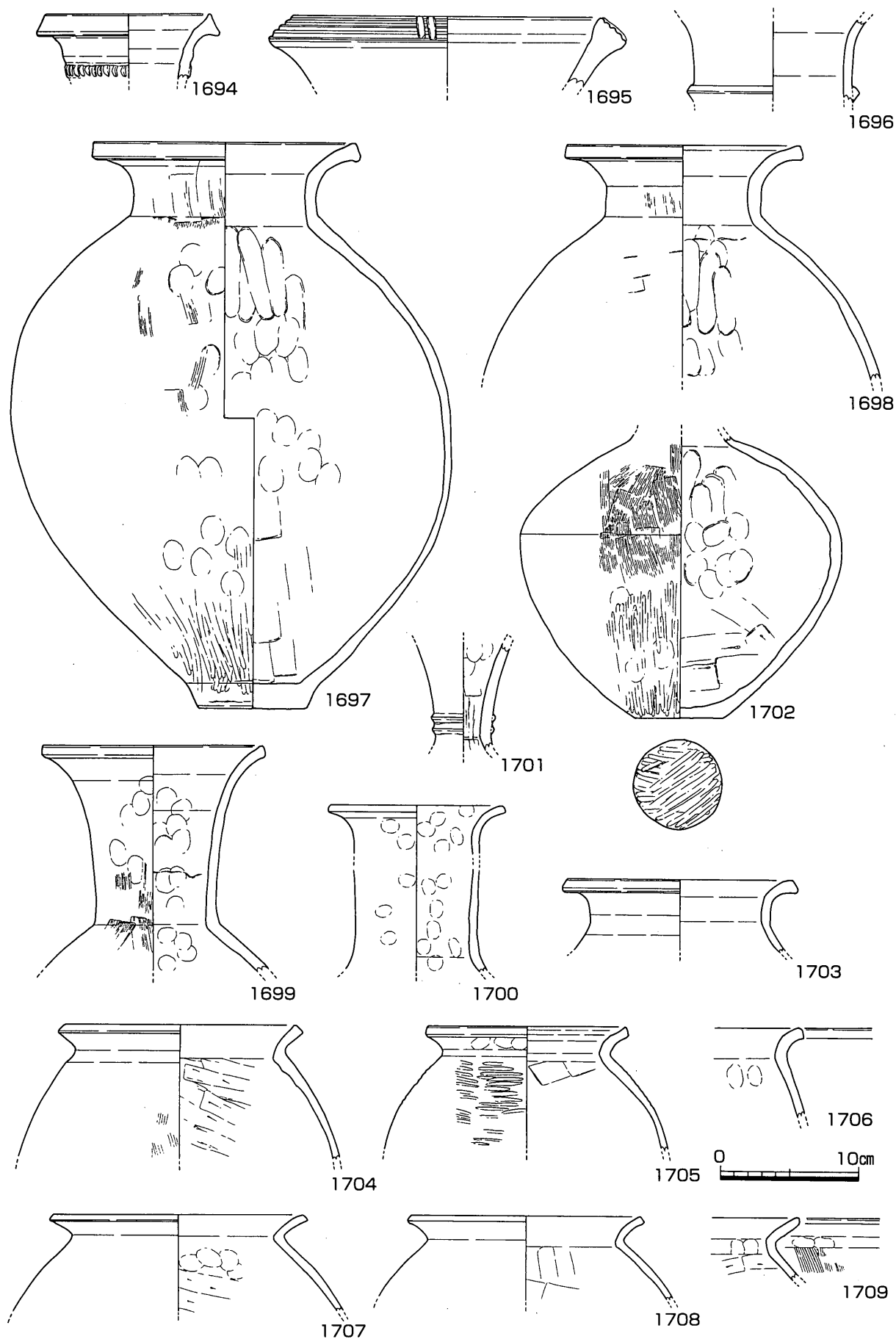
1689・1690は凹基の石鏃である。1691は石鏃の未製品で、両端部に敲打痕があることから、楔形石器の残り部分を転用して石鏃を製作している。1692は石錐の錐部である。1693は打製石庖丁で、側縁部には抉りがあり、敲打により丸みを出している。

第435図 V区第2面南東部集石群出土遺物（2）（1／2）

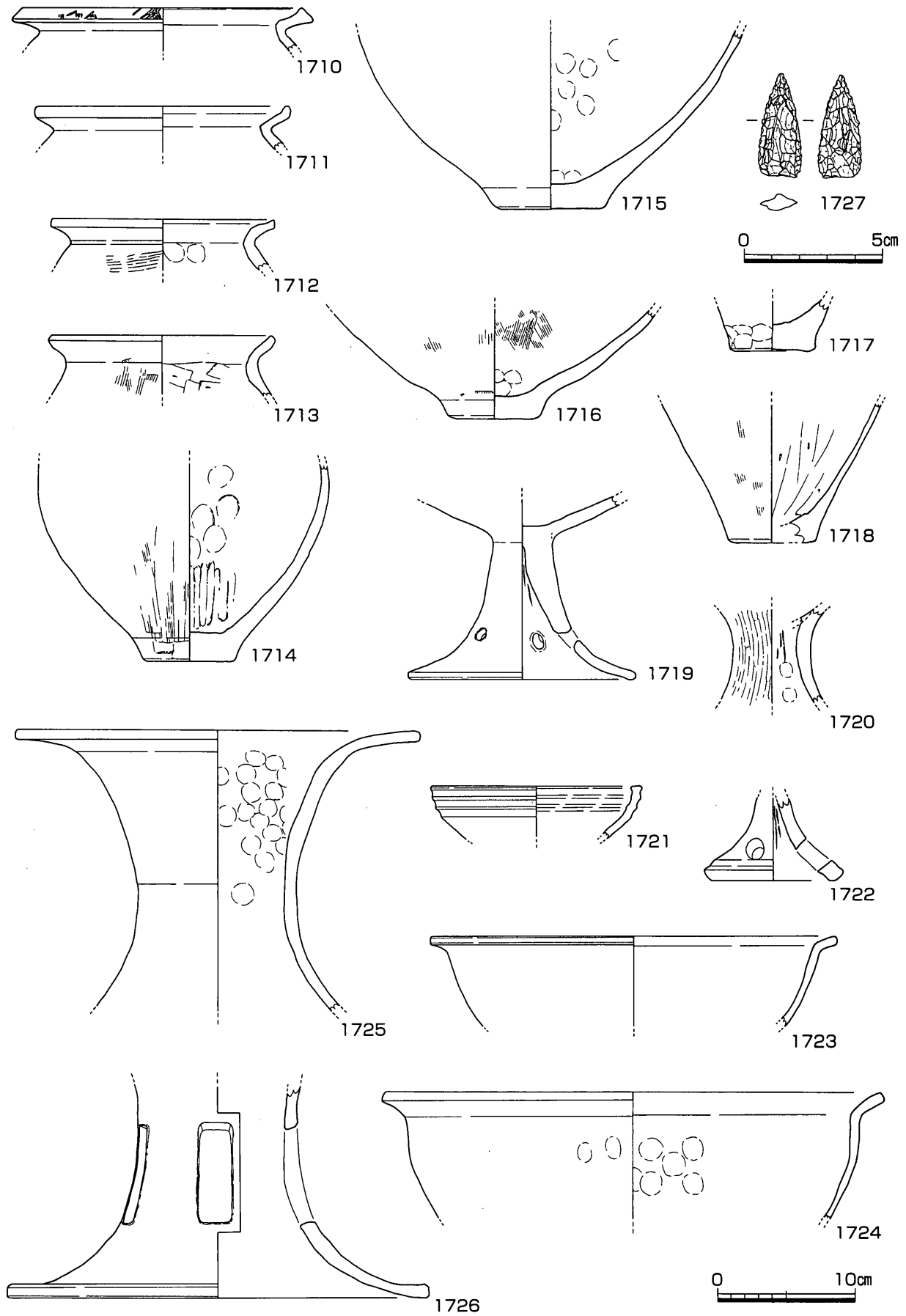
集石15（第431～432・436～437図）

調査区南東隅の、旧G 1区東壁際で検出した集石遺構である。集石15は保存のため、その上面を検出したにとどまる。全体の調査を行っていないので、集石遺構の範囲は礫の分布の疎密により判断したが、不明な部分が多々ある暫定的な範囲である。

平面的に検出しただけで、盛り上がりは確認していない。平面形は楕円形で長径7.2m、短径5.7mである。検出部分の標高は12.5mで高くなっている。礫を検出した部分で掘り込みを停止しているため、端部の標高と集石遺構の高さは不明である。しかし当初設定した東壁際のトレンチに集石15の部分が見え、それによると高さは少なくとも40cmはあり、10～20cmの礫が多数集まり、全体に塚状に盛り上がっている。礫は南半分のほうが多くなっており、砂岩が中心で少量の花崗岩を含んでいる。



第436图 V区第2面集石15出土遺物 (1) (1 / 4)



第437图 V区第2面集石15出土遺物(2)(1/4、1/2)

集石15は断ち割り調査を行っていないので盛土の詳細は不明である。しかしトレンチ部分での観察によると暗茶褐色粘質土になっている。また全体に第1遺構面を形成する茶褐色砂質土に覆われている。そしてこの茶褐色砂質土中の中で礫を面的に検出した段階で掘り込みを停止している。下部施設の有無は不明である。

遺物は北東部分のグリッド8のトレンチに近い部分で集中的に出土した。次いで南半分のグリッド1部分での出土がある。それ以外の部分は少ない。器種としては壺・甕・高杯・鉢・器台があるが、大型のものが目立つ。石器はサヌカイト剥片を含めても1点のみで、非常に少ない。

1694～1703は壺である。1694は頸部に刻目突帯を、1696は断面三角形の突帯を巡らせている。1695は口縁部端部を上下に拡張して凹線を巡らせ、その後に棒状浮文を貼り付けている。1697・1698の口縁部は直立する頸部から外反して開く。1697の体部は最大径が中央にあり、外面上半はハケ目、下半はヘラミガキを施す。内面上半は指押さえと指ナデ、下半は板ナデになっている。1698の体部内面は指ナデである。1699の口縁部は、細長く外傾する頸部からそのまま開く。頸部は内・外面とも指押さえが顕著で、外面にはハケ目を加える。1700の口縁部は、細長く直立する頸部から外反して開く。1701の頸部は非常に細長く、突帯を2条巡らせている。1702の体部は最大径が上半にあり、膨らみが強い。外面上半はハケ目、下半はヘラミガキを施している。内面下半にはヘラケズリを施している。また底部外面には丁寧なヘラミガキを重ねている。

1704～1713は甕である。1704は体部内面に器壁を抉るように強くヘラケズリを施している。1705は体部外面にタタキを行う。1707・1708ともに体部上半は張っている。1711は口縁部端部を上方に拡張している。1712は口縁部内面を強くナデている。

1714～1718は壺および甕の底部である。1714の底部は厚く、内面を指でナデている。1716の底部は突出している。

1719・1720・1722は高杯である。1719の脚部は外反して開き、透かし穴は5個ある。1720は外面にヘラミガキを施し、円盤充填の剥離痕がある。1722は短く厚い脚部で、端部は斜めに接地し、内・外面を強くナデている。透かし穴は現存で1個である。

1721・1723・1724は鉢である。1723・1724の口縁部は屈曲して開いている。全体に摩滅している。

1725・1726は器台である。1725は筒状の体部から大きく外反して開く口縁部をもち、全体に摩滅しているが内面上半には指押さえが顕著である。1726は大きく外反して開く脚部で、長方形の透かし穴が4個ある。

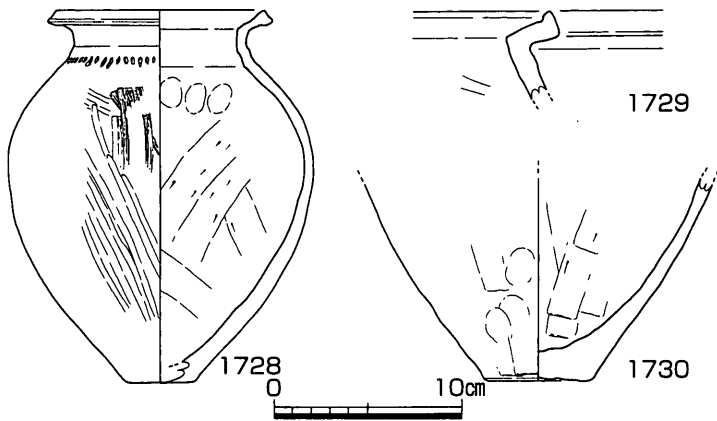
1727は平基の石鏃で、精緻な作りである。

以上の出土遺物から、集石15は弥生時代後期中葉～後半の所産と考えられる。

集石16 (第431～432・438図)

調査区南東隅の旧G1区で検出した集石遺構で、集石15の西側に隣接している。集石16は保存のため、その上面を検出したにとどまる。全体の調査を行っていないので、集石遺構の範囲は礫の分布の疎密により判断したが、不明な部分が多々ある暫定的な範囲である。

平面的に検出しただけで、盛り上がりは確認していない。平面形は直径5.0mの円形である。検出部分の標高は12.4mで高くなっている。礫を検出した部分で掘り込みを停止しているため、端部の標高と集石遺構の高さは不明である。礫は南東部分が多く密集しており、砂岩が中心で少量の花崗岩を含んで

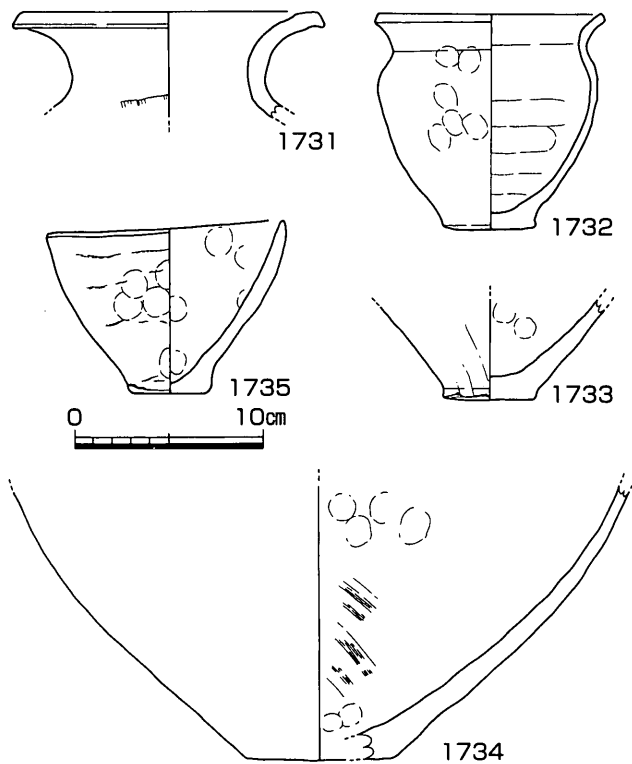


第438図 V区第2面集石16出土遺物 (1/4)

ト片を含めた石器は出土していない。

1728は壺である。短く直立する頸部の下部には列点文が巡っている。体部は最大径が上半にあり、甕の体部に似る。外面はハケ目の後にヘラミガキを施し、内面は全体に弱いながらヘラケズリになっている。1729は甕で口縁部端部を上方に拡張する。

出土遺物は少なく時期差が認められるが、集石16は1728から弥生時代後期中葉の所産と考えておく。



第439図 V区第2面集石17出土遺物 (1/4)

で盛土の詳細は不明である。全体に第1遺構面を形成する茶褐色砂質土に覆われている。そしてこの茶褐色砂質土中の中で礫を面的に検出した段階で掘り込みを停止している。下部施設の有無は不明であ

いる。

集石16は断ち割り調査を行っていないので盛土の詳細は不明である。全体に第1遺構面を形成する茶褐色砂質土に覆われている。そしてこの茶褐色砂質土中の中で礫を面的に検出した段階で掘り込みを停止している。下部施設の有無は不明である。

遺物は北東部のグリッド5の部分から比較的多く出土したが、集石16全体では出土量は少ない。サヌカイ

集石17 (第431~432・439図)

調査区南東隅の旧G1区で検出した集石遺構で、集石15の北側に隣接している。集石17は保存のため、その上面を検出したにとどまる。全体の調査を行っていないので、集石遺構の範囲は礫の分布の疎密により判断したが、不明な部分が多々ある暫定的な範囲である。

平面的に検出しただけで、盛り上がりは確認していない。南側部分は集石15と重なり、その境界は極めて曖昧である。平面形は長径8.8m、短径6.2m前後の楕円形を想定している。検出部分の標高は12.4mである。礫を検出した部分で掘り込みを停止しているため、端部の標高と集石遺構の高さは不明である。礫は全体に少ないが、中央部分と西側部分が多くなっている。砂岩が中心で少量の花崗岩を含んでいる。

集石17は断ち割り調査を行っていないの

る。

遺物は中央部分のグリッド12と、東側のグリッド11で出土しているが、集石17全体では出土量は少ない。サヌカイト片を含めた石器は出土していない。

1731は壺である。頸部から口縁部にかけて全体に外反している。1732は甕で、口縁部屈曲部の内面は丸みを帯びている。体部は最大径が上半にあり、全体に摩滅しているが内面は指で横方向にナデている。胎土には結晶片岩を含んでいる。1735は鉢で、体部は緩やかに内湾している。口縁部端部は先細りになる。外面には粘土の接合痕が残り、指押さえが顕著である。

出土遺物は少ないが、集石17は弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

集石18（第440～451図）

調査区南側中央部分で検出した集石遺構である。周溝墓SX02の下部で検出している。平面形は楕円形で、長径5.8m、短径4.1mである。北東部分は直線的な部分がある。西側部分は周溝墓の周溝SX02-D02によって壊されており、不明瞭な部分がある。全体に塚状に盛り上がり頂部は丸みを帯びているが平坦に近い。西側部分は周溝SX02-D02によって壊されているため、SX02-D02の掘り込みの傾斜になっている。それ以外の本来の集石18の部分は緩やかである。特に南西部分は緩やかである。端部の標高は11.9～12.1m、頂部の標高は12.5m、高さ40～60cmである。南側の端部のほうが高くなっているが、これは遺構面の傾斜に合っている。

頂部は全体に礫に覆われているが、斜面部から端部にかけては礫が少なく土のほうが多い。礫は10～15cm大のものが多く、頂部には一回り大きい20～25cm大のものが見られ、頂部の礫は丸みのあるものが多い。そして中央の礫の密集している東端の部分には40cm四方の扁平な礫が1個認められる。礫は砂岩が中心で、少量の花崗岩を含んでいる。中央部の礫は20cmほど堆積しており、その下部では被熱赤変した礫と石器が8点出土している。しかし炭化物は出土しておらず、その場で火を使用した痕跡は認められない。

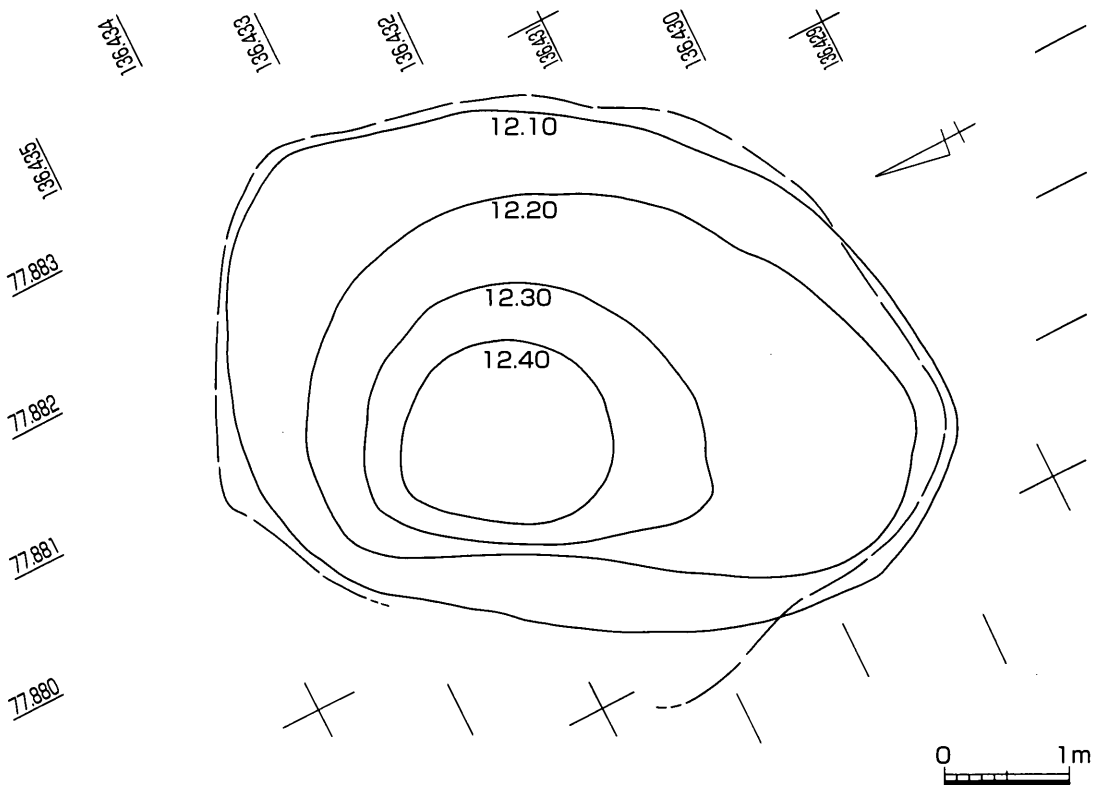
集石18は周溝墓SX02にその全体を覆われている。そして集石18はSH03～05が掘り込まれている暗黄褐色砂混じり粘質土層上に構築されている。南のほうに高く傾斜するこの面から礫と土を混ぜながら盛り上げている。盛土は上中下の3層に大別出来る。下層は暗茶色砂混じり粘質土、中層は暗茶褐色粘質土、上層は茶褐色粘質土である。頂部の礫は基本的に上層部分に含まれている。

盛土の上層と中層を除去した段階で、盛土下層部分に掘り込んだ土坑（SK01）を1基検出した。土坑の平面形は隅丸長方形と楕円形の間形態であり、北側部分は丸みを帯びている。隅丸長方形として計測すると、長辺1.3m、短辺1.0mになる。土坑の掘り込みは全体に緩やかで、底部は長辺方向に1.2m、短辺方向に0.45mで、土坑上面より一回り狭くなっている。底部は若干の凹凸が見られるものの、概ね平坦である。土坑の検出面から底部までは45cmの深さがある。土坑の埋土は最下層に暗褐色砂質土が薄く堆積するが、その上には厚く暗灰茶色砂混じり粘質土が堆積する。この層は地山層である暗黄褐色粘質土と暗灰色粘質土のブロックを含み、埋め戻している状況がうかがえる。そして最上層には炭化物を含む暗灰褐色粘質土が薄く堆積している。この土坑は頂部の礫群の真下に位置している。そして盛土中から掘り込まれていることから、集石18に伴う遺構と言える。

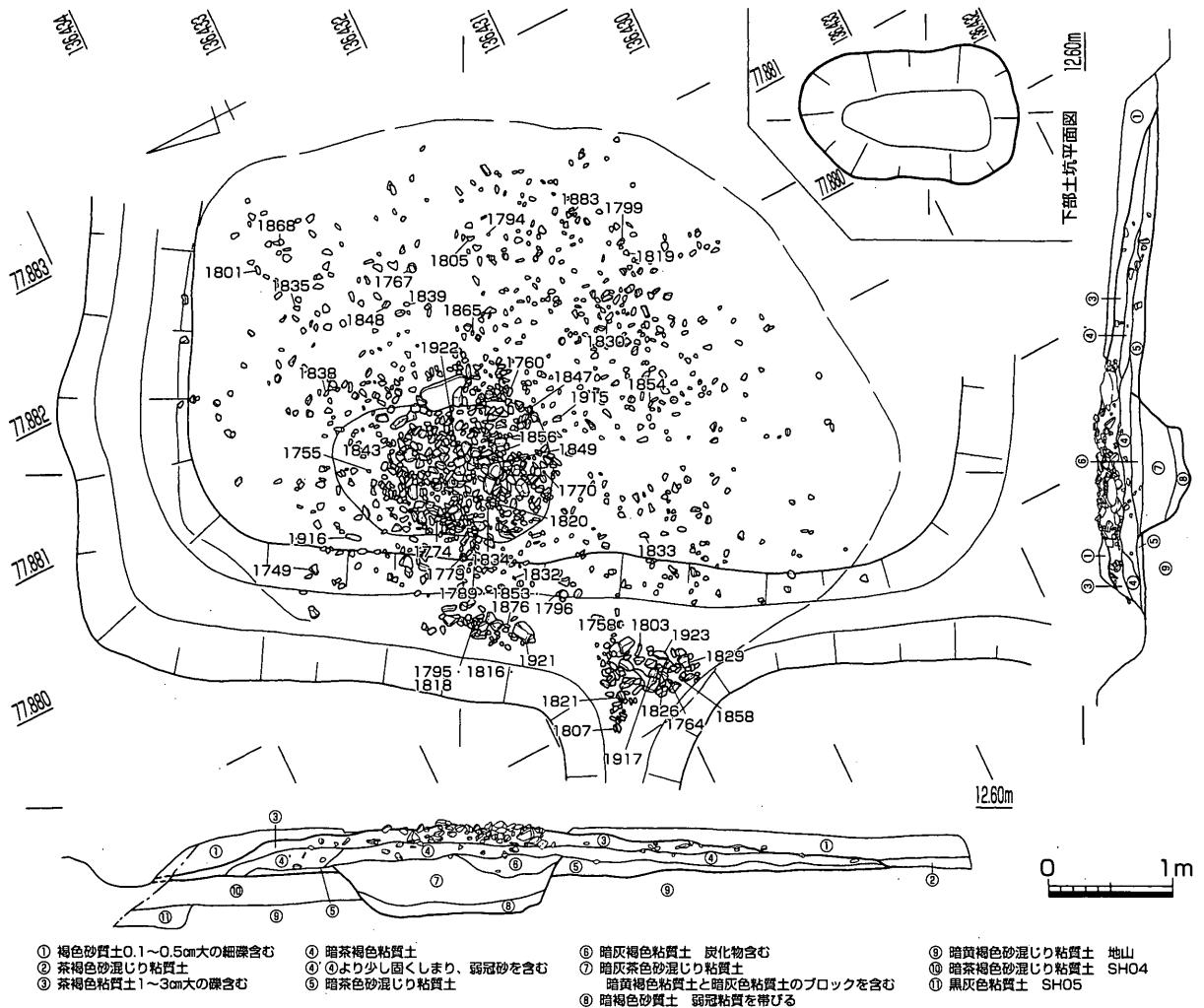
土坑の埋土の最上層に炭化物が含まれていることと、この土坑の上部15cmほどの部分の礫中で出土した、被熱赤変した礫との関連は不明である。土坑には焼土は含まれておらず、上部にも火を使用した



第440図 V区第2面集石18平・立面図 (1/60)



第441図 V区第2面集石18測量図 (1/60)



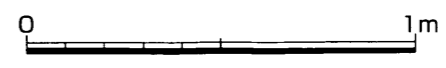
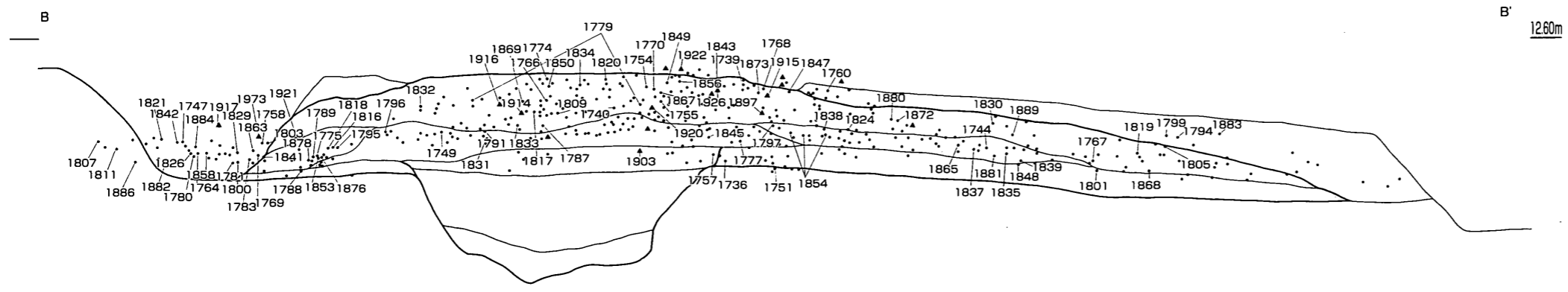
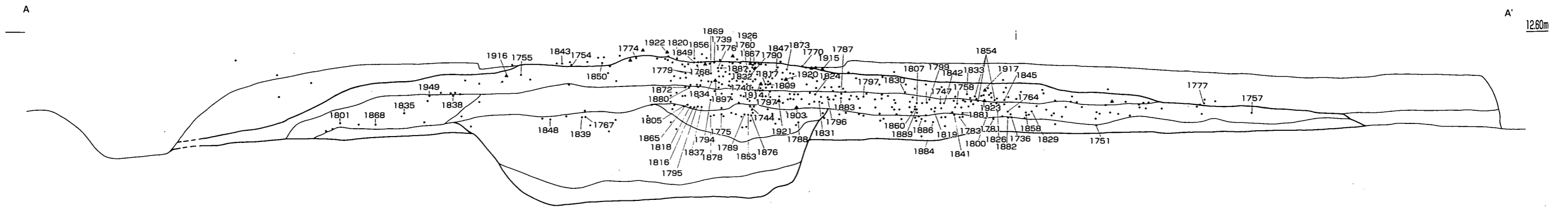
第442図 V区第2面集石18平・断面図, 下部土坑平面図 (1/60)

痕跡が認められないことから、他の場所で火を使う行為を行った後に集石18にもたらされた可能性が高い。

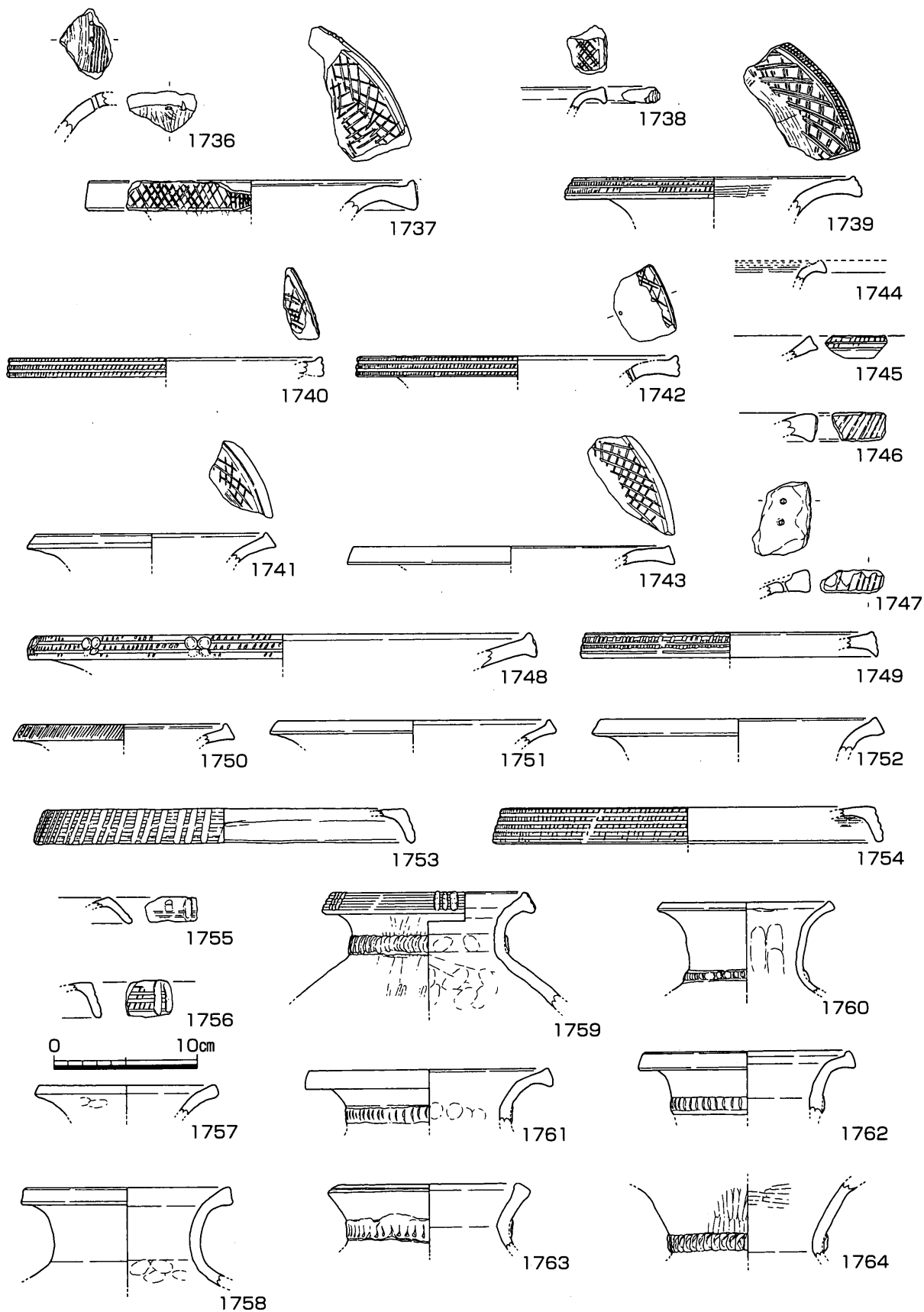
またこの土坑の性格であるが、均整のとれた形状や直線的な掘り込みにはなっていない。また底部は上部に比べて狭くなっている。しかし埋土には地山ブロックを含む埋め戻し土があり、その上部には土坑を覆うように土を塚状に盛り上げている。このような遺構は通常、墳墓として理解するのが妥当であろう。そして礫で最終的に封印するような状況である。

遺物は多量に出土しているが、いずれも破片での出土で、比較的小さな破片が多い。平面的には南半分から多く出土しており、特に中央の礫の集中している部分から多く出土している。そして盛土の上層と中層から、つまり下部の土坑より上の部分で出土している。土器は図化した157点に加えて、細片が577点あり、合計734点出土している。その内訳は壺95点、甕123点、高杯・鉢で36点、壺あるいは甕の体部480点である。出土状況に目立った特徴は認められず、器種ごとの偏りなども認められなかった。また、石器以外のサヌカイトの剥片・細片は290点出土し、総重量にして398.3gになる。1917と1923の石器2点と自然石6点の合計8点については、被熱赤変している。

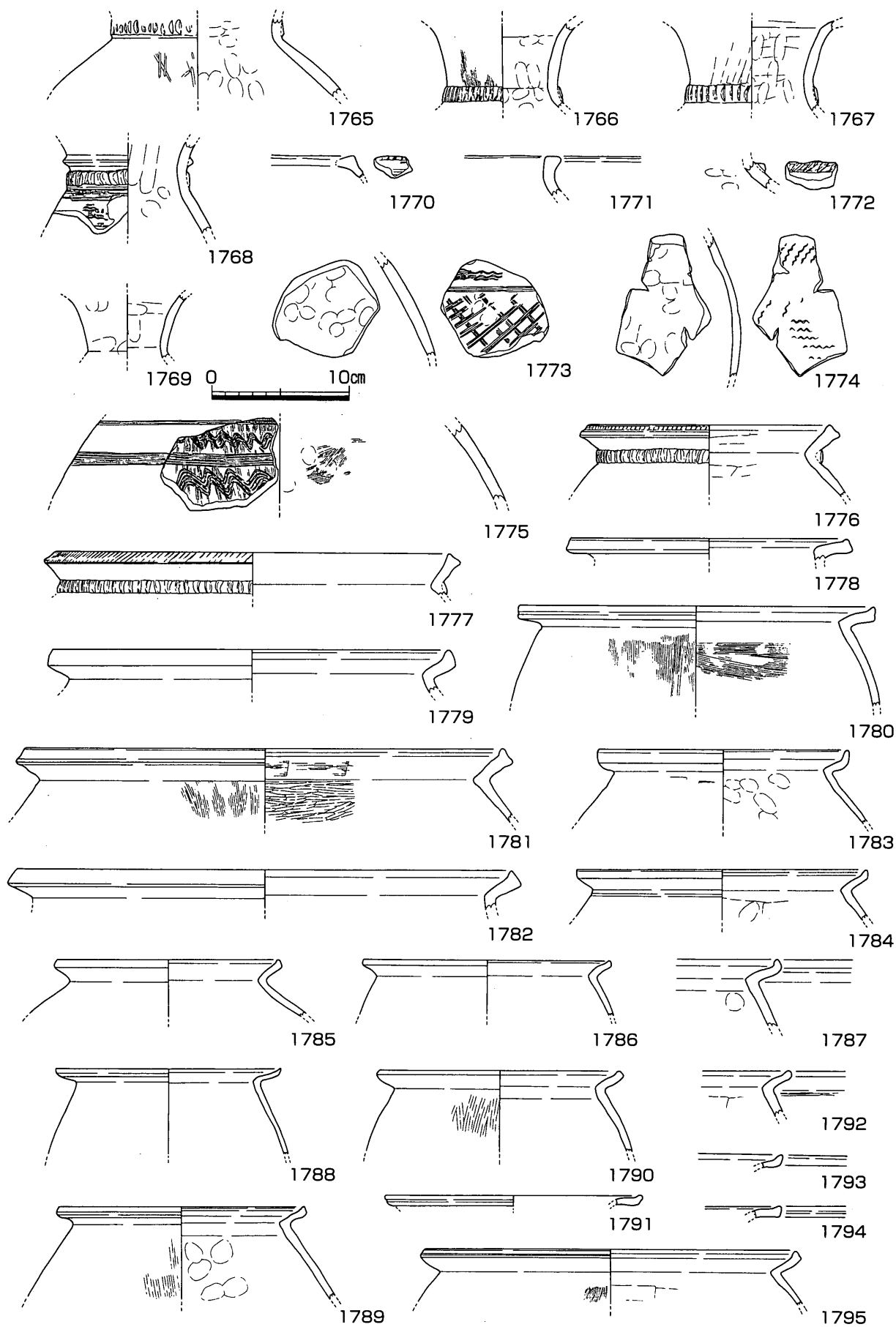
1736~1775は壺である。1737~1743は口縁部内面に斜格子文を施している。1737の内面の斜格子文は2段になっている。口縁部端部外面にも斜格子文を加えている。1744は口縁部内面に突帯の剥離痕がある。1745~1750は口縁部端部外面に刻み目を施している。1753~1756は口縁部端部を下方に大きく拡張



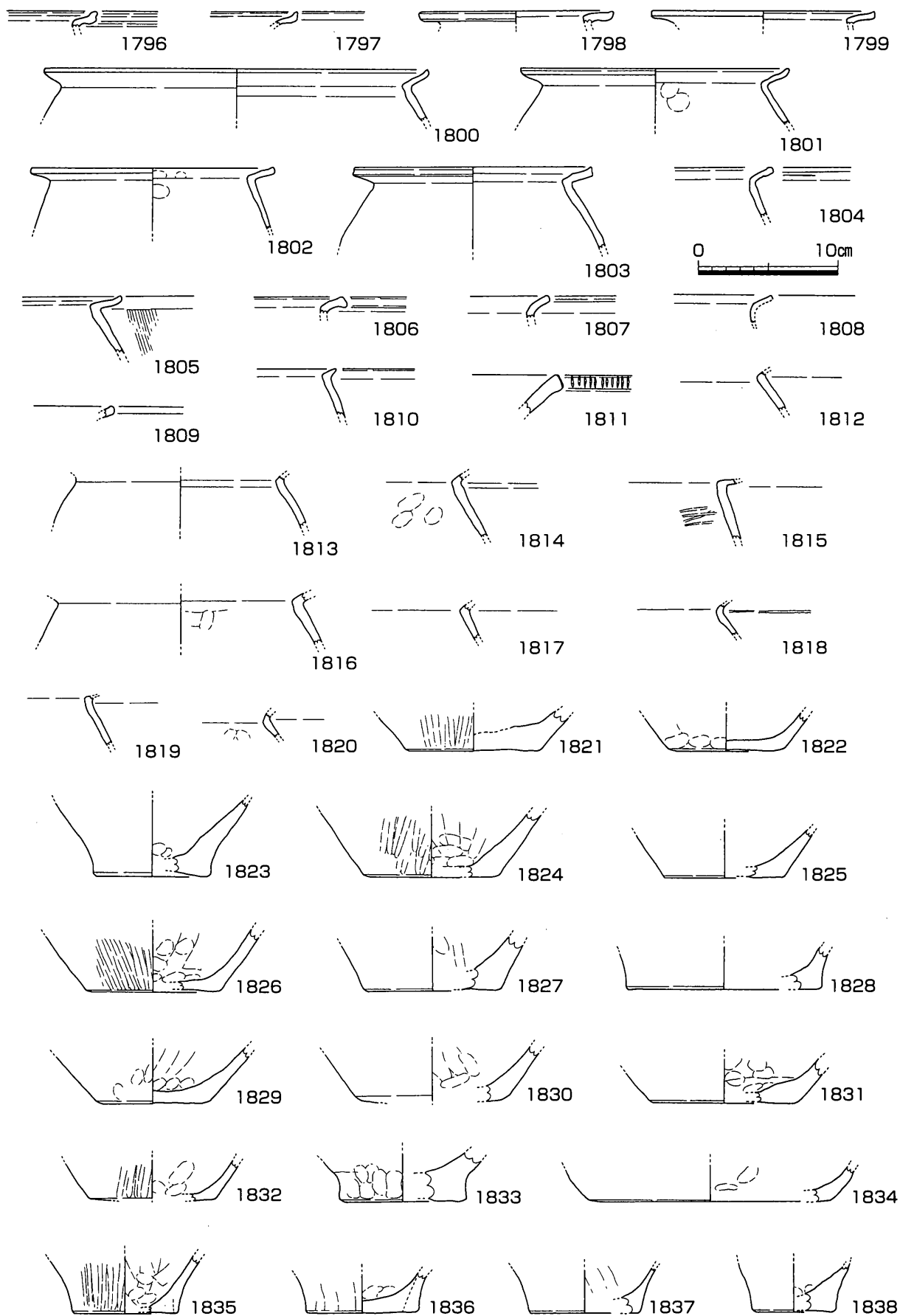
第443图 V区第2面集石18遺物出土狀況立面図 (1 / 20)



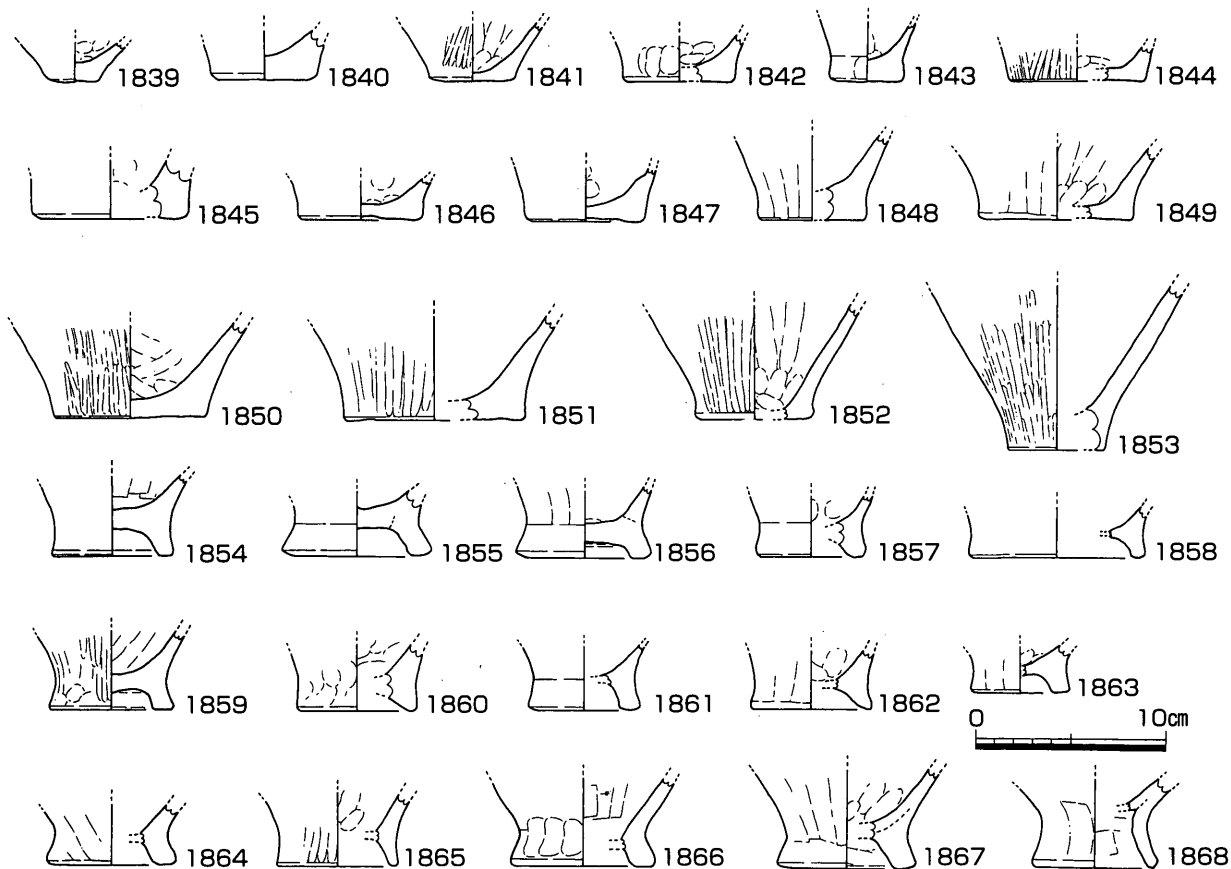
第444图 V区第2面集石18出土遗物(1)(1/4)



第445图 V区第2面集石18出土遺物 (2) (1/4)



第446图 V区第2面集石18出土遺物 (3) (1 / 4)



第447図 V区第2面集石18出土遺物(4)(1/4)

している。1759~1768は頸部に刻目突帯を巡らせている。1759は口縁部端部を上下に拡張し、外面に棒状浮文を3本1単位で貼り付けている。体部外面にはヘラミガキを施している。1763の刻目突帯は蛇行し、刻み目は潰れている。1768は刻目突帯のほかに断面三角形の突帯を巡らせている。体部外面には櫛描直線文と櫛描波状文が見られる。1770は無頸壺である。1774は体部外面に貝殻腹縁圧痕文が施されている。甕になるかもしれない。1775の体部外面には櫛描直線文と櫛描波状文が見られる。

1776~1820は甕である。1776・1777は口縁部端部外面に刻み目を施し、屈曲部外面には刻目突帯を巡らせている。1779~1797は口縁部端部を上方に拡張している。1781は口縁部内面にハケ目を施し、体部の内面には丁寧にヘラミガキを施している。1786・1788~1790・1792は口縁部内面を強くナデることによって端部を上方に拡張している。1800・1803は口縁部屈曲部の内面を強くナデている。1804は口縁部端部外面が肥厚している。1811の口縁部端部外面には刻み目を施している。

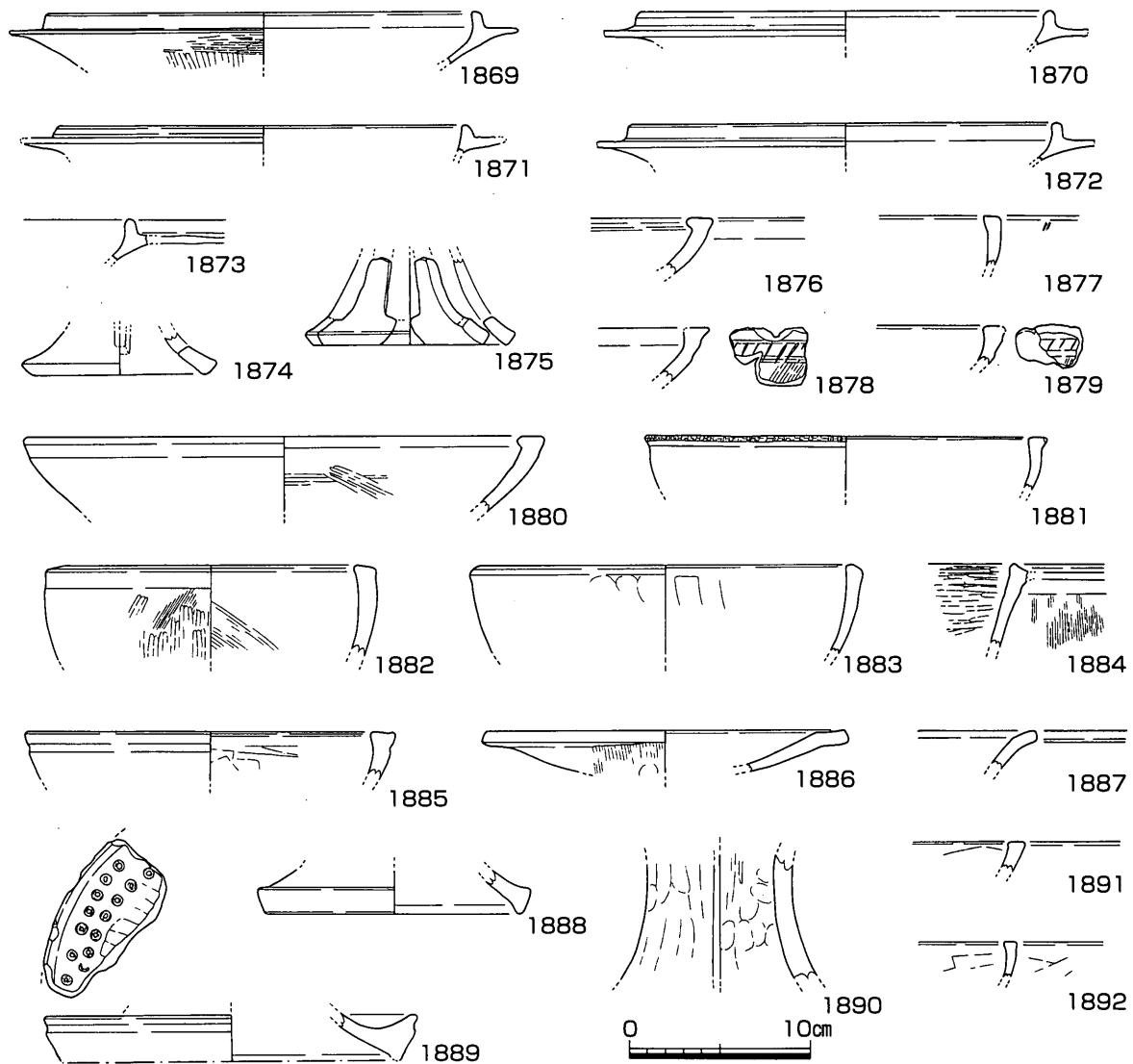
1821~1867は壺および甕の底部である。1823は上げ底である。1833の底部は突出しており、側面に指押さえを行っている。1850~1853は体部外面にヘラミガキを施している。1854~1867は短い脚台が付いている。1860・1862・1865の脚台は断面が三角形である。1868は台付鉢の台部で全体に外反している。円盤充填の剥離痕がある。

1869~1875・1888~1890は高杯である。1869~1873の口縁部は真横に開き、内面には突帯がある。1889は斜めに接地しており、端部を上方に大きく拡張している。外面には竹管文を2列巡らせている。1890は長方形の透かし穴があり、器台の筒部と考えられる。

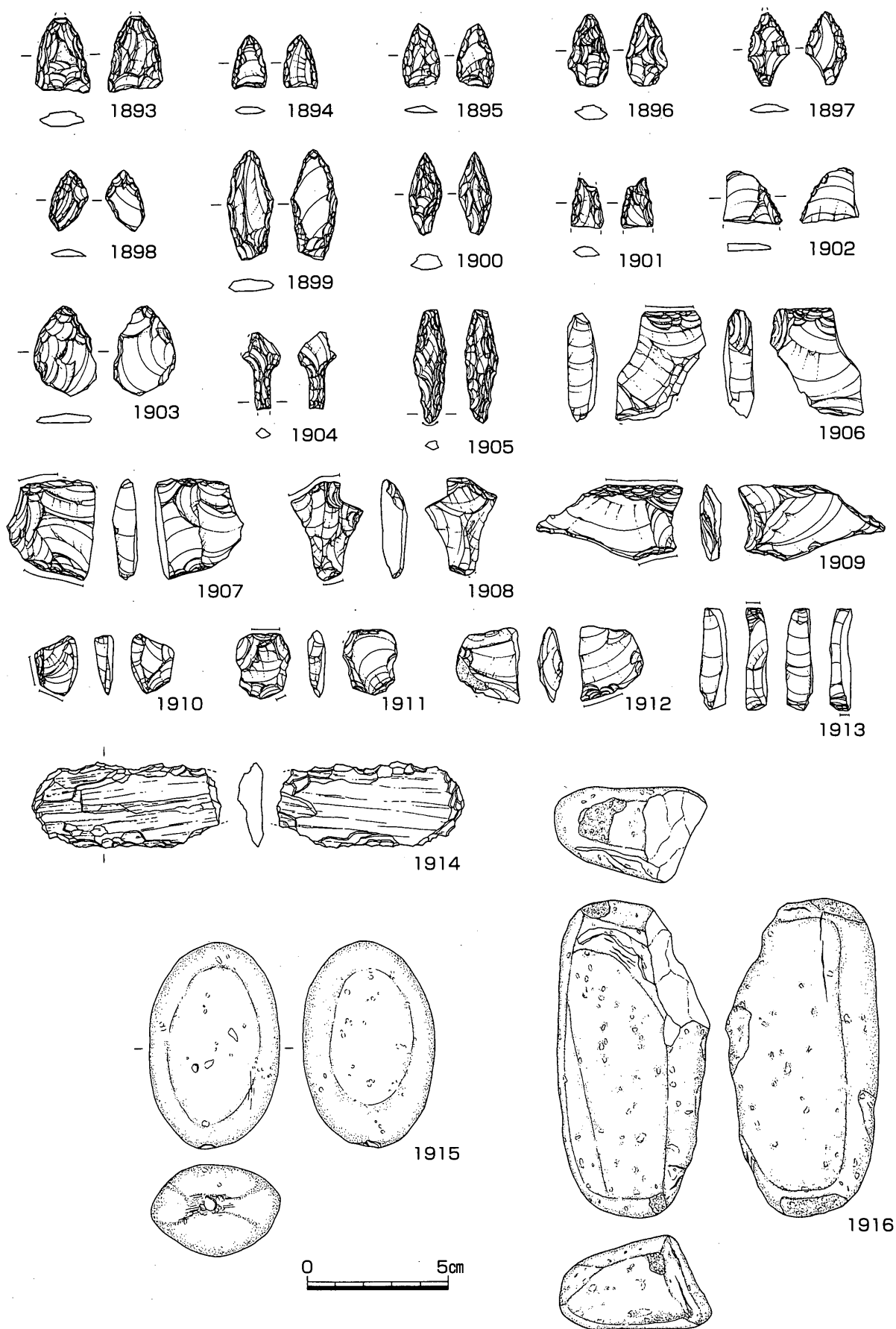
1876~1887は鉢である。1876・1878~1880は口縁部上面は平坦な面になり、下部には台が付くかもしれない。1886は浅い皿状で、口縁部内面を強くナデており、外面はハケ目を施している。高杯に分類したほうが良いかもしれない。

1893~1901は石鏃である。1893~1895は凹基、1896~1900は凸基である。1897・1900は凸基でも有茎式に近い。1898の基部は傾いている。1902・1903は石鏃の未製品と考えるが、1902は加工痕のある剥片と言ったほうが良いかもしれない。1904・1905は石錐で、1905の錐部には摩滅痕が認められる。1906~1913は楔形石器である。1910は隣り合う辺に敲打痕が認められる。1913は截断が進んで削片になったものである。1914は結晶片岩製のスクレイパーである。1915~1918は敲石である。1915は一端のみ使用している。1918は一端と両面を敲打に使用している。1919・1920は凹石で、1920は端部も敲打に使用している。1921~1926は砥石であるが、1924は台石としての使用のほうが多く、1926は台石としても使用しているが、砥石としての使用のほうが多い。

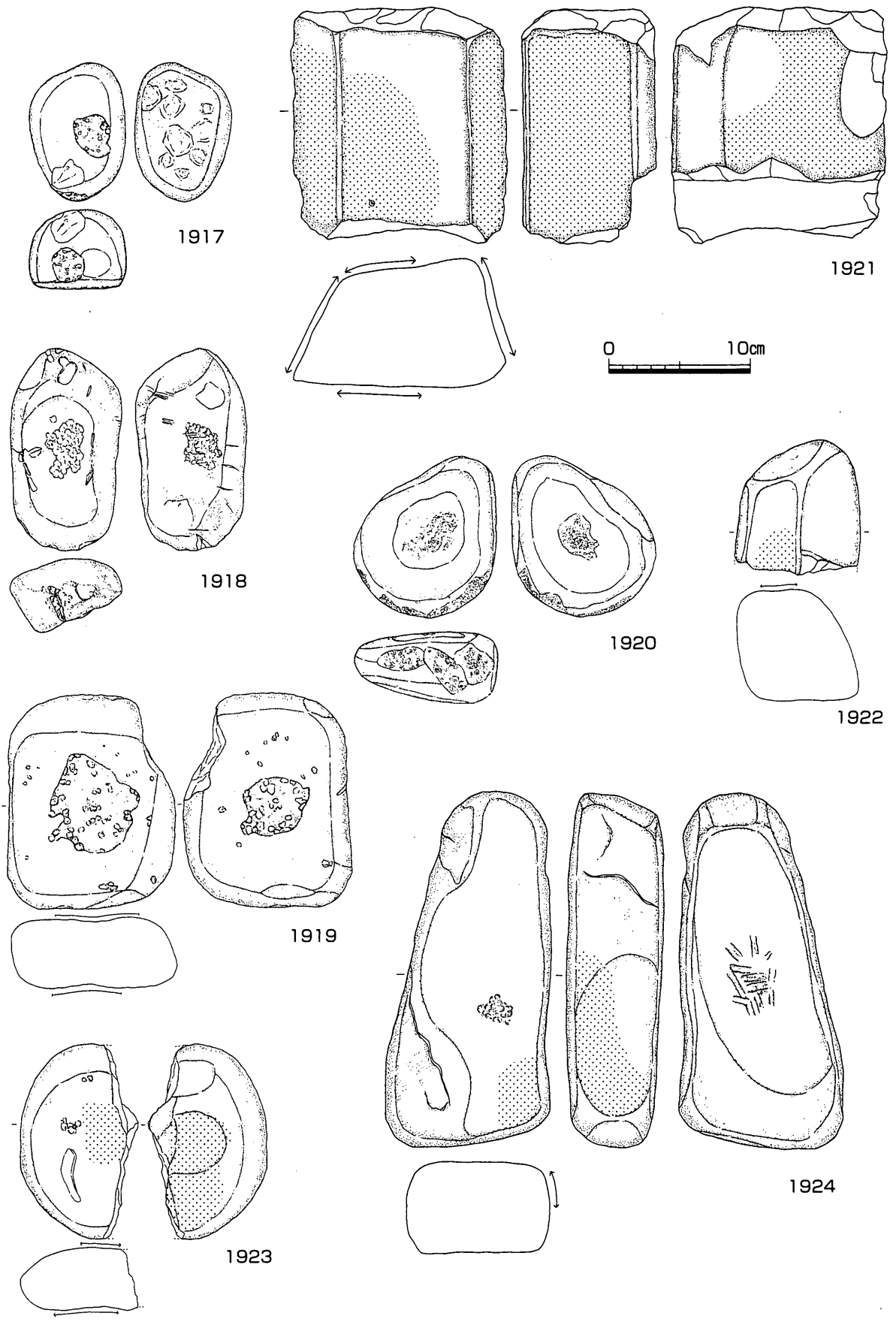
集石18は南北土層図からもSH03・SH05を壊して構築されており、周溝墓SX02に先行する。出土遺物から集石18は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。



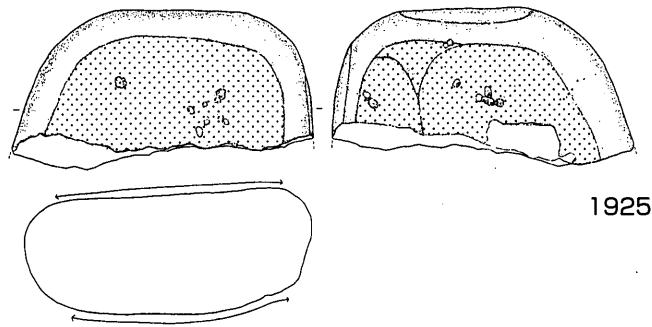
第448図 V区第2面集石18出土遺物 (5) (1 / 4)



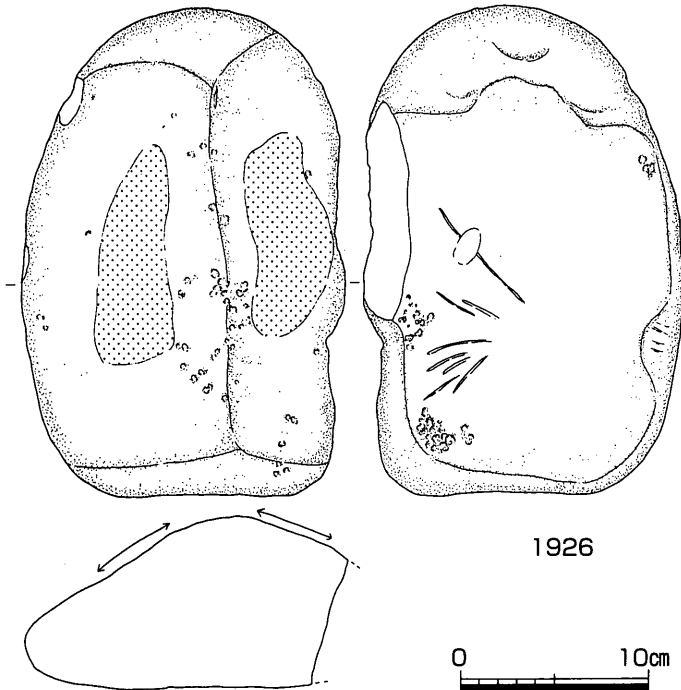
第449图 V区第2面集石18出土遺物 (6) (1/2)



第450图 V区第2面集石18出土遺物 (7) (1/4)



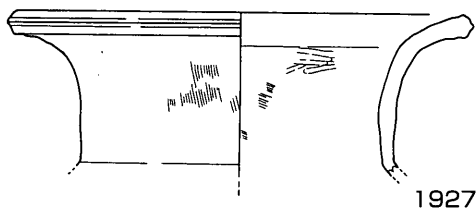
1925



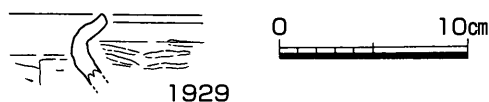
1926

0 10cm

第451図 V区第2面集石18出土遺物(8)(1/4)



1927



1929

第452図 V区第2面集石26出土遺物(1/4)

集石26 (第431~432・452図)

調査区南東部の、旧G1区南壁際で検出した集石遺構で、集石16の西側に隣接している。集石26は保存のため、その上面を検出したにとどまる。全体の調査を行っていないので、集石遺構の範囲は礫の分布の疎密により判断したが、不明な部分が多々ある暫定的な範囲である。

平面的に検出しただけで、盛り上がりは確認していない。平面形は直径3.4mの円形で、南側部分は調査区外になる。検出部分の標高は12.4mである。礫を検出した部分で掘り込みを停止しているため、端部の標高と集石遺構の高さは不明である。礫は中央やや北東部分で密集しているが、それ以外は少ない。砂岩が中心で少量の花崗岩を含んでいる。

集石26は断ち割り調査を行っていないので盛土の詳細は不明である。全体に第1遺構面を形成する茶褐色砂質土に覆われている。そしてこの茶褐色砂質土の中で礫を面的に検

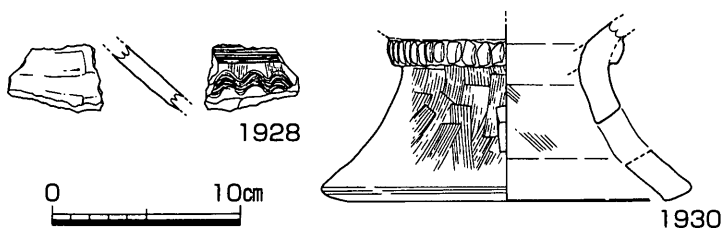
出した段階で掘り込みを停止している。下部施設の有無は不明である。

遺物の出土量は極めて少なく、図化出来たのは2点だけである。サヌカイト片を含めた石器は出土していない。なおレイアウトの都合上、遺物番号は飛んでいる。

1927は壺で、外反して開く口縁部の端部は上下からナデているため、中央部分が尖っている。頸部は外面にハケ目を施し、内面はハケ目とヘラミ

ガキを施している。1929は口縁部直下の体部外面にタタキが認められる。内面はヘラケズリである。

遺物は極めて少ないが、集石26は弥生時代後期中葉~後半の所産と考えておく。



第453図 V区第2面集石27出土遺物 (1 / 4)

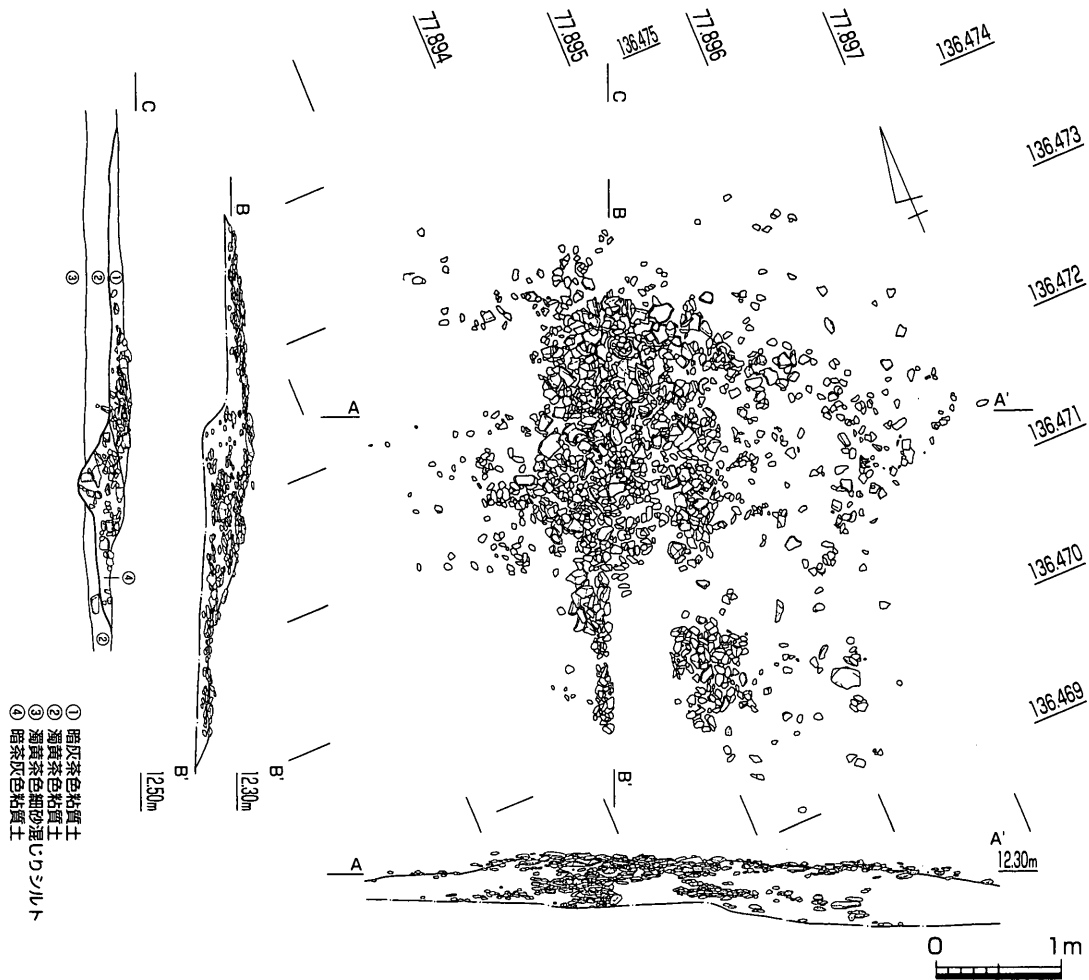
集石27 (第431~432・453図)

調査区南東部の、旧G1区南壁際で検出した集石遺構で、集石26の東側に隣接している。集石27は保存のため、その上面を検出したにとどまる。全体の調査を行っていないので、集石遺構の範囲は礫の分布の疎密により判断したが、

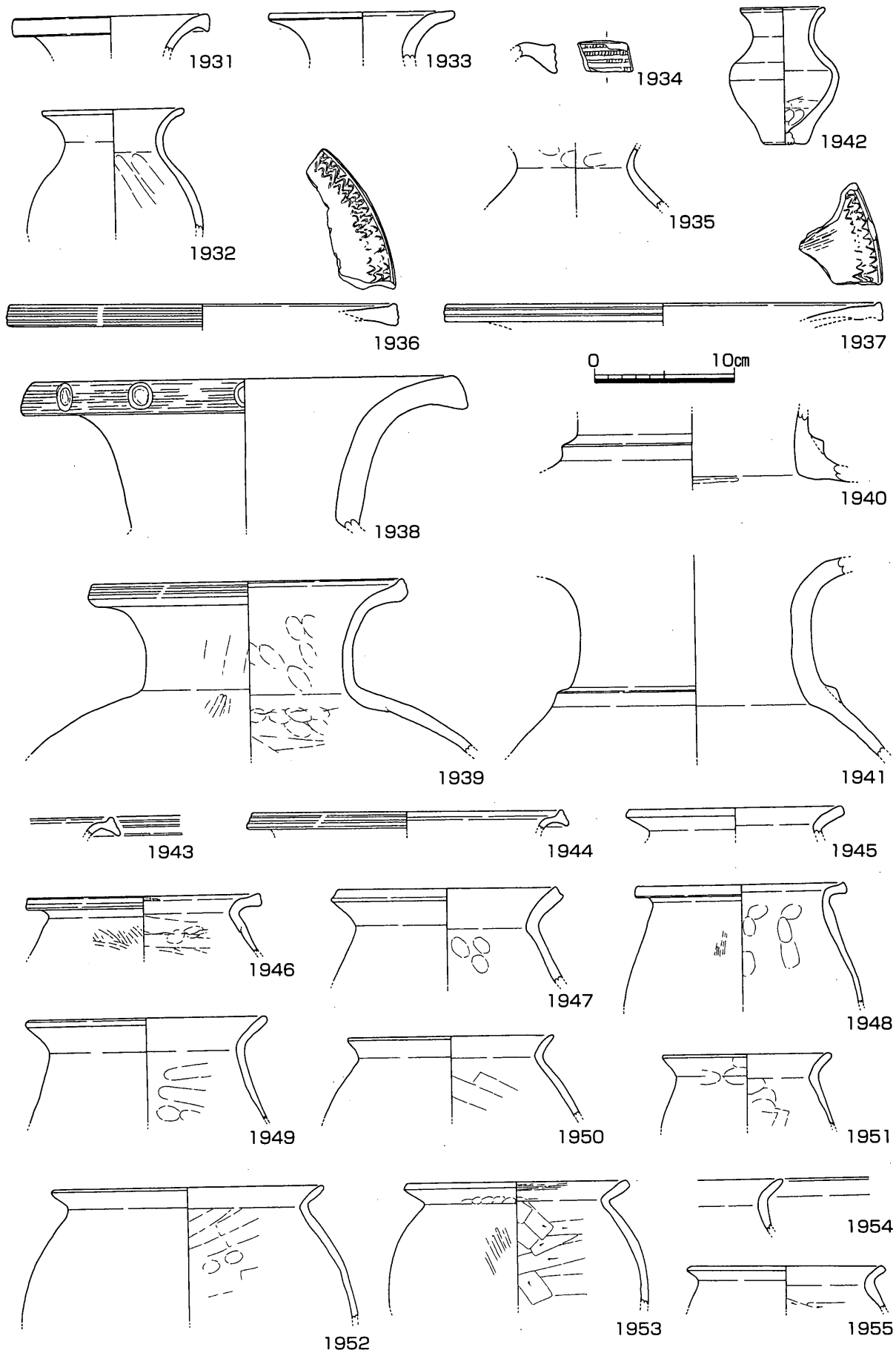
不明な部分が多々ある暫定的な範囲である。

平面的に検出しただけで、盛り上がりは確認していない。平面形は直径5.9mの円形である。検出部分の標高は南側で12.2m、北側は12.05mで北側のほうが低い部分での検出となった。礫を検出した部分で掘り込みを停止しているため、端部の標高と集石遺構の高さは不明である。礫は全体に広がっているが、それほど密な状況ではない。砂岩が中心で少量の花崗岩を含んでいる。

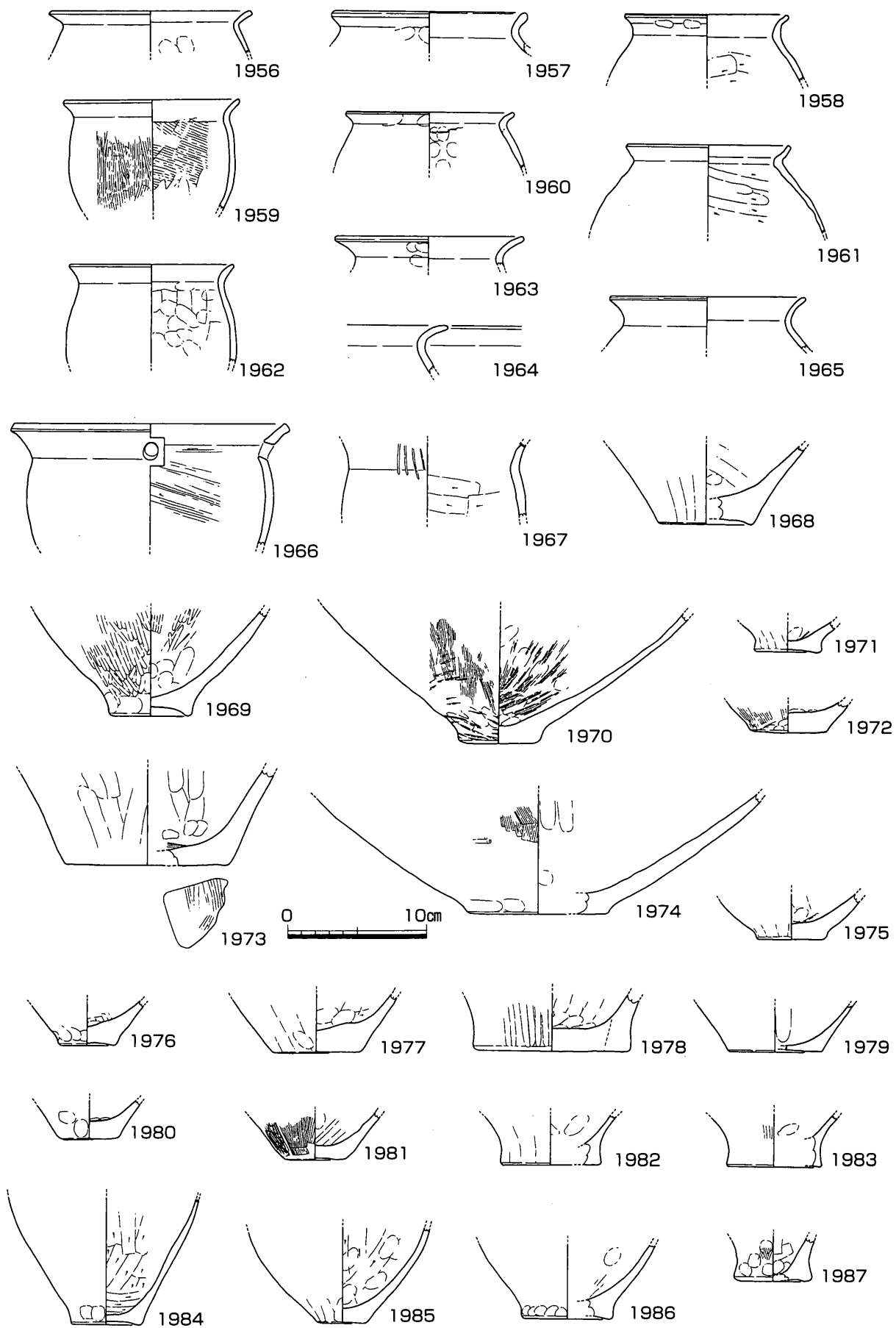
集石27は断ち割り調査を行っていないので盛土の詳細は不明である。全体に第1遺構面を形成する茶褐色砂質土~暗茶褐色粘質土に覆われている。そしてこの茶褐色砂質土中の中で礫を面的に検出した段階で掘り込みを停止している。下部施設の有無は不明である。



第454図 V区第2面集石28平・立・断面図 (1 / 60)



第455图 V区第2面集石28出土遺物 (1) (1 / 4)



第456图 V区第2面集石28出土遺物 (2) (1/4)

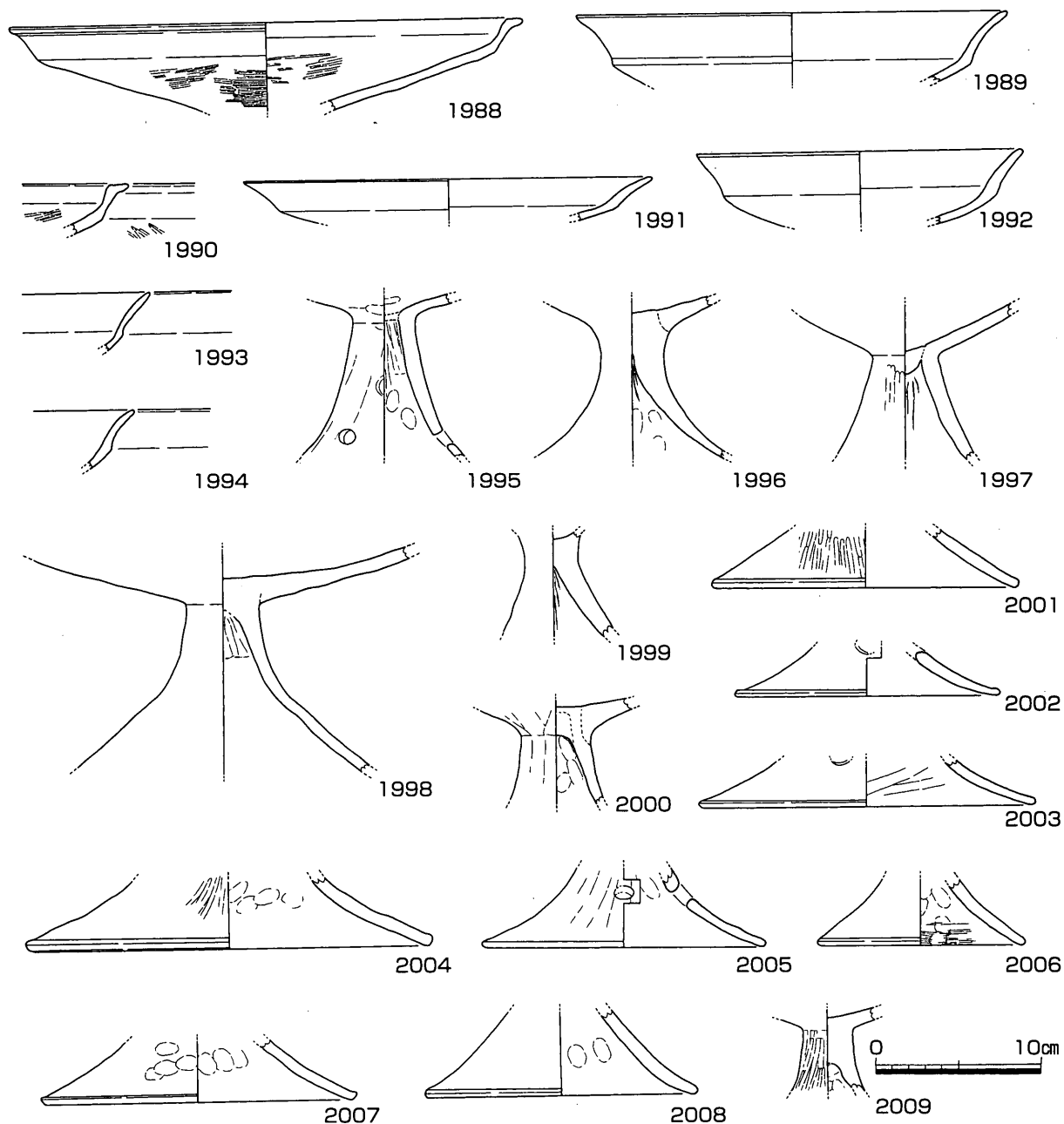
遺物の出土量は少ない。サヌカイト片を含めた石器は出土していない。なおレイアウトの都合上、遺物番号は飛んでいる。

1928は壺の体部で、外面には櫛描直線文と櫛描波状文が施されている。1930は台付鉢の台部である。鉢体部との境界部分には刻目突帯を巡らせている。端部は斜めに接地し、方形の透かし穴が現存で1個ある。内・外面共にハケ目を施している。内面上部に円盤充填の剥離痕が認められる。

以上の少ない遺物ではあるが、集石27は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。

集石28 (第454~460図)

調査区北側の西寄り、旧G4区で検出した集石遺構である。平面形は直径4.4~4.9mの円形である。浅く土坑を掘り込み、その中に土と礫を投入して土坑の掘り込み面よりも上まで盛り上げている。土坑



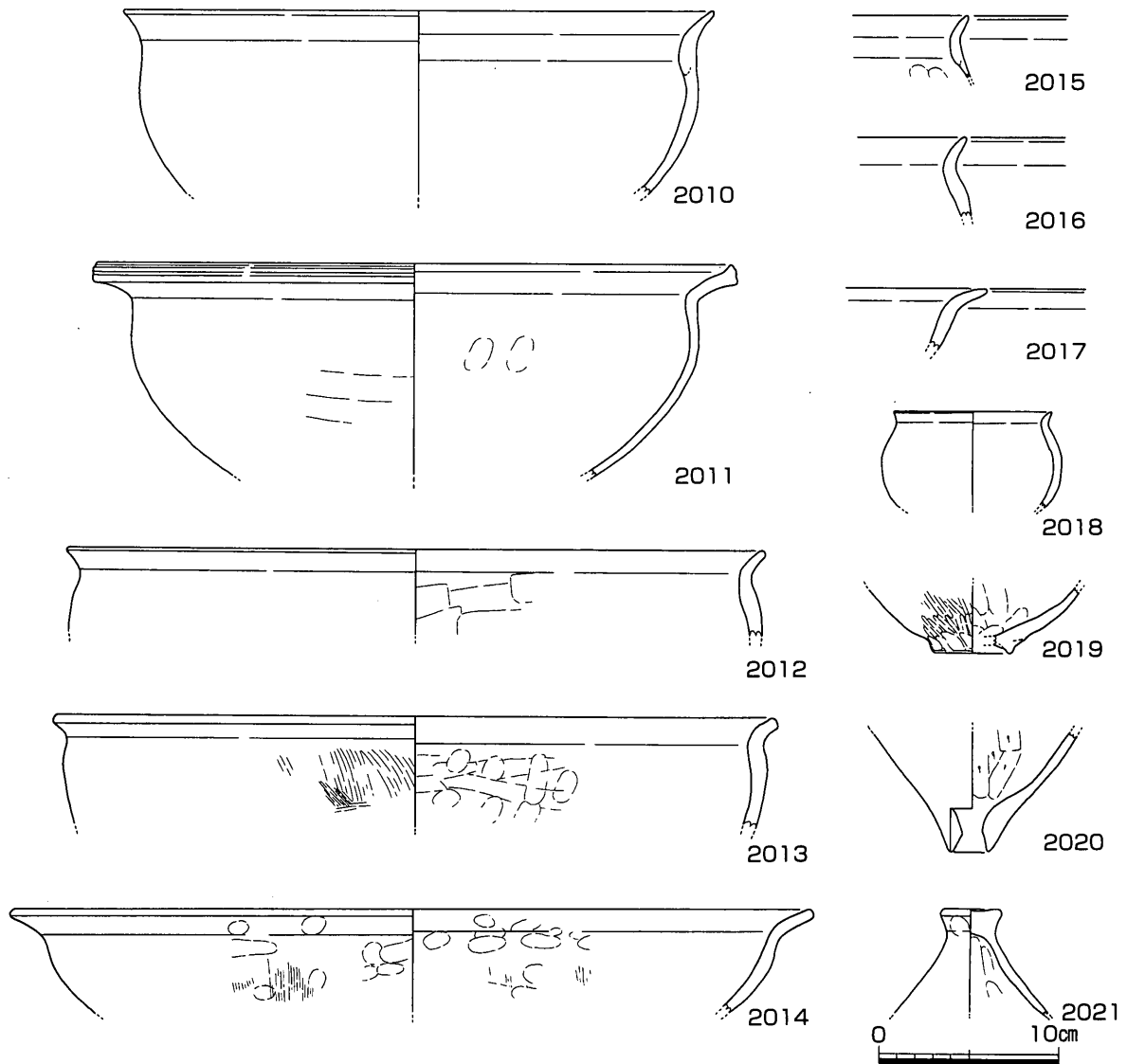
第457図 V区第2面集石28出土遺物 (3) (1/4)

の掘り込み面は12.3~12.35mで、南側のほうが若干低くなっている。盛り上がった部分の頂部の標高は12.45mである。土坑の底部は中央より南側部分が一段低くなる。最深部の標高は12.0mである。検出面から頂部までは10~15cmの盛り上がりがある。しかし南西部分の盛り上がりは低い。

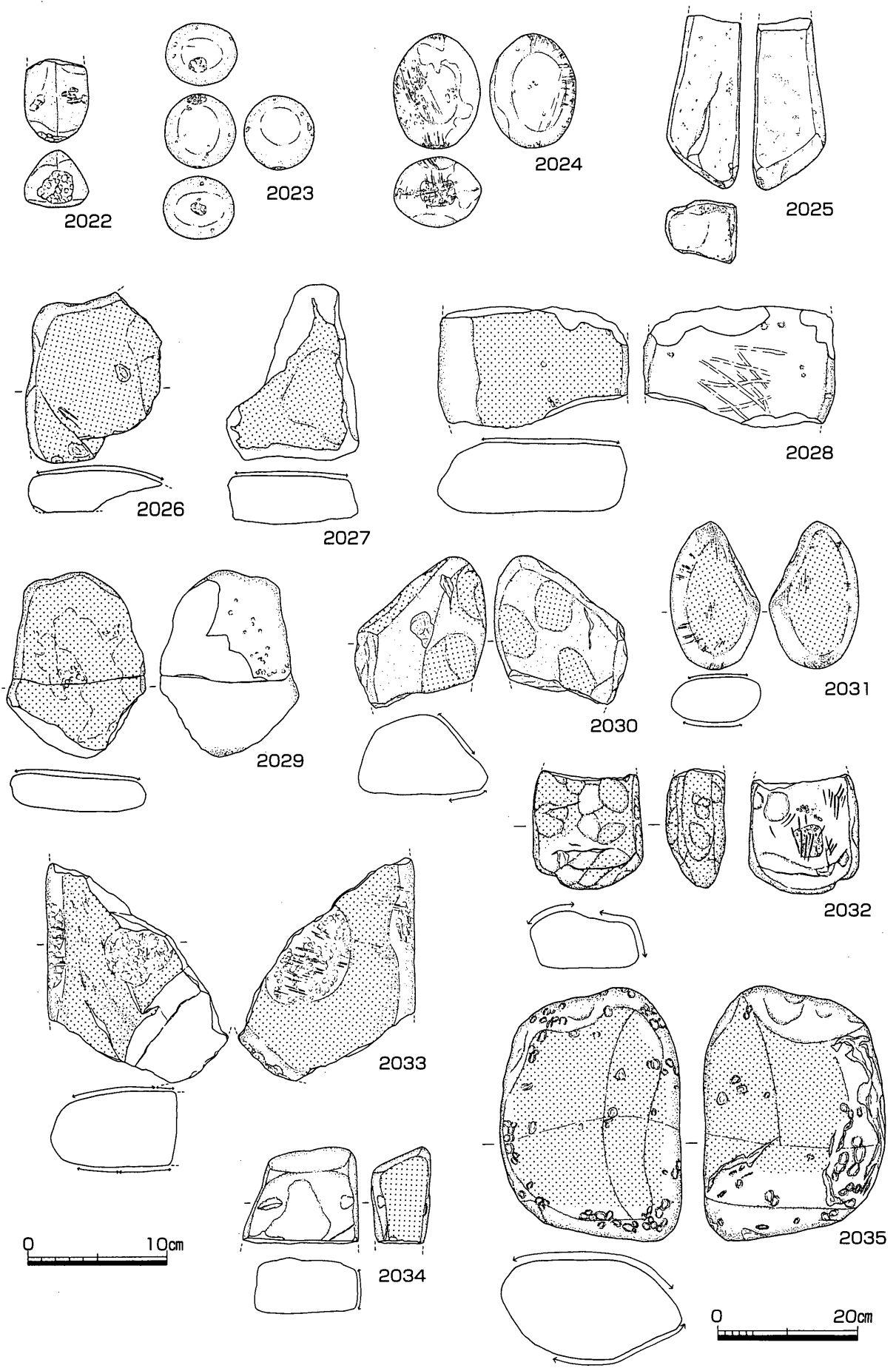
表面は全体的に礫に覆われているが、特に中央部分に密集している。礫は5~20cm大で、10cm程度のもが多い。礫は砂岩が主体で、少量の花崗岩・粘板岩と微量の結晶片岩を含んでいる。このうちの15%ほどが被熱赤変している。南北方向の土層断面によると2回の掘り込みがあるが、平面的には確認出来なかった。一段低くなっている部分が充填された後に北側の部分を掘り込んでいる。両者とも濁黄茶色粘質土層から掘り込まれている。

上に盛り上がった部分は、土坑に充填した土と礫をそのまま盛り上げている。従って上部にある掘り込みに充填された暗灰茶色粘質土と、一段低くなっている部分に充填された暗茶灰色粘質土が上に盛り上がっている。

上部にある後に掘り込まれた部分から礫とともに土器が集中的に出土した。これに対して下部の一段低い部分には土器はなく礫のみが出土している。遺物量は比較的多く、特に中央部分で多数出土している。



第458図 V区第2面集石28出土遺物(4)(1/4)



第459图 V区第2面集石28出土遺物 (5) (1/4、1/8)

る。石器は敲石・砥石・磨石などの大きいものだけで、サヌカイト製の小型の石器は出土しておらず、サヌカイト碎片が2点、重量にして13.3gが出土したにとどまる。

1931～1942は壺である。1931は口縁部端部を下方に拡張している。1932の体部上半は張りが無い。1936・1937は口縁部内面に櫛描波状文を施している。1938は口縁部端部外面に竹管文を施している。1939の口縁部端部を上方に拡張し、頸部内面には指押さえが顕著である。体部上半は大きく膨らみ、外面にヘラミガキを施している。1940・1941は頸部に突帯を巡らせている。1942はミニチュアの壺で、体部の張りは強い。

1943～1967は甕である。1943・1944は口縁部端部を上下に拡張している。1947の口縁部は厚く、端部は平坦な面になる。1949の体部上半は直線的である。1953は口縁部外面に指押さえを行い、内面にはハケ目を施している。体部は丸みが強く外面にはヘラミガキが認められ、内面にはヘラケズリを施している。1958は口縁部端部内面を強くナデている。体部内面にはヘラケズリを施している。1959は体部内・外面にハケ目を施している。1961は口縁部内面と屈曲部内面を強くナデて、体部内面にはヘラケズリを施している。1962の体部内面には指押さえが顕著である。1966は口縁部屈曲部に円形の穿孔が認められる。1967の口縁部の屈曲は弱く、外面にはヘラ描による文様がある。体部内面にはヘラケズリを施している。

1968～1987は壺および甕の底部である。1968・1971・1976・1984は上げ底である。1969は短い脚台が付き、体部内・外面にヘラミガキを施している。1970の底部は突出している。体部外面はタタキの後にハケ目を施し、内面はハケ目である。1973は底部外面にハケ目を施している。

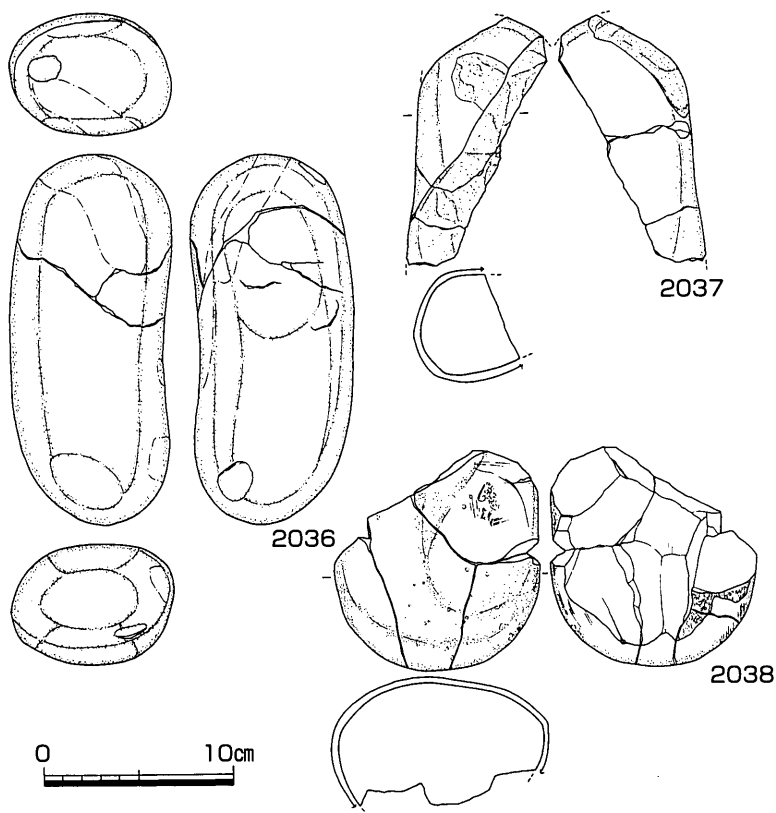
1988～2009は高杯である。1988・1990は口縁部端部を真横に拡張する。杯部の内・外面にはヘラミガキを施す。胎土に角閃石を含んでいる。

1989・1991～1994の口縁部は杯部から外面に稜を作って屈曲し後に、外反して開く。1995は上下2段の透かし穴がある。1997とともに円盤充填になっている。2001・2006・2007の脚部は直線的に開く。2002～2005の脚部は外反して開く。2008の脚部は端部付近で僅かに外反する。

2010～2019は鉢である。2010・2012・2015～2017の口縁部は直線的で、端部は先細りになる。2013・2014は体部外面にハケ目を施し、内面には指押さえが顕著である。2018は小型で体部の湾曲は強い。2019は底部に短い脚台が付き、体部外面にはヘラミガキを施す。

2020は甑、2021は蓋である。

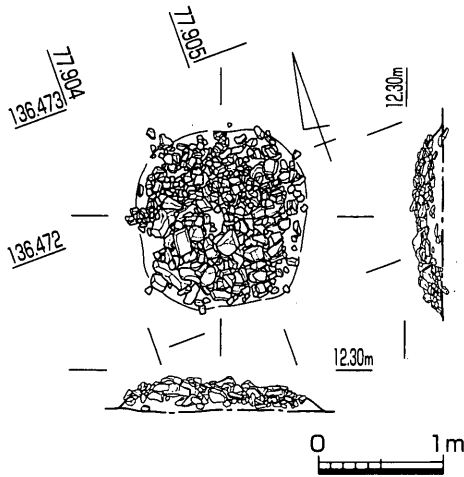
2022～2025は敲石である。2023は



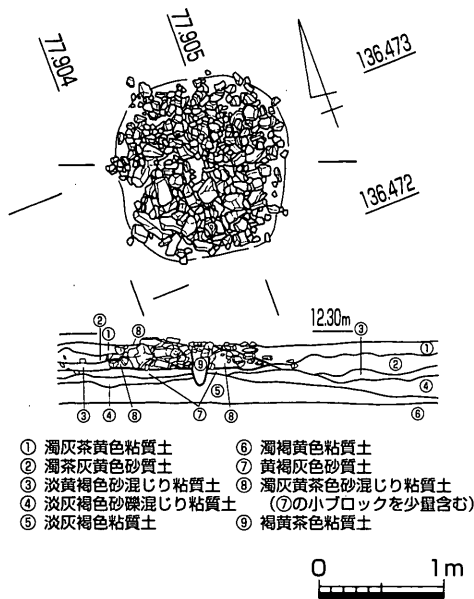
第460図 V区第2面集石28出土遺物(6)(1/4)

球形で上下両端を使う。2024は上下両端を使い、被熱赤変して炭化物も付着している。2026～2035は砥石である。2028・2032は台石としても使用しているが、砥石としての使用頻度のほうが高い。2033は表裏と側面を台石として使用しているが、砥石としても使用している。2036～2038は磨石である。2036は縦長のものである。2038は被熱赤変して割れている。

以上の遺物から集石28は、若干の弥生時代後期前半の遺物を含むが、概ね弥生時代後期中葉の所産と言える。



第461図 V区第2面集石29平・立面図(1/60)



第462図 V区第2面集石29平・断面図(1/60)

濁灰茶黄色粘質土の単一層である。柱穴と考えれば、この集石29の中央部に柱が立っていることになり、興味深い。ほかの集石遺構に比べて小さく、均整のとれた形であることを含めて何か特殊な意味合いがあったことが考えられる。この小穴以外に、下部の遺構等は認められなかった。

遺物の出土量はあまり多くない。いずれも破片で、出土状況に特に特徴は認められない。サヌカイトの剥片・破片は13点、重量にして25.3gが出土している。

2039～2049・2054～2058が集石29に伴うもので、2050～2053は集石29検出時の直上の包含層で出土し

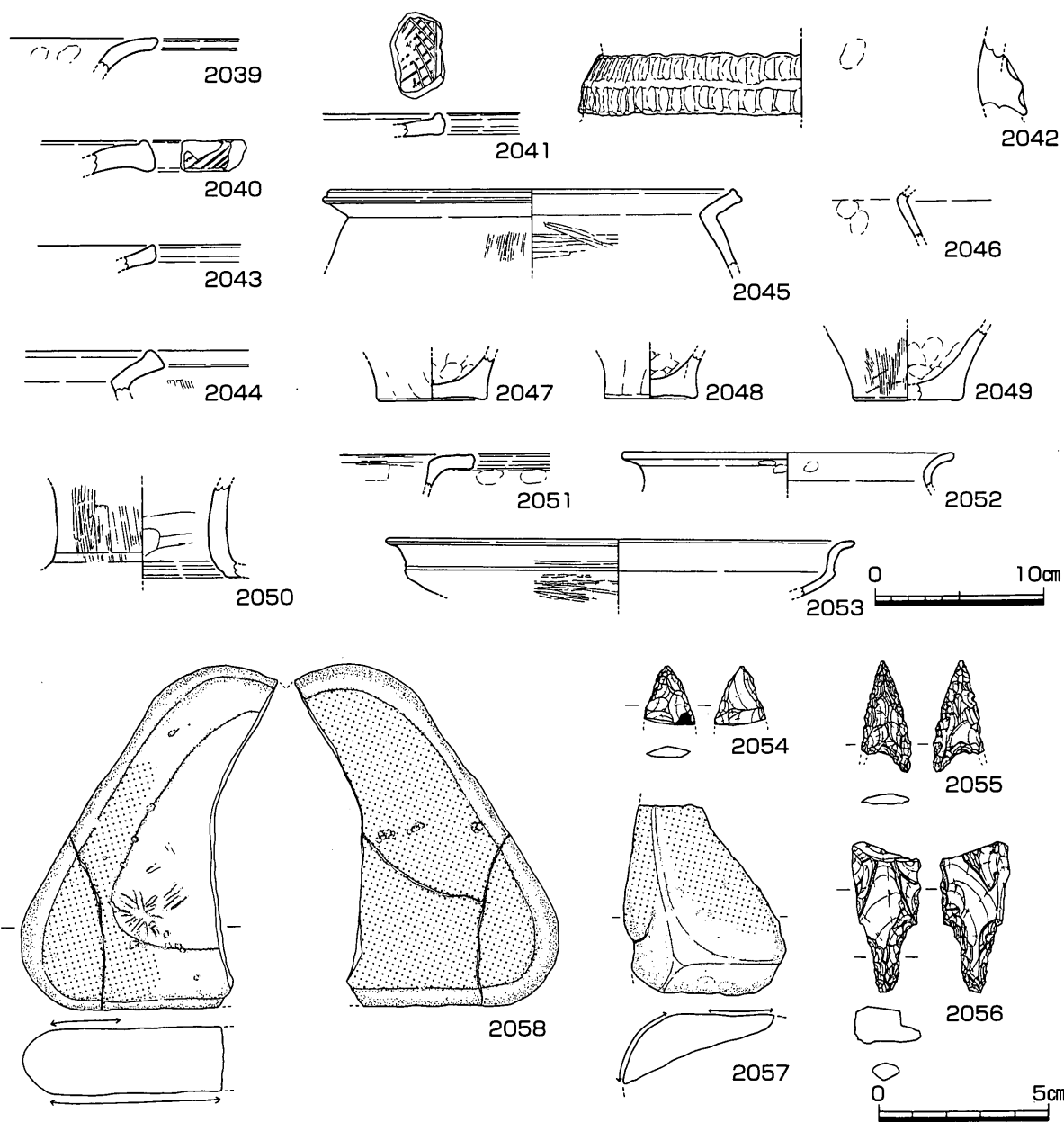
集石29 (第461～463図)

調査区北側中央部分の旧G 4区で検出した集石遺構である。平面形は一辺1.4mの隅丸方形である。全体に小型で均整の取れた形である。全体に塚状に盛り上がっているが、頂部は平坦に近く西側から東側に向かって緩く傾斜する。端部の標高は12.0m、頂部の標高は12.25m、高さは25cmである。端部付近の傾斜は西側から南側にかけて急になっている。

表面は全体に礫に覆われており、礫は5～15cm大である。南東部分に比較的大きな礫が集中している。礫は砂岩が主体となり、少量の花崗岩・粘板岩と微量の結晶片岩を含んでいる。このうちの8%ほどが被熱赤変している。

集石29の構築面は黄褐灰色砂質土層の上面で、これは北壁土層図の弥生時代の遺構面より上部になるが、遺構面は北から南に向かって上がっているため、集石29の位置する部分では弥生時代の遺構面に相当する。この面から土と礫を混ぜながら塚状に盛り上げている。盛土は濁灰黄褐色砂混じり粘質土の単一層である。礫は上下全体にあり、この盛土は積んだ礫が崩落しないように接着する役割も含んでいると考えられる。

頂部の中心部で盛土上面から掘り込まれた直径15cmの円形の小穴を検出した。深さは30cmで、底部は構築面より下部に至っている。埋土は褐黄茶色粘質



第463図 V区第2面集石29・集石29上部包含層出土遺物（1/4、1/2）

た遺物である。

2039～2042は壺である。2041は口縁部内面に斜格子文を施している。2042は幅広の突帯に2段の刻み目を施している。2043～2046は甕である。2045は口縁部屈曲部の内面は鋭く、端部外面には太い凹線を巡らせている。体部外面にはハケ目を施し、内面には太いヘラミガキを施している。2047～2049は甕の底部と考えられる。2054・2055は石鏃で、2055の基部は湾曲の度合いが強い。2056は石錐で、つまみ部は縦長である。2058は片面を砥石に、反対を台石として使用している。

以上のように、集石29の上部の包含層には弥生時代後期の遺物が混じるが、集石29に伴う遺物は弥生時代中期中葉である。従って集石29は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。

集石30（第464・466・467・482図）

調査区北壁際の中央部の、旧G4区で検出した集石遺構である。平面形は楕円形で、北東部分は調査

区外になる。長径は検出部分で2.0m、短径は1.3mである。盛り上がりはあまりなく、平面的に分布している。端部の標高は11.95~12.0m、頂部の標高は12.15、高さは15~20cmである。全体に平坦で、西側部分の端部が少し低くなる。

全体に礫が集められたような状態で、礫は5~15cm大である。礫は砂岩が主体となり、花崗岩を伴っている。礫のいくつかは被熱赤変している。

集石30の構築面は黄茶色砂質土層の上面である。この部分は弥生時代の遺構面が高くなっている部分に相当する。この面の上に礫1個分を敷き詰めたような状態になっている。礫の間に充填されている土は淡黄茶色砂混じり粘質土であるが、集石30を覆う土とはあまり区別がつかない。集石30に伴う下部遺構は認められなかった。この集石30の下部には集石31がある。

遺物は礫の間から少量出土している。いずれも破片である。

2069は壺の口縁部で2個の穿孔が認められる。2070は壺あるいは甕の底部で、外面にヘラミガキを施している。2071は鉢の口縁部で、端部を拡張して上側に面を作る。2072は紡錘車である。2795は壺で、



第464図 V区第2面集石30平・断面図 (1/20)

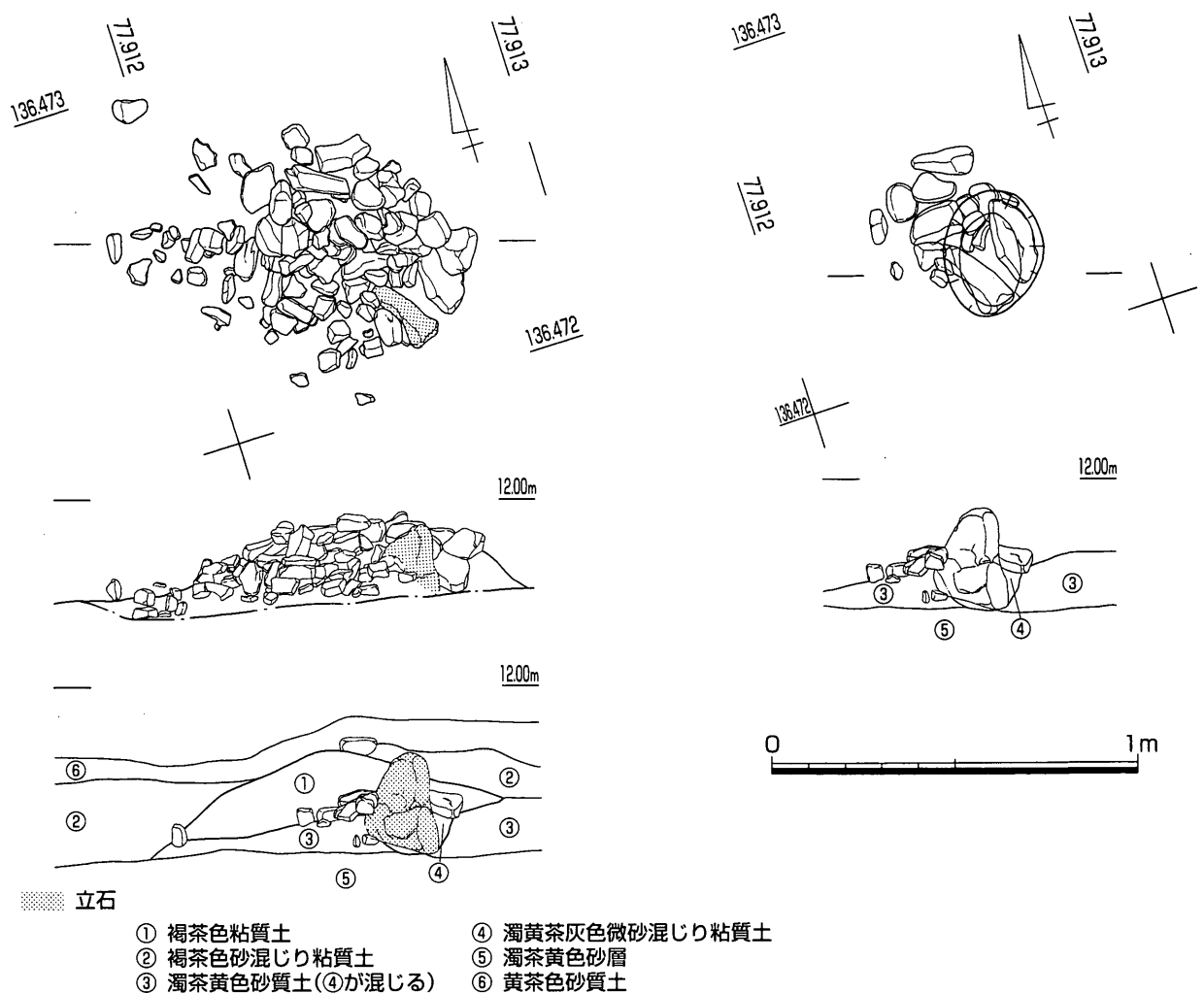
頸部には突帯を2条巡らせているが、1条は剥離している。内面には粗いヘラミガキを施している。2796は甕で、口縁部端部は上方に拡張し、屈曲部外面には指押さえによる刻目突帯を巡らせているが摩滅している。2797は高杯で、口縁部は真横に開き、内面には突帯がある。2798・2799は壺の底部と考えられる。2080は凸基有基式の石鏃である。

出土遺物は弥生時代中期中葉である。しかし構築面から考えると弥生時代後期と考えられる。下部には別の集石31があり、それより上部に位置していることと、構築面から集石30は弥生時代後期と考えておく。

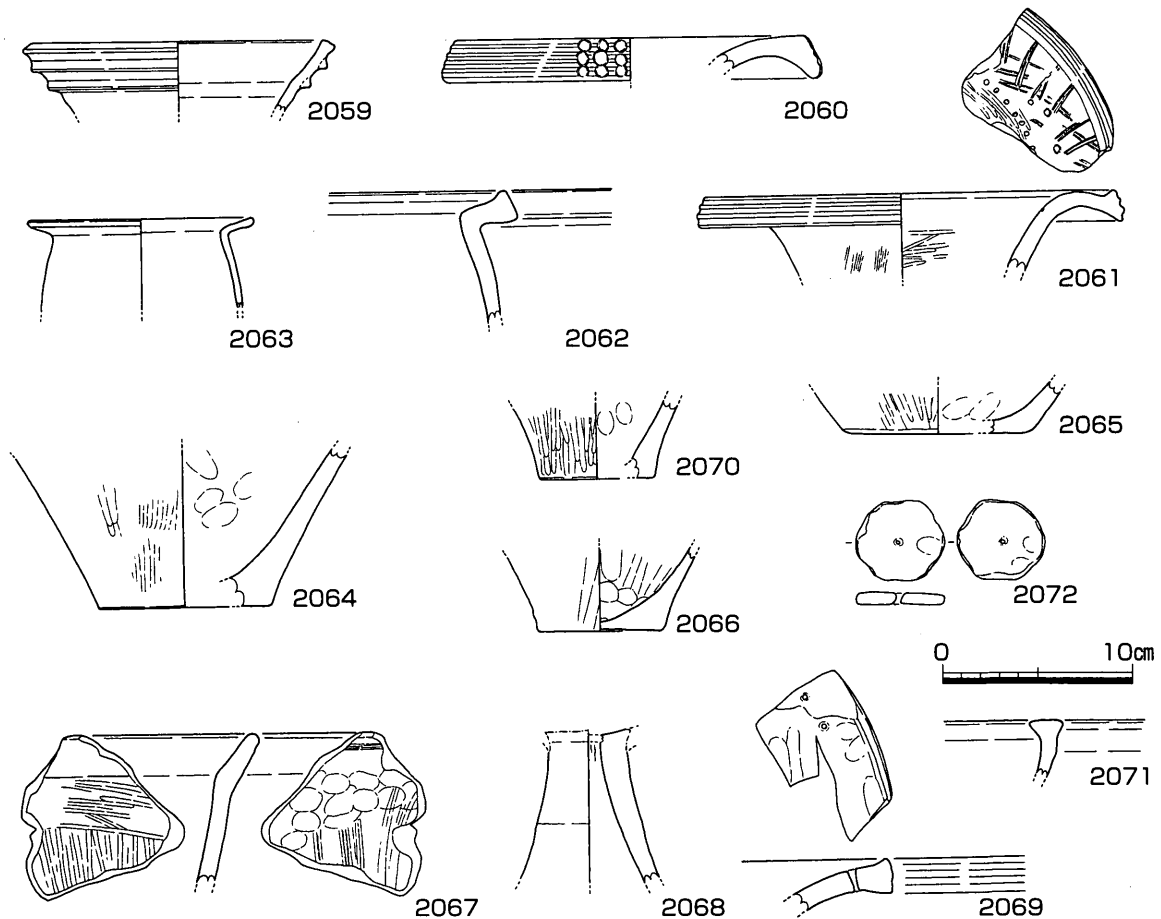
集石31 (第465～467・482図)

調査区北壁際の中央部の、旧G4区で検出した集石遺構である。集石30と重なり、集石30より下部に位置している。平面形は直径0.7mの円形で、小型の集石遺構である。全体に塚状に盛り上がっている。頂部は丸みを帯びており、西側部分のほうが少し傾斜は緩くなっている。端部の標高は11.7～11.8m、頂部の標高は11.95m、高さは15～20cmである。西側部分の端部が低くなっている。

全体に礫に覆われているが、東側部分が幾分少なくなっている。礫は5～20cm大で、集石の規模の割には大きめの礫を使用している。礫は砂岩が主体となり、花崗岩を伴い、少量の粘板岩と微量の結晶片岩が認められる。礫の14%が被熱赤変している。



第465図 V区第2面集石31平・立・断面図、中央立石平・立・断面図 (1/20)



第466図 V区第2面集石30・集石31出土遺物（1）（1／4）

集石31の構築面は濁茶黄色砂質土層の上面である。この面から土と礫を混ぜながら塚状に盛り上げている。この盛土は褐茶色粘質土の単一層で、礫が崩落しないように接着する役割もあると考えられる。

中央から南寄りの端部に近い位置では、構築面に直径25cmの円形の穴を12cm掘り込み、そこに長さ28cmの扁平な石を立てている。立石の近辺には支えにしたと考えられる小礫が認められる。この立石の上部は集石31の表面ではすでに確認出来ている。そしてこの立石を取り囲むように土と礫を盛り上げている。この立石は砥石（2079）を転用しているものである。盛り上げた土と礫をすべて除去すると、まさに立石のみが起立している状況である。縄文時代の立石を彷彿させるものである。立石のほか下部遺構などは検出されなかった。

集石31は全体を褐茶色砂混じり粘質土に覆われている。埋没後に上部に厚さ10cm前後の黄茶色粘質土が堆積し、その上面に集石30が築かれている。集石30と集石31の構築面は20cmの高低差があり、集石31の頂部とは10cm前後の差になっている。

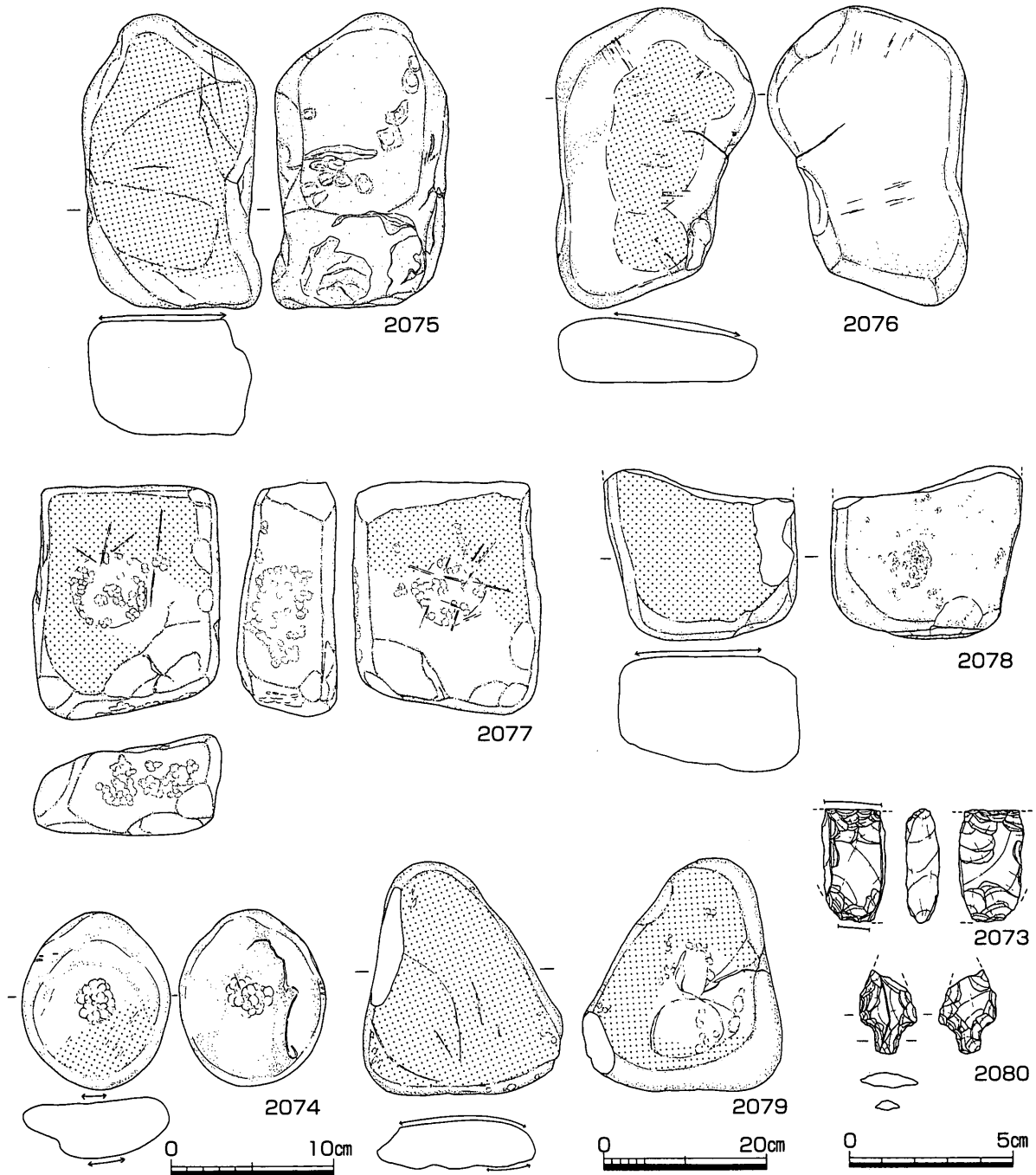
遺物の出土量は多くない。土器はすべて破片での出土である。石器のほかにサヌカイトの剥片・破片が12点、重量にして17.0gが出土している。

2059～2061は壺である。2059は外傾する口縁部の外面に突帯を巡らせている。2060は口縁部端部を大きく下方に拡張し、外面に凹線を巡らせた後に9個1単位の円形浮文を貼り付けている。2061の口縁部は強く外反し、端部のほうが低くなっている。端部は上下に拡張している。内面には斜格子文の間に剥離痕だけが残るが円形浮文を貼り、さらに下部に円形の刺突文を巡らせている。2062・2063は甕である

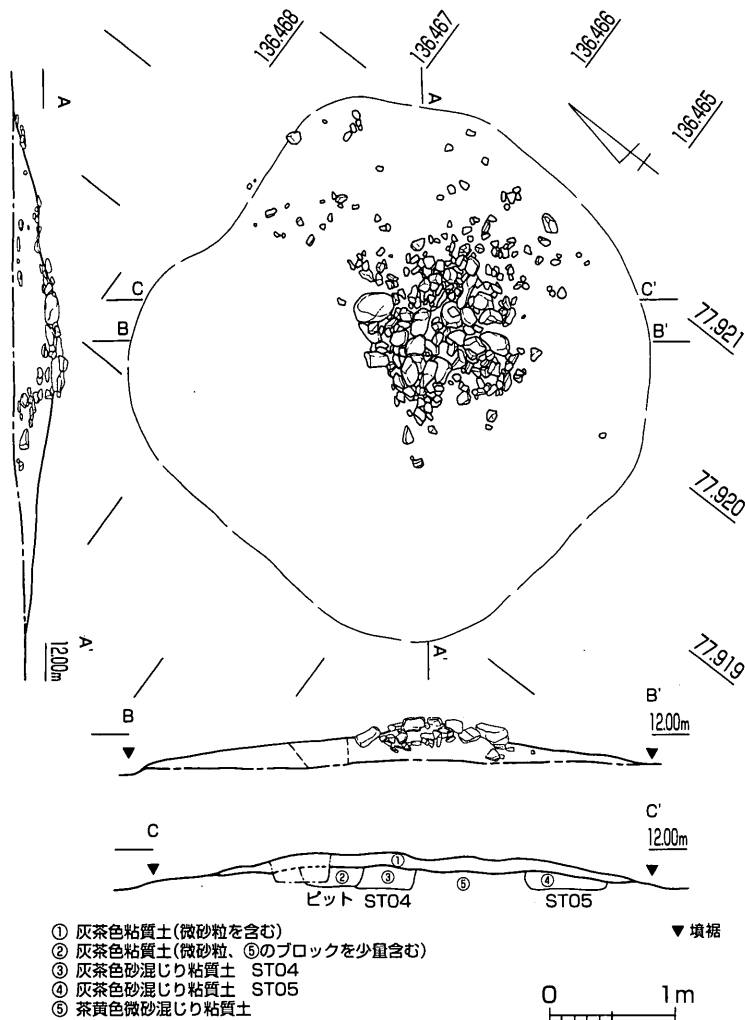
が両者とも全体に摩滅している。2067は鉢と考えられ、体部・口縁部共に直線的である。体部外面には、ハケ目であるが半截竹管により連続的に施している。内面はヘラミガキである。2068は高杯である。2800・2801は壺で内面に斜格子文を施す。2800は端部外面に刻み目を加える。

2073は楔形石器で、截断面に両極打撃の痕跡が残る。2074は凹石で、両面とも使用している。2075～2079は砥石である。2077は台石としての使用頻度のほうが高い。2078は台石としても使用しているが、砥石としての使用頻度のほうが高い。2079は立石として転用している。

以上の出土遺物と構築面から、集石31は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。



第467図 V区第2面集石30・集石31出土遺物 (2) (1/2、1/4、1/8)



第468図 V区第2面集石32平・立・断面図 (1/60)

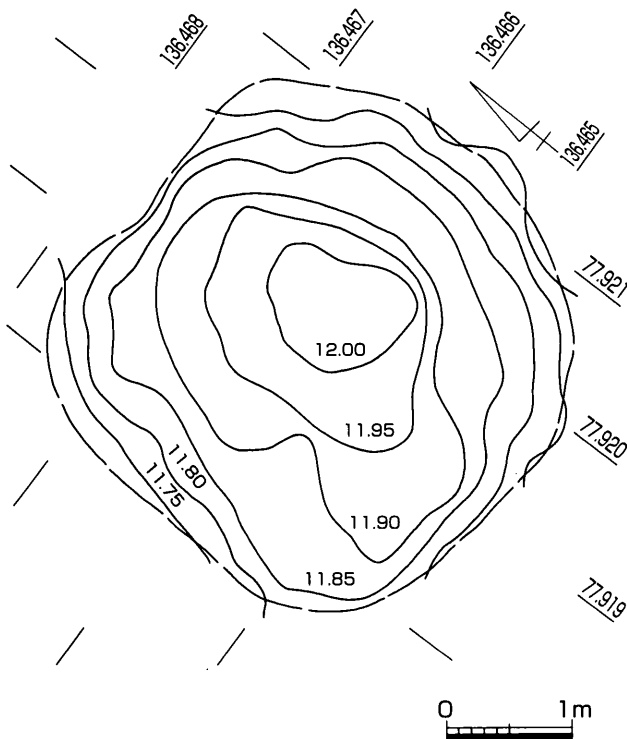
集石32・ST04・ST05 (第468～472・482図)

調査区北側のやや東寄りの旧G4区で検出した集石遺構である。平面形は一辺3.7mの隅丸方形であるが、北側が少し内側に入り込んでいる。全体に塚状に盛り上がっている。頂部は丸みを帯びており、緩やかに傾斜して端部に至る。南西部分は平坦に近い部分がある。端部の標高は11.8～11.85m、頂部の標高は12.15m、高さは30～35cmである。

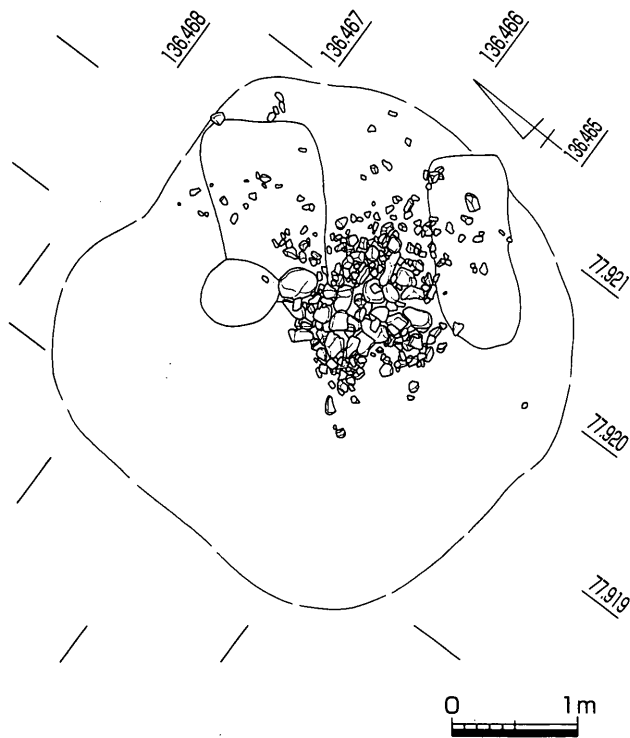
礫は中央から少し東側の部分の頂部に集中しており、その他の部分には基本的にはない。僅かに斜面部で見られる礫は、おそらく頂部の礫が崩落したものと考えられる。礫は5～30cm大で、中央に15～20cm大の大き目の礫を配し、その周囲に小さめの礫を配している。礫の数は規模の割には少ない。

礫は砂岩が主体となり、少量の花崗岩を含んでいる。被熱しているものは認められなかった。

集石32の構築面は茶褐色砂混じり粘質土層の上面である。この面から主に土を塚状に盛り上げて、最後に頂部に礫を配している。盛土は灰茶色粘質土の単一層で、盛土の上面に礫を配し、礫の間にも灰茶色粘質土を充填している。盛土の厚さは10～30cmほどであるが、断面図と立面図で厚さが異なるのは作図した位置が異なるためである。また端部付近の地山を削り出したような表現になっているが、これは土層の識別が困難なため周囲の遺構面を下げ気味で調査したためである。



第469図 V区第2面集石32測量図 (1/60)

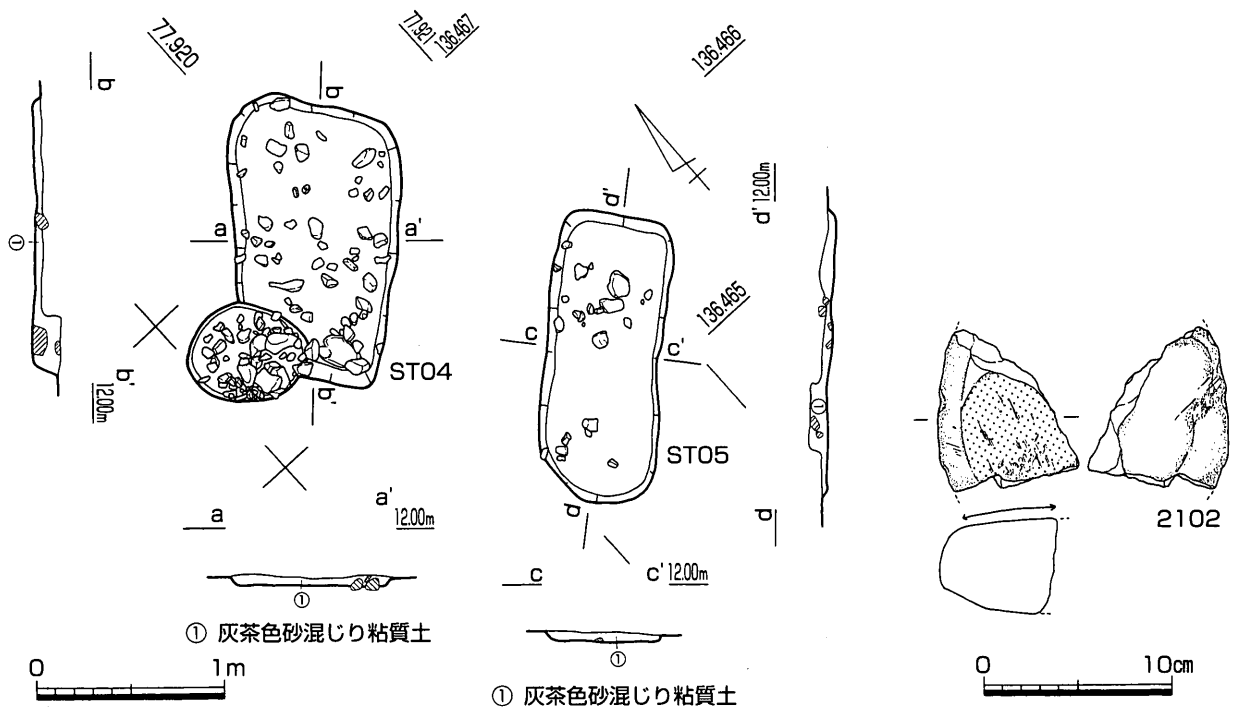


第470図 V区第2面集石32平面図 (1/60)

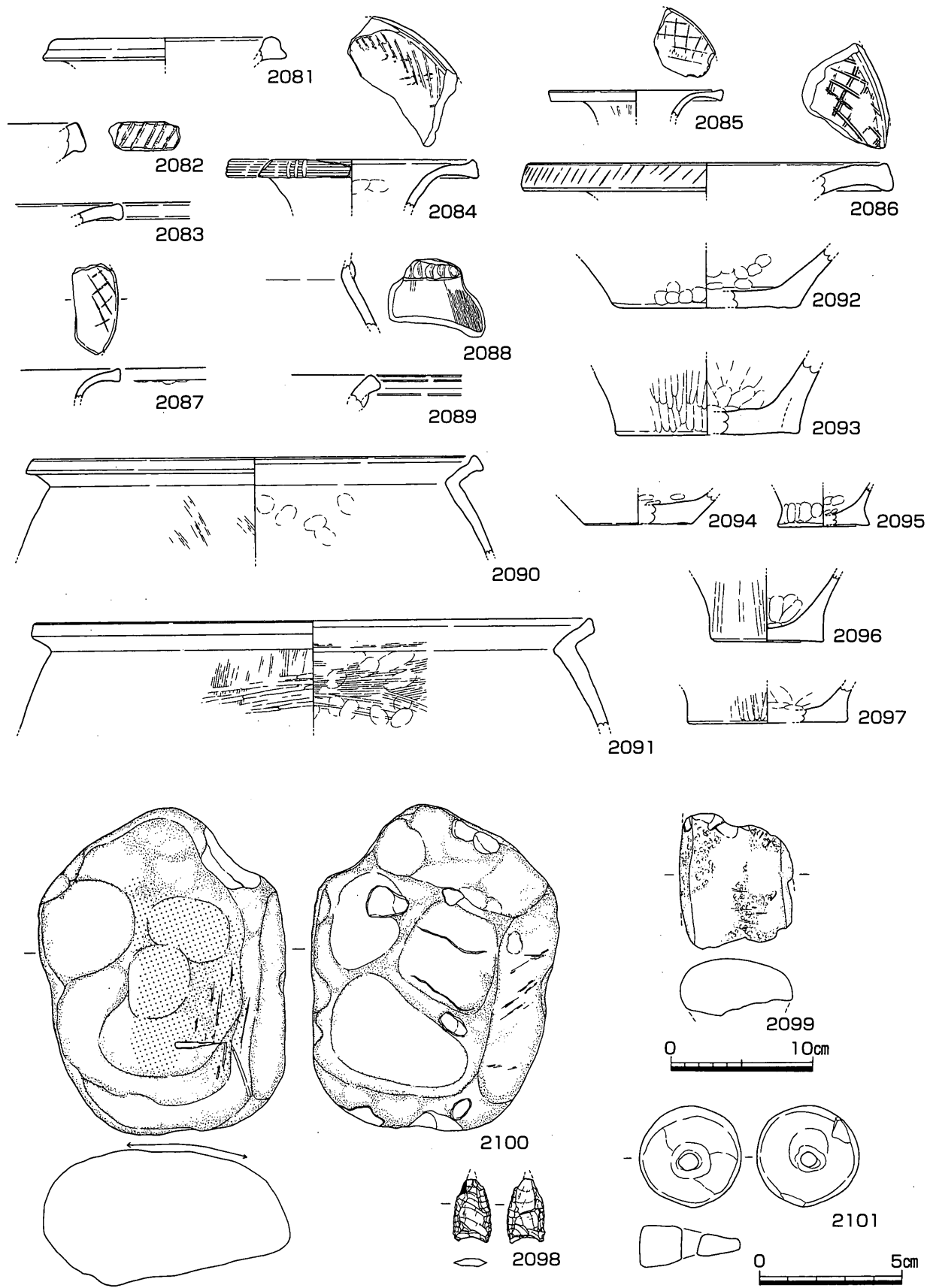
集石32の下部で2基の土壙 (ST04・05) を検出した。いずれもその形状から調査概報での解釈通り、土壙墓と考えられるものである。ST04は平面形が長方形で、長辺1.4m、短辺0.9mである。掘り込みは急で、深さは15cm、埋土は灰茶色砂混じり粘質土の単一層である。底部は平坦で2~10cm大の礫を、密度は低い敷いたような状態で認められた。一方、ST05も平面形は長方形で、長辺1.5m、短辺0.6mである。掘り込みは急で、深さは10cm、埋土は灰茶色砂混じり粘質土の単一層である。底部は平坦で、ST04よりさらに少ないが、2~10cm大の礫が認められた。しかし両者とも土壙墓としては掘削深度がかなり浅くなっている。

ST04・05とも掘り込み面は、集石32の構築面と同じ茶褐色砂混じり粘質土である。集石32の端部の標高と一致する。一応、集石32の盛土に覆われている。しかしST05はその東側隅が集石32の端部ラインからはみ出している。さらにST04は西側の隅をほかの小穴に壊されている。ST04が集石32に伴うものであれば、このST04を壊す小穴も同じ条件で集石32に伴うことになる。しかしこの小穴の性格とST04を壊すことの説明がつかない。

一方、このST04・05の南西に隣接してSB07がある。このSB07の北東側の柱穴は集石32の盛土を除去



第471図 V区第2面集石32下部・ST04・05平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)



第472图 V区第2面集石32出土遗物 (1/4、1/2)

した段階で検出している。検出面はST04・05と同じである。集石32の盛土が残っている段階で掘立柱建物SB07を建てたとは考えられない。従って集石32はSB07の廃絶後に築かれたものである。SB07とST04・05は隣接しているが、重なってはいない。ST04を壊す小穴をSB07のような周囲に点在する柱穴の一つと考えれば、ST04はSB07に先行し、集石32にも伴わないことになる。

ST04・05は集石32に伴うような位置関係にある。しかし集石32とST04・05との断面による関係や、上記のような理由から両者が伴うという根拠は乏しい。

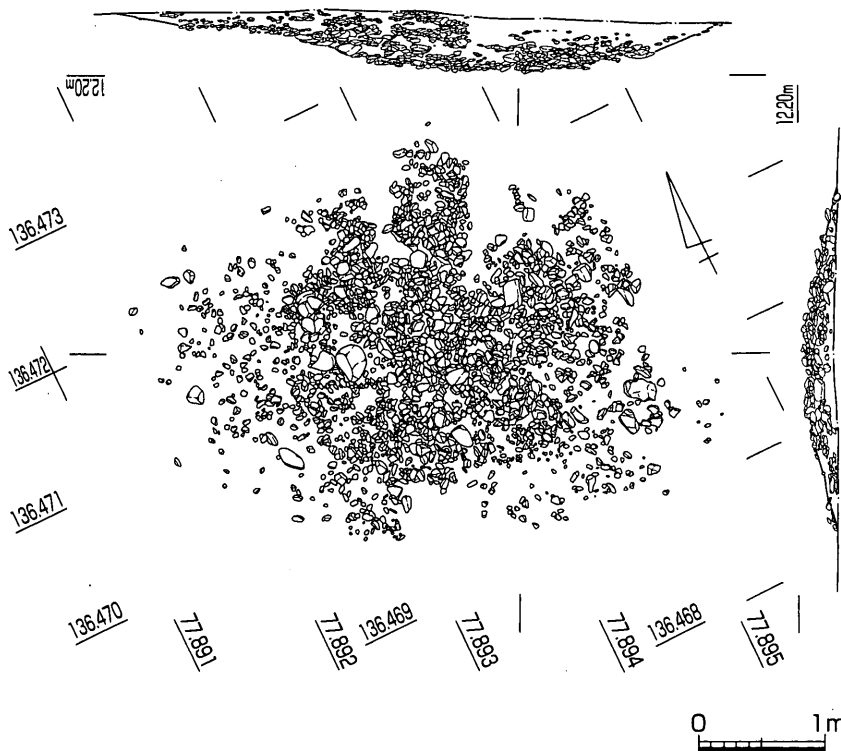
集石32からの遺物の出土量は多くない。頂部の礫に混じって出土している。土器はすべて破片での出土である。石器のほかにサヌカイトの剥片・碎片が20点、重量にして19.0gが出土している。

2081～2088は壺である。2081は壺の口縁部と考えたが、あるいは高杯の脚部になるかもしれない。2084～2087は口縁部内面に斜格子文を施す。2084は口縁部端部外面に棒状浮文を貼り付け、2086は刻み目を施す。2088は頸部に突帯を巡らせている。2089～2091は甕である。2090は口縁部端部を上下に拡張している。2091は体部外面にハケ目の後にヘラミガキを施し、内面にはハケ目を施している。2802・2803は壺で、口縁部端部を下方に拡張している。

2098は凹基の石鏃である。2099は脈岩安山岩製の太型蛤刃石斧の破片である。2100は砥石。2101は珪化木を利用した紡錘車である。厚さは一定ではなく斜めになっている。

2102はST05から出土した砥石である。砥石としてではなく、欠損品として普通の礫と同じ扱いにしている。

以上の出土遺物から、集石32は弥生時代中期中葉と考えられるが、同じく中期中葉のSB07よりは後出する。またST04・05は明瞭な時期は分からないが、検出面や周囲で検出した土壙墓の時期などから、弥生時代中期中葉と考えられるが、SB07よりは先行する可能性がある。



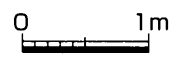
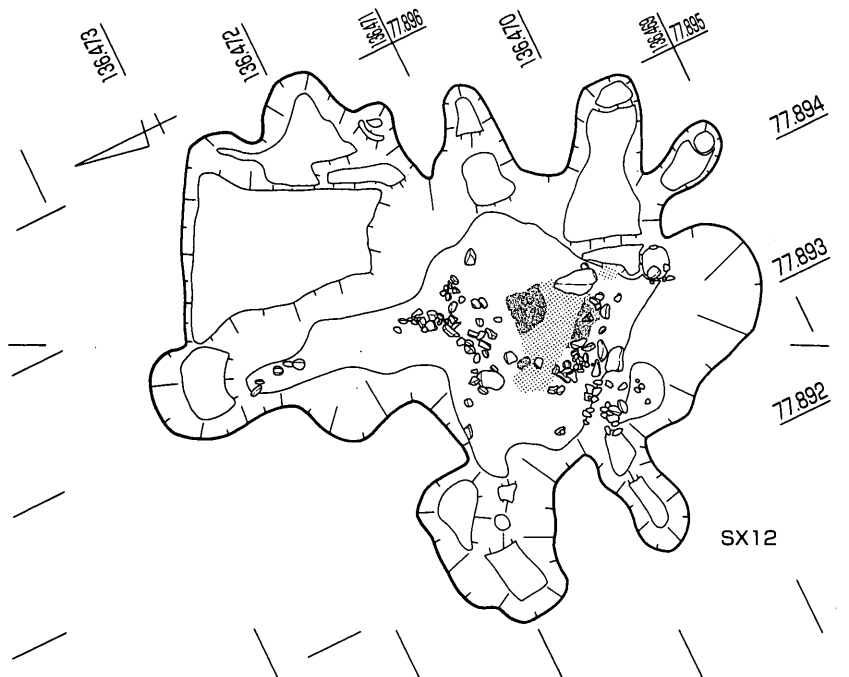
集石33・SX12 (第473～482図)

調査区北側の西寄り、旧G4区で検出した集石遺構で、集石28と重なり、その下部で検出している。平面形は楕円形で、長径4.7m、短径2.8mである。全体に塚状に盛り上がっている。頂部は丸みを帯びている。南北方向は緩やかに傾斜して端部に至るが、東側の傾斜は直線的で比較的急になっている。西側は途中で平坦なテラス状の面を作ってから再び

第473図 V区第2面集石33平・立面図 (1/60)



- ① 濁黄茶色粘質土
- ② 濁茶黄色砂質土
- ③ 淡茶色砂混じり粘質土
(茶黄色粘質ブロック含む) 集石33
- ④ 灰茶色粘質土
(茶黄色粘質ブロック少量含む) 集石33
- ⑤ 茶色砂礫混じり粘質土 集石33
- ⑥ 濁黄色砂質土
- ⑦ 茶褐色砂礫混じり粘質土
- ⑧ 茶褐色砂混じり粘質土
- ⑨ 灰茶褐色砂混じり粘質土
- ⑩ 黄茶褐色砂混じり粘質土
- ⑪ 黄茶褐色砂混じり粘質土
(焼土ブロックがラミナ状に入る)
- ⑫ 茶褐色砂混じり粘質土
- ⑬ 黄茶色砂混じり粘質土
- ⑭ 灰茶色砂混じり粘質土
- ⑮ 暗褐色砂質土
- ⑯ 明褐色砂混じり粘質土
- ⑰ 明褐色砂混じり粘質土
(焼土ブロックが下部にラミナ状に入る)
- ⑱ 明褐色砂混じり粘質土
(焼土ブロック、炭化物多量を含む)
- ⑲ 濁茶黄色砂混じり粘質土
- ⑳ 茶色砂礫混じり粘質土
(黄茶色粘質土ブロック含む)
- ㉑ 暗黄灰色砂混じり粘質土
- ㉒ 暗褐色砂混じり粘質土
- ㉓ 暗褐色砂混じり粘質土
(焼土・炭化物を含む黄色粘土ブロックが混じる)
- ㉔ 黄茶色砂質土



第474図 V区第2面集石33・SX12平・断面図 (1/60)

傾斜して端部に至る。端部の標高は11.7～11.9m、頂部の標高は12.15m、高さは25～45cmである。東西部分の端部が少し低くなっている。

全体的に礫に覆われているが、端部に向かうほど礫は少なくなる。また南東-南-南西部分は少なく土が露出している。反対に頂部は礫がかなり密集している。礫は5～30cm大であるが、大部分は5～10cm大である。頂部中心から0.8～1.0m離れた部分では、一回り大きい15～20cm大の礫が円周を描くように認められる。礫は砂岩が主体となり、少量の花崗岩を含んでいる。

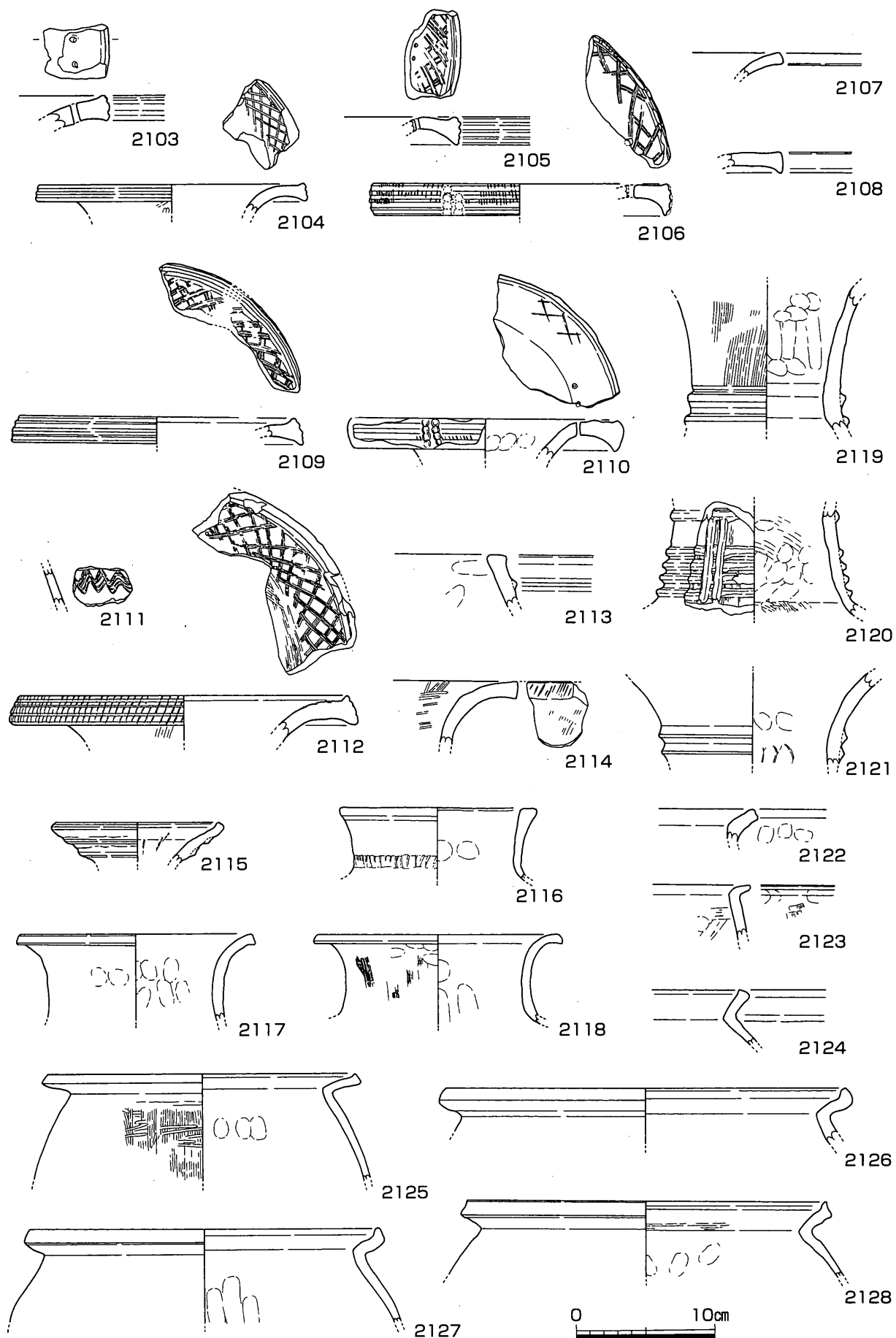
集石33の構築面は茶褐色砂礫混じり粘質土層の上面である。この面から土と礫を塚状に盛り上げている。盛土は大きく3層に分かれる。構築面の土坑状に40cmほど窪んだ部分に土と礫を充填しながら盛り上げている。下部の2層は斜めに堆積しており、下層には茶色砂礫混じり粘質土が、その上の中層には灰茶色粘質土が堆積している。上層には淡茶色砂混じり粘質土が堆積している。礫は下層から上層にかけて含まれているが、表面近くには礫が重なって堆積している。それ以外は土のほうが多い。

遺物は下層から多く出土し、次いで上層で、中層からの出土は少ない。土器・石器ともに出土しているが、土器は破片が多い。石器の他にサヌカイトの剥片・碎片が46点、重量にして114.6gが出土している。

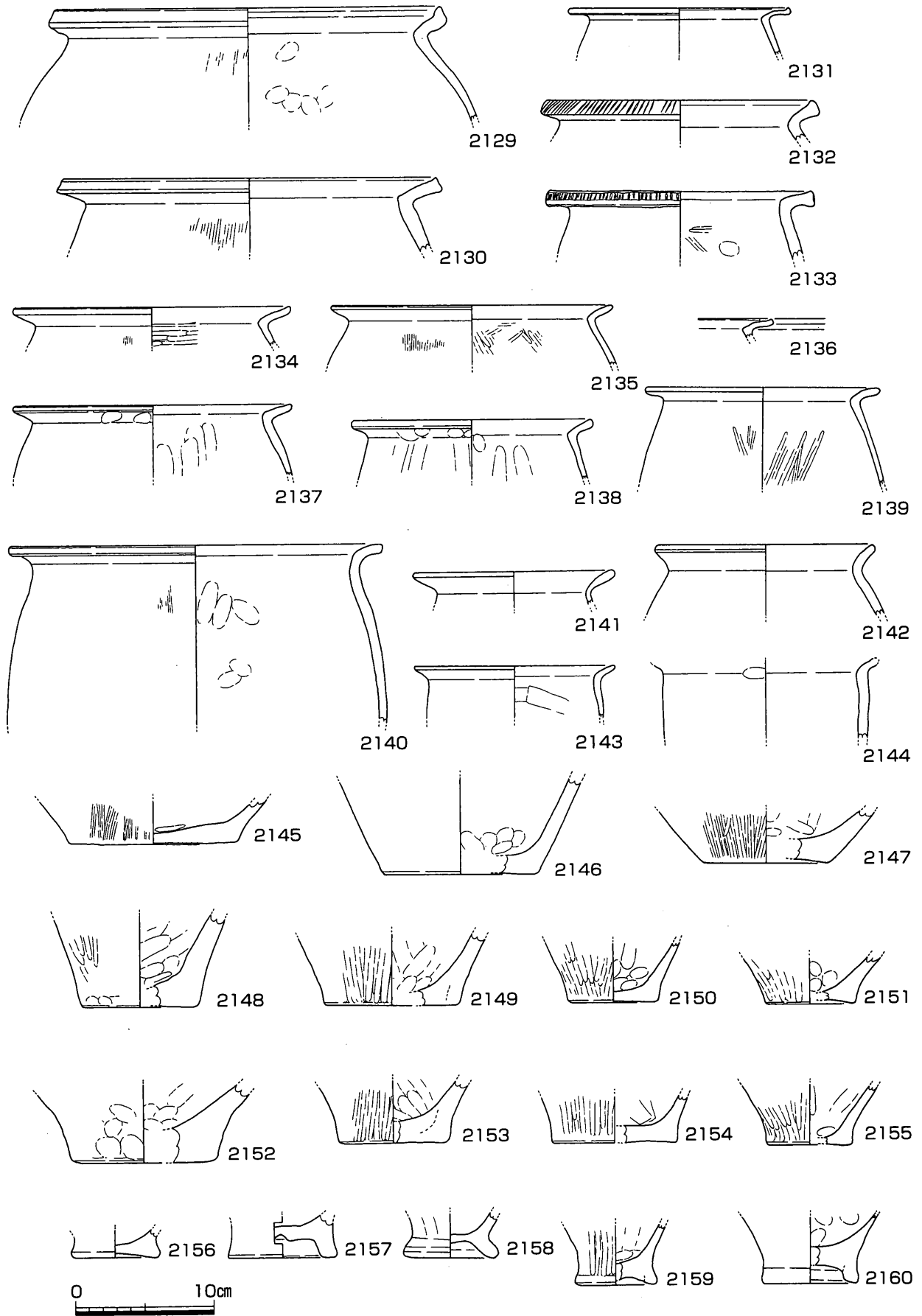
集石33の構築面である厚さ20cm前後の茶褐色砂礫混じり粘質土の下の地山である黄茶色砂質土の面から、不整形の大形の土坑状の落ち込みSX12を検出した。平面形は花卉状の凹凸がある。南北方向4.6m、東西方向は花卉状の突出部分で4.1m、突出部分の付け根では2.4mになる。全体に緩やかに掘り込まれ、特に北東部分ではテラス状の面を形成した後に、北側は段状に、南側は急激に落ち込む。底部は平坦に近い。土層の断面から3回の掘削が認められる。最初に土層⑬～⑰・⑲・⑳の部分が掘削され、その後⑩～⑭・㉑の部分が、最後に⑧・⑨・⑮・⑯の部分が掘削されている。最初の掘削が最も低い部分まで及び、掘り込み面から1.0mほどになる。北側部分が段状に落ち込むのは、この2回目・3回目の掘削の底部を反映していることになる。最初の掘削の底部には礫が落ち込んでおり、最下層を中心に焼土と炭化物が堆積している。底部自体も焼けて赤くなり、周囲に炭化物が広がり、火を使用した痕跡が認められる。被熱赤変した礫も数個、認められる。その上部には焼土層が2面認められる。2回目の掘削時の埋土にも焼土層が認められるが、3回目の掘削時の埋土には焼土・炭化物ともに認められない。なお、SX12からは土器・石器などの遺物は出土していない。

SX12の平面形態は人為的なものにしては不整形である。しかし3回の掘削の痕跡や焼土・炭化物が認められ火の使用が考えられることから、人為的なものと言わざるを得ない。この花卉状の突起部分は、降雨時に水が低い場所に流れた痕跡と考えれば、納得がいく。SX12には覆い屋の痕跡はなく、露出していたと考えられる。つまり本来は花卉状の突起部分を除いた南北に長い長方形のような形状であったのではなかろうか。

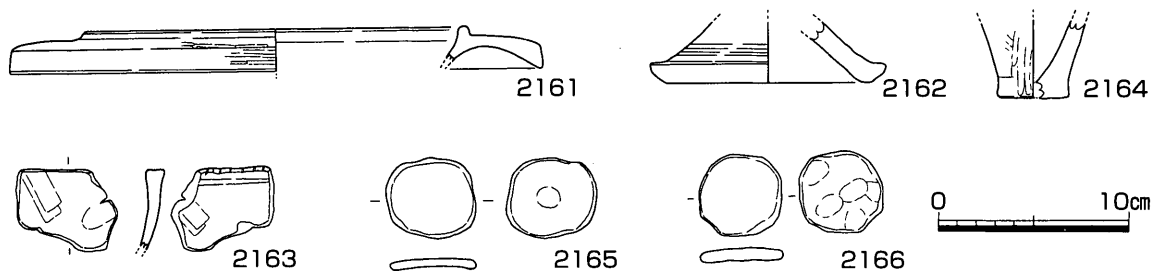
このSX12が完全に埋没した後に集石33の構築面である茶褐色砂礫混じり粘質土が堆積し、後にその上面に集石33が築かれている。しかしSX12の埋没面は深く掘削したために凹凸が生じている。この凹凸を整地する意味で茶褐色砂礫混じり粘質土を敷いたとするならば、SX12の掘削・使用→整地→集石33の構築の順序が考えられる。この茶褐色砂礫混じり粘質土層が北側で墳端状に収束していることから、敷いたような状況が伺える。SX12の最深部の真上に集石33の頂部が位置しており、さらに集石33がSX12全体を覆うように構築されているのも何か必然性があるように思える。いずれにしても茶褐色砂礫混じり粘質土層の解釈により集石33とSX12との関連の有無が決まってくる。関連があるならば、



第475图 V区第2面集石33出土遺物 (1) (1/4)



第476图 V区第2面集石33出土遗物 (2) (1/4)



第477図 V区第2面集石33出土遺物(3)(1/4)

集石遺構の性格を考える上で参考になる。

次に集石33から出土した遺物を報告する。

2103～2121は壺である。2104～2106・2109・2110・2112は口縁部端部を上下に拡張し、内面に斜格子文を施している。2106・2110は口縁部端部外面に刻み目の後に円形浮文を貼り付けている。2113は無頸壺で、外面に突帯を巡らせている。2115は外傾する口縁部の外面に突帯を貼り付けている。2116の口縁部は端部が肥厚し、頸部には刻目突帯を巡らせている。2118の口縁部は直立する頸部から外反して開く。2119は頸部に突帯を2条巡らせている。外面にはハケ目を施す。2120は頸部に突帯を巡らせた後に棒状浮文を貼り付けている。

2122～2144は甕である。2125～2129・2131・2132は口縁部端部を上方に拡張する。2125は体部外面にハケ目の後にヘラミガキを施す。2128は口縁部内面にハケ目が認められる。2130は口縁部屈曲部の内面は鋭く、その上下を強くナデている。2132・2133は口縁部端部外面に刻み目を施している。2134・2135は体部内面にヘラミガキを施している。2139は体部内・外面にヘラミガキを施している。2140は如意形口縁で、全体に摩滅しているが体部外面に僅かにハケ目が認められる。2143・2144も如意形口縁である。

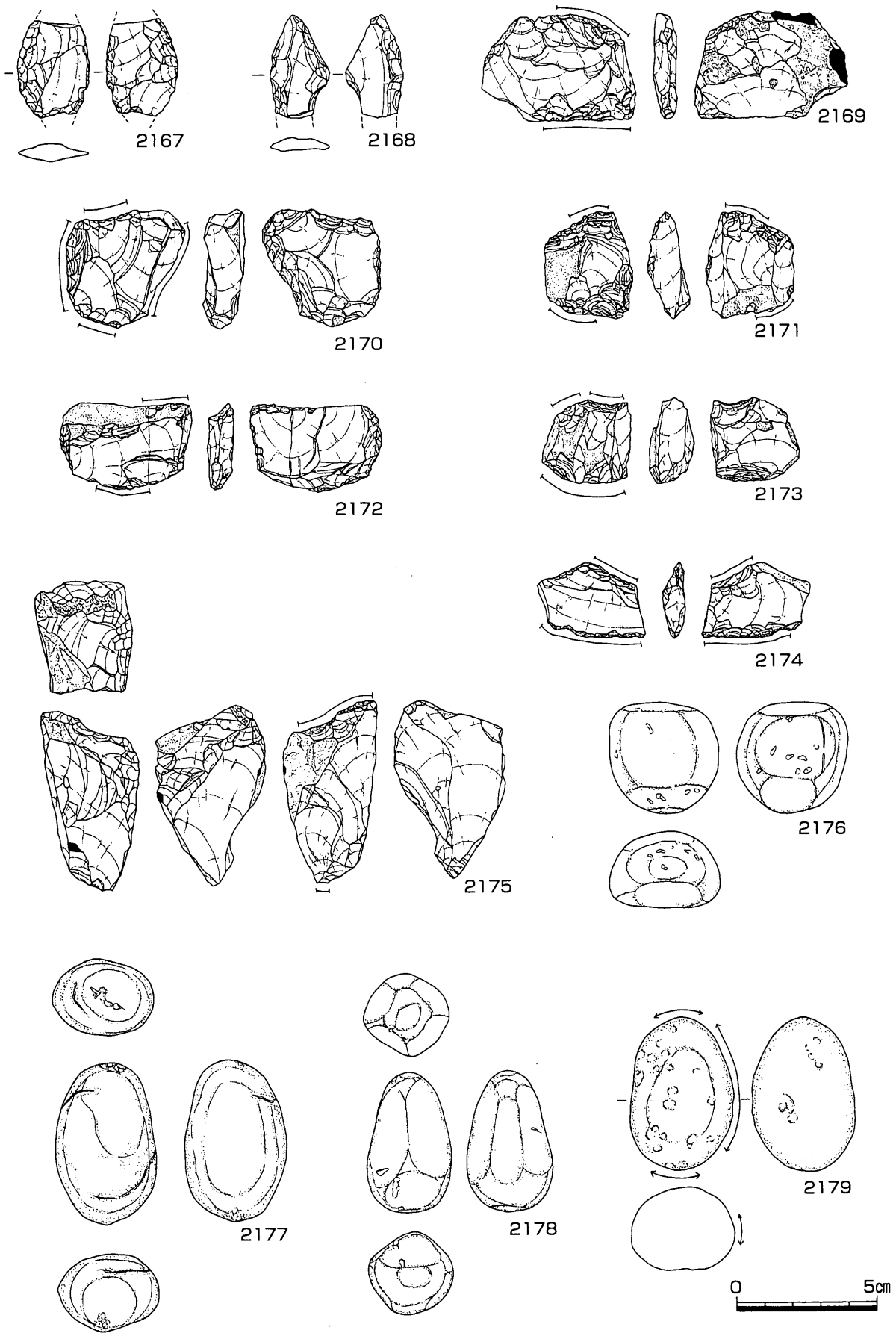
2145～2160は壺および甕の底部である。2147・2151・2156は上げ底である。2156は胎土に結晶片岩を含んでいる。2157～2160は短い脚台が付く。2157は底部外面の中央部を棒状工具で押圧している。

2161は高杯で、口縁部はやや下方に開き、内面には突帯がある。口縁部には端部までヘラミガキを施す。2162の高杯の脚部は斜めに接地し、端部を上方に拡張している。外面には凹線が2条巡っている。2163は鉢で、口縁部端部外面には刻み目を施す。2164の底部は小さく体部の開きも弱い。2165・2166は紡錘車の未製品で、まだ穿孔を施していない。

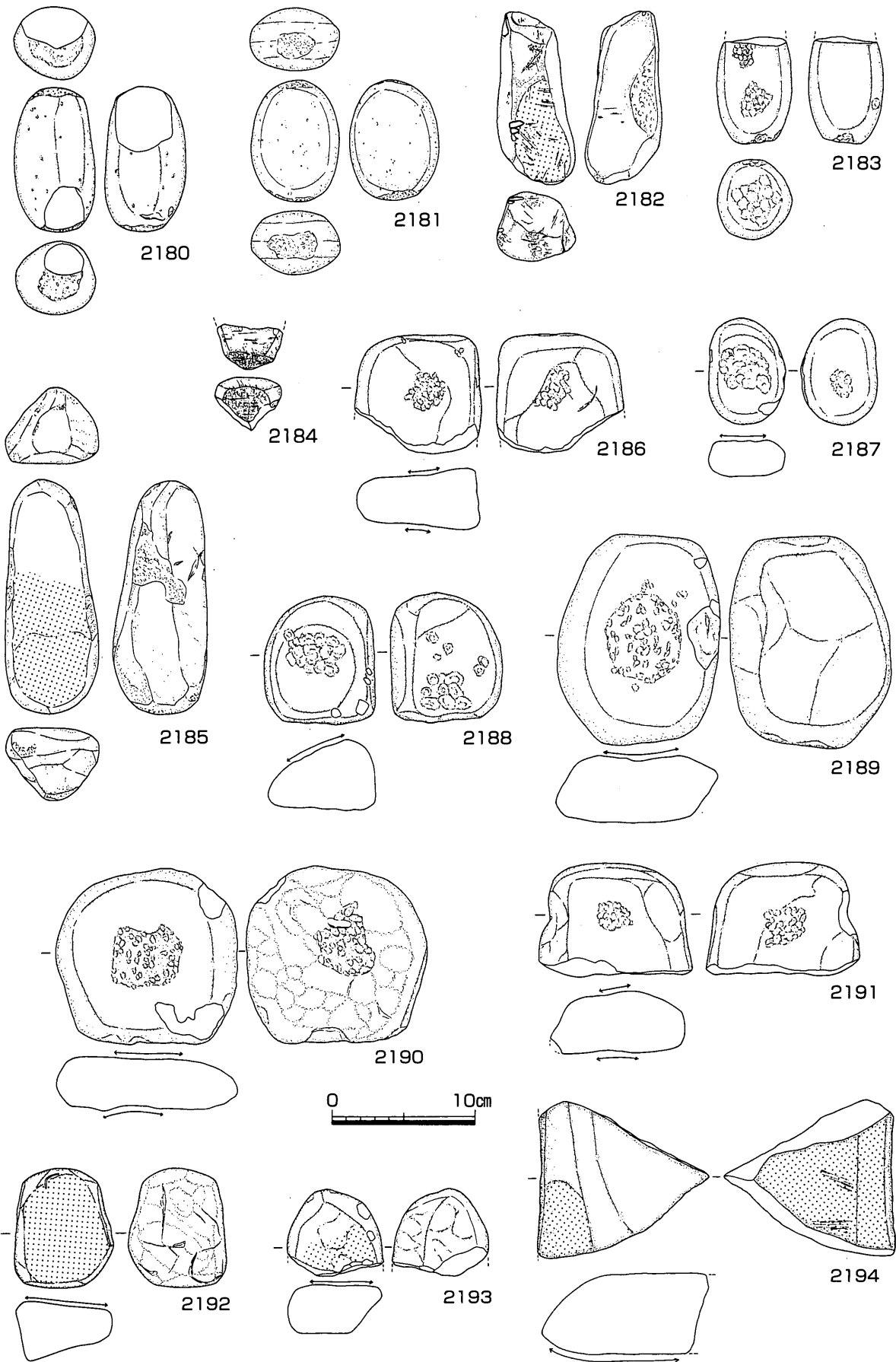
2804・2805は壺である。2805は頸部に爪により刻み目を施した突帯を巡らせている。

2167は凹基の石鏃、2168は石鏃の未製品である。2169～2174は楔形石器であるが、自然面を残すものが多い。2170は3辺に敲打痕が認められる。2175は石核である。当初、打面を変えながら剥片を剥離していたが、剥離の進行と共に下部が尖ってきたため、楔形石器のように両極打撃を加えるようになったものである。

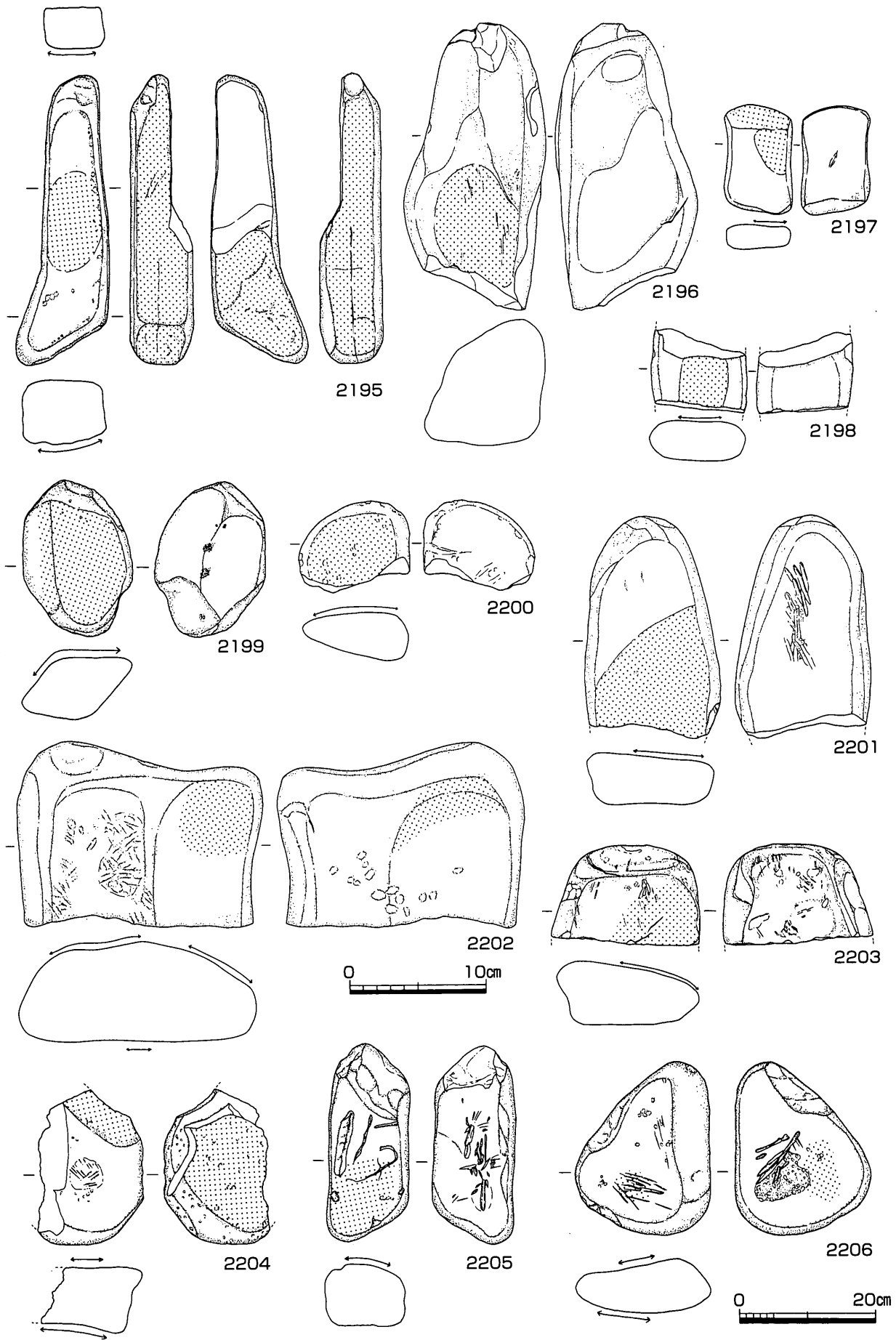
2176～2179は磨石である。2176は使用のため丸みが取れている。2179は上下両端と側面部も使用している。2180～2185は敲石である。2182は磨石としても使用している。2185は砥石としても使用しているが、砥石としての使用頻度のほうが高い。2186～2191は凹石である。2189は片面のみが窪んでいる。2192～2207は砥石である。2199は使用頻度がかなり高く、光沢があるほどに摩滅している。部分的に被熱赤変している。2201～2207は台石としても使用しているが、2206以外は砥石としての使用頻度のほう



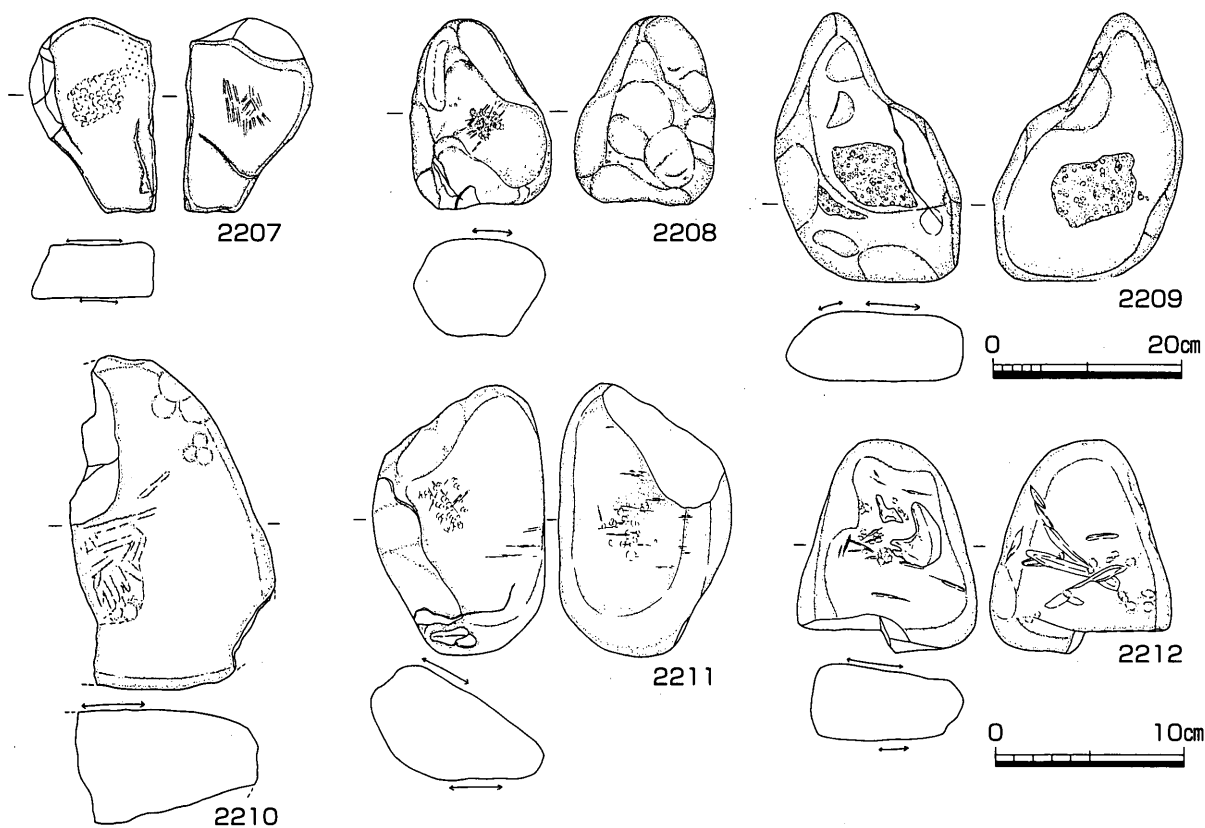
第478图 V区第2面集石33出土遺物 (4) (1/2)



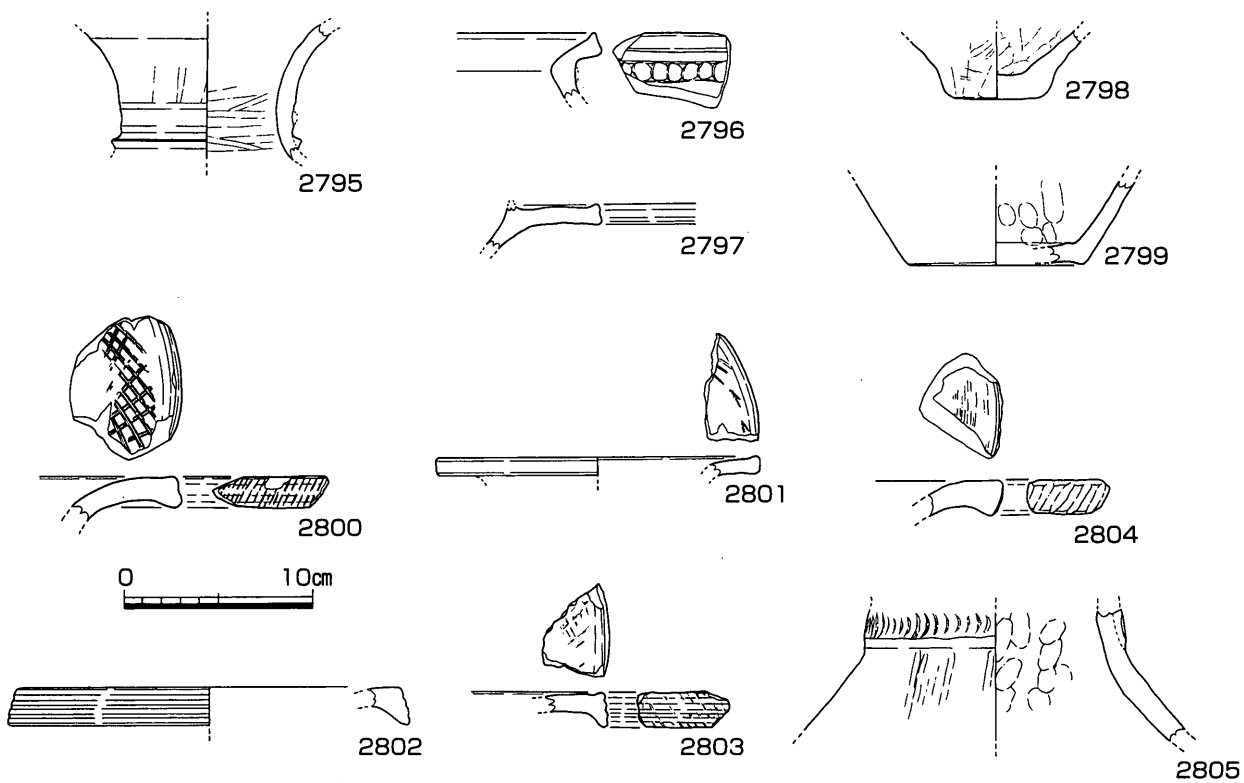
第479图 V区第2面集石33出土遺物 (5) (1/4)



第480图 V区第2面集石33出土遺物 (6)
 2196~2198·2200~2202 (1/4)、2195·2199·2203~2206 (1/8)



第481图 V区第2面集石33出土遺物 (7) (1/4、1/8)



第482图 V区第2面集石30·31·32·33出土遺物 (1/4)

が高い。2202・2207は部分的に被熱赤変している。2208～2212は台石である。2209・2211は被熱赤変している。2212の幅広の線状の痕跡は、新しい時代のものかも知れない。

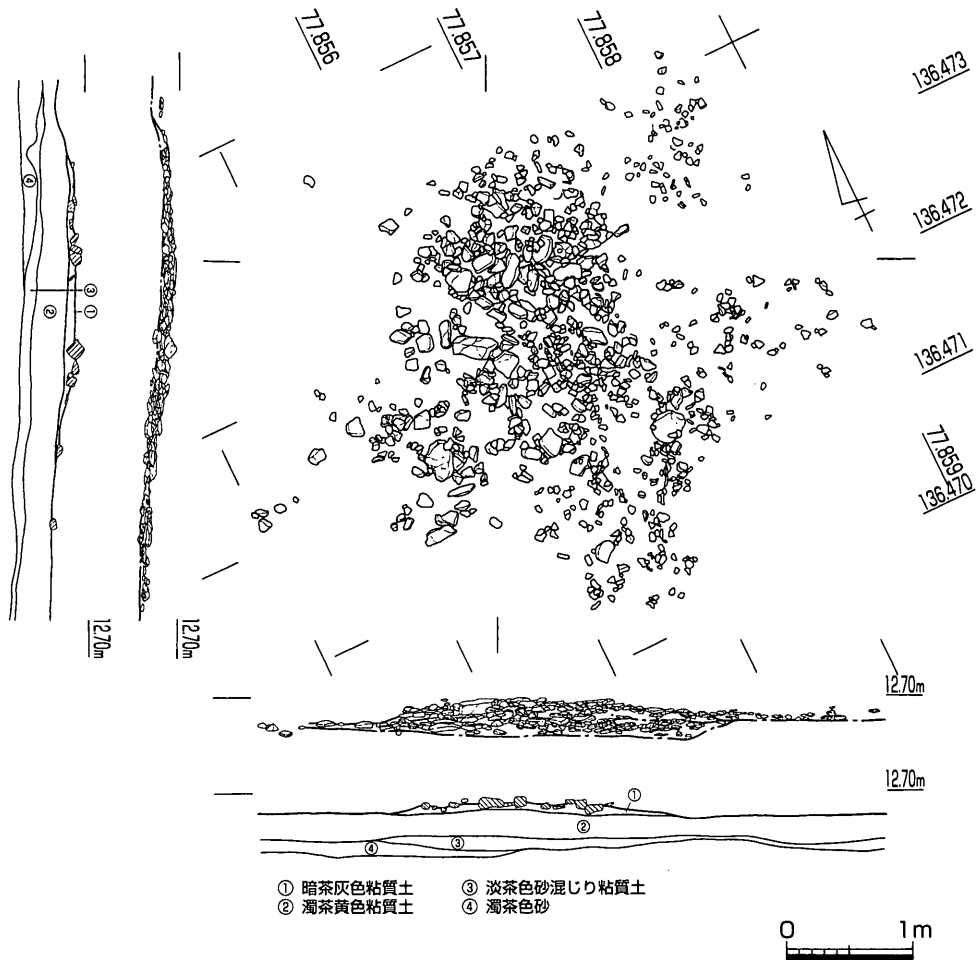
以上の出土遺物から、如意形口縁の甕が見られることから集石33は弥生時代弥生時代中期前葉～中葉と考えられる。SX12は集石33より少し先行するか、あるいは同時期と考えられるが弥生時代中期を遡ることはない。

集石34 (第483～487図)

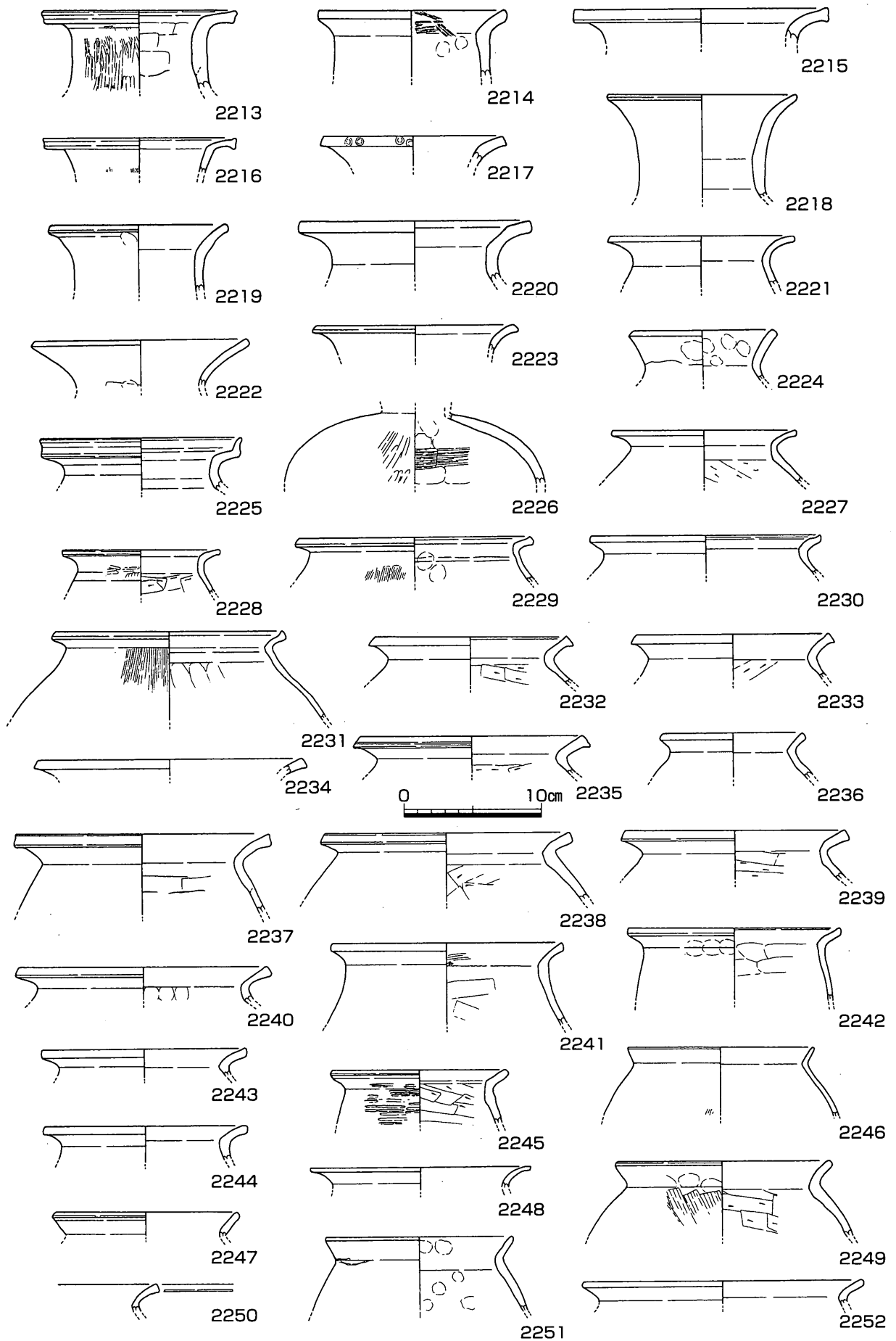
調査区北西隅の、旧G5区で検出した集石遺構である。平面形は直径4.0mの円形である。盛り上がりはあまりなく、平面的に分布している。端部の標高は12.5m、頂部の標高は12.65m、高さは15cmである。全体に平坦で、北から南に向かって低くなっている。

全体に礫が集められたような状態であるが、東側の部分に礫が少ない箇所があるが、これはトレンチを設定したためである。礫は5～30cm大で、20cm前後の大き目の礫が中心近くに多く、その間と周囲に小さい礫が多くなっている。礫は砂岩が主体となり、花崗岩を伴っている。礫の23%は被熱赤変している。

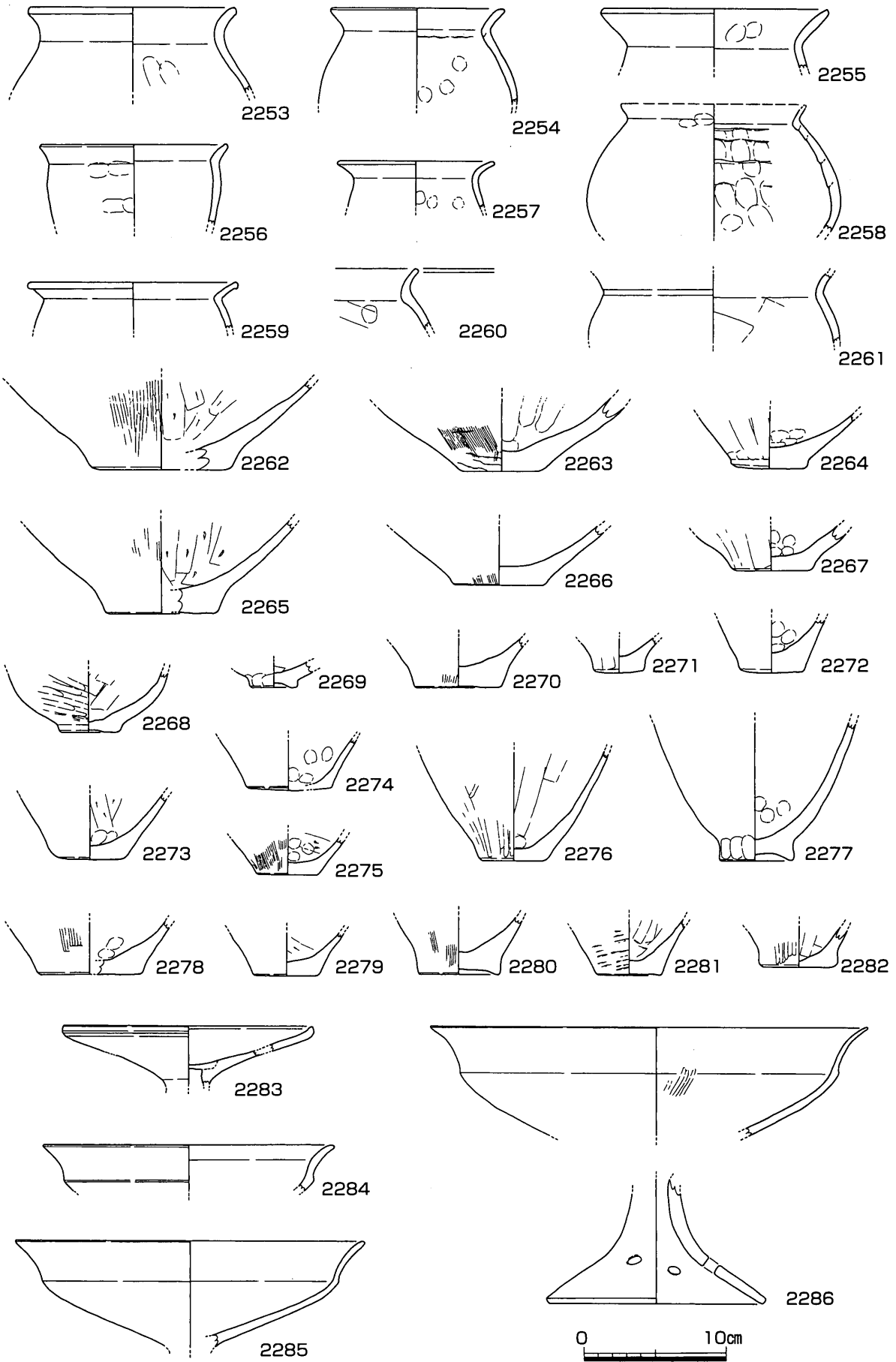
集石34の構築面は濁茶黄色粘質土層の上面である。この部分は弥生時代の遺構面が高くなっている部分に相当する。この面の上に礫1個分を敷き詰めたような状態になっている。礫とともに薄く広がっている土は暗茶灰色粘質土である。集石34に伴う下部遺構は認められなかった。



第483図 V区第2面集石34平・立面図 (1/60)



第484图 V区第2面集石34出土遗物(1)(1/4)

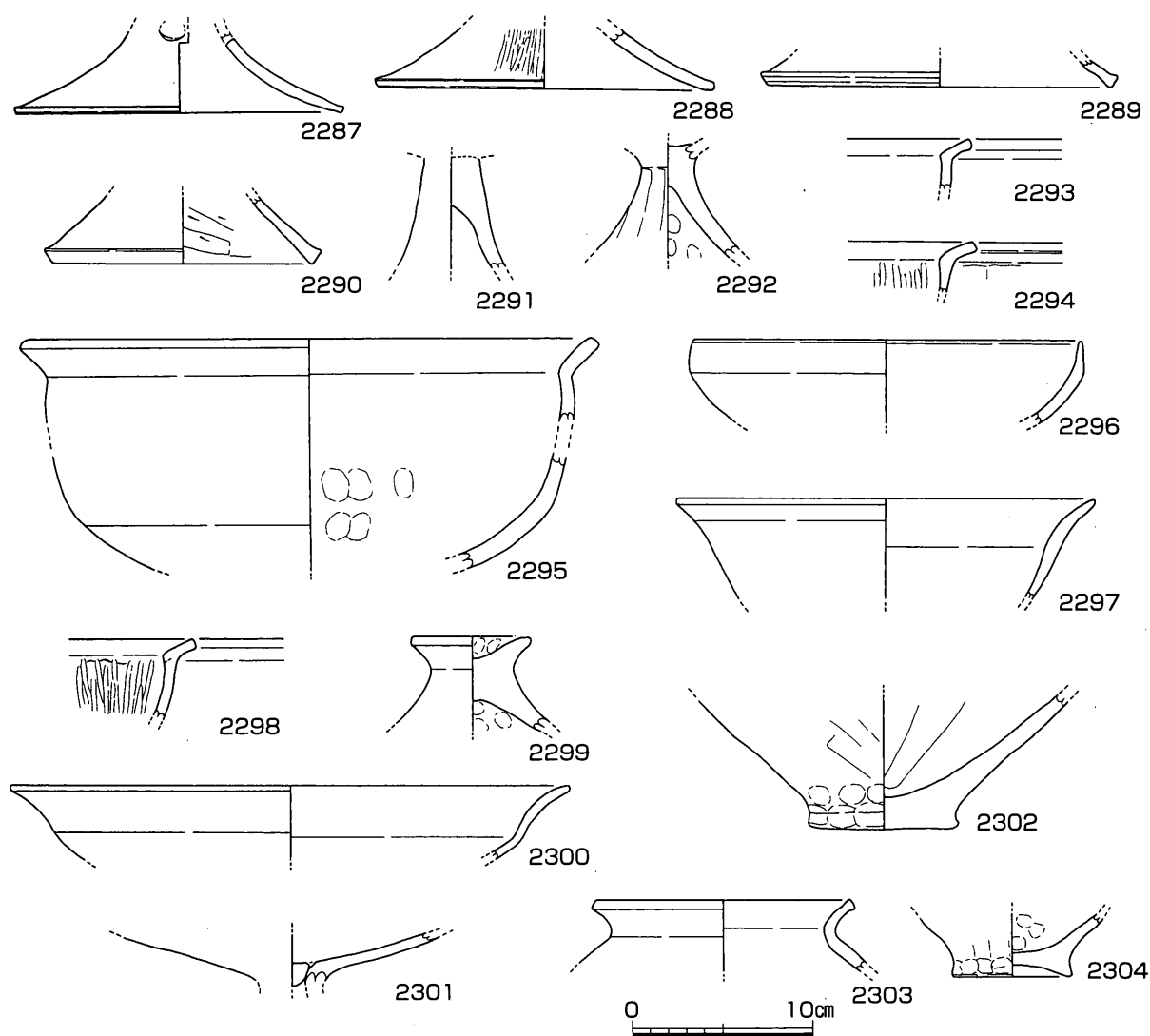


第485图 V区第2面集石34出土遺物 (2) (1/4)

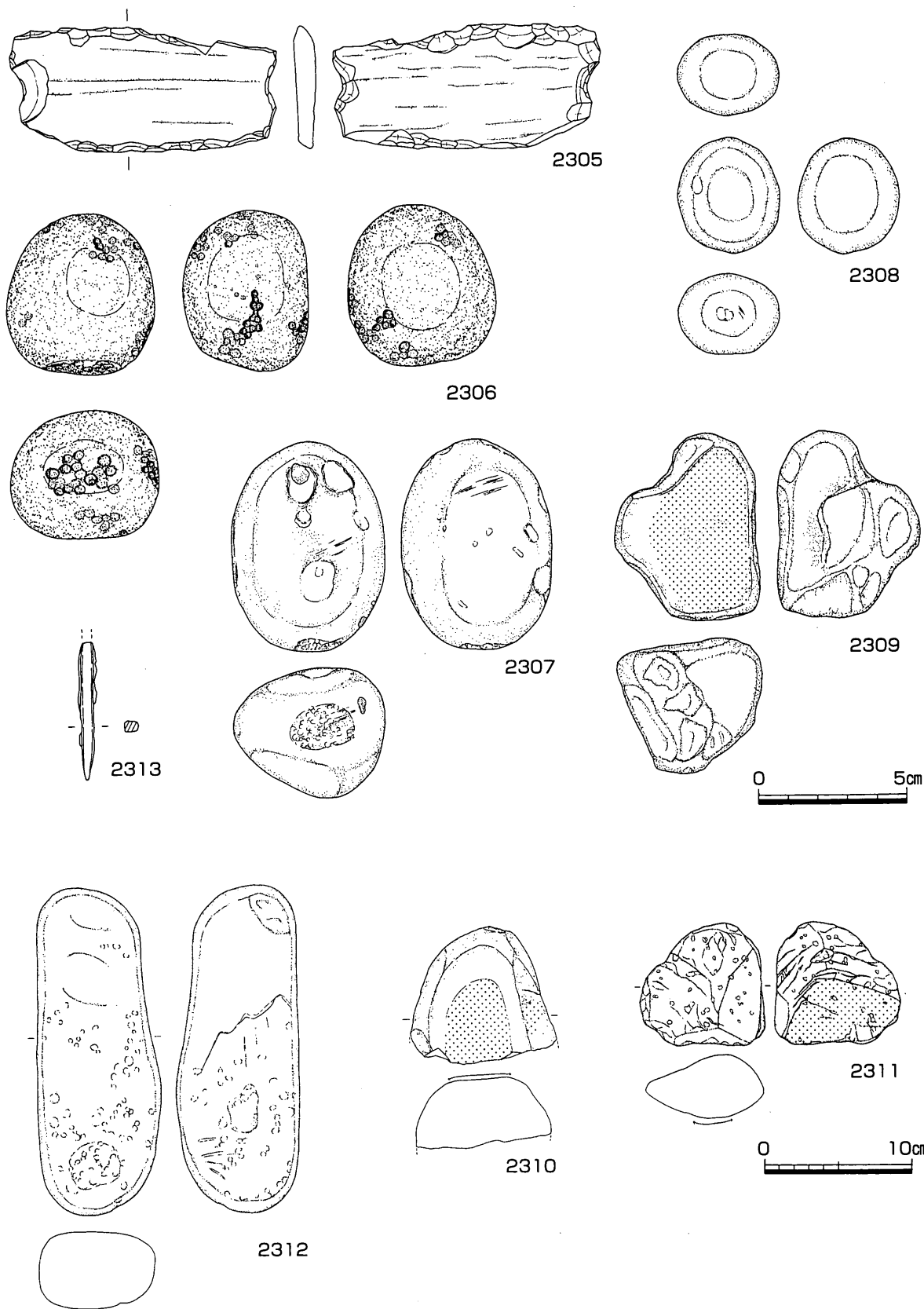
遺物は多量に出土しており、点数で言えば礫の数の10倍以上になる。特に南東部分から集中的に出土している。しかし遺物は破片であるため、見た目は礫のほうがかかなり目立っている。石器は結晶片岩製の打製石庖丁が1点出土しているほかは、敲石・砥石類で、サヌカイト製の石器は出土していない。またサヌカイトの剥片・碎片も出土していない。

2213~2226は壺である。2213の口縁部は真横に開き、頸部は外面にハケ目を施す。2214は口縁部屈曲部の内面が肥厚している。2216の口縁部は真横に開き、端部を上下に拡張している。胎土には角閃石を含む。2217の口縁部端部外面には2個1単位の竹管文が現存で2単位ある。2221は僅かに頸部があるが甕に似る。2225の口縁部端部は上方に大きく拡張している。2226の体部は扁平で、外面にはヘラミガキを施している。内面には部分的にハケ目が認められる。

2227~2261は甕である。2227・2228の体部内面にはヘラケズリを施す。2229・2231は体部外面にハケ目を施し、胎土には角閃石を含んでいる。2232・2233・2235・2238・2239は体部内面にヘラケズリを施す。2241は口縁部屈曲部が肥厚している。2245の口縁部は直線的で、体部外面のタタキは一部、口縁部まで及ぶ。内面はヘラケズリである。2246の口縁部は直線的で、端部は先細りになる。2249の体部内面のヘラケズリは強く器壁を抉っている。2256の体部の膨らみは弱く、口縁部のほうが外側になる。2258の体



第486図 V区第2面集石34出土遺物(3)、集石34上部包含層出土遺物(1/4)



第487图 V区第2面集石34出土遺物(4)、集石34上部包含層出土遺物(1/2、1/4)

部内面には粘土接合痕が残り、指押さえが顕著である。2260は口縁部屈曲部が肥厚している。

2262～2282は壺および甕の底部である。2268の体部下半は湾曲している。2269・2277の底部は突出して上げ底になっており、側面に指押さえを行っている。2281の体部外面にはタタキが認められる。

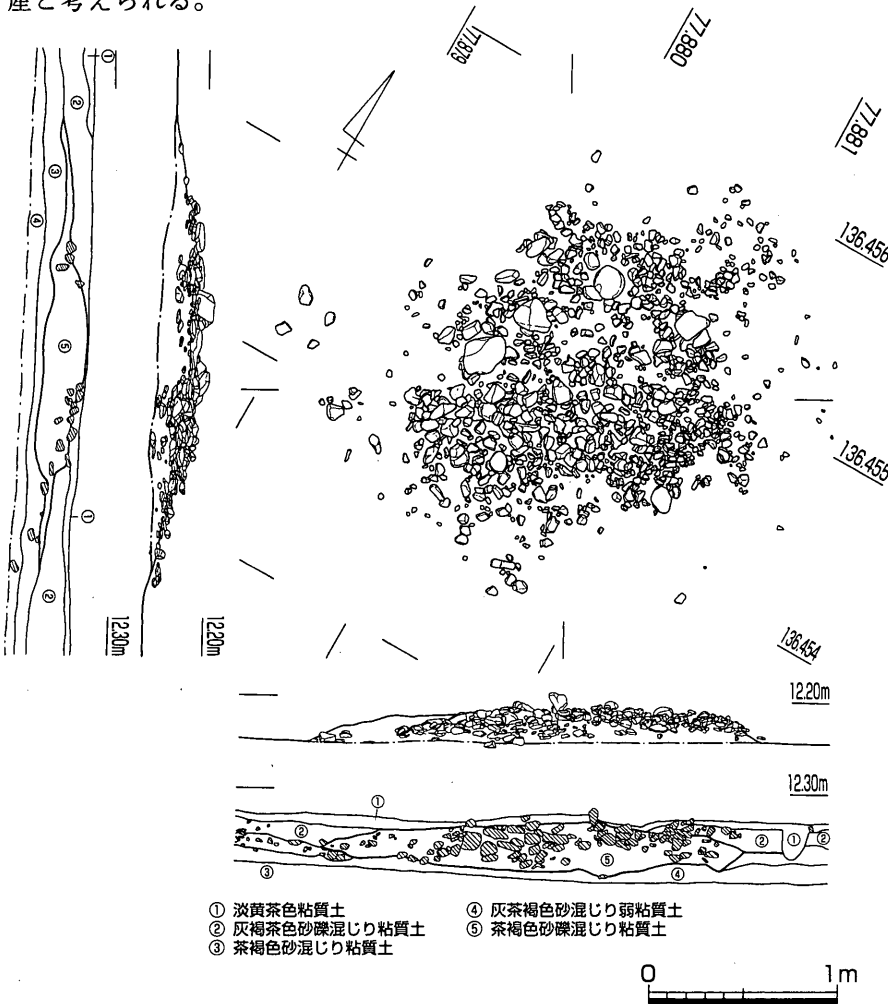
2283～2292は高杯である。2283は直線的な杯部からそのまま口縁部に至り、端部を上方に拡張している。外面には煤が付着している。2284～2286の口縁部は外反している。2290は端部外面には強いナデを施している。内面はヘラケズリである。胎土には角閃石を含んでいる。

2293～2298は鉢である。2293～2295・2298の口縁部は直線的で、体部から屈曲している。2296の口縁部は体部から真上に立ち上がり、端部は先細りになる。2297の口縁部は体部から僅かに外反する。2299は蓋で、つまみ部中央は窪んでいる。

2305は結晶片岩製の打製石庖丁で、側縁部には抉りが認められる。2306・2307は敲石である。2308は磨石である。2309～2311は砥石であるが、2309は台石としても使用している。2312は台石である。その形状は細長く敲石のようであるが、敲打を行った痕跡は認められない。

2300～2304・2313は集石34の検出時に、その上部の包含層で出土した遺物である。2300の高杯の口縁部は外反し、脚部との接合は円盤充填になっている。2313は鉄鏃の基部と考えられるが、弥生時代のものかどうかは不明である。

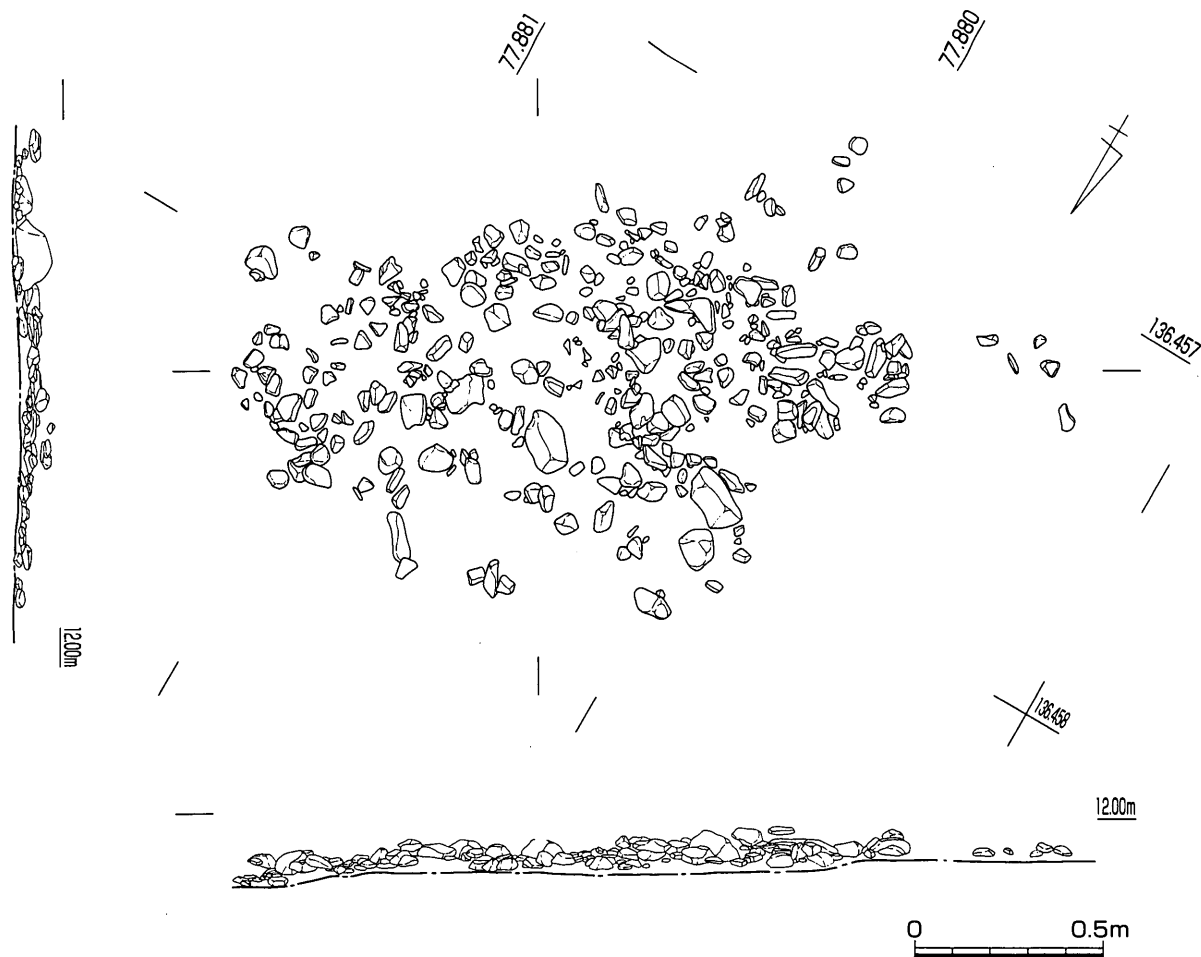
以上の出土遺物から、集石34は若干の弥生時代後期前半の遺物を含むものの、弥生時代後期中葉の所産と考えられる。



集石35 (第488～494・500図)

調査区中央部のやや西寄りの、旧G7区で検出した集石遺構である。平面形は直径2.3mの円形である。全体に塚状に盛り上がっている。頂部は若干の丸みを帯びているが、東西方向は平坦に近くなっている。北東部分の傾斜が少し急になっている他は、全体に緩やかである。端部の標高は11.95～12.0m、頂部の標高は12.15m、高さは15～20cmである。南東部分の端部が少し低く

第488図 V区第2面集石35平・立・断面図 (1/40)



第489図 V区第2面集石35北側礫群平・立面図 (1/20)

なっている。

礫は頂部を中心に密集しているが、端部付近は全体に少ない。また西側部分は斜面部も少なくなっている。礫は5~20cm大で、10cmほどのものが中心で縦長のものが目立つ。15~20cm大の大きめの礫が、中心から50cm離れた箇所で円を描くように認められる。礫は砂岩が主体となり、少量の花崗岩を含んでいる。

集石35の構築面は東西の端部付近が茶褐色砂混じり粘質土層、中央部分は灰茶褐色粘土混じり砂質土層の上面である。しかしこの構築面は凹凸が見られ、端部より下がっている部分もある。この面から礫と土を混ぜながら盛り上げている。盛土は茶褐色砂礫混じり粘質土の単一層である。礫は構築面近くの下部から頂部にかけて堆積し、全体に礫の密度は高い。全体を調査したが、下部遺構は認められなかった。

また集石35の北側1mのところには礫が集中している箇所がある。1.8m×1.0mの範囲に集中しているが、礫だけが平面的に集まっている。礫は5~15cm大で、砂岩が中心となっている。集石35との関係は不明である。

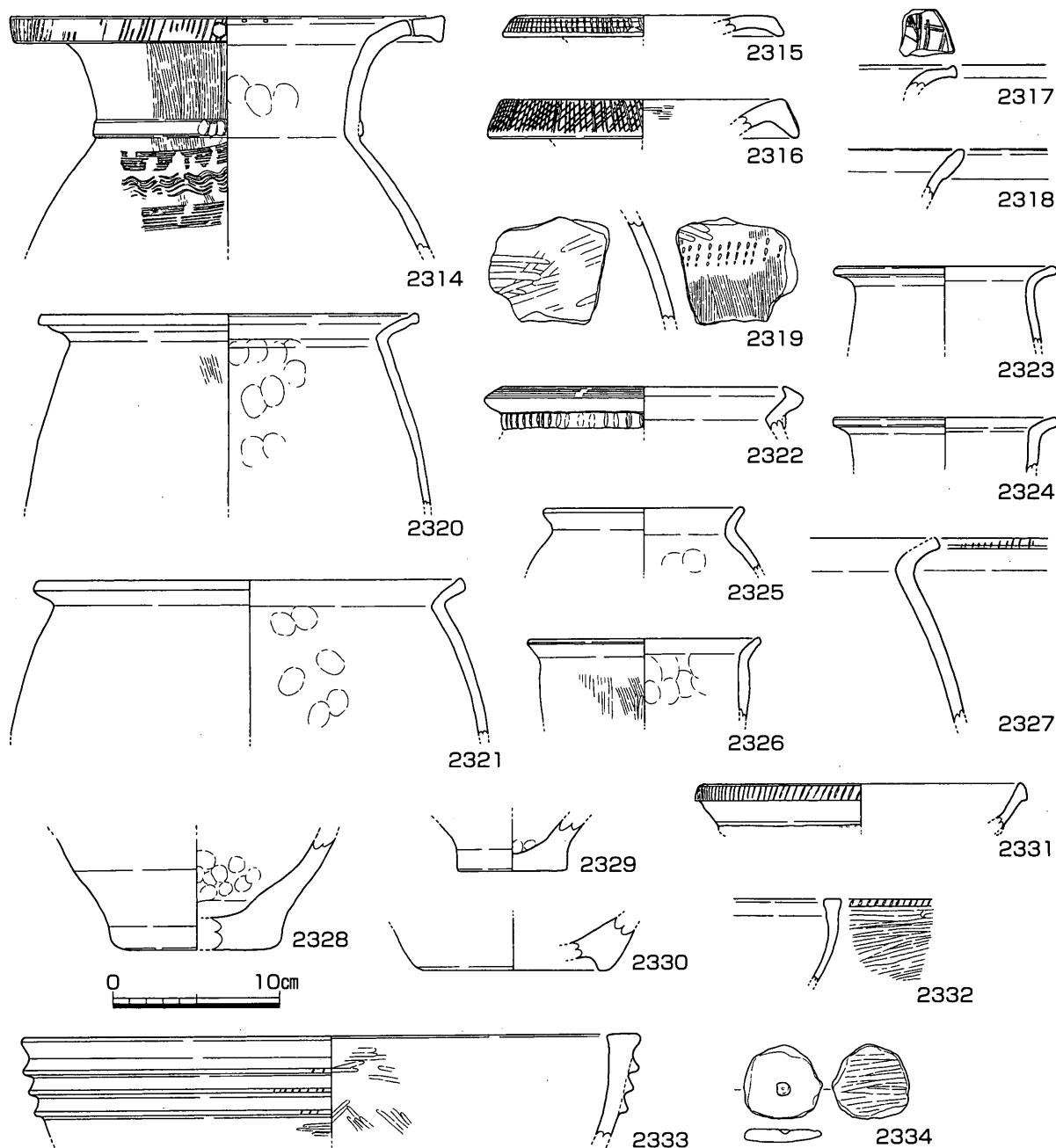
遺物は礫に混じって出土しているが、頂部から構築面に近い下部にかけて出土している。量的には余り多くない。土器は破片で出土している。石器以外のサヌカイトの剥片・碎片が140点、重量にして161.4gが出土している。

2314~2319は壺である。2314の口縁部は外傾する頸部から真横に開き、端部外面には刻み目の後に円

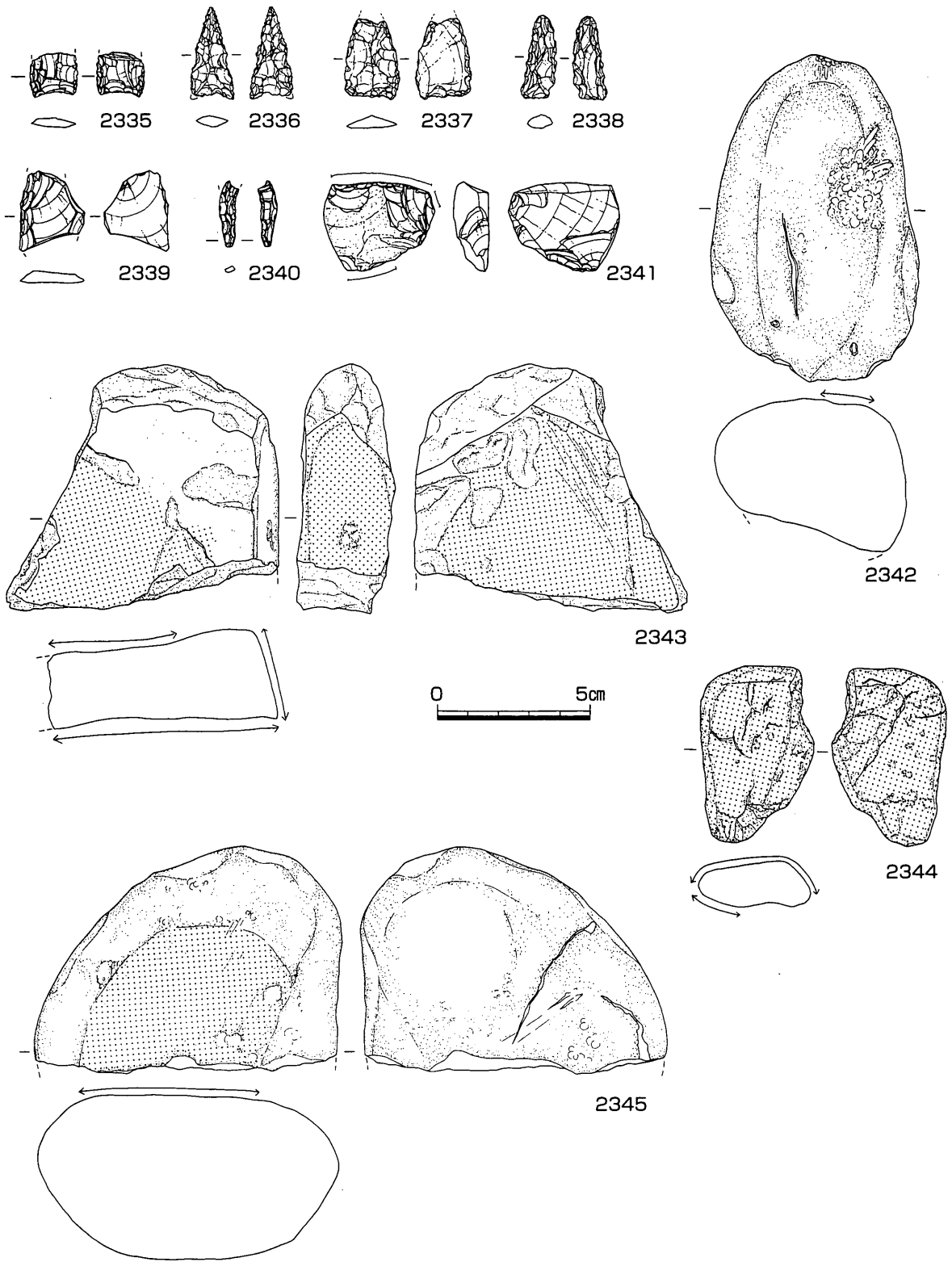
形浮文を貼り付けている。穿孔が2個認められる。頸部には刻目突帯を巡らせ、外面にはハケ目を施している。体部上半の張りは無く、外面には櫛描直線文と櫛描波状文を施している。2315・2316は口縁部端部を下方に拡張している。2318の口縁部は肥厚し玉縁状になる。胎土には結晶片岩を含んでいる。2319の外面には櫛描列点文が認められる。

2320～2327は甕である。2322は口縁部端部を上方に拡張し、頸部には刻目突帯を巡らせている。2323は如意形口縁である。2324・2326の口縁部は直線的で、如意形に近い。2327は口縁部端部外面に刻み目を施す。

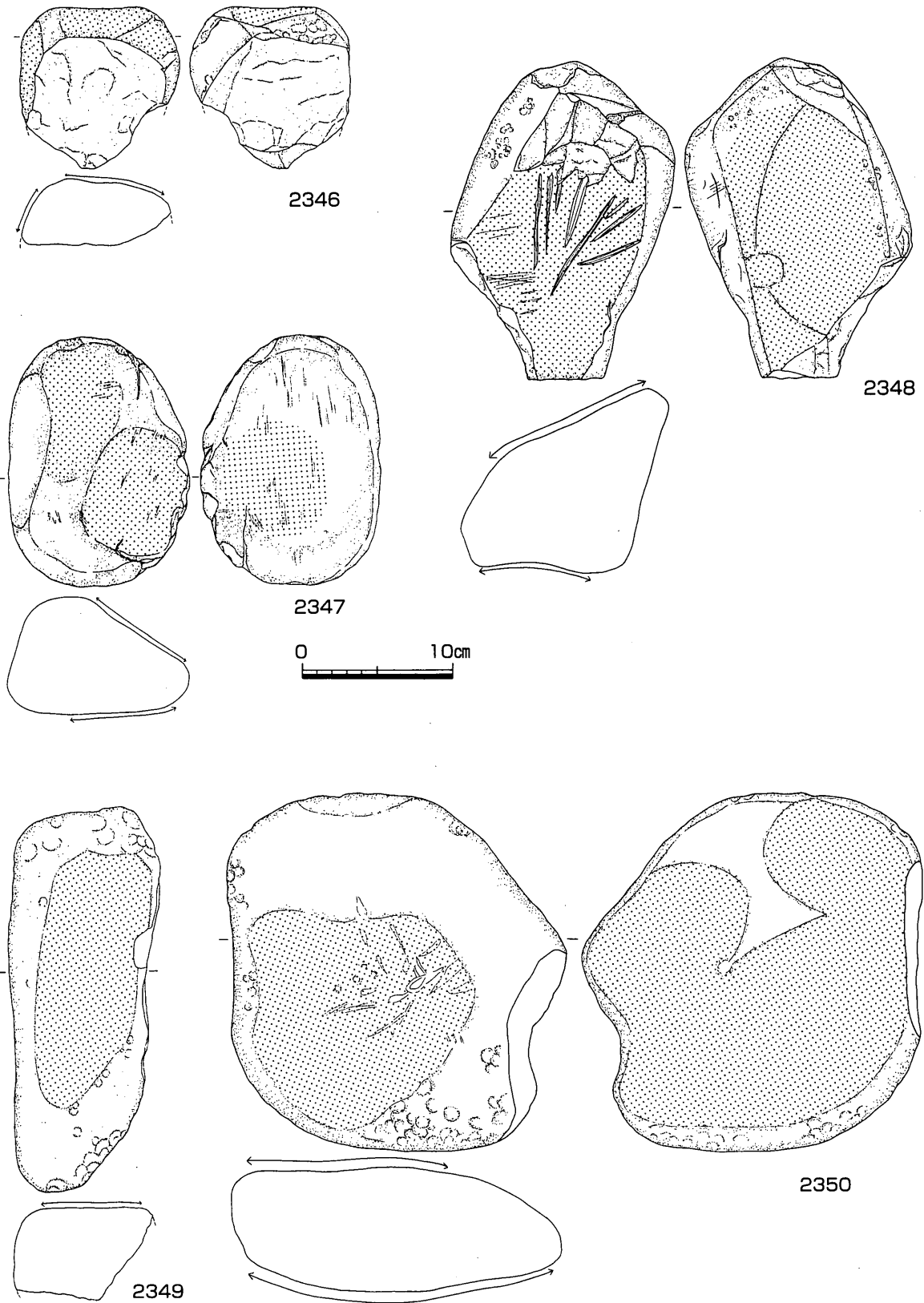
2331～2333は鉢である。2331の口縁部は玉縁状になり外面に刻み目を施す。体部には沈線が1条巡り、円形浮文の剥離痕が認められる。2332も口縁部外面に刻み目を施す。2333は口縁部外面に刻目突帯



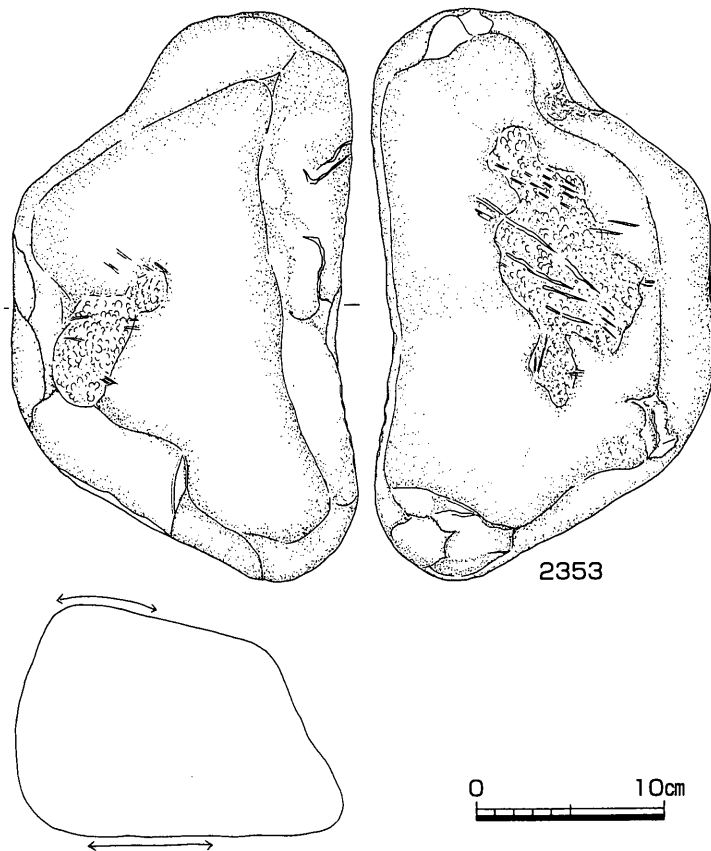
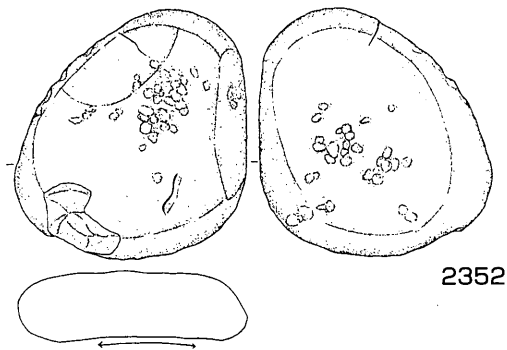
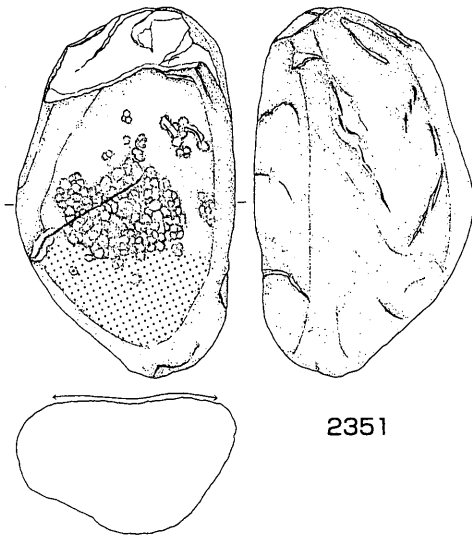
第490図 V区第2面集石35出土遺物 (1) (1 / 4)



第491图 V区第2面集石35出土遺物(2)(1/2)



第492図 V区第2面集石35出土遺物 (3) (1 / 4)



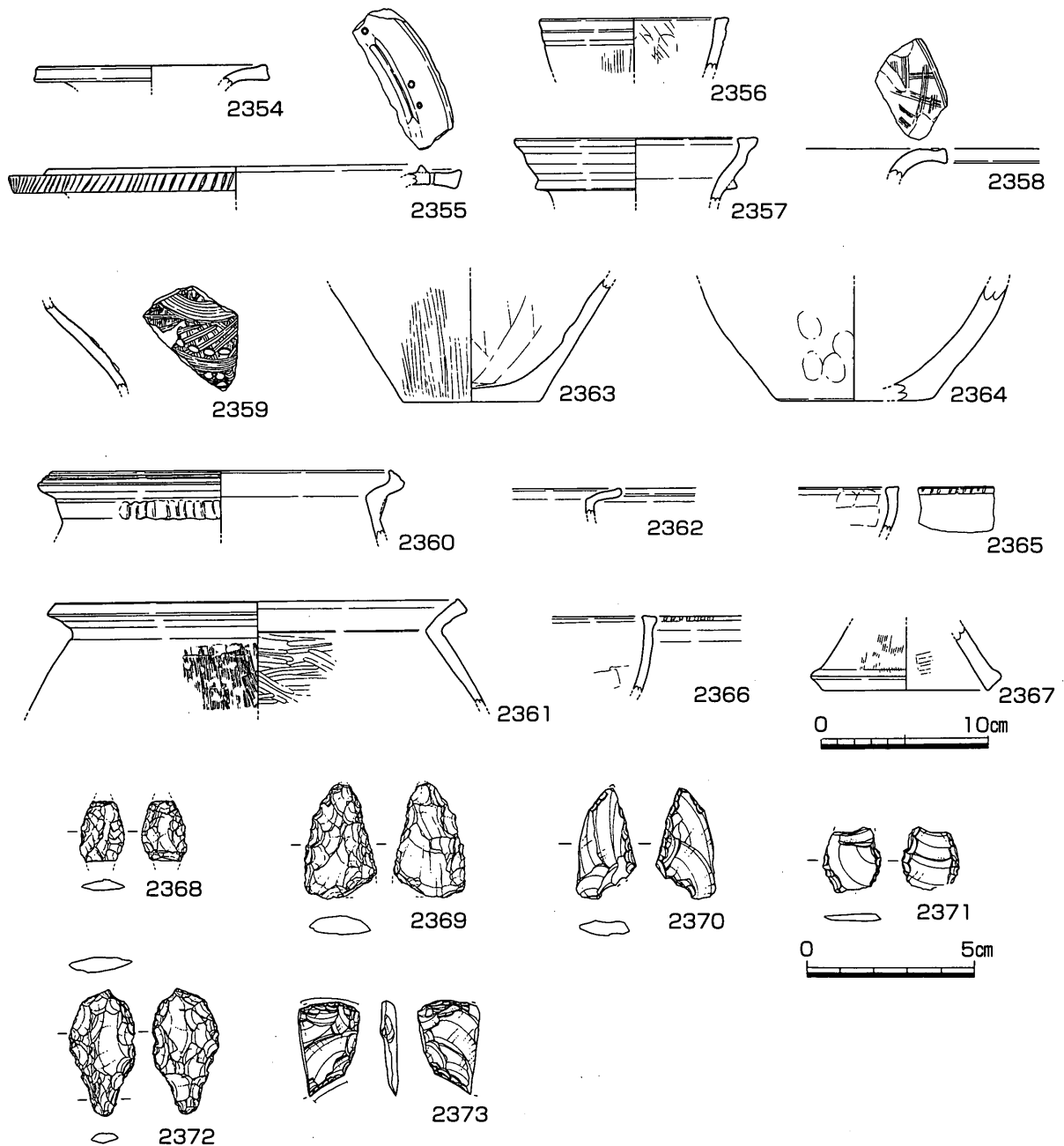
0 10cm

第493図 V区第2面集石35出土遺物(4)(1/4)

を3条巡らせている。2334は紡錘車の未製品で、穿孔の途中である。

2335~2338は石鏃で、2335・2336は凹基、2337・2338は平基である。2340は石錐の錐部である。2341は楔形石器で、自然面を残している。2342は敲石である。下端部は敲打を行った際に欠損したようである。2343~2351は砥石である。2343は流紋岩製で、表裏2面を使用しており、使用のため面が窪んでいる。2350・2351は台石としても使用している。2352・2353は台石である。

2354~2373は集石35の検出時に、その上部の包含層で出土した遺物である。2354~2359は壺である。2355は口縁部内面に突帯が巡っている。2357は口縁部上面に平坦な面を作る。外面には突帯が巡っている。2359は外面に櫛描直線文の間に斜格子文を配し、円形浮文を加えている。2360~2362は甕である。2360は口縁部端部を上方に拡張し、外面には凹線を巡らせている。口縁部屈曲部外面には刻目突帯を貼



第494図 V区第2面集石35上部包含層出土遺物 (1/4、1/2)

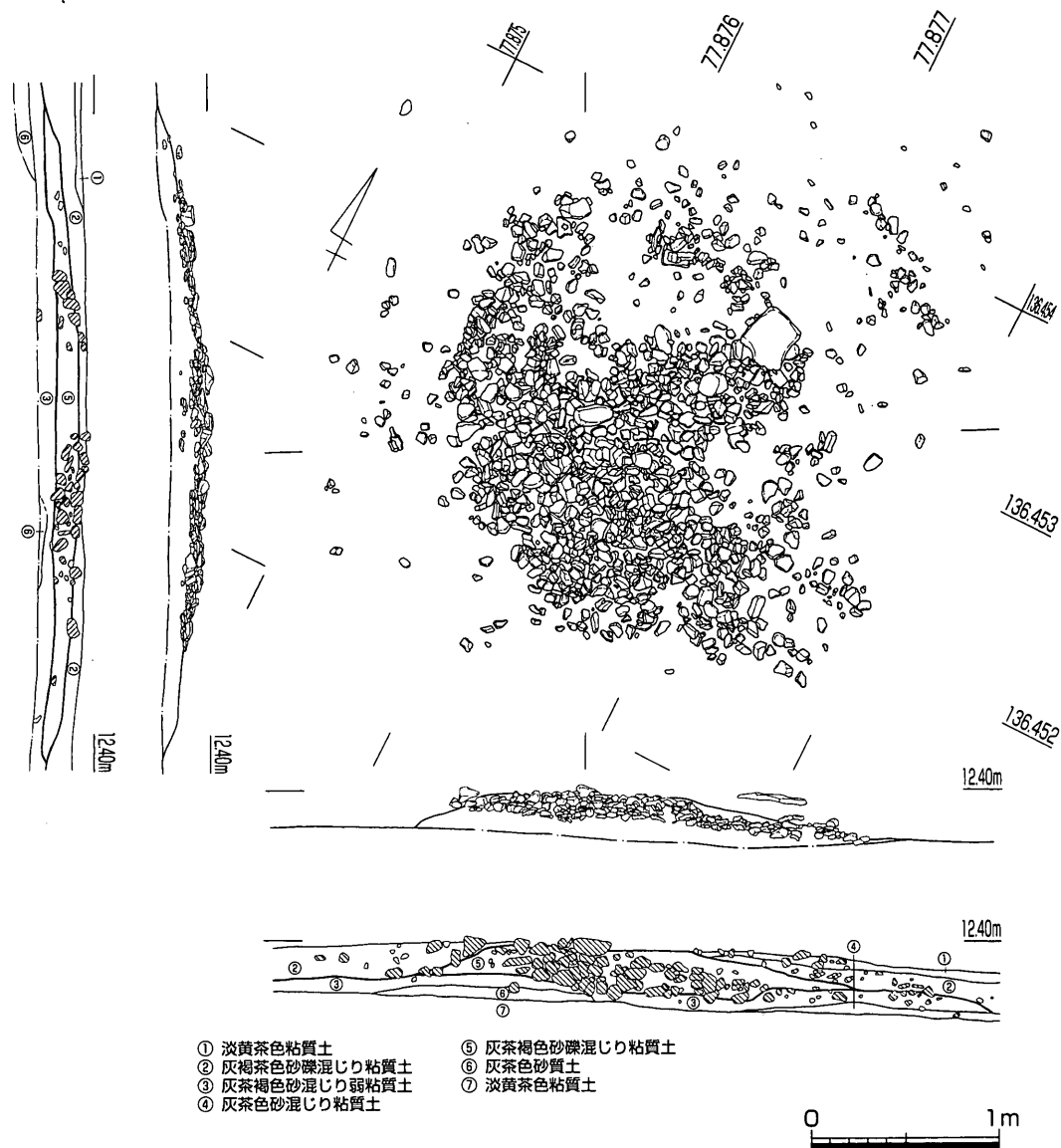
り付けている。2361は体部外面にハケ目を、内面にはヘラミガキを施している。2365・2366は鉢で、口縁部外面に刻み目を施している。2367は高杯で斜めに接地している。胎土には角閃石を含んでいる。

2368・2369は石鏃、2370・2371は石鏃の未製品である。2372は凸基有茎式の石鏃である。石鏃に似るが、鏃部にしては剥離の角度が浅く扁平であるので石鏃に分類した。2373は楔形石器である。

以上の出土遺物から、集石35は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。

集石36（第495～500図）

調査区中央部のやや西寄りの、旧G7区で検出した集石遺構である。集石35の南西2mの所に位置し、2基並んで検出された。平面形は楕円形で、長径3.4m、短径2.5mである。全体に塚状に盛り上がっている。頂部は平坦に近いが、若干の丸みを帯びている部分もある。西側部分の傾斜がやや急である以外は、全体に緩やかである。また南側の端部付近は平坦になっている部分がある。端部の標高は12.15～12.2m、頂部の標高は12.35m、高さは15～20cmである。西側の端部が少し高くなっている。

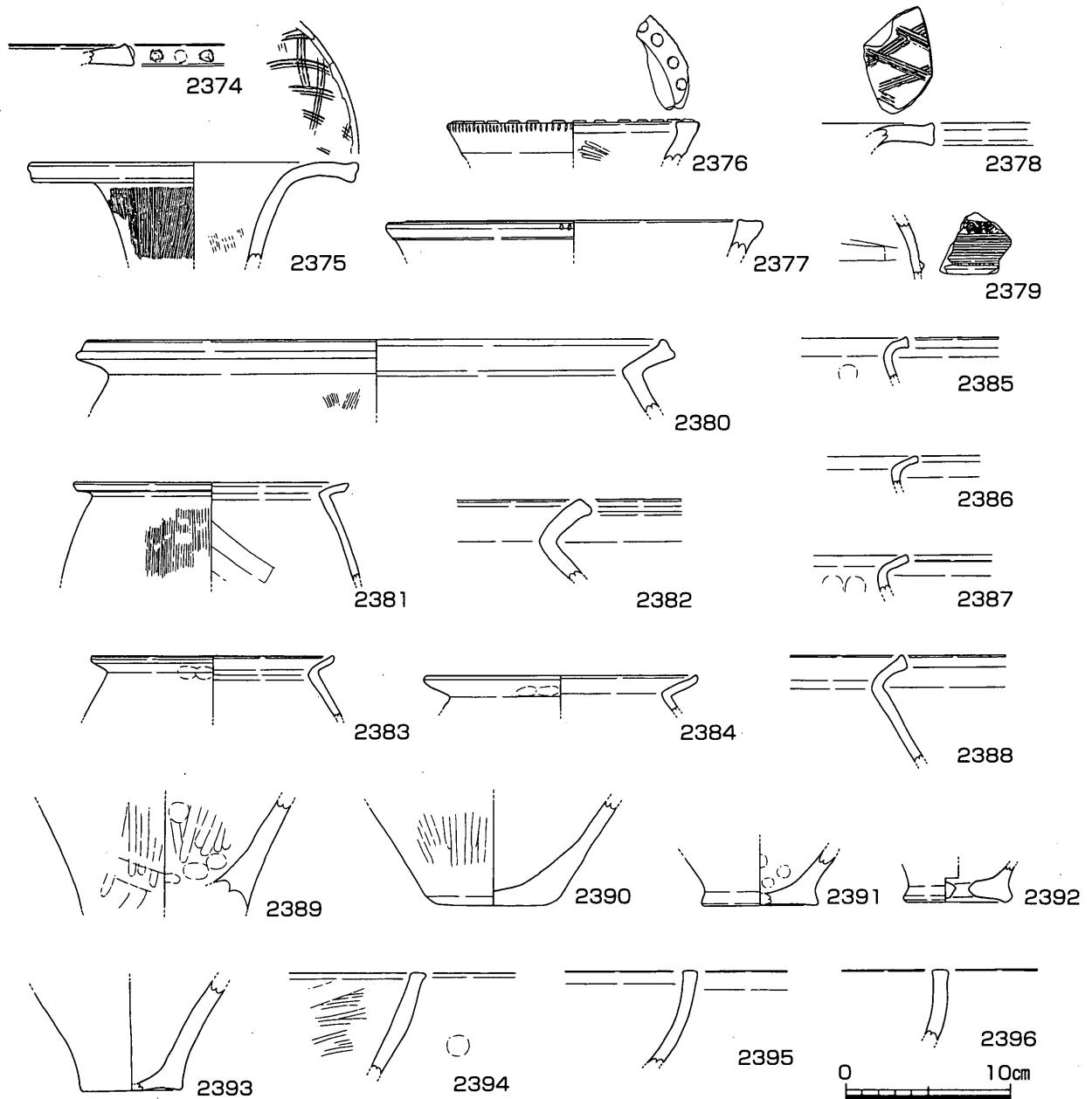


第495図 V区第2面集石36平・立・断面図（1/40）

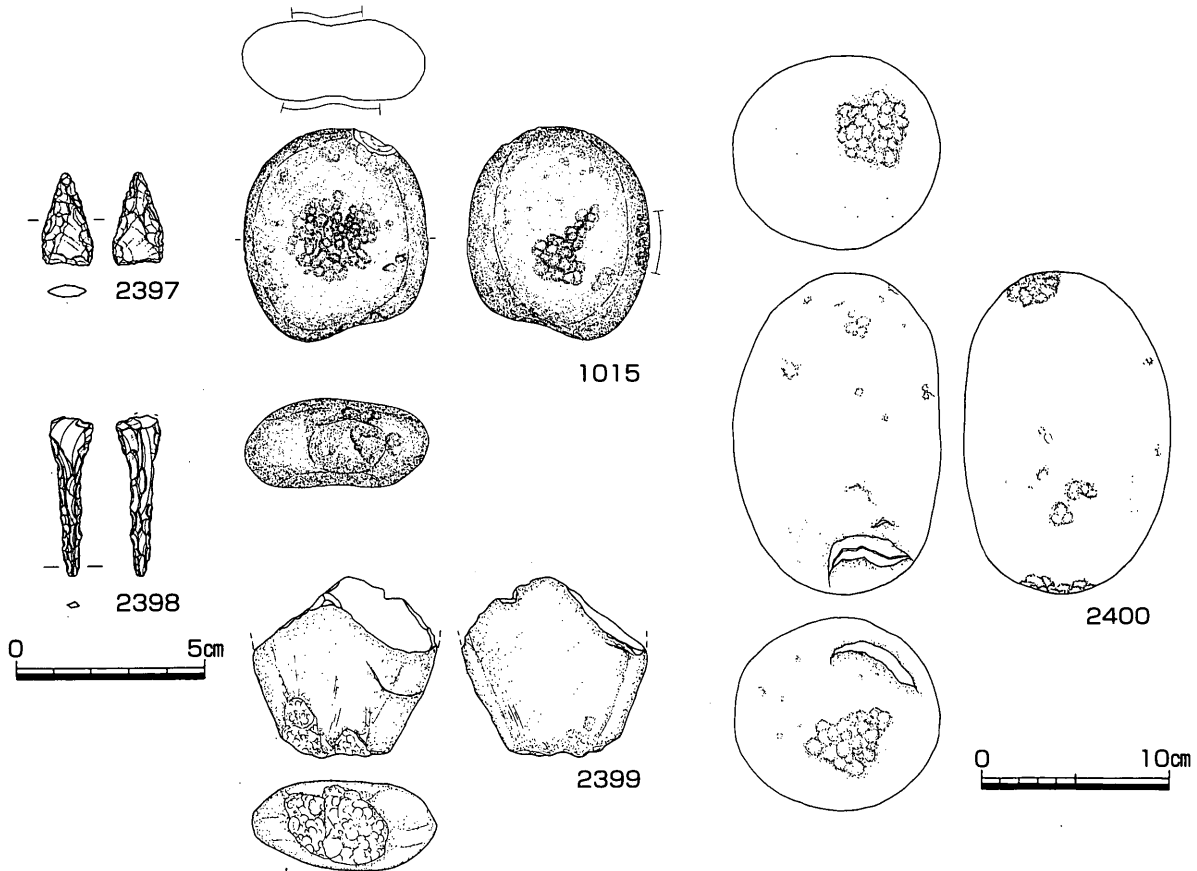
礫は南西部分を中心に密集しているが、北西-北-東部分では少なくなっている。また斜面から端部にかけても少なくなっている。礫は5~20cm大であるが、10cm大のものが多く、また中心から少し北側には25cm四方の扁平な板石が目立っている。礫は砂岩が主体となり、少量の花崗岩を含んでいる。

集石36の構築面は集石35と同じ灰茶褐色粘土混じり砂質土層の上面である。この面から礫と土を盛り上げている。盛土は灰茶褐色砂混じり粘質土の単一層である。礫は構築面近くの下部から頂部にかけて堆積し、礫のみが積み重なっている部分がある。全体に礫の密度は高い。全体を調査したが、下部遺構は認められなかった。

遺物は頂部から下部にかけて出土している。量的には余り多くなく、土器はすべて破片での出土である。石器以外のサヌカイトの剥片・碎片は他の集石遺構に比べて多く、208点、重量にして242.9gが出土している。



第496図 V区第2面集石36出土遺物(1)(1/4)



第497図 V区第2面集石36出土遺物(2)(1/2、1/4)

2374~2379は壺である。2375の口縁部は、外傾する頸部から真横に開き、内面に斜格子文を施している。頸部外面はハケ目である。2376は口縁部端部上面に平坦な面を作り、円形浮文を巡らせ、外面には刻み目を施している。2379は体部に突帯が巡り、その上部には櫛描波状文と櫛描直線文を施している。

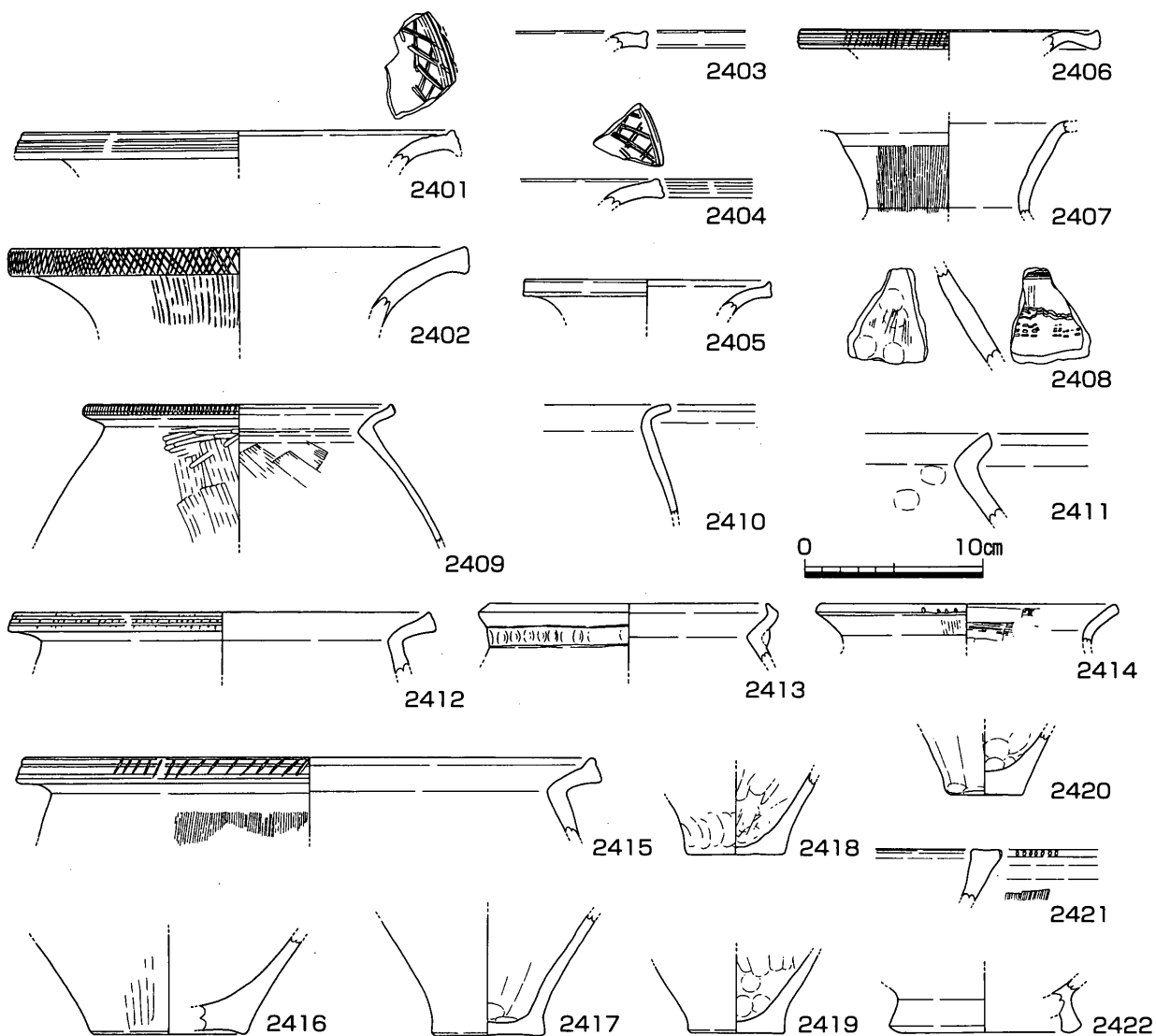
2380~2388は甕である。2381の口縁部内面は強い横ナデになっている。2384の口縁部は直線的である。2385は胎土に結晶片岩を含む。2392は甗で、胎土に結晶片岩を含んでいる。2394~2396は鉢である。2394の体部は直線的で、口縁部端部は平坦な面を作る。

2397は平基の石鏃である。2398は石錐で、錐部は細長い。2399は敲石であるが、上部は欠損している。2400も敲石で上下両端を使用している。1015は凹石であるが、側縁も敲打に使用している。

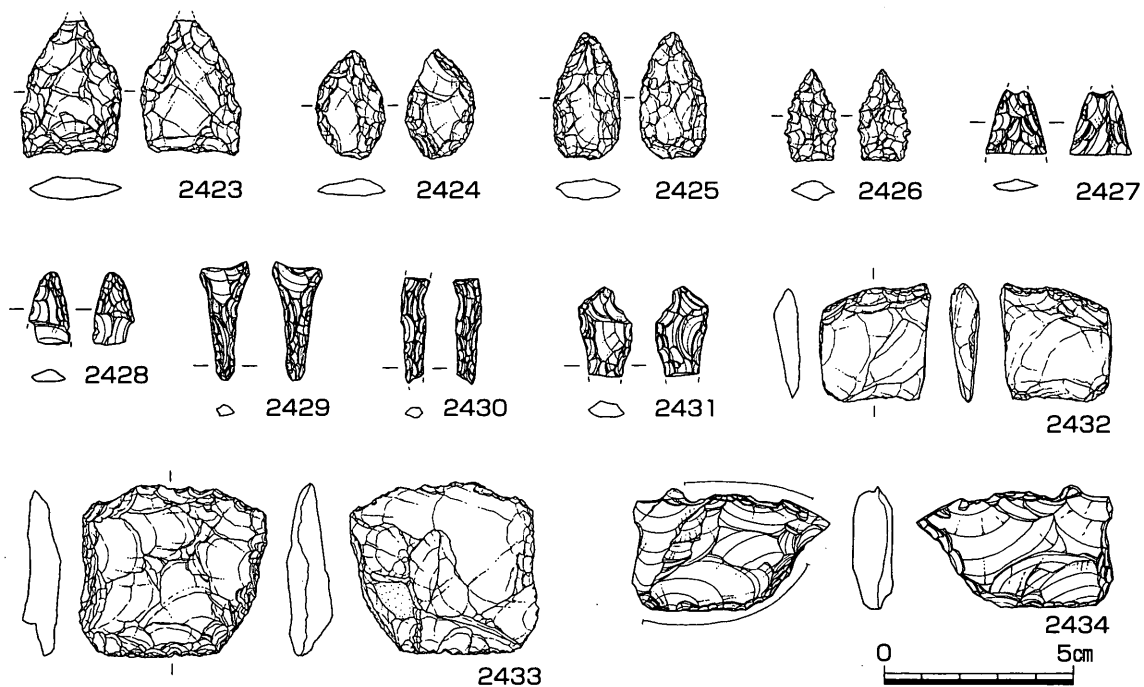
2401~2434は集石36の検出時に、その上部の包含層で出土した遺物である。2401~2408は壺である。2401は口縁部端部を上下に拡張し、内面には斜格子文を施している。2402は口縁部端部外面に斜格子文を巡らせている。2406の口縁部はS字状に湾曲している。2408の外面には櫛描波状文と櫛描直線文を施し、さらに櫛描列点文を加えている。

2409~2415は甕である。2409・2412・2414・2415は口縁部端部外面に刻み目を施している。2409は体部上面の外面にハケ目の後に横方向にヘラミガキを加えている。内面はハケ目である。2413は口縁部端部を上方に拡張し、頸部には指頭で刻み目を施した突帯を巡らせている。2421は鉢で、口縁部外面に刻み目を施す。2422は台付鉢の台部と考えられる。

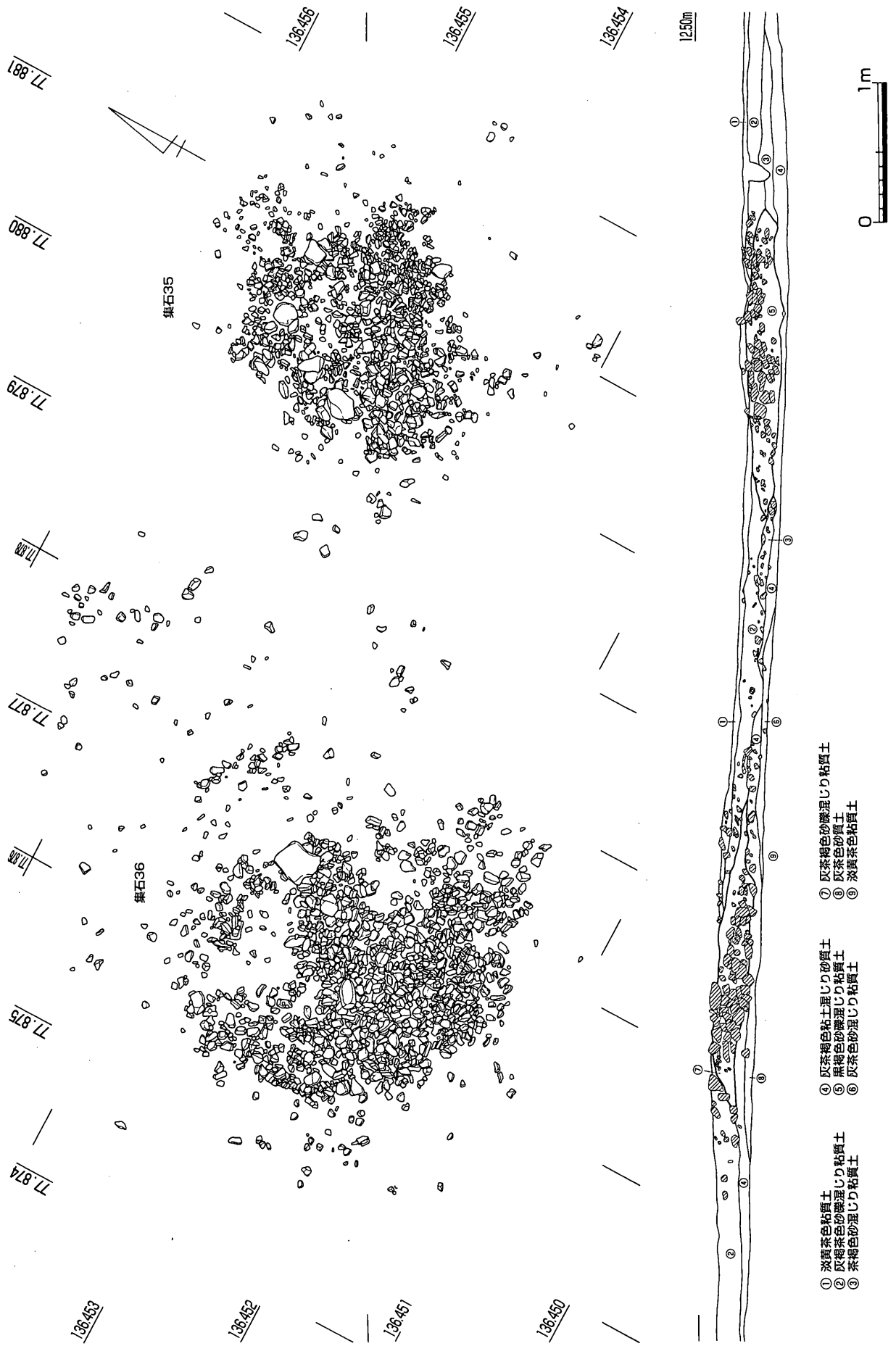
2423~2428は石鏃である。2423は凹基であるが、基部は不揃いである。2424は凸基で、鏃身の最大



第498图 V区第2面集石36上部包含層出土遺物 (1) (1/4)



第499图 V区第2面集石36上部包含層出土遺物 (2) (1/2)



第500図 V区第2面集石35・36間土層断面図 (1/40)

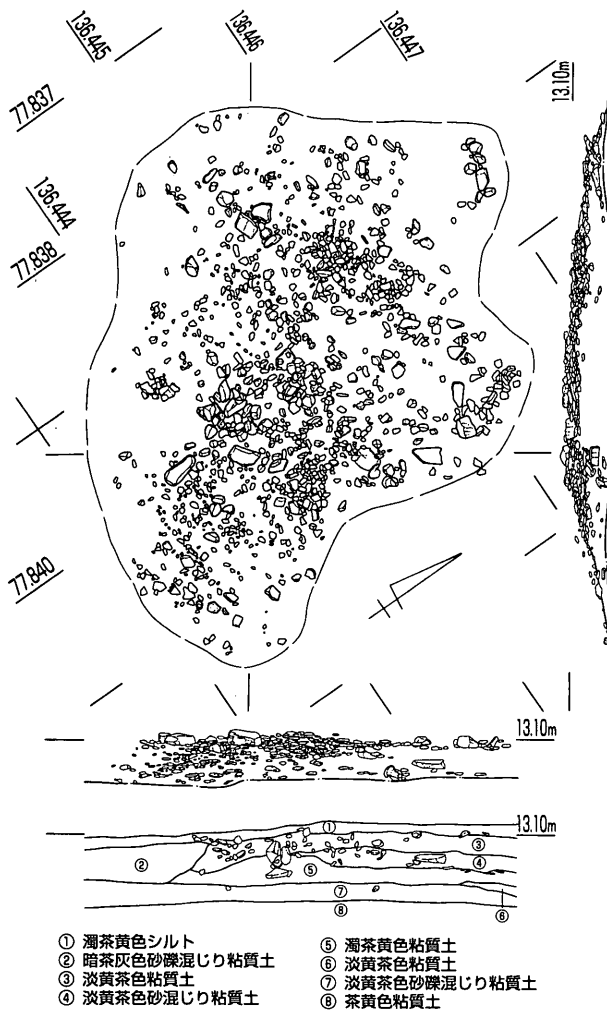
幅は中央にある。2425・2426は平基である。2425は凸基に近づいている。2429～2431は石錐である。2432～2434は楔形石器である。2432・2433とも敲打痕は認められないが、両極打撃による歯こぼれ状の剥離は認められる。

以上の出土遺物から、集石36は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。

集石37 (第501～507図)

調査区南西部の西壁近くの、旧G 6区で検出した集石遺構である。平面形は不整形で、東側が湾曲している。北西-南東方向で4.3m、北東-南西方向は1.8～3.5mである。基本的には塚状に盛り上がっているが、土層の識別が困難であり、断面では盛り上がりのラインは確認出来ていない部分がある。北西-南東方向では均質に盛り上がり、頂部から端部にかけて緩やかな傾斜となる。北東-南西方向は、北西部は比較的緩やかであるが、南西部は急になっている。頂部は平坦に近い。端部の標高は12.75m、頂部の標高は13.1m、高さは35cmである。

礫は全体に広がっているが密集はしていない。北東部分では斜面から端部にかけて礫はない。これに対して南東部は斜面にも礫は認められる。礫は5～20cm大であるが、10cm前後のものが主となっている。



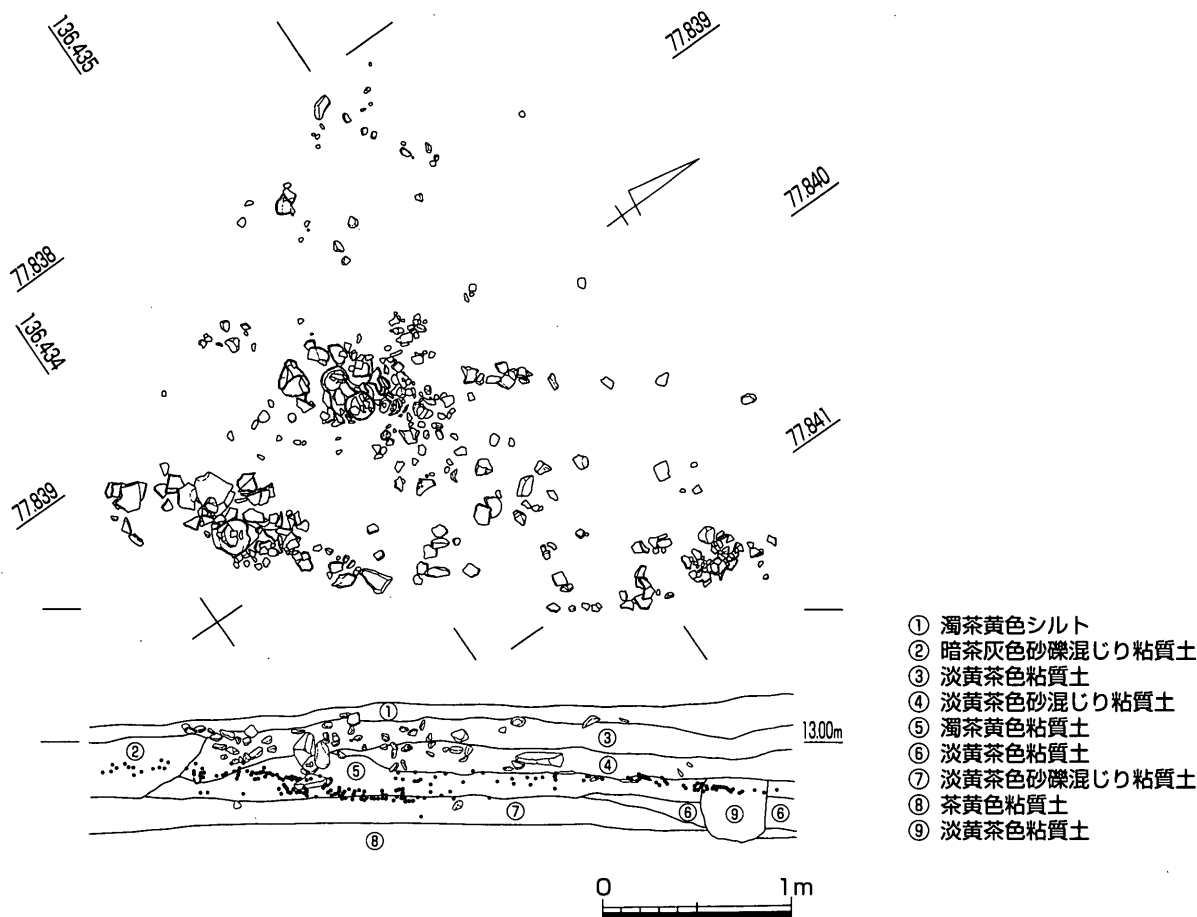
大きな礫の出土位置には特に特徴は認められない。礫は砂岩が主体となり、少量の花崗岩を含んでいる。

集石37の構築面は淡黄茶色砂礫混じり粘質土層の上面である。この面から礫と土を盛り上げている。土層図では北東部分の盛り上がりのラインが確認出来ていないが、盛土は上下に大別出来るようである。下層には濁茶黄色粘質土、上層は淡黄茶色粘質土と考えられる。礫は上層部分に多く、下層は土が多くなっている。全体を調査したが、下部遺構は認められなかった。

遺物の出土量は多い。特に下層部分からの出土が多く、構築面近くから集中的に出土している。上面の礫の部分からの出土量は少ない。土器はすべて破片で、完形に近く復元出来たものはない。石器の出土は少なく、サヌカイトの剥片・碎片は11点、重量にして33.8gの出土にとどまる。

2435～2453は壺である。2435の口縁部は外反し、端部は丸く収める。頸部は内・外面ともにハケ目を施し、体部は丸く膨らむ。体部も内・外面ともにハケ目を施す。2436の口縁部は外傾する頸部からそのまま緩く外反して

第501図 V区第2面集石37平・立・断面図(1/60)

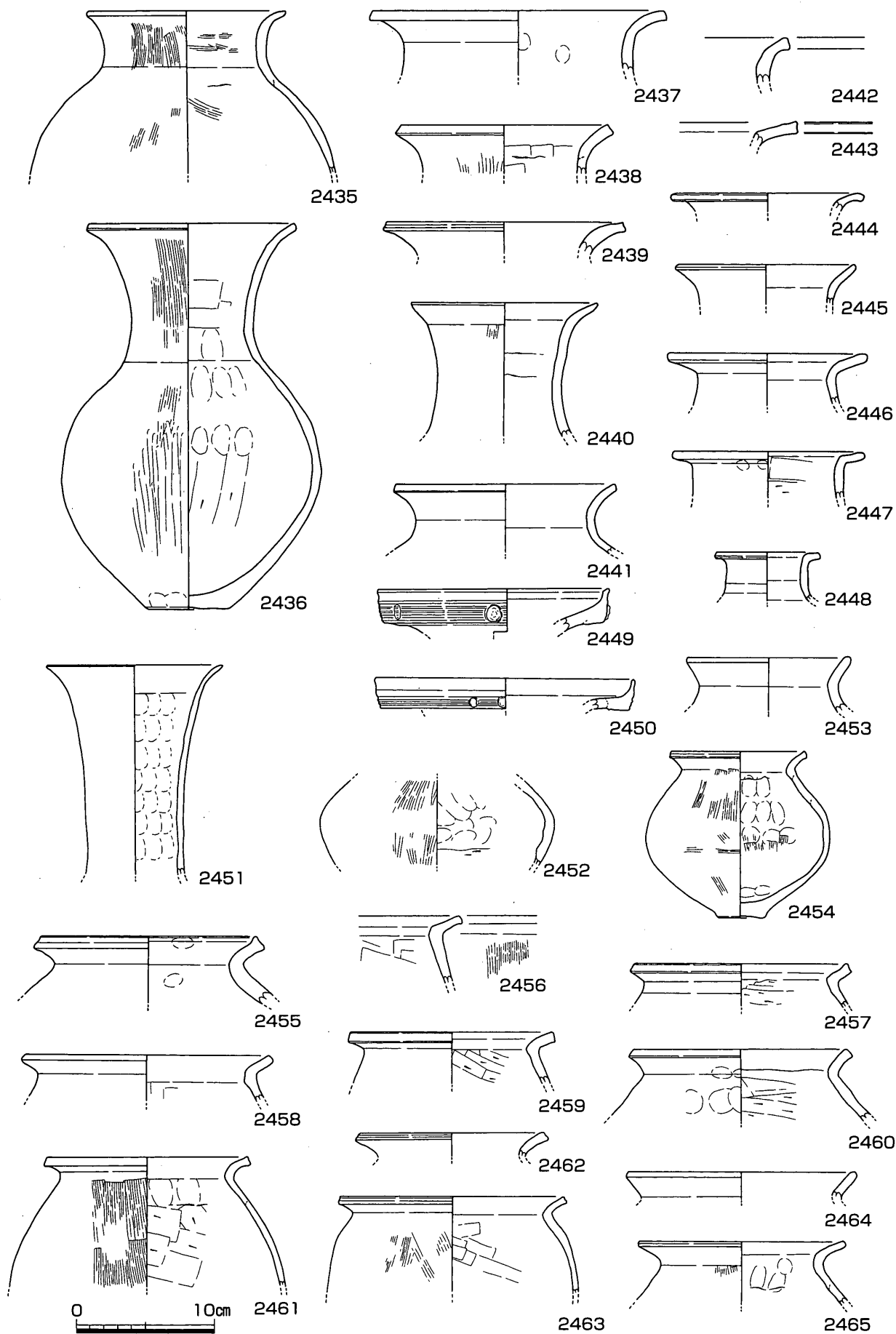


第502図 V区第2面集石37下層遺物出土状況平面図、垂直分布図（1/40）

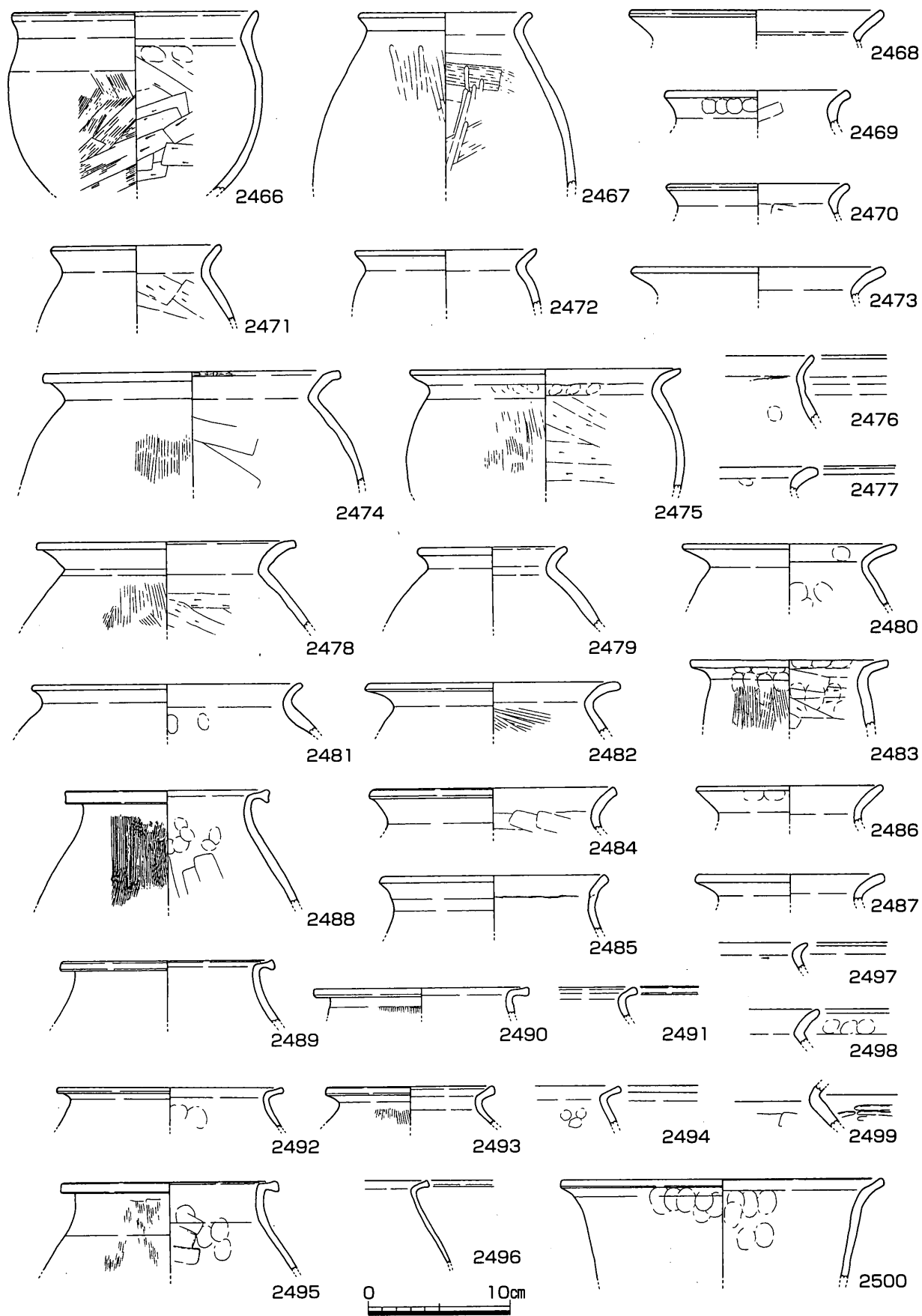
開く。体部は球形で外面にはハケ目の後にヘラミガキを施す。2440の頸部は長く、口縁部端部は先細りになる。2447の口縁部は横に開き、内面を強くナデている。頸部内面にはヘラケズリを施す。2448の口縁部は真横を向く。胎土には角閃石を含んでいる。2449・2450は口縁部端部を上方に大きく拡張して強くナデている。外面には円形浮文を貼り付けている。2451の頸部は細長く、内面には指押さえが顕著である。口縁部端部は先細りになる。胎土には角閃石を含んでいる。2452の体部は扁平で、外面にはヘラミガキを施している。内面上半には指押さえが顕著で、下半にはヘラケズリを施す。胎土には角閃石を含んでいる。

2454～2496は甕である。2454の体部最大径は中央にあり、扁平である。外面にはハケ目を施し、内面にも部分的にハケ目が認められる。壺に近い形態である。2455は全体に肥厚している。2457・2459～2461の体部内面にはヘラケズリを施す。2466の口縁部は直線的で開き方は弱い。体部高は低く、外面にはハケ目を、内面にはヘラケズリを施す。2467の体部は下膨れになる。外面にはヘラミガキを、内面にはハケ目の後にヘラミガキを部分的に施す。2474・2478は口縁部端部を強くナデて横に向かせている。2475の口縁部屈曲部には内・外面に指押さえを行っている。体部上半は膨らみ、外面にはハケ目を施し、内面にはヘラケズリを施す。2481の口縁部は全体に外反する。2483の口縁部は内・外面に指押さえを強く行う。2488～2495は胎土に角閃石を含んでいる。2488～2490・2495の口縁部は真横に開く。

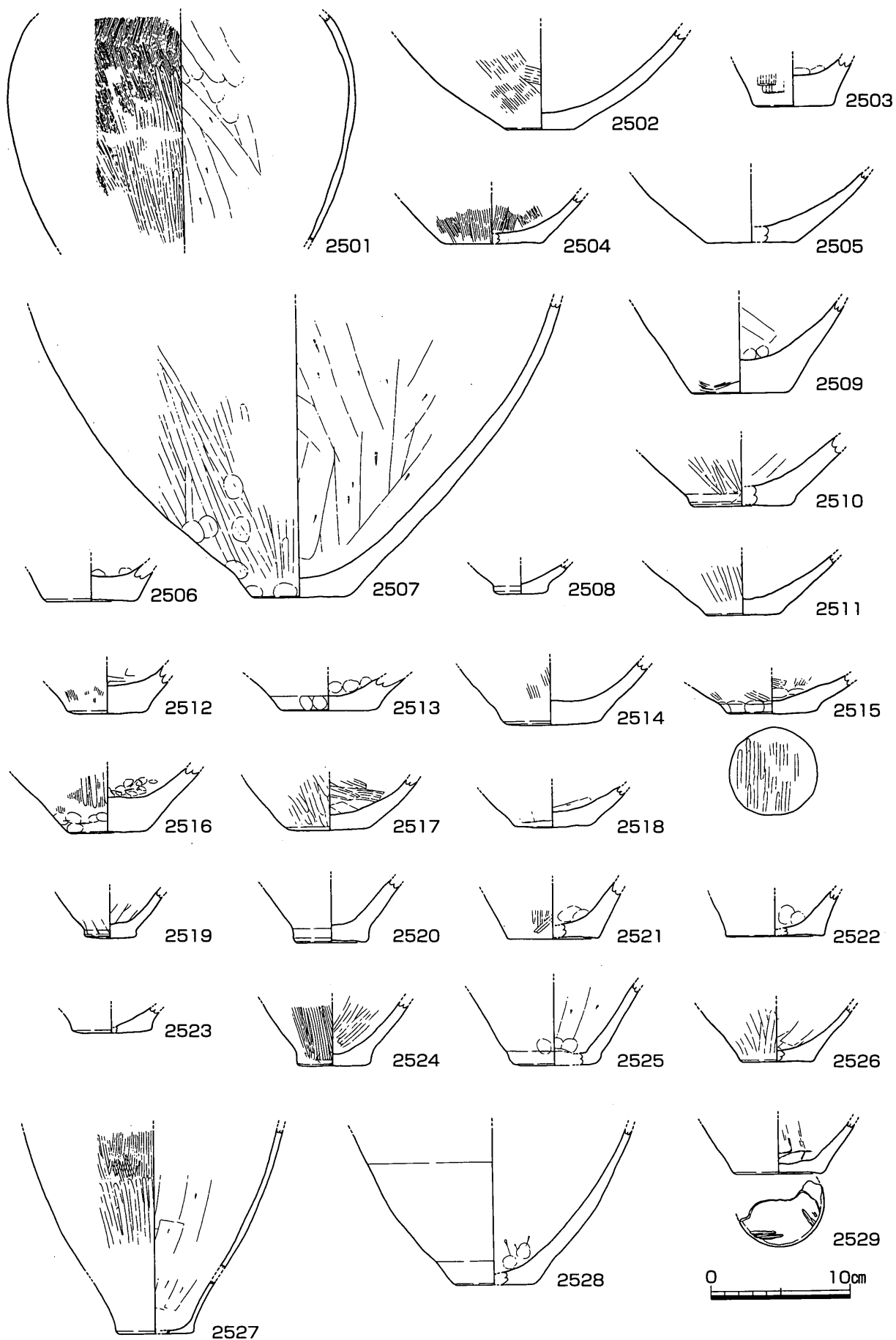
2501は甕の体部で、外面には細かいハケ目の後に下半にヘラミガキを施す。胎土には角閃石を含んでいる。2502～2529は壺および甕の底部である。2508・2510・2515・2519・2520・2524の底部は突出している。



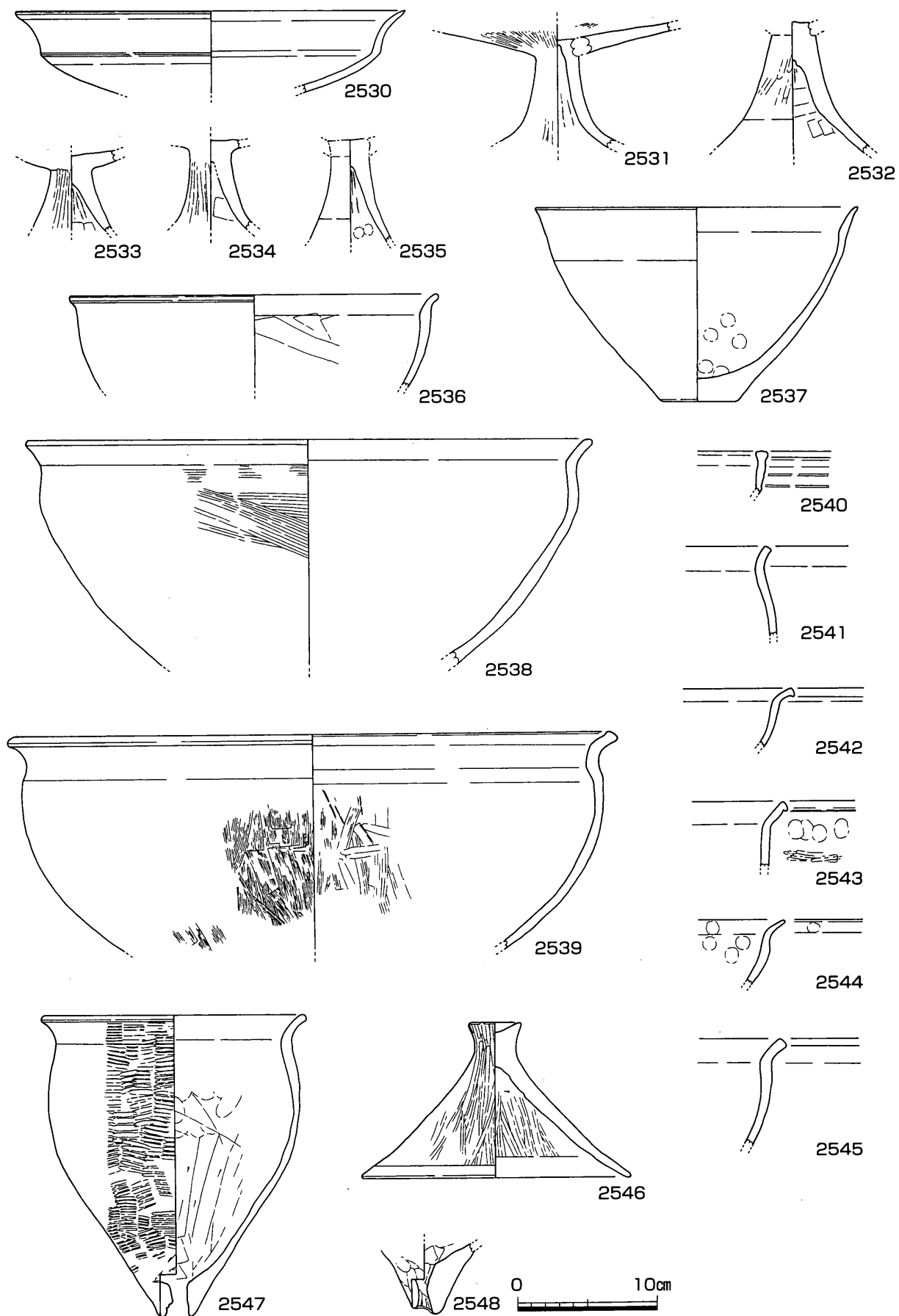
第503图 V区第2面集石37出土遗物 (1) (1/4)



第504图 V区第2面集石37出土遗物(2)(1/4)



第505图 V区第2面集石37出土遺物 (3) (1 / 4)



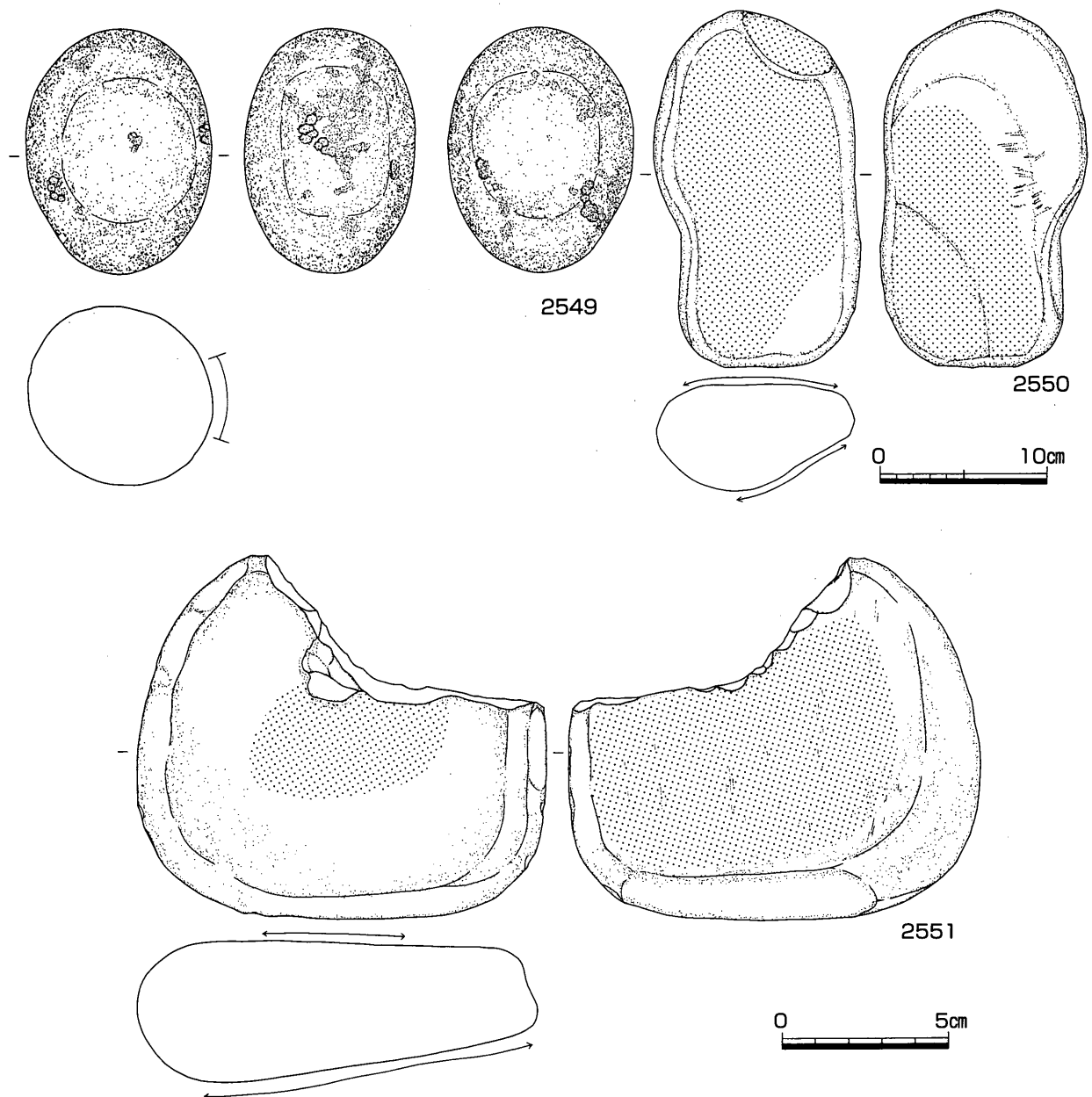
第506图 V区第2面集石37出土遗物(4)(1/4)

2513は胎土に結晶片岩を含んでいる。2515は底部外面にもヘラミガキを施している。2529の底部外面にはヘラ痕が認められる。

2530～2535は高杯である。2530の口縁部は外反している。2531は杯部外面にヘラミガキを施している。内面は摩滅しているもののヘラミガキが僅かに認められる。2533・2534の脚部外面にはヘラミガキを施している。2535は杯部との接合は差込みによる。

2536～2545は鉢で、2540以外の口縁部は体部から屈曲して開く。2538の体部上半は直立してから口縁部が屈曲する。胎土には結晶片岩を含んでいる。2539の口縁部屈曲部内面は丸みを帯びている。体部は扁平で外面にはハケ目を施し、内面にはハケ目の後に太いヘラミガキを加えている。2543は口縁部外面に指押さえが顕著である。

2546は蓋で、つまみ部の上部は窪んでいる。体部は直線的に開き、端部は丸く収める。外面は全体



第507図 V区第2面集石37出土遺物 (5) (1/2、1/4)

にヘラミガキを施している。内面はヘラケズリの後にヘラミガキを加え、最後に端部をナデている。2547・2548は甗である。2547の体部最大径は上半にあり、外面には全体にタタキを施し、内面にはヘラケズリを施している。底部の穿孔は主に外面側から施している。2548の穿孔は両面から施している。

2549は敲石で、断面は円形で主に側縁部を使用している。2550・2551は砥石で、2550は台石としても使用している。

以上の出土遺物から、集石37は弥生時代後期中葉～後半の所産と考えられる。

(3) 包含層出土遺物

旧G1区包含層出土遺物（第508～510図）

2552～2565は壺である。2552の口縁部は直立する頸部から外反して開く。頸部は内・外面に指押さえと板ナデを施している。体部は下半が欠損しているが横に膨らんでいる。内面の下半部にはハケ目を施している。2553は頸部から内湾して口縁部に至り、端部は平坦になっている。外面には凹線文を巡らせている。2554は口縁部端部を下方に拡張し、外面には刻み目と9個1単位の円形浮文を貼り付けている。2556は口縁部内面に斜行する直線文を施している。2558は口縁部端部を下方に拡張し、外面には棒状浮文を3条貼り付けている。内面には斜格子文を施している。2559の口縁部は直線的で、内・外面にハケ目を施している。2562の口縁部は真横に開いている。体部内面には抉るようなヘラケズリを強く施している。2563は無頸壺で、外面に刻み目の入った棒状浮文を貼り付けている。2564・2565は外面に格子文を施している。

2566～2581は甕である。2566は口縁部端部を下方に拡張している。口縁部屈曲部の外面に指押さえを行っている。2568の口縁部は体部に比べて厚くなっている。口縁部外面から体部外面にかけてハケ目を施している。2569・2570・2573・2576の口縁部屈曲部の内面は鋭くなっている。2580は胎土に角閃石を含んでいる。

2582～2585は壺および甕の底部～体部である。2585は外面にタタキの後にハケ目を施している。内面にもハケ目を施している。

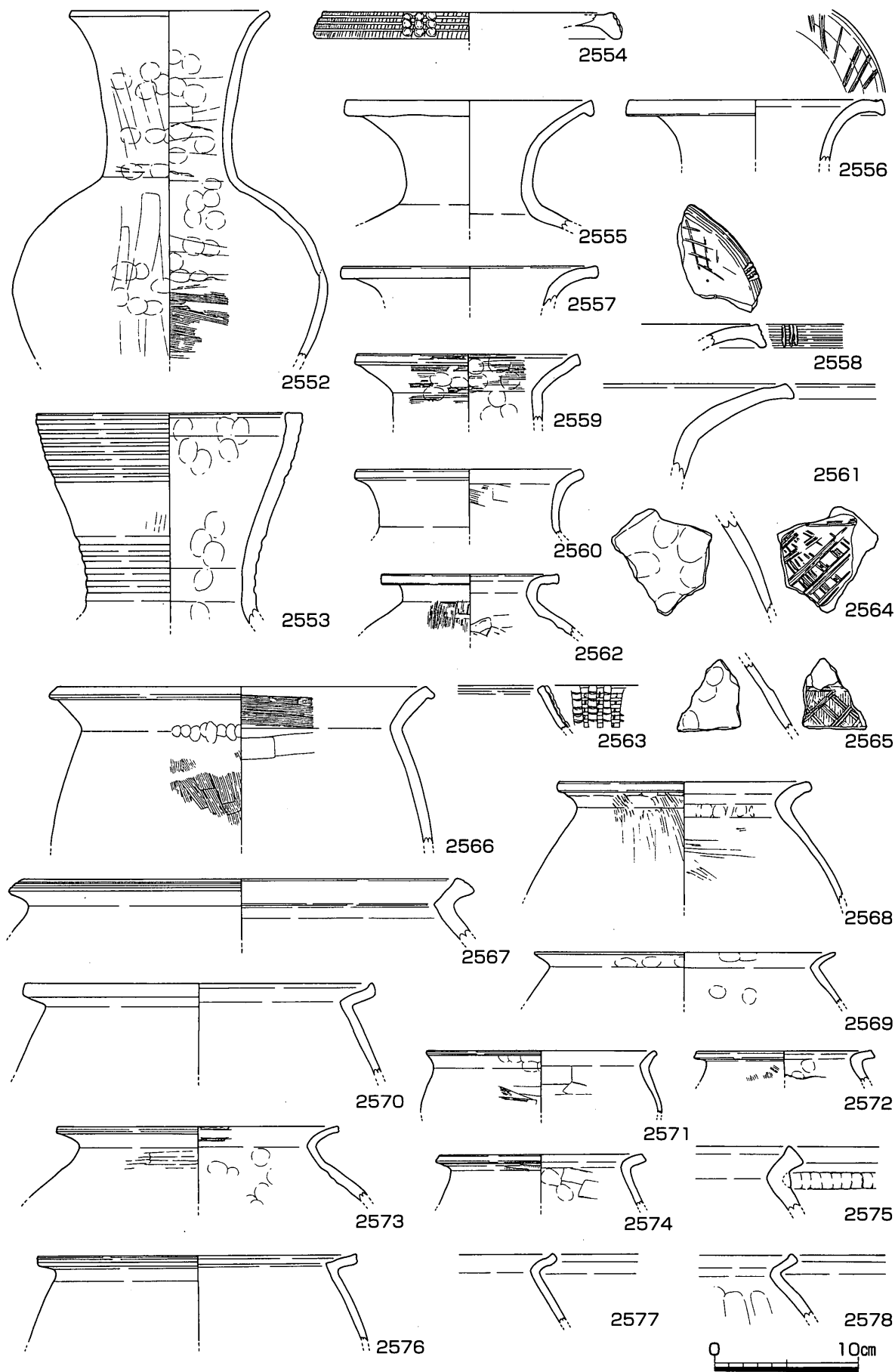
2586～2593は高杯である。2586の口縁部端部は下方に拡張し、外面に棒状浮文を貼り付けている。内面には斜め上方に立ち上がる突起がある。2588は杯部外面にはヘラミガキを施している。円盤充填になっている。胎土には角閃石を含んでいる。2591は脚部外面に丁寧なヘラミガキを施している。

2594～2597は鉢である。2594の口縁部は短い直線的で、端部を上下に拡張している。体部外面はヘラミガキで、内面にはハケ目の後にヘラミガキを加えている。2595は内湾する体部からそのまま口縁部に至り、上面に平坦な面を作っている。外面には凹線を巡らせた後に棒状浮文を貼り付けている。2596は小型の鉢の底部と考えたもので、内・外面にヘラミガキを施している。底部は上げ底である。2597も小型の鉢の底部で、短い脚台が付いている。

2598は紡錘車、2599は蓋である。

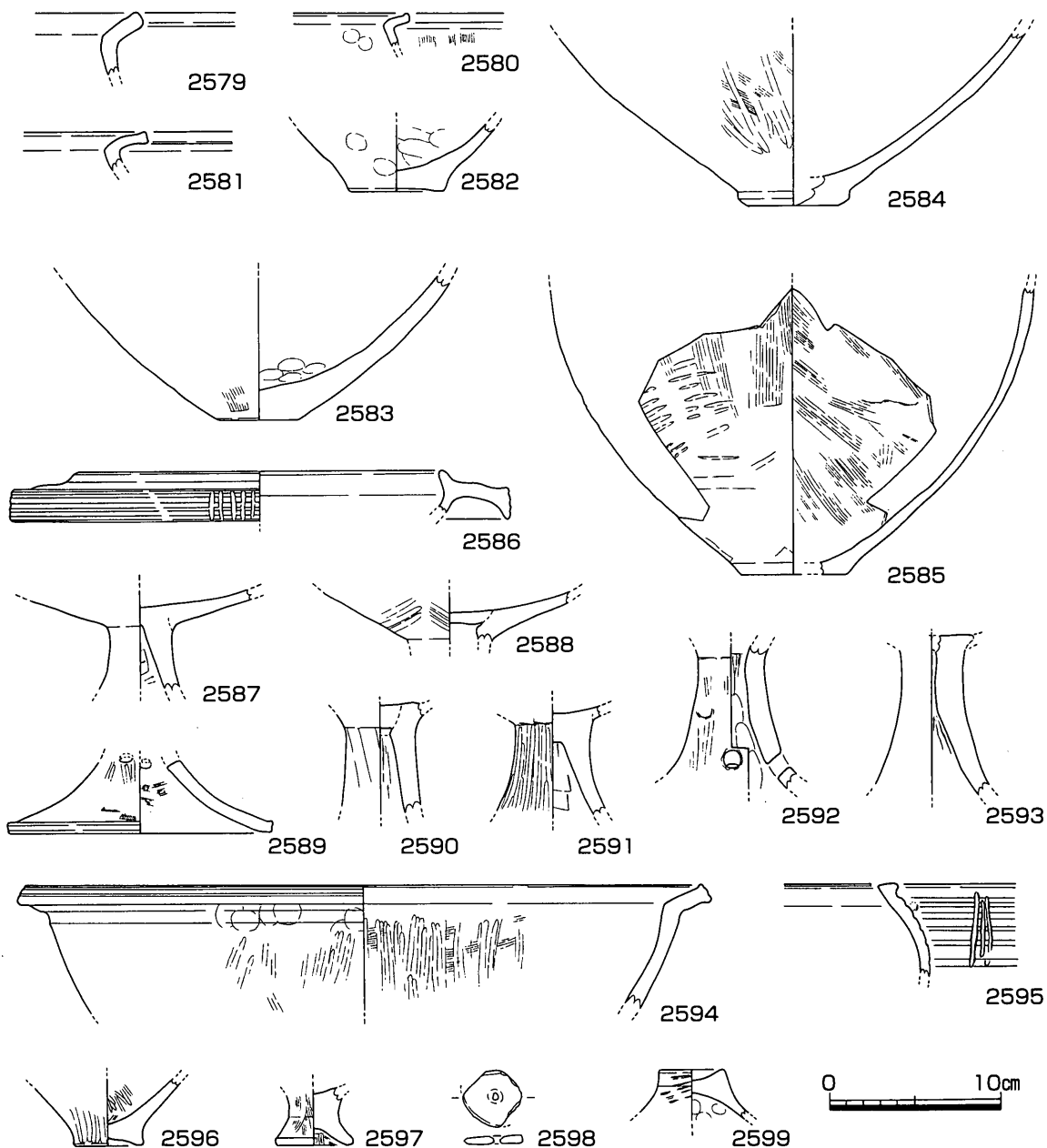
2600～2602は平基の石鏃である。2602の鏃身の下半は凸基のような形状であるが、基部には平坦な部分がある。2603・2604は凸基有茎式の石鏃である。2605は風化が進んでいる。2607・2608は石鏃の未製品である。2609は石錐の錐部であるが自然面が残っている。2610は楔形石器である。上部と下部に両極打撃の際の剥離が見られる。

2611は扁平片刃石斧で、刃部は打撃による潰れと剥離が見られる。基端部は斜めになっている。2612

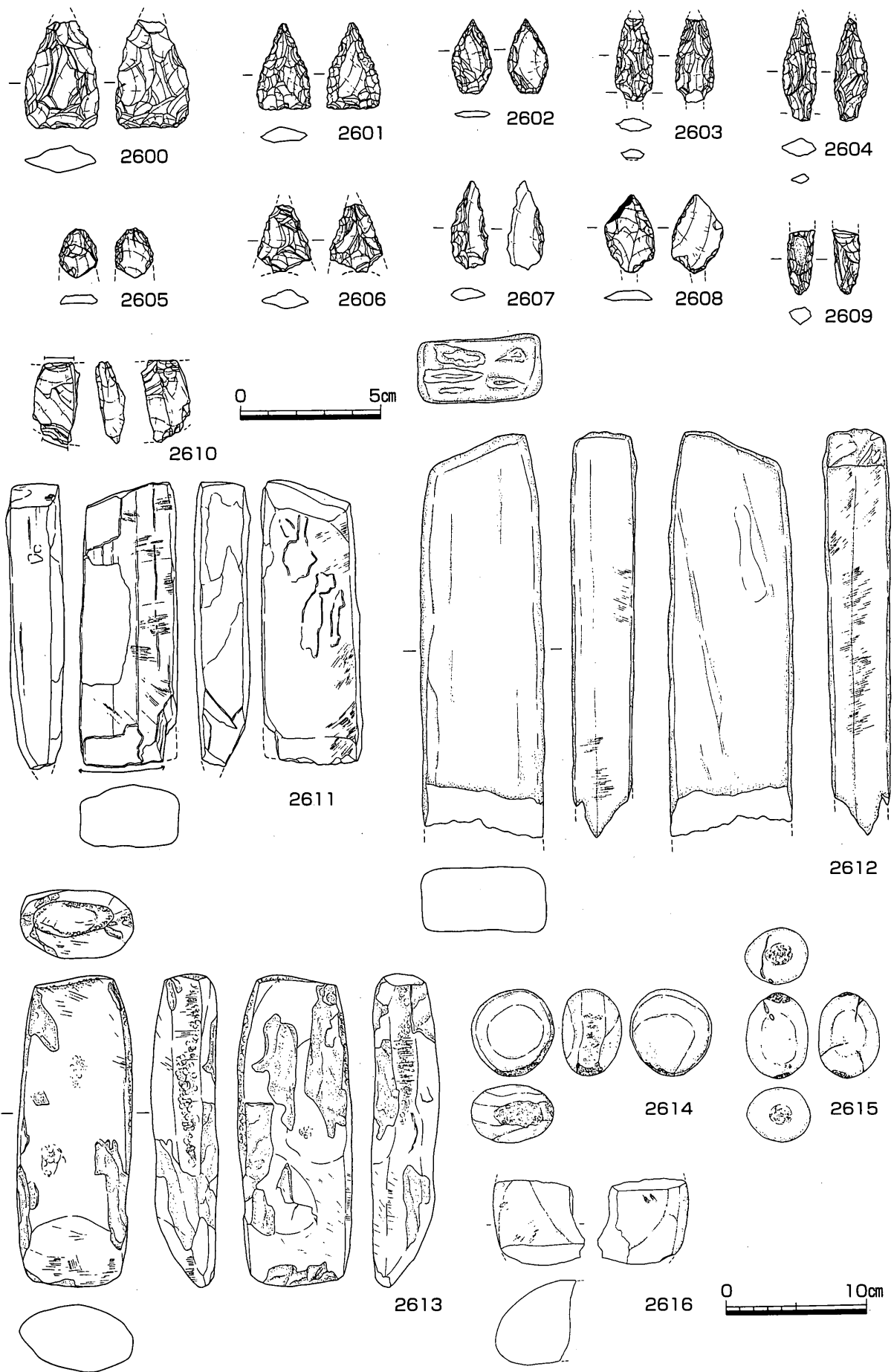


第508图 V区第2面包含层出土遗物(1)(旧G1区)(1/4)

の基端部も斜めである。刃部は欠損している。2613は片刃石斧で、刃部は丸く研ぎ出しており、刃部には刃こぼれが生じている。断面は楕円形で、側縁部には柄との装着痕が認められる。縄文時代の定角式石斧に似ている。2614~2616は敲石である。2614は片方の端部と側面を使用している。被熱して赤変している。2615は両端部を使用している。2616は欠損品で、残っている部分には敲打した痕跡は認められない。



第509図 V区第2面包含層出土遺物(2)(旧G1区)(1/4)



第510图 V区第2面包含层出土遗物(3)(旧G1区)(1/2、1/4)

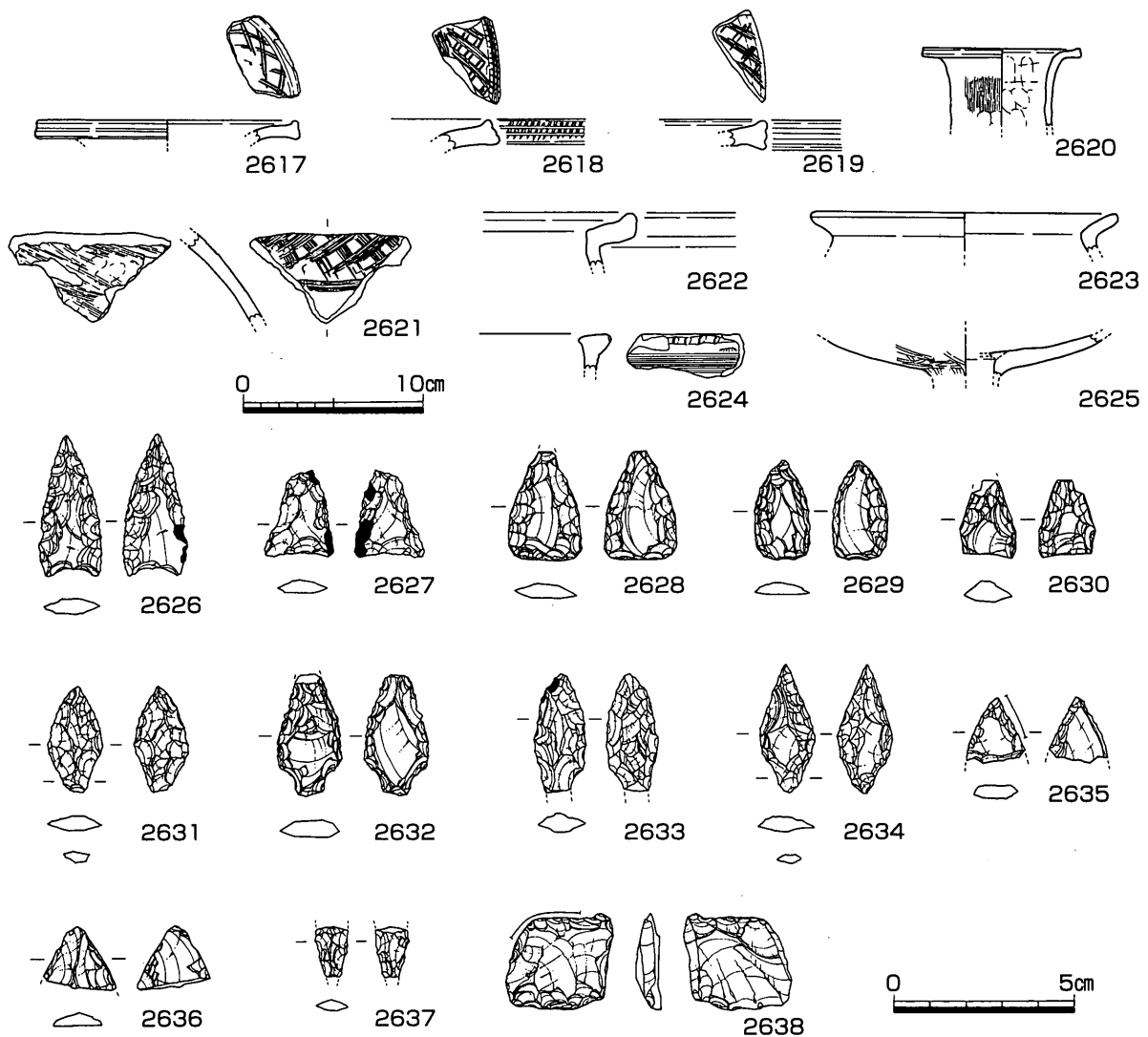
旧G3区包含層出土遺物（第511図）

2617～2621は壺である。2617・2618は口縁部端部を上方に、2619は上下に拡張している。いずれも口縁部内面に斜格子文を施している。2620の口縁部は直立する頸部から真横に開く。頸部外面にはハケ目を施し、内面は指押さえである。胎土には角閃石を含んでいる。2621は体部外面に櫛描直線文と斜格子文を施している。

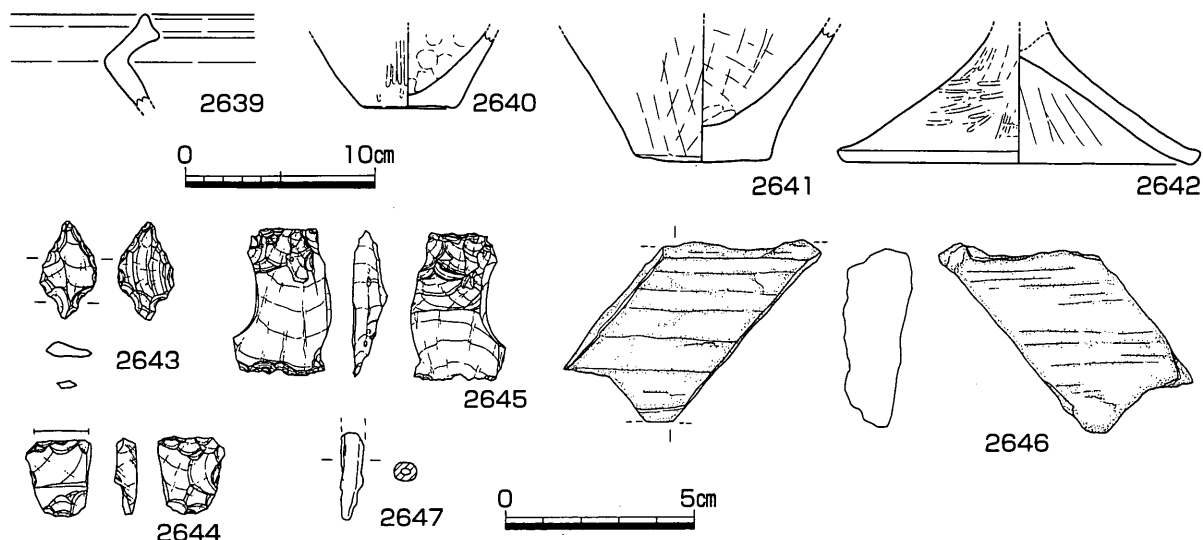
2622～2624は甕である。2622は口縁部端部を上方に拡張している。2624は逆L形口縁で、端部には刻み目を施している。体部外面には櫛描直線文を巡らせている。

2625は高杯で、内面は摩滅しているが外面にはヘラミガキが認められる。円盤充填が剥離している。

2626～2634は石鏃である。2626・2627は凹基で、2626は基部の湾曲の度合いは強い。2628～2630は平基である。2631は凸基、2632～2634は凸基有茎式である。2635・2636は石鏃の未製品である。2635は楔形石器を転用しており、鏃身の側縁部には楔形石器のときの敲打痕がある。また基部は楔形石器の截断面になっている。2637は石錐の錐部である。2638は楔形石器で、截断面の一部にも敲打痕がある。



第511図 V区第2面包含層出土遺物（4）（旧G3区）（1/4、1/2）



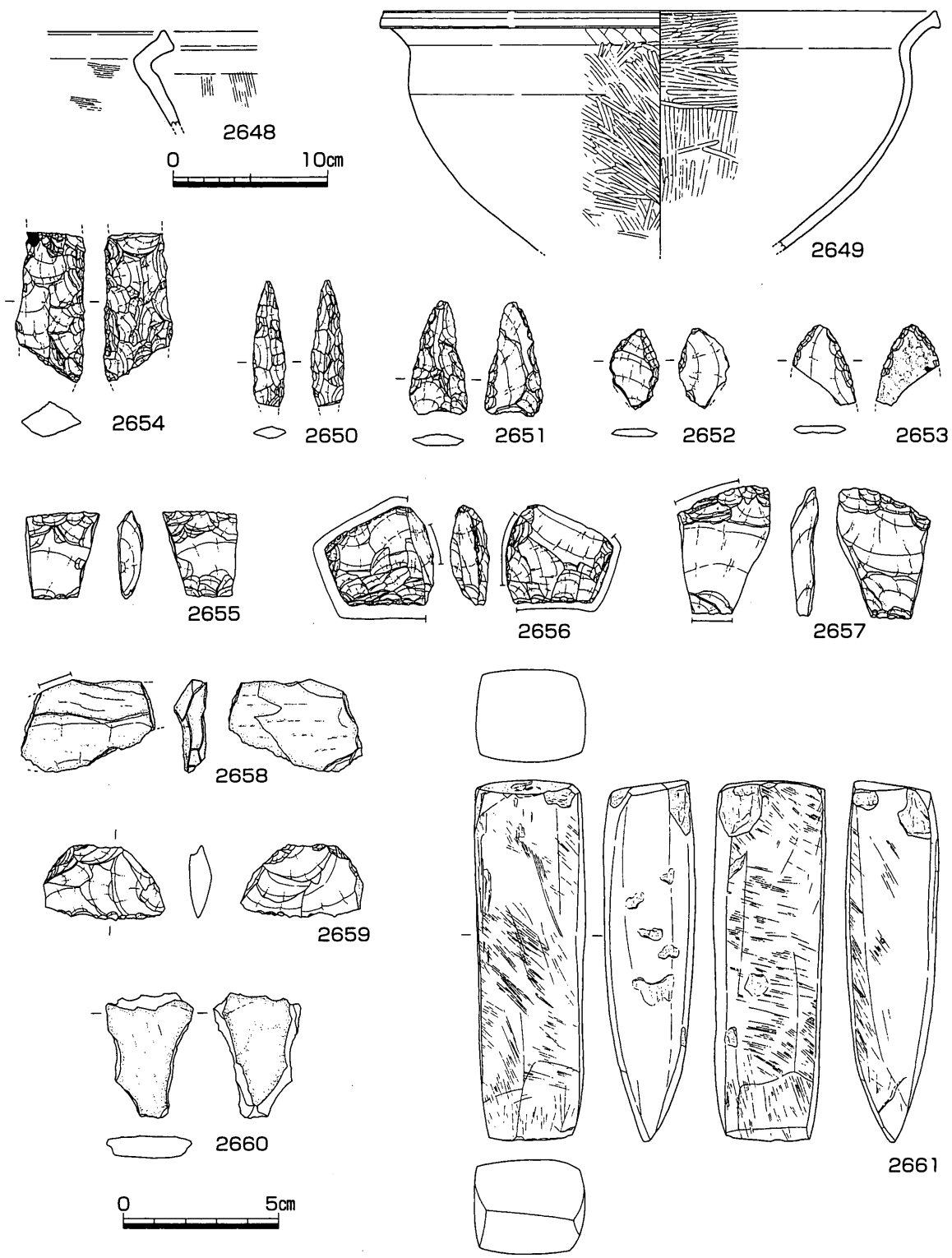
第512図 V区第2面包含層出土遺物(5)(旧G4区)(1/4、1/2)

旧G4区包含層出土遺物(第512~515図)

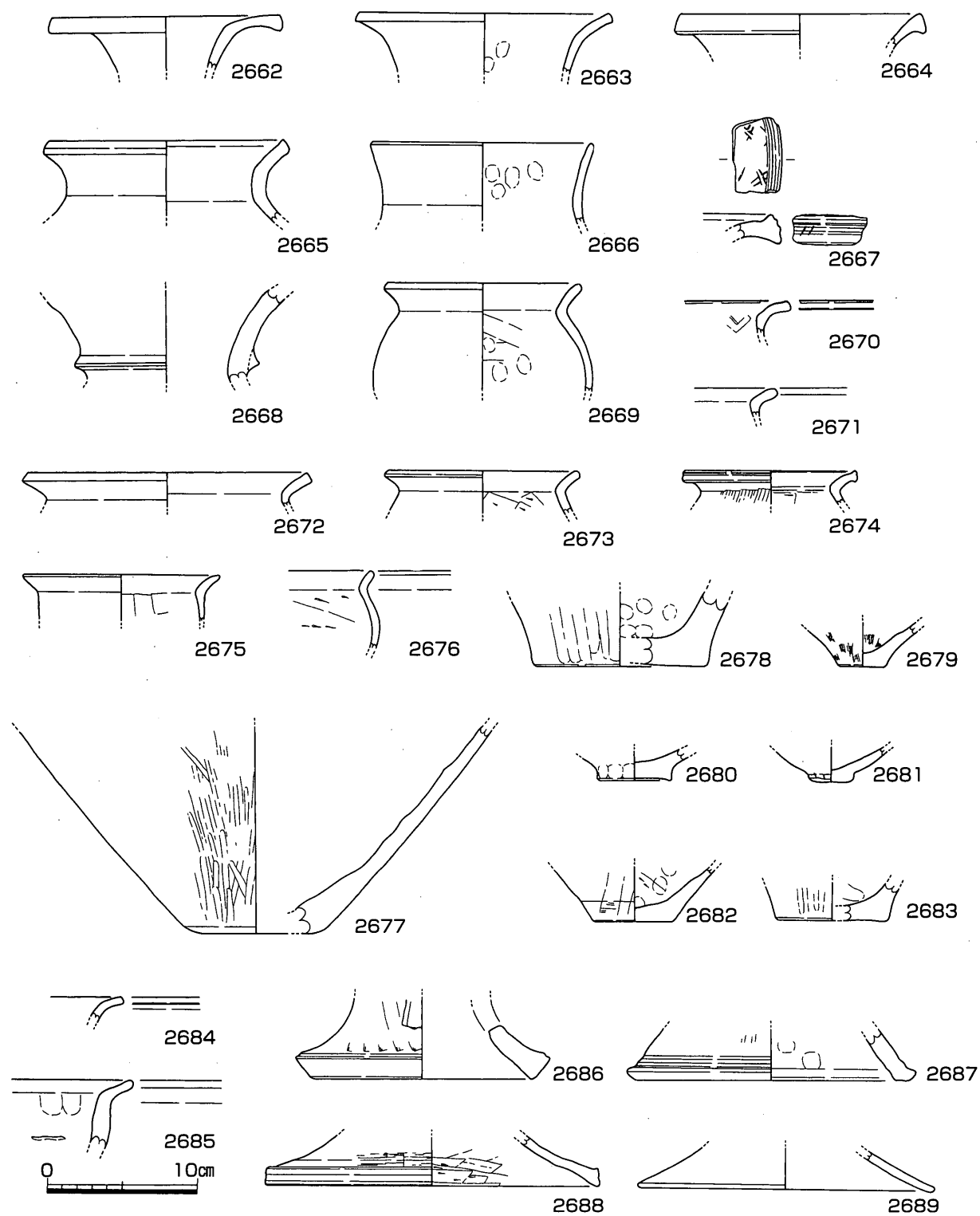
2639~2647は第1面の直下の部分で出土した遺物である。2643は凸基有茎式の石鏃である。2644・2645は楔形石器である。2646はスクレイパーに似るが刃部の作り出しは不十分である。縁辺部は整っており、厚手である。結晶片岩製で、あるいは自然物かもしれない。2647は鉄鏃の茎部である。

2648~2661は第2面の直上から出土した遺物である。2649は鉢で、口縁部は端部を下方に拡張している。体部上半の膨らみは強く、外面には丁寧にヘラミガキを施す。内面も口縁部から体部まで全体にヘラミガキを施している。2650・2651は石鏃、2652・2653は石鏃の未製品である。2654は石槍である。側縁部の調整が不十分である。断面は菱形でまだ厚みが残る。2655~2657は楔形石器である。2656は3辺と截断面に敲打痕が認められる。2658は結晶片岩製の楔形石器と考えられ、敲打痕が認められる。2659はスクレイパーである。2660は磨製石斧の一部で、薄手で刃部付近と考えられる微妙に傾斜する部分が図の上端にある。扁平片刃石斧と思われる。2661は柱状片刃石斧で、刃部の研ぎ出しは片刃であるが、その形状は両刃に近い。基部に挟りはなく、端部はやや斜めになっている。全体に細かい擦痕が顕著である。

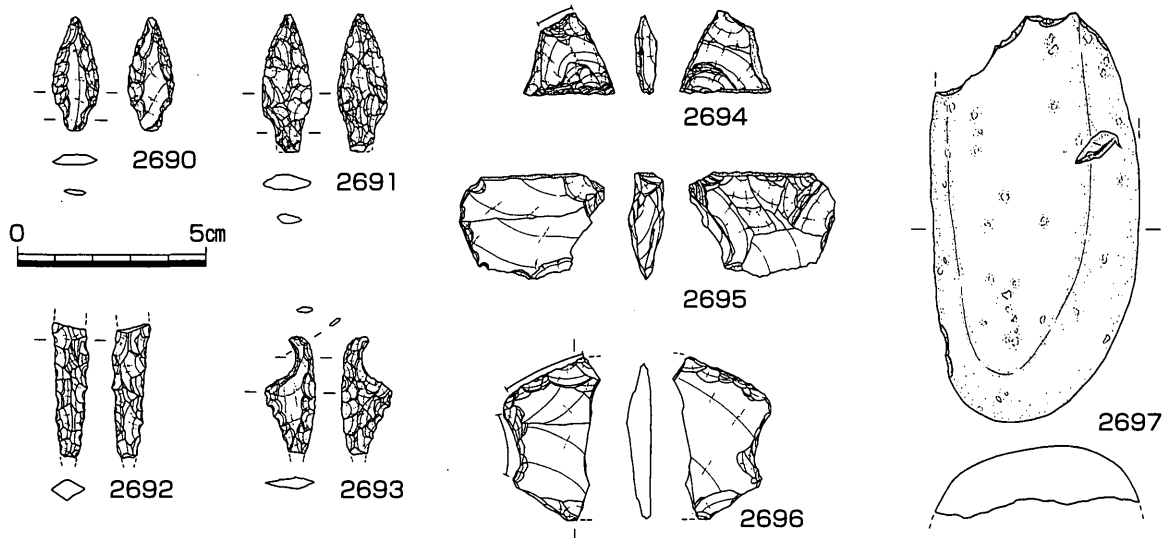
2662~2697は集石33付近の包含層で土器が集中的に出土した部分の遺物である。2662~2668は壺である。2662の口縁部は真横に開き、頸部は細くなる。2664は口縁部端部を下方に拡張している。2665は胎土に結晶片岩を含んでいる。2667は口縁部端部を上下に拡張し、内面には摩滅しているが斜格子文が認められる。2668は頸部に突帯を巡らせている。2669~2676は甕である。2674は口縁部内面を強くナデており、体部外面にはハケ目を施している。2675は体部内面には強く板ナデを施している。2677~2683は壺および甕の底部である。2677は外面にヘラミガキを施し、胎土には角閃石を含んでいる。2680の底部は突出し、側面には指押さえを行っている。2684・2685は鉢である。2686~2689は高杯である。2686の端部は斜めに接地している。方形の透かし穴が現存で1個ある。2687は端部を外側に拡張し、外面には細かい凹線を巡らせている。脚部は僅かに内湾している。あるいは台付鉢の台部かもしれない。2688の端部は外側に面を作り、内面にヘラケズリを強く施している。胎土には角閃石を含んでいる。2690・2691は凸基有茎式の石鏃である。2692は石錐である。2693は石匙のような形状で、上部は湾曲して鎌状に突出する。下端部は欠損しているが石鏃の鏃身を反転させたような形である。用途は不明の異形石器であ



第513图 V区第2面包含层出土遗物(6)(旧G4区)(1/4、1/2)



第514图 V区第2面包含层出土遗物(7)(旧G4区)(1/4)



第515図 V区第2面包含層出土遺物（8）（旧G4区）（1/2）

る。2694・2695は楔形石器である。2694は片側の側縁部に自然面を残している。2696は側縁部に抉りのある打製石庖丁である。裏面には主要剥離面を残している。背部に敲打痕が認められることと、折れ方が截断面のようになっていることから、楔形石器に転用したのかもしれない。2697は敲石で、被熱赤変している。

旧G5区包含層出土遺物（第516図）

2698・2699は壺である。2698は頸部から口縁部にかけて全体に外反し、端部は丸く収める。外面にはハケ目を施し、内面にはハケ目と太いヘラミガキを施している。胎土に角閃石を含んでいる。2699の口縁部は外傾する頸部から横に開く。頸部外面にはヘラミガキを施し、内面は板ナデであるが僅かに砂粒が動いている部分がある。

2700～2704は甕である。2700は口縁部端部を下方に拡張している。2702は口縁部端部を丸く収め、内面にはハケ目を施している。2704の体部最大径は中央にある。外面にはハケ目を施している。

2705～2708は壺および甕の底部である。2709は鉢の底部と考えられ、底部は突出し側面に指押さえを行う。2710も鉢で、口縁部は上方を向き、端部を丸く収める。内面を強くナデている。体部外面はタタキの後にハケ目を施している。2711～2713は高杯である。2711の口縁部は真横を向く。口径が小さいことから高杯にしたが、小型の鉢かもしれない。2713の脚部外面にはヘラミガキを施している。2714は甌である。

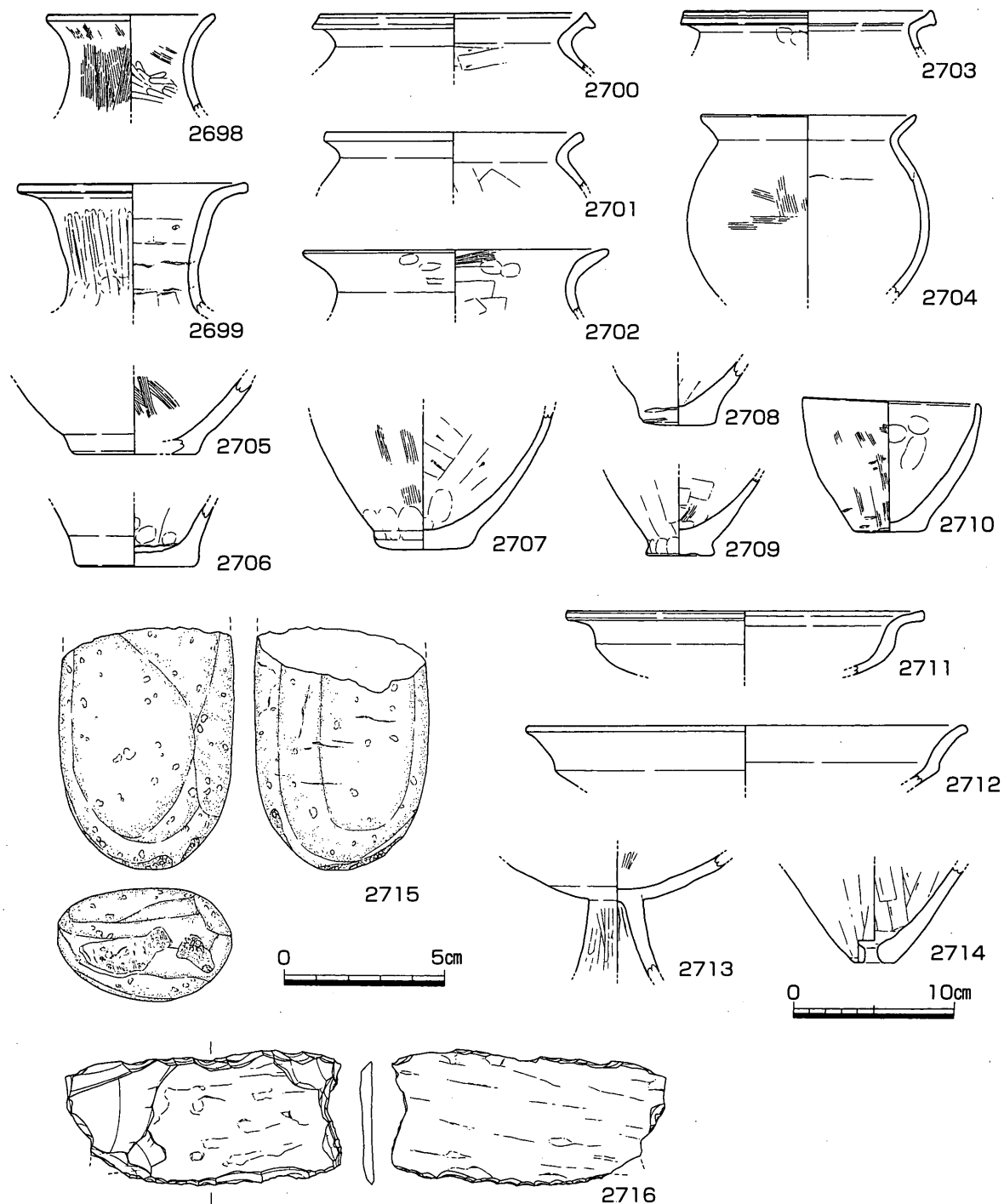
2715は敲石で、端部の敲打を行った痕跡は弱い。全体に研磨している。2716は結晶片岩製の打製石庖丁で、側縁部には抉りがある。

旧G6・8区包含層出土遺物（第517～519図）

2717～2754は包含層でも第1面に近い部分で出土したものである。2717・2718は壺である。2717の頸部は直立し、外面にはハケ目を施している。2718は細頸壺になると考えられる。2719～2729は甕である。2719は口縁部端部を上方に拡張する。2720は胎土に角閃石を含んでいる。2725の口縁部は外反し真横に開く。2726の体部内面には強い板ナデにより器壁が抉れている。2727は口縁部端部外面に刻み目を

施している。2728は体部外面を強くナデている。2730～2733は壺および甕の体部・底部である。2730は壺の体部で、外面に櫛描波状文と櫛描直線文を施している。2733は短い脚台が付いている。壺と考えられる。2734・2735は高杯である。2736～2740は鉢である。2736の口縁部は外反し、内面にハケ目を施している。体部は浅く、外面にヘラミガキを施している。2738は注ぎ口の部分である。2741は紡錘車である。

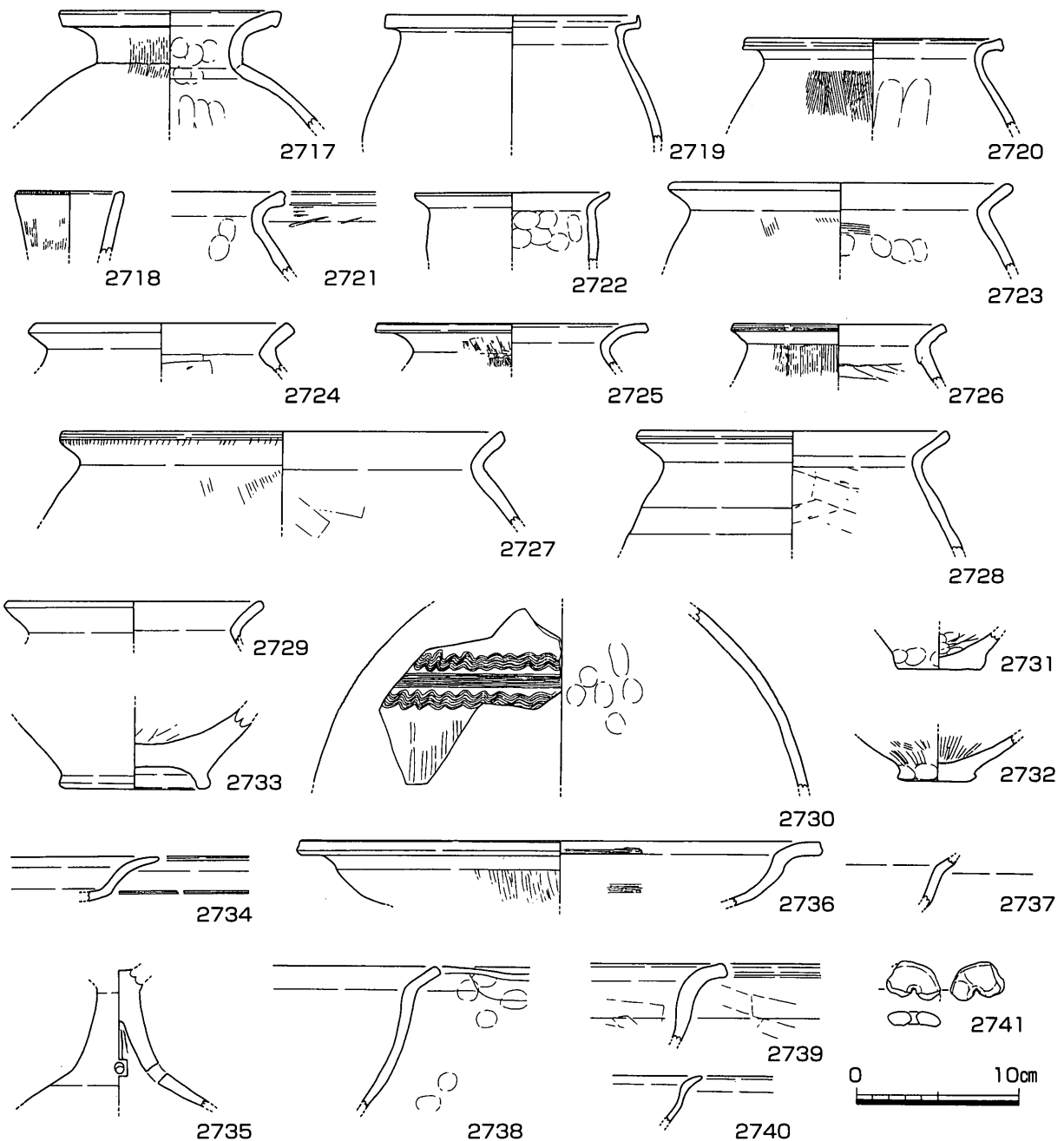
2742・2743は平基の石鏝、2744～2749は凹基の石鏝である。2744の基部は湾曲の度合いが強い。2746の鏝身は均整のとれた三角形である。2748・2749の基部は斜めで平基に近いが僅かに湾曲している。2750～2752は石鏝の未製品である。2753は楔形石器である。2754は敲石で、上下両端を使用しているが



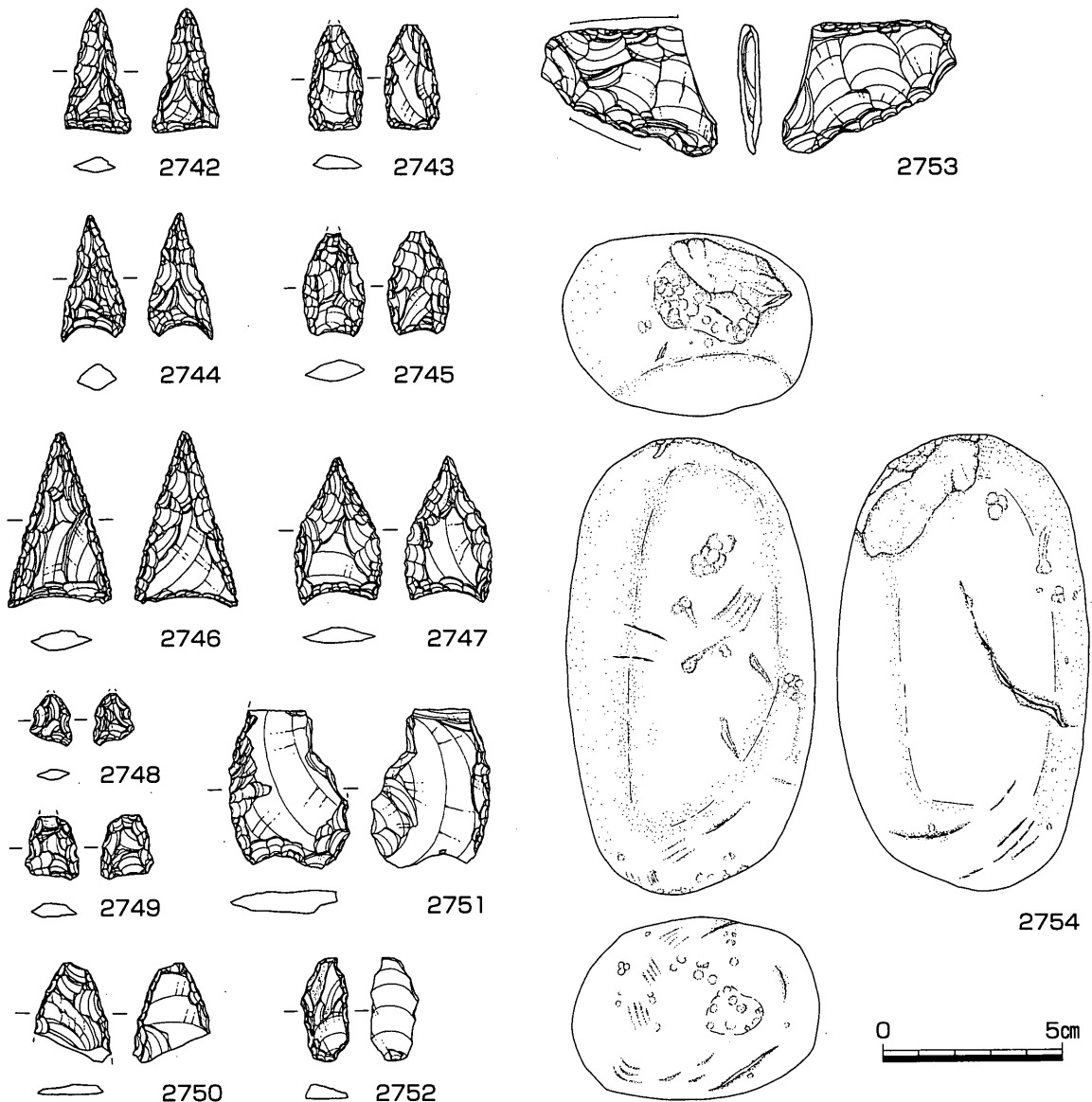
第516図 V区第2面包含層出土遺物(9)(旧G5区)(1/4、1/2)

敲打の度合いは少ない。被熱して赤変している部分がある。

2755~2766は第2面の直上で出土した遺物である。2755・2756は壺である。2756は頸部外面にハケ目の後にヘラミガキを施している。内面は粘土の接合痕があり、ハケ目と指押さえを行っている。2757は甕である。2758は甕と壺の中間形態である。口縁部端部を丸く収め、内面にはハケ目を施す。体部内面の上部には指ナデを行い、その下部にはヘラミガキを加えている。外面はハケ目を施している。2759は甕になるか鉢になるか不明である。如意形口縁で、体部外面にはヘラミガキを、内面にはヘラケズリを施している。2760・2761は鉢である。2761の口縁部は一度内傾した後に外反する。2762は石鏃、2763は石鏃の未製品である。2764は石錐である。2765は結晶片岩製の磨製扁平石斧である。刃部は両刃で表裏同じ位置から刃部を研ぎ出している。刃部とその上部には擦痕が顕著であるが、使用によるものとは方



第517図 V区第2面包含層出土遺物 (10) (旧G6・8区) (1/4)



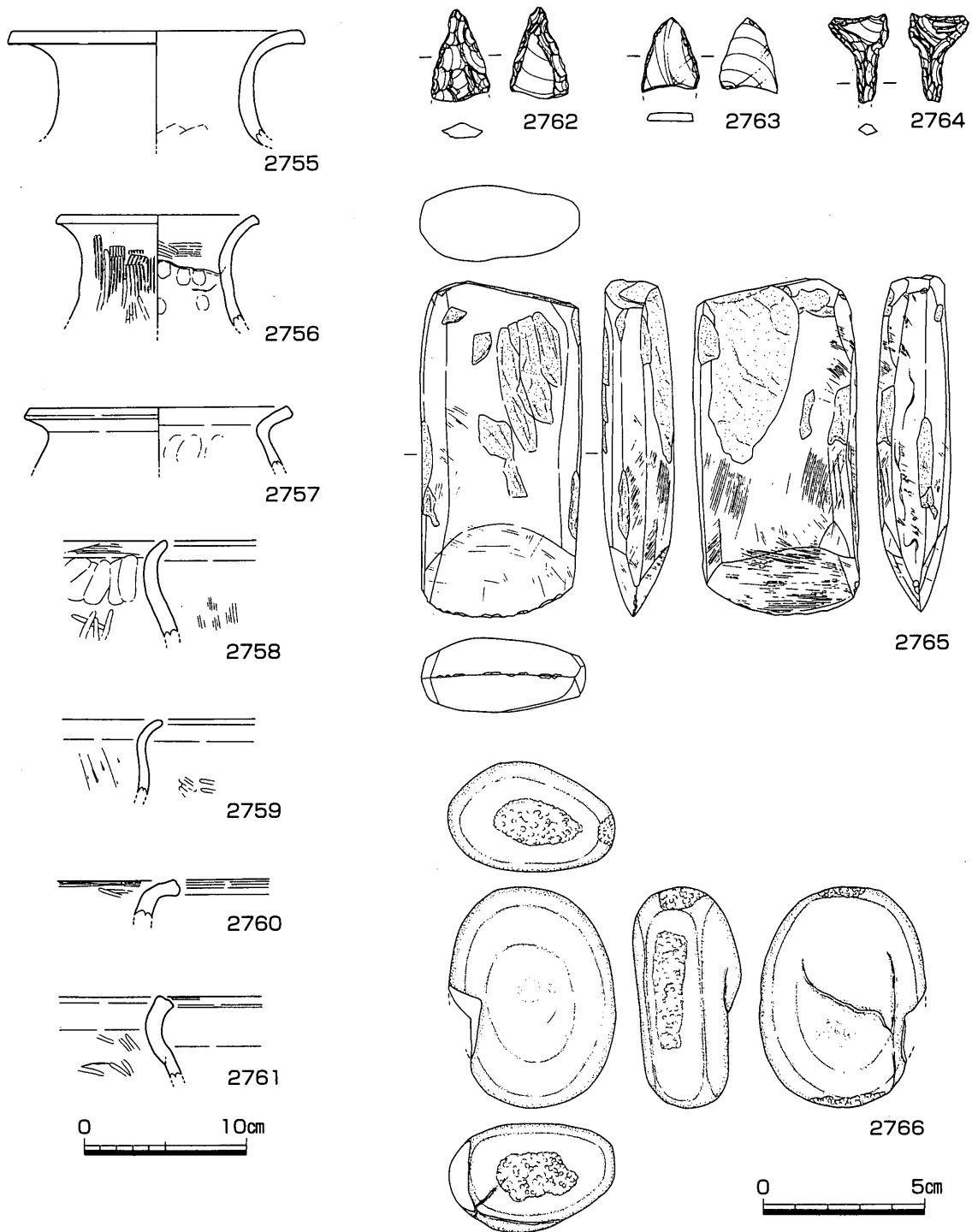
第518図 V区第2面包含層出土遺物 (11) (旧G 6・8区) (1 / 2)

向が異なる。基端部も研磨している。2766は敲石で、上下両端と一側縁部を敲打に使用している。部分的に赤変している。

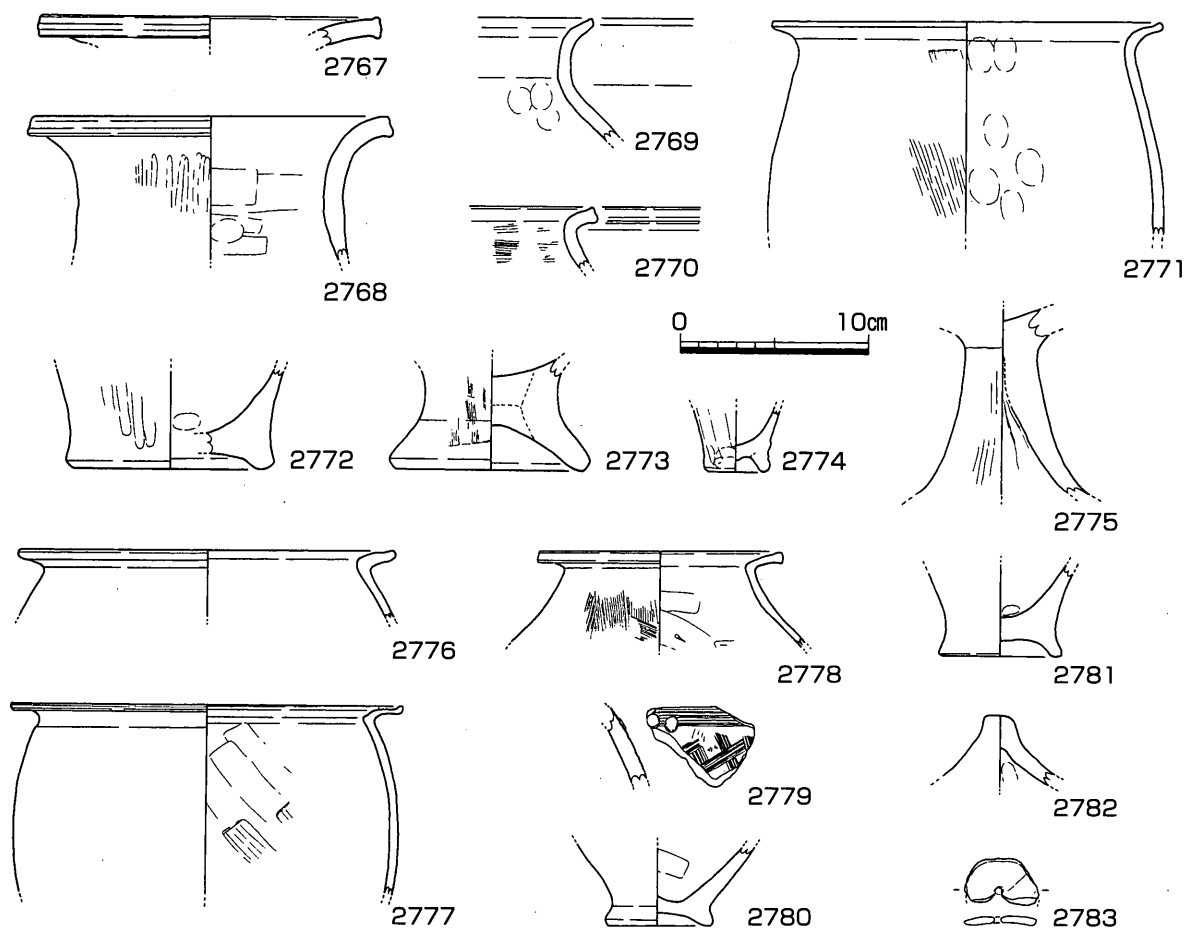
旧G 7区包含層出土遺物 (第520～521図)

2767～2775・2784～2786は第1面直下で出土した遺物である。2767～2769は壺である。2768の口縁部は直立する頸部から外反して開く。頸部外面にはヘラミガキを施す。2770・2771は甕である。2770は胎土に角閃石を含む。2771は如意形口縁で内面を強くナデている。体部外面にはハケ目を施し、胎土には結晶片岩を含んでいる。2772は甕の底部と考えられ、短い脚台が付いている。2774は鉢で外面に板ナデを施し、胎土には角閃石を含んでいる。2784は凸基の石鏃で、先端部は石錐とは異なる角度の浅い剥離によって鋭く仕上げている。2785は楔形石器である。2786は結晶片岩製の石棒と考えられるものである。残存部は丸く仕上げている。復元すれば直径5 cm程度になり、基部は叩いて整形している。身の部分を含めて研磨はされていない。

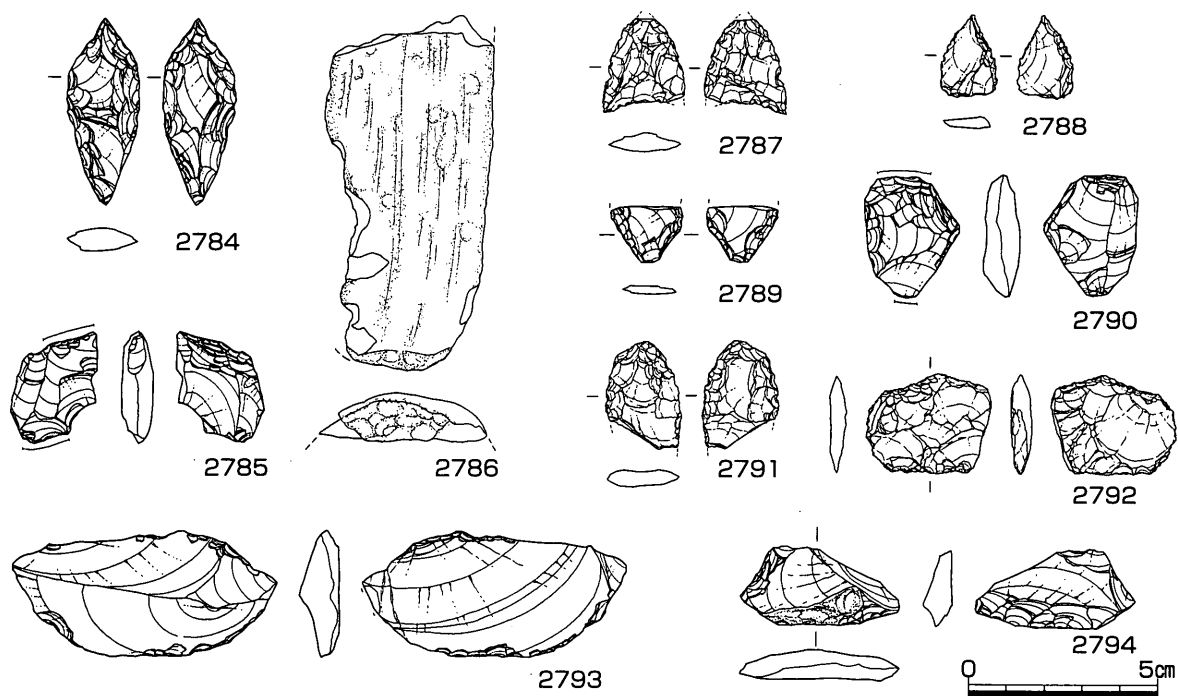
2776~2783・2787~2794は第2面の直上で出土した遺物である。2776~2778は甕である。2777の口縁部は真横に開き、端部を上方に拡張している。体部外面は摩滅しているが、内面はハケ目を施している。2787は凹基の石鏃、2789は凸基の石鏃である。2788は石鏃の未製品である。2790・2792は楔形石器であるが、2792には敲打痕が認められない。2793・2794はスクレイパーである。2793の刃部への調整は少ない。



第519図 V区第2面包含層出土遺物 (12) (旧G6・8区) (1/4、1/2)



第520图 V区第2面包含層出土遺物 (13) (旧G7区) (1/4)



第521图 V区第2面包含層出土遺物 (14) (旧G7区) (1/2)

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第五十四冊

成重遺跡Ⅱ

(第一分冊)

平成17年3月25日発行

編集 香川県埋蔵文化財センター
発行 香川県教育委員会
日本道路公団
印刷 (株)美巧社

四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第五十四冊

成 重 遺 跡 II

第 二 分 冊

2005年3月

香 川 県 教 育 委 員 会
日 本 道 路 公 団

四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第五十四冊

成 重 遺 跡 Ⅱ

第 二 分 冊

2005年3月

香 川 県 教 育 委 員 会
日 本 道 路 公 団

第3章 自然科学分析の成果

第1節 成重遺跡出土の赤色顔料

志賀智史・本田光子（別府大学）

1. はじめに

香川県大川郡白鳥町（現東かがわ市）成重遺跡出土の赤色顔料について調査する機会を得たので、その方法と結果を報告し、若干の考察を加えたい。

現在までの知見によれば、出土赤色顔料は酸化第二鉄（ Fe_2O_3 ）等を主成分とするベンガラと赤色の硫化水銀（ HgS ）を主成分とする朱の二種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四酸化三鉛（ Pb_3O_4 ）を主成分とする鉛丹がある。これら3種類の赤色顔料を念頭におき分析調査を実施した。

2. 試料

試料は、赤く見える土器2点（試料8、9）と赤く見える石器2点（試料10、11）の合計4点である。試料の所属時期は、全て弥生時代中期と考えられている。

3. 方法

①実体顕微鏡観察 6～40倍の倍率で直接に遺物を観察する。赤色物がある場合は、その付着状態と付着部位を調べる。また、光学顕微鏡および電子顕微鏡用の試料を作成するために針先に付く程度の赤色部分をサンプリングする。三者の赤色顔料はそれぞれ特徴を持った外観を有しているため、この実体顕微鏡による観察と次の生物顕微鏡による観察から、試料の材質や状態などについてはほぼ経験的に見極めがつく。なお、赤く見える土器試料については、土器破片をエポキシ樹脂に包埋し、断面観察用の試料を作成した。

②生物顕微鏡観察 50～400倍の倍率でサンプリングした赤色物ないしは断面試料を観察する。透過光および反射光で粒子の状態、形状、粒度等を精査する。断面試料の場合は赤色物を含む層自体や下地の状態を観察する。ベンガラは多くの場合粒子が $1\ \mu\text{m}$ 以下と非常に小さいので、粒子形態の把握には次の電子顕微鏡による観察が必須である。なお、粒子径が $1\ \mu\text{m}$ 以下の朱粒子の場合、光学顕微鏡観察でベンガラ粒子との区別を付けることは非常に難しい。

③電子顕微鏡観察 20～100000倍の倍率でサンプリングした赤色物を観察する。主としてベンガラ粒子の形状を観察する。この顕微鏡での観察は白黒での観察のみとなるので、確実に赤色部分を観察できるように、試料の作成と観察には十分な注意を行っている。

④蛍光X線分析 赤色物の主成分元素の検出を目的に、エネルギー分散型蛍光X線分析装置（堀場製作所製MESA500及び電子顕微鏡付属EDAX社製）を用い、試料を直接測定した。赤色の由来となる元素として、朱は水銀（ Hg ）が、ベンガラは鉄（ Fe ）が検出される。ただし、土壌や土器にはもともと元素としての鉄（ Fe ）が含まれているので、この方法で検出された元素の種類からだけで朱かベンガラかの判別を行うことは危険である。

以上の工程を適宜ふまえ、分析依頼を受けた赤色物が、考古学的に意味のある赤色物、すなわち赤色顔料であるか否かを判断した。

第2表 分析結果一覧表

試料 No.	遺物種類	出土位置	時期	顕微鏡観察		蛍光X線分析		赤色顔料の 種類	備考
				朱	ベンガラ	Hg	Fe		
1	弥生土器 高杯	集石3	弥生時代中期	×	○	×	○	ベンガラ	焼成前にスリッ プの塗布 遺物番号 Ⅲ296
2	弥生土器 甕	集石2、5付 近包含層	弥生時代中期	×	○	×	○	ベンガラ	焼成前にスリッ プの塗布 遺物番号 Ⅲ490
3	磨石	V区第2面 SH01	弥生時代中期	×	×	×	○	確認できない	石自体が赤い
4	磨石	V区第2面 SH01	弥生時代中期	×	×	×	○	確認できない	石自体が赤い

4. 結果と考察

分析結果を第1表に示す。

- ・ 試料1と2は、土器焼成前にスリッパを塗布したと考えられる。
- ・ 試料3と4には赤色顔料が認められなかった。

試料1、2について

試料1は脚部に透かしの入る高杯の脚部、試料2は甕の頸部である。実態顕微鏡下では、外面に部分的に赤色部分が認められる（写真2、7）。断面では、層状の赤色部分の中に透明・半透明鉱物が確認された（写真3、4、8、9）。したがって、土器焼成前に、赤くすることを目的として、スリッパを塗布し焼成したと判断される。ただし、焼成前にすでに赤かったのか、焼成によって赤くなったのかは不明である。

ベンガラとは厳密には、酸化第二鉄（ Fe_2O_3 ）を指し、試料1、2のような赤く発色したスリッパはベンガラではない。しかし、古代の人々にとっては、赤く発色させること自体が目的であり、原料の種類は問わないであろう。したがって、本例も広義の意味でベンガラと判断した。

試料3と4について（写真11～15）

実態顕微鏡による観察から、石器表面には層状や粉状の赤色顔料は認められず、部分的に石自体が赤い状況が観察された（写真12、13、15）。また、このような石を粉砕したとしても、薄いピンク色の粉となるのみであるため、赤色顔料の素材とも考えがたい。

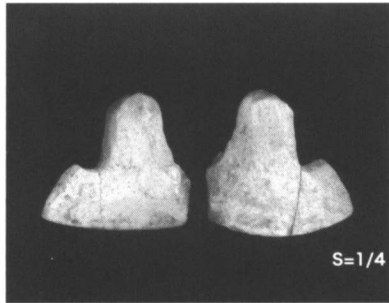


写真1 試料1

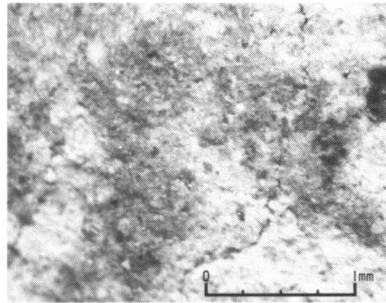


写真2 試料1 外面表面

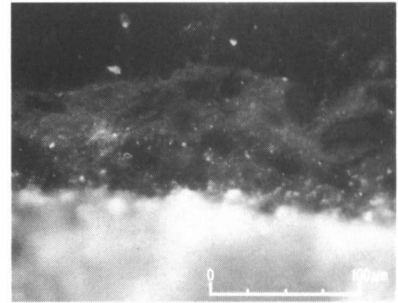


写真3 試料1 断面

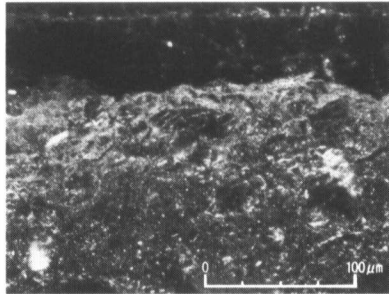


写真4 試料1 断面

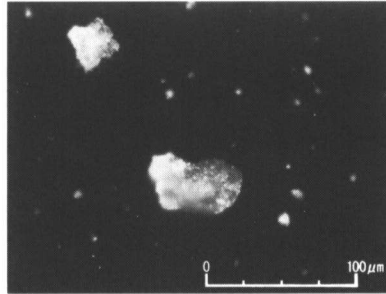


写真5 試料1 赤色顔料粒子(光学)

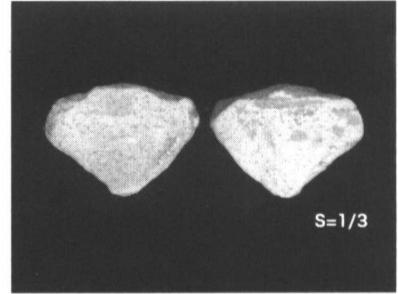


写真6 試料2

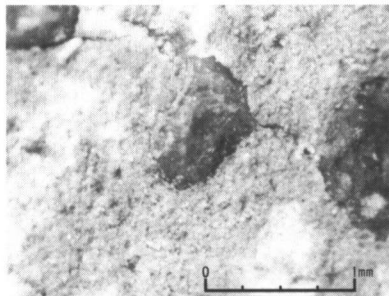


写真7 試料2 外面表面

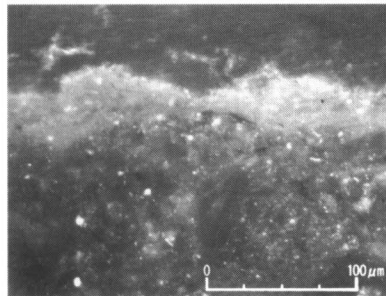


写真8 試料2 断面

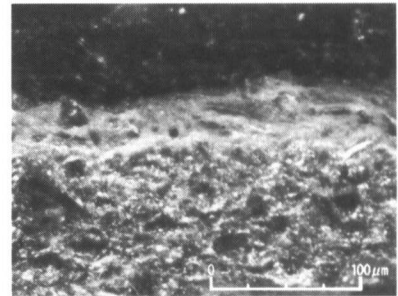


写真9 試料2 断面

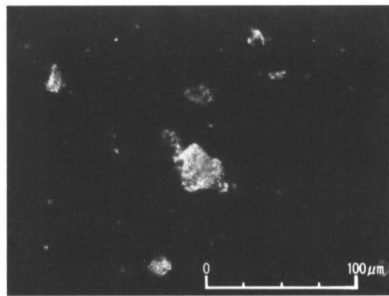


写真10 試料2 赤色顔料粒子(光学)

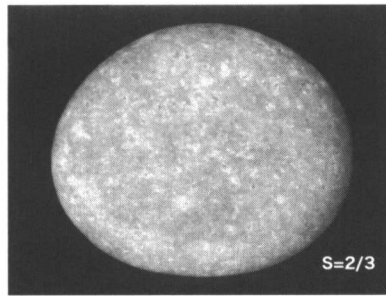


写真11 試料3

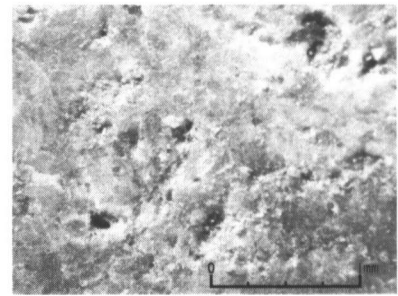


写真12 試料3 表面

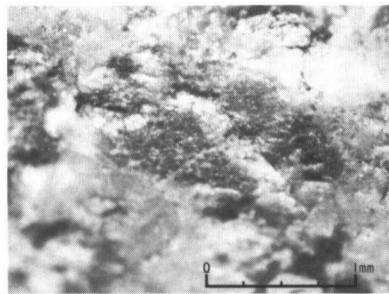


写真13 試料3 表面

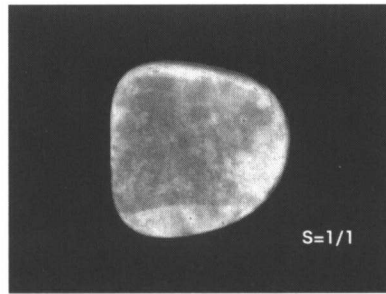


写真14 試料4

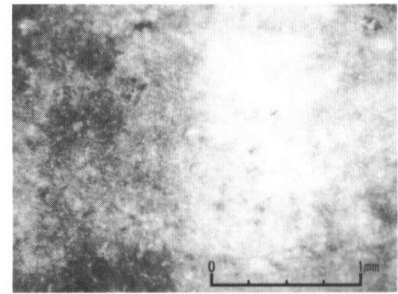


写真15 試料4 表面

第2節 成重遺跡の植物珪酸体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

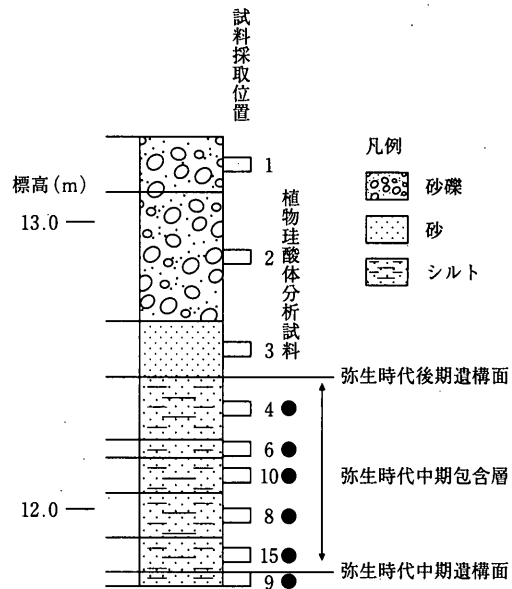
はじめに

成重遺跡は湊川により形成された沖積平野に立地する。これまでの発掘調査では、弥生時代中期～後期にかけての墳墓群や、弥生時代後期の竪穴住居跡群が検出されている。特に墳墓群には弥生時代中期の多種多様な墓制が確認されており、そのうち集石墓は後の積石塚古墳の成立を考える上でも重要な遺構と考えられている。このように本遺跡では、弥生時代中期以降の低地の土地利用状況に関する情報が蓄積されてきている。そこで、今回は今年度発掘調査が行われたV（旧G4）区における、弥生時代中期から後期にかけての土地利用状況、特に稲作の消長に関する情報を得ることを目的として、植物珪酸体分析を実施する。

1. 試料

調査対象は、湊川氾濫原の東方に位置するG4区南壁の堆積物である（第522図）。

調査区内では、上位から耕作土、洪水砂礫層（上面は近世とされる第1遺構面）、暗灰黄色シルト層（昨年の調査区では上面で古代・中世の遺構面）、砂・粘土互層、淡黄褐色粘質土層（上面は弥生時代後期とされる第2遺構面）、砂・粘土互層（弥生時代中期の遺物包含層）、灰黄色砂混じり粘質土層（上面は弥生時代中期とされる第3遺構面）が見られる。このうち、第3遺構面では前述の墓や集石遺構などが検出されている。



第522図 V区（旧G4区）南壁の分析層位

分析試料は各層から層位試料として1点ずつ採取され、その中から弥生時代中期の土層を中心に6点を選択した（第522図）。

2. 分析方法

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W, 250KHz, 1分間）、沈沈法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生や稲作について検討するために、植物珪酸体群集図を作成した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

3. 結果

結果を第3表、第523図に示す。各試料の検出個体は保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

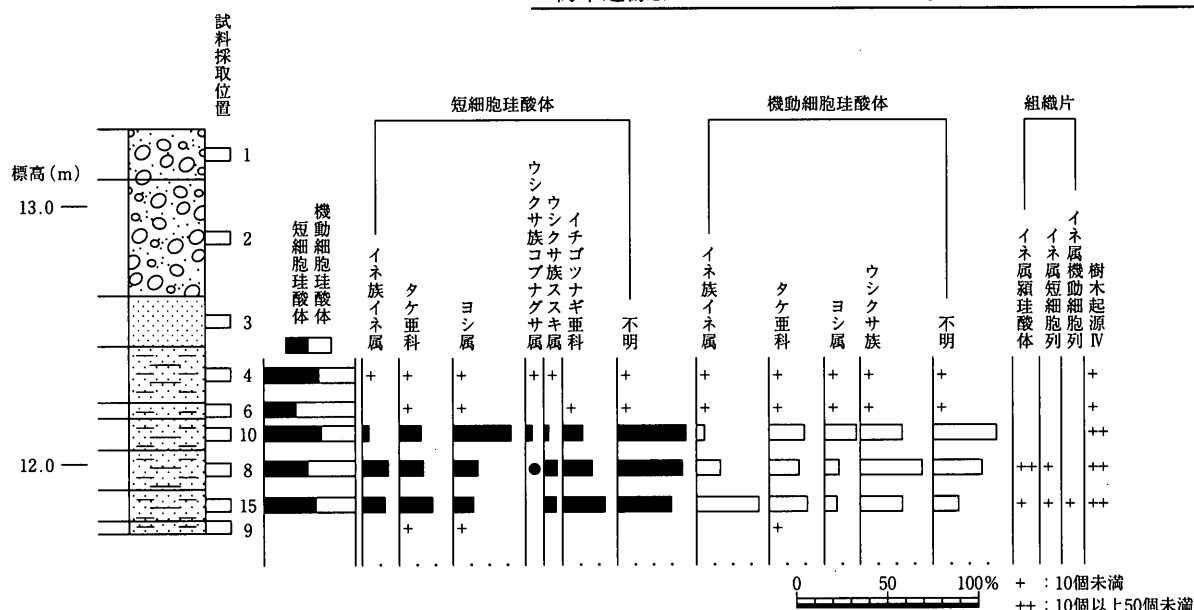
弥生時代中期遺構面の試料番号9では、植物珪酸体数が少ない。産出した種群はタケ亜科やヨシ属などである。栽培種のイネ属は認められない。

弥生時代中期遺物包含層では栽培植物のイネ属が層位的に連続して出現する。出現率は下部の試料番号15で高く、上位に向けて低率となる。この中には短細胞列として出現するもの、稲籾殻に形成される穎珪酸体なども認められる。イネ属以外では、タケ亜科やヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。このうち、ヨシ属が上位に向けて増加する。

試料番号6・4では検出個数が少なく、その中ではヨシ属やタケ亜科、ウシクサ族の産出が目立つ。また、イネ属やイチゴツナギ亜科なども認められる。

第3表 V (旧G4) 区南壁の植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	4	6	10	8	15	9
イネ科葉部短細胞珪酸体							
イネ族イネ属		1	-	6	35	25	-
タケ亜科		6	6	26	32	39	1
ヨシ属		18	13	68	31	23	1
ウシクサ族コブナグサ属		1	-	2	1	-	-
ウシクサ族ススキ属		2	-	5	18	12	-
イチゴツナギ亜科		-	3	23	39	49	-
不明キビ型		10	7	27	47	21	-
不明ヒゲシバ型		19	9	37	29	23	-
不明ダンチク型		6	5	17	13	19	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体							
イネ族イネ属		1	2	5	35	56	-
タケ亜科		9	8	24	42	34	2
ヨシ属		8	15	22	22	12	-
ウシクサ族		10	23	29	90	37	-
不明		12	31	43	71	23	-
合計							
イネ科葉部短細胞珪酸体		63	43	211	245	211	2
イネ科葉身機動細胞珪酸体		40	79	123	260	162	2
総計		103	122	334	505	373	4
組織片							
イネ属穎珪酸体		-	-	-	13	7	-
イネ属短細胞列		-	-	-	2	3	-
イネ属機動細胞列		-	-	-	-	1	-
その他							
樹木起源IV		8	2	11	22	16	2



第523図 V区 (旧G4区) 南壁の植物珪酸体群集と組織片の産状

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満の種類、+はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の試料で検出された種類を示す。また、組織片の産状を検出個数により+、++、+++の記号で示す。

なお、試料番号15以浅の試料では樹木起源珪酸体の第IVグループ（近藤・ピアスン, 1981）も連続して検出される。第IVグループは網目状の棟を持ち、紡錘形を呈する。ブナ科シイ属、ツツジ科、モクレン科などの葉部に形成される。

4. 考察

今回の調査区は現在の湊川氾濫原に隣接する場所にあり、V（旧G4）区東壁断面で認められた堆積物も層相から河川の氾濫や洪水に由来する堆積物と推定される。

弥生時代中期の遺構が確認された灰黄色砂混じり粘質土層は、植物珪酸体の保存状態が悪く、タケ亜科・ヨシ属がわずかに検出されただけである。本層の成因は不明であるが、立地環境および層相を考慮すれば河川氾濫時の溢流堆積物の可能性がある。また、遺構が確認されていることから、本層堆積後に人間が進出できるような土地条件になったことが窺える。これらのことを考慮すると、植物珪酸体が少なかった原因としては、堆積後の経年変化の過程で風化作用の影響を受け、分解消失している可能性が考えられる。なお、検出されたヨシ属やタケ亜科などは集水域周辺に分布していた植物とみられる。

弥生時代中期の遺物を包含する堆積層は砂と粘土が互層からなる。これらの堆積層からは栽培種のイネ属由来の植物珪酸体が検出された。層位的には第3遺構面を覆う堆積物で高率に出現し、上位に向けて減少した。第3遺構面を覆う堆積物の機動細胞珪酸体の出現率は約35%であった。この値は、イナワラ堆肥連用（8年間：500kg/10a/年）の現水田耕作土における、イネ属機動細胞珪酸体の出現率が16%を示した調査例（近藤, 1988）と比較しても、かなり高い値となっていることがわかる。また、本層準からは籾殻や葉部に形成される植物珪酸体も検出されている。したがって、第3遺構面を覆う堆積物には栽培種のイネ属植物体が混入していることが指摘でき、本層堆積後に稲作が行われていたことが推定される。ただし、本層の成因が河川の氾濫時の一過性の堆積物であるとすれば、稲作耕土が削剥され、本地点に堆積している可能性もある。いずれにしても、本層堆積時には調査区近辺で稲作が行われていたことが推定される。

本層の上位層準ではイネ属が減少し、逆に湿潤な場所に生育するヨシ属が増加する。このような層位的変化は、調査地点の土地利用状況の変化を示している可能性がある。すなわち、稲作地であった場所が何らかの影響を受け、ヨシ属が繁茂する湿地へと変化したことを示唆している可能性がある。また、弥生時代中期遺物包含層上部では植物珪酸体の保存状態が悪かったため、このような湿地の景観が継続していたかは不明である。ただし、栽培種のイネ属が検出されていることからみて、当時の調査地点周辺で稲作が行われていた可能性がある。

ところで、香川県内では、縄文時代晩期後半に稲作が開始され、丸亀平野では扇状地を開析した旧河道や埋没旧河道に稲作地の痕跡が残存する可能性が指摘されている（外山, 1993）。また、香川県大川郡の鴨部川田遺跡周辺では弥生時代前期にヒョウタン類やキュウリ属が栽培されていた可能性が指摘されている（パリノ・サーヴェイ株式会社, 未公表資料）。本遺跡が位置する湊川流域では、今回の結果から少なくとも弥生時代中期段階に稲作が行われていたことが推定される。このような調査成果は、本地域における稲作の定着課程を検討する上で重要であり、今後、当該期の堆積層について調査して資料を蓄積することで検討していきたい課題である。

なお、各層の堆積期を通じて、調査区周辺にはタケ亜科、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などのイネ科草本類が生育していたことがうかがえる。また、試料番号15以浅の試料では樹木起源珪酸体の第IV

グループが連続して検出された。第IVグループは網目状の棟を持ち、紡錘形を呈する形質を持ち、ブナ科、ツツジ科、モクレン科などの葉部に形成される。前述の鴨部川田遺跡での花粉分析結果によれば、弥生時代前期～中期には暖温帯の気候下に属しており、カシ類を中心とする常緑広葉樹林が存在していた可能性がある。本遺跡で検出された樹木起源珪酸体もこれらの樹木に由来する可能性があるが、花粉分析や種実分析により検討することが望まれる。

以上、植物珪酸体の産状に基づいて、調査地点の土地利用状況等について検討した。今後、調査区内の堆積物の成因および、それに基づく地形発達過程を明らかにすることで、今回の成果の再評価を行い、本地域の土地利用状況に関する詳細な検討を行っていきたい。

引用文献

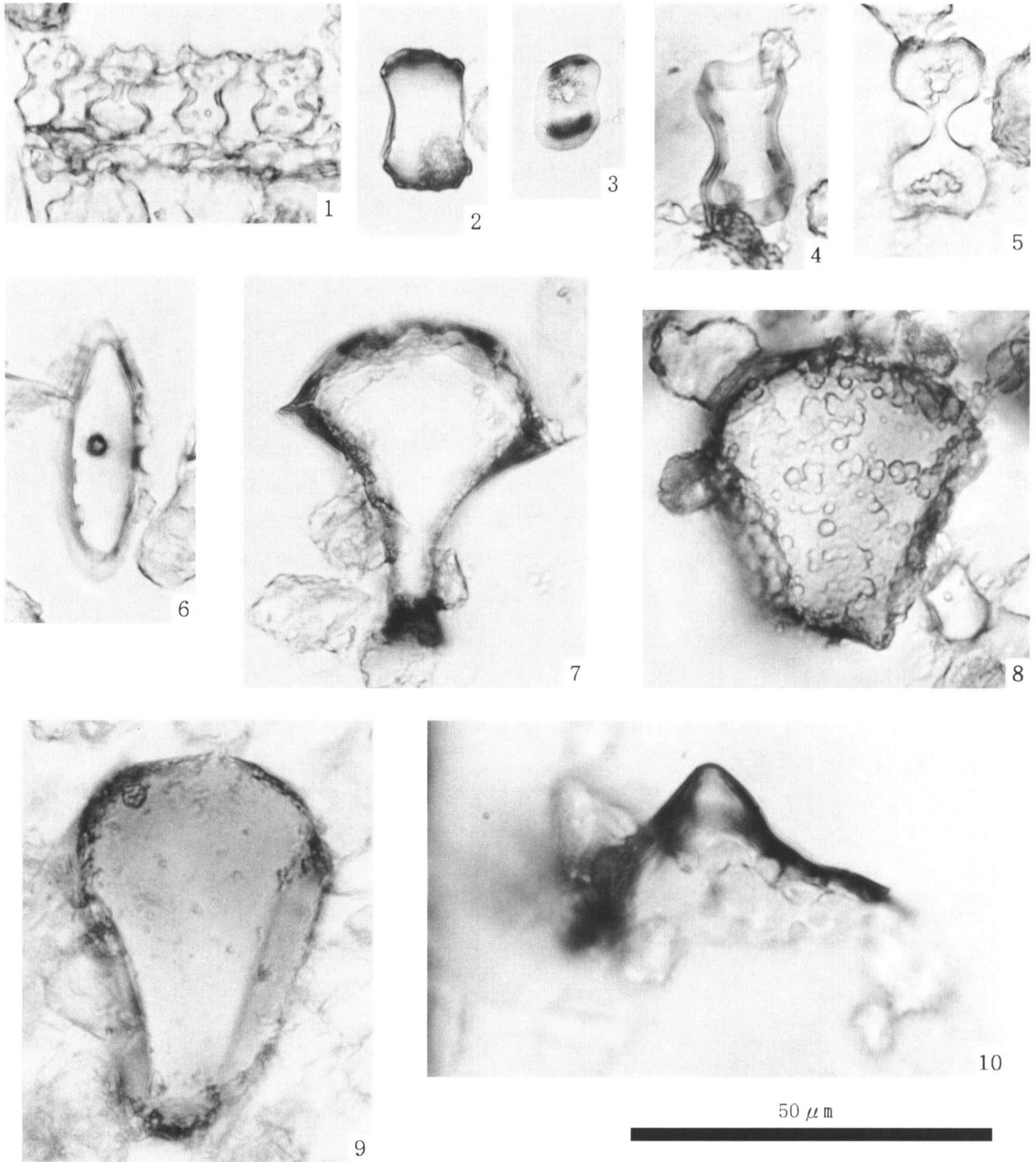
近藤錬三・ピアスン友子（1981）樹木葉のケイ酸体に関する研究（第2報） 双子葉被子植物

樹木葉の植物ケイ酸体について. 帯広畜産大学研究報告, 12, p.217-229.

近藤錬三・佐瀬 隆（1986）植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, p.31-64.

外山秀一（1993）丸亀平野における遺跡の立地と環境-その1 植物化石による環境の復原-.

「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第十二冊 郡家一里屋遺跡」, p.247-256.



1. イネ属短細胞列 (V(旧G4)区南壁;8)
 2. タケ亜科短細胞珪酸体 (V(旧G4)区南壁;15)
 3. ヨシ属短細胞珪酸体 (V(旧G4)区南壁;15)
 4. コブナグサ属短細胞珪酸体 (V(旧G4)区南壁;10)
 5. ススキ属短細胞珪酸体 (V(旧G4)区南壁;8)
 6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (V(旧G4)区南壁;15)
 7. イネ属機動細胞珪酸体 (V(旧G4)区南壁;8)
 8. タケ亜科機動細胞珪酸体 (V(旧G4)区南壁;15)
 9. ウシクサ属機動細胞珪酸体 (V(旧G4)区南壁;15) 10. イネ属穎珪酸体 (V(旧G4)区南壁;8)

第524図 植物珪酸体

第4章 まとめ

第1節 Ⅲ区～Ⅴ区の遺構変遷（第525～526図）

古墳時代～近世の時代ごとの遺構変遷については『成重遺跡Ⅰ』で報告している。本書ではⅢ区～Ⅴ区の弥生時代について報告しており、ここではその弥生時代の中での遺構変遷について報告する。

弥生時代前期～中期初頭

確実に前期まで遡る遺構はない。しかし逆L字口縁や如意形口縁の甕が遺構に混入して出土したり、包含層から出土している。いずれも細片で量的には少ない。体部外面には櫛描直線文が施されているものもあり、中期初頭のものもある。しかし成重遺跡の東部にあたるⅡ区では中期初頭から前葉には竪穴住居（Ⅱ区SH06）は営まれることから、Ⅲ区～Ⅴ区でも集落形成の胎動が見受けられる。

弥生時代中期中葉（古）

集落が形成される時期である。凹線文の出現期であるが、まだ凹線文の頻度は低く、如意形口縁の甕が残っている段階である。

まず中期中葉までには埋没しているⅣ区・Ⅴ区の境部分のSD01がある。SDとして報告したが、実際は自然河川に近いものである。この部分はSD01が埋没後も低地部分となり、その上面に遺構が形成されることは少ない。

そしてⅤ区SH05・06がⅢ区～Ⅴ区で最初に営まれる。湊川の形成する自然堤防上の高い場所とその縁辺部に位置しており、まずは無難な選地から始めている。特にⅤ区SH05は住居床面の中央土坑の両端に柱穴を配する「松菊里型住居」である。さらにⅤ区集石33とⅤ区SX12が形成される。Ⅴ区集石33は壺を中心に凹線文が認められるが、甕にはまだ凹線文は施されず、一部には如意形口縁のものが含まれている段階である。竪穴住居の形成の後を追うように集石遺構が築かれ始めると言う点は注目される。さらにⅤ区SX11は井戸状の遺構であるが、廃絶時に火を使用し最後に上に礫を敷いているものである。

この時期の遺構はすべてⅤ区の西側部分の自然堤防上の微高地部分にあり、Ⅲ区・Ⅳ区では検出されていない。

弥生時代中期中葉

前段階では遺構はⅤ区に限られていたのが、Ⅲ区～Ⅴ区の全体に広がる時期である。

竪穴住居がⅣ区の南東部、Ⅴ区の南側を中心に多数築かれ、集落が盛行する。具体的にはⅣ区SH01～05、Ⅴ区SH01～04・07～10がある。Ⅳ区の南東部に新たに竪穴住居が築かれるが、地形的にもⅢ区とⅣ区の間で舌状の延びる微高地部分に位置している。この南側部分は調査を行っていないが、おそらく竪穴住居を中心とした居住域が展開しているものと考えられる。さらにⅣ区西端の低地部分の縁辺部にもⅣ区SH03～05が短い期間で同じような位置に建てている。しかしこの3棟は床面の構造が簡単で、遺物も少ないことから本格的に居住していたという感じは受けられない。またⅤ区SH01・02のように石器を製作している竪穴住居もある。Ⅴ区には前段階の自然堤防上部分から、Ⅳ区・Ⅴ区境の低地部分に至るまでの微高地縁辺部の緩斜面部にも竪穴住居が築かれる。居住域は前段階に点的に居住を開始した部分を踏襲しながら広がっている。これら竪穴住居の多くは同じ位置で建て替えを行ったり、近辺に

調査区	遺構名	梁間×桁行	主軸方位	建物面積(m ²)	時 期	備 考
V	SB01	1間×6間	N-51° - E	35.3	弥生時代中期中葉	
V	SB02	1間×5間	N-50° - E	29.9	弥生時代中期中葉	
V	SB03	2間×5間	N-56° - E	29.8	弥生時代中期中葉	
V	SB04	1間×3間	N-56° - E	14.7	弥生時代中期中葉	
V	SB05	1間×2間	N-30° - W	10.2	弥生時代中期中葉	
V	SB06	1間×1間	N-6° - E	9.8(14.7)	弥生時代中期中葉	N-80° - Wの場合有り
V	SB07	1間×2間以上	N-43° - W	(13.5以上)	弥生時代中期中葉	棟持柱有り
V	SB08	2間×7間	N-40° - E	31.2	弥生時代中期中葉	棟持柱有り
V	SB09	1間×5間以上	N-67° - W	(22.0以上)	弥生時代中期中葉	棟持柱有り
V	SB10	1間以上×3間	N-85° - W	不明	弥生時代後期	

第4表 掘立柱建物跡一覧表

建て直したりしている。

竪穴住居に加えてV区では9棟の掘立柱建物が確認されている。いずれも竪穴住居に隣接する部分に建てられている。いずれも梁間1間が基本となっている。桁行が5間を超えるものが5棟あり、なかにはSB01やSB08のように建物面積が30m²を超えるものもある。さらにSB07~09のように棟持柱をもつものが3棟あるのが注目される。

これらの居住域の周辺に、Ⅲ区~V区にかけて点的に木棺墓・土壙墓・土器棺墓が築かれている。土器棺墓以外は単独ではなく群を形成している。特にV区の北側部分では7基の土壙墓が検出されたが、その大部分は主軸をN-50° - E前後の方位に向けていることから、その造墓に際して一定の原理が働いていたことが分かる。この土壙墓群はその北側一帯に続いて行くと考えられる。

またV区SK19やSX09のような火を使用した痕跡のある大形の遺構がある。何のために火を使用したかは不明であるが、特異な遺構もある。

そして居住・墳墓遺構と時を同じくして、これらの遺構を避けるように集石遺構が築かれて行く。Ⅲ区に集石1・2の2基、Ⅳ区に集石6・19~25の8基、V区に集石18・27・29・31・32・35・36の7基の合計17基が築かれている。Ⅲ区では調査区が狭いためかもしれないが、2基が点在している。Ⅳ区では集石19~25さらにその延長方向で集石6が北東-南西方向に帯状に分布している。しかし集石1の構築以前にⅢ区ST01・02が、集石2の構築以前にⅢ区ST03が、集石32の構築以前にV区ST04・05がそれぞれ築かれていることから、先述した墳墓群の後に集石群が形成されていることになる。だがこの集石群を壊している遺構は、先ほどのV区周溝墓SX02以外はない。Ⅳ区SH03~05も接するように築かれているが、集石群とは重なっていない。これら集石群は他の遺構の無い部分に築かれているようだ。竪穴住居や掘立柱建物などの遺構と集石遺構の前後関係、あるいは同時併存の確証はないが、集石遺構を避けるように竪穴住居や掘立柱建物などの遺構が築かれたとも言えよう。このことは居住域と集石遺構の構築域との分離という考えがあったのではなかろうか。さらに集石群の東側の部分とⅣ区SH01・02との間は、遺構の空白部分がある。この部分は微高地の先端部で遺構が築かれても良い場所である。しかし全く遺構がないということは、遺構を築かない場所として意識されていた広場のような場所と考えられる。

弥生時代中期中葉 (新)

Ⅲ区とV区の中央部分に方形周溝墓が築かれる。V区では竪穴住居群が廃絶した後に方形周溝墓が築かれており、中には周溝墓SX02のように集石18の上に重なるように築かれたものもある。遺構では前

後関係が認められるが、出土遺物は同じ中期中葉のものである。V区の周溝墓は、SX01以外は周溝を共有するタイプのもので同時期と言える。Ⅲ区ではSX01とSX02の2基の方形周溝墓が築かれている。この2基はSX01→SX02というように前後関係をもつが、前段階の周溝墓の墳丘を利用していることや、前段階の主体部の直上に標石を置くなど緊密な関係があると考えられる。周溝から出土した甕も口縁部が発達気味で、凹線文が巡るなど中期中葉でも新しい要素が見られる。

前段階に一気に構築された集石遺構は、先述した集石18以外は基本的に継続していると考えられる。集石32は中期中葉であるが、同じく中期中葉のSB07の廃絶後に築かれている。

同じ中期中葉でも明確な居住遺構が廃絶し、方形周溝墓と集石遺構が中心になる時期である。

弥生時代中期後葉

凹線文が盛行するこの時期の遺構は基本的には認められず、遺物が包含層などから少量出土するにとどまる。

弥生時代後期前葉

明瞭な遺構はないが、V区SD10や集石28・34などの遺構に混入する形で遺物が認められるが、量は少ない。

弥生時代後期中葉

再び遺構の量が増加する時期である。出土土器にはまだ長頸壺が残る段階である。竪穴住居はV区SH11～13があるが、散在している。V区SH12・13は中央土坑を持たない簡易な作りで、一定期間集落を営むというより、短期間の何か目的をもった住居を造営している感を受ける。またSH13以前の後期段階にV区SB10があるが不明な点が多い。

V区の東側には南北方向で遺物が多量に出土したSD10がある。住居跡の少なさの割には遺物は多い。

V区の南側の中央付近に土坑SK34が築かれている。この周囲にも土坑SK26～36が築かれているが、大部分は弥生時代中期中葉の竪穴住居や方形周溝墓の埋没後のものである。遺物は細片のみであるが、SK34と同じ弥生時代後期中葉の可能性が高い。

Ⅳ区中央部分とV区の南東部分、V区の北側から西側の縁辺部にかけて集石遺構が再び築かれる。特にⅣ区中央部分の集石7・8・10・11・12は北東－南西方向に帯状に分布している。これは丁度、弥生時代中期中葉のⅣ区集石19～25と同じ方向になる。そしてこの集石19～25と集石6の間を埋めるように構築されている。さらに後期中葉に築かれたV区南東部の集石15～17・26も北東－南西方向で、弥生時代中期中葉のⅣ区集石19～25の南西方向の延長に位置している。集石遺構の配置には何か強い法則のようなものがあるように思える。また調査区の関係かもしれないが、Ⅳ区北東部に大型の集石4が単独で築かれている。V区の北側から西側の縁辺部でも集石28・30・34・37が築かれている。

弥生時代後期後葉

Ⅳ区の北側に竪穴住居SH06が築かれる。居住遺構はこの1棟のみである。この竪穴住居は床面に大形の土坑があり、その周りを柱が巡り居住空間が極めて少ないものである。火を広範囲に数回も繰り返して使用するなど、何か居住以外の目的を持って建てられた可能性があるものである。

Ⅳ区の北側には2基の方形周溝墓SX01・02が造営される。周溝墓SX01は主体部の埋土に炭化物と焼土を伴っていた。主体部そのものが焼けている訳ではなく、その場で火葬したとは考えられない。しかし埋葬に至る過程で、火の使用が想定出来るものである。先述したⅣ区SH06が僅か8mの距離で隣接していることは示唆的である。

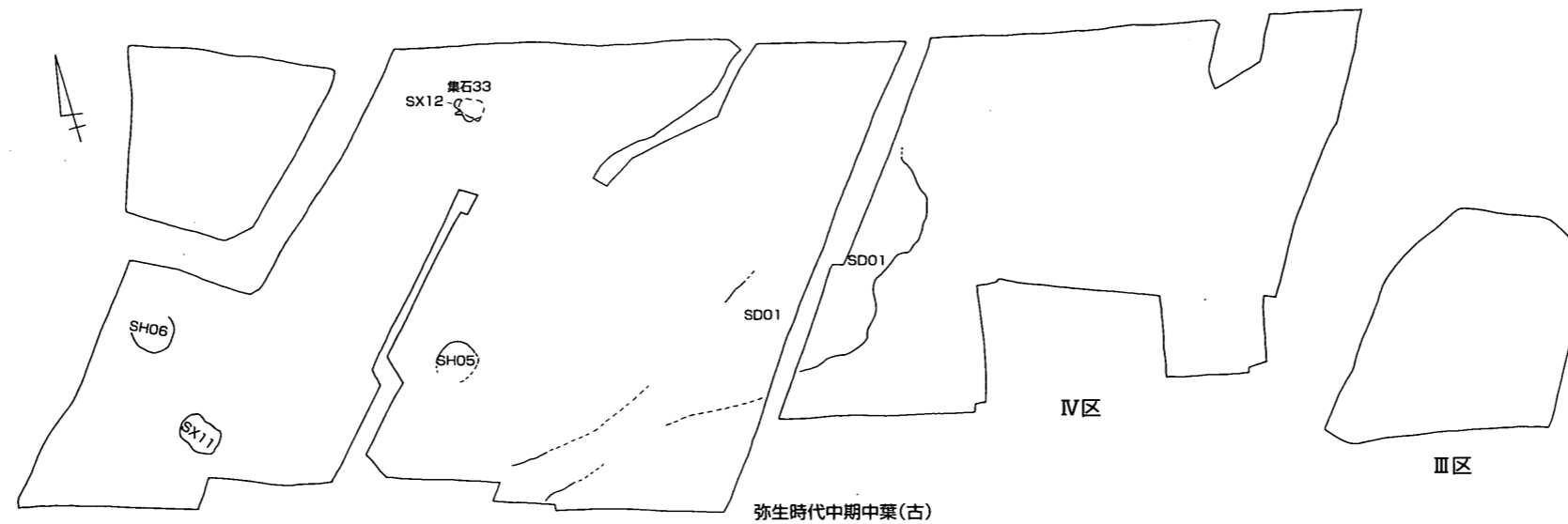
この方形周溝墓の周囲には長方形の土坑が取り巻くように分布している。中にはⅣ区SK07・08のように木棺墓と考えてもよいものも含まれている。いずれも遺物は皆無か微細なものが少量出土したにとどまる。僅かに出土した遺物は弥生時代中期のものが多いが、これは埋め戻したときの混入の可能性が高い。従って方形周溝墓の周囲に分布する土坑群は検出面や埋土の状況などを加味して、方形周溝墓と同じ弥生時代後期後葉の可能性が高いと考えられる。

集石遺構は後期後半になって新たにⅢ区集石3・5、Ⅳ区集石9・13が築かれる。後期中葉に築かれた集石遺構は後葉になっても継続するものが多く、また当然のことながら後期中葉の遺物しか含まないものでも、後期後葉段階でも壊されることなく残っていたと考えられる。Ⅲ区に新たに築かれた以外は後期中葉の位置を踏襲している。

この時期をもって成重遺跡のⅢ区～Ⅴ区の部分は急速に衰退してゆく。また後期後葉には集落の中心は東側のⅠ区・Ⅱ区に移っている。

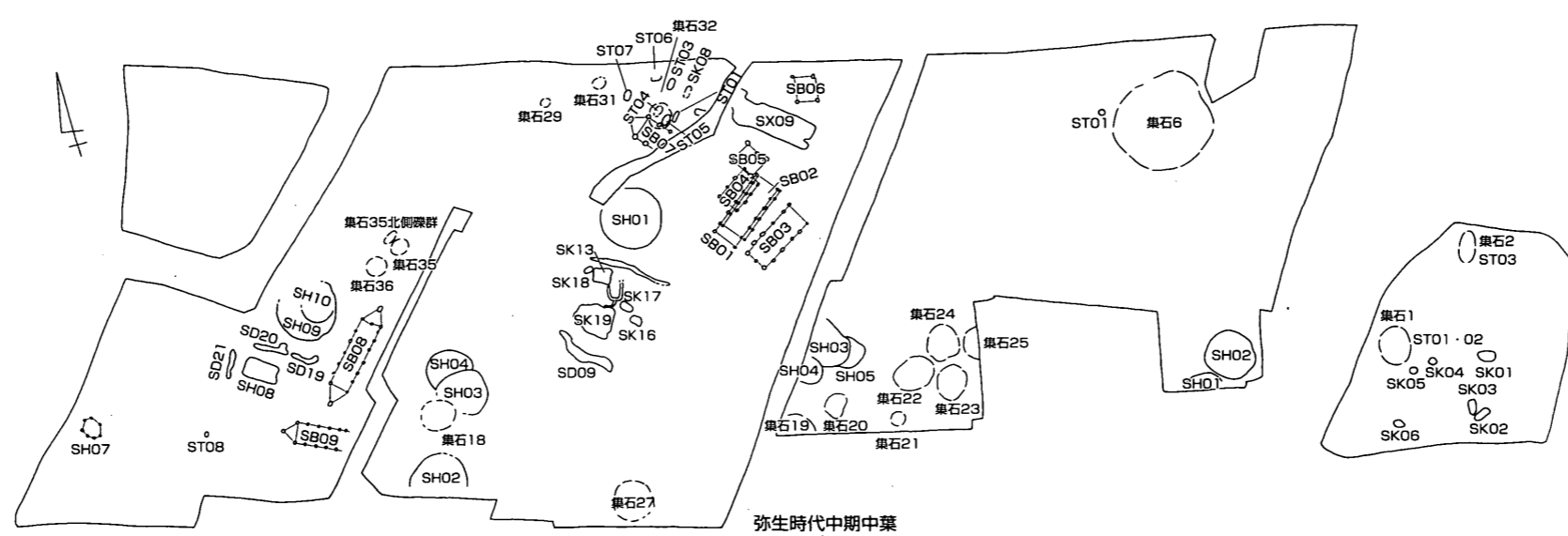
Ⅲ区～Ⅴ区にかけて次に遺構が認められるのは古墳時代中期初頭になる。古墳時代以降の遺構の変遷は最初に述べたように『成重遺跡Ⅰ』で報告している。

*中期中葉は畿内第3様式(新)段階に相当するものとして表記している。中期中葉(古)と中期中葉(新)は同じ中期中葉の中での土器群の傾向や遺構の前後関係により便宜的に分けているものである。なお、『成重遺跡Ⅰ』のⅠ区・Ⅱ区の成果における弥生時代中期後半は、凹線文A種の出現をもって弥生時代Ⅳ期という考えで表現しているため、表記に若干の齟齬がある。本書では凹線文A種の出現段階は旧来通りの中期中葉と表記している。

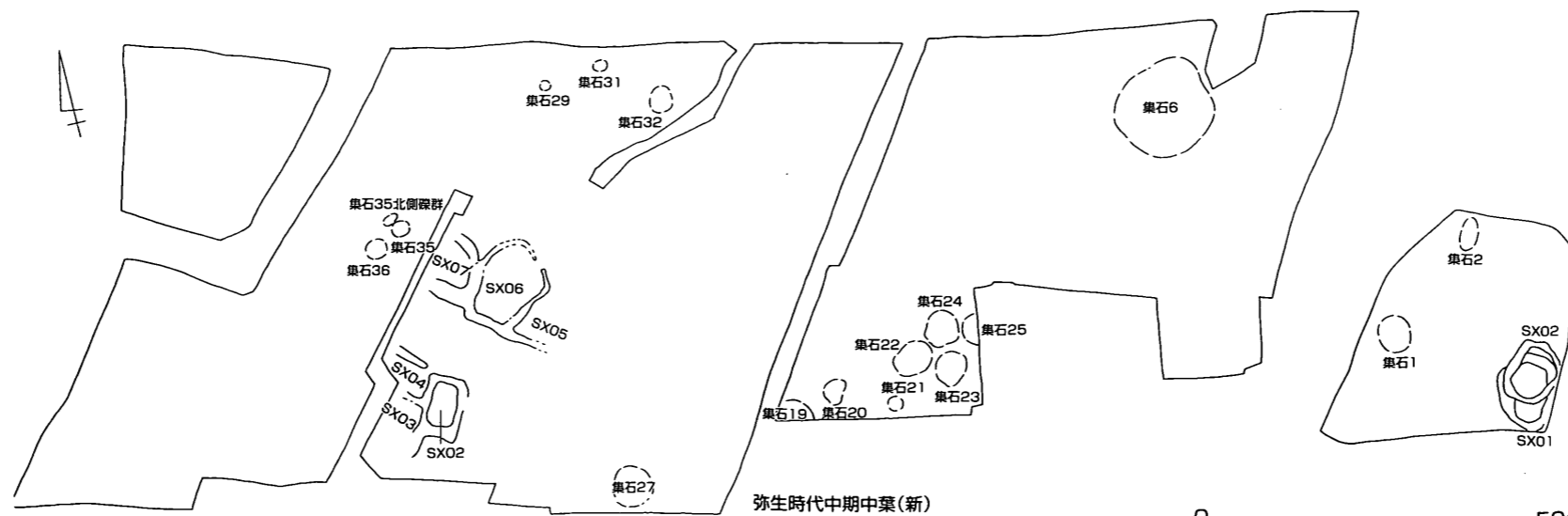


弥生時代中期中葉(古)

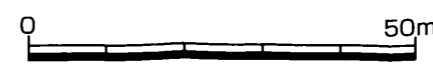
V区



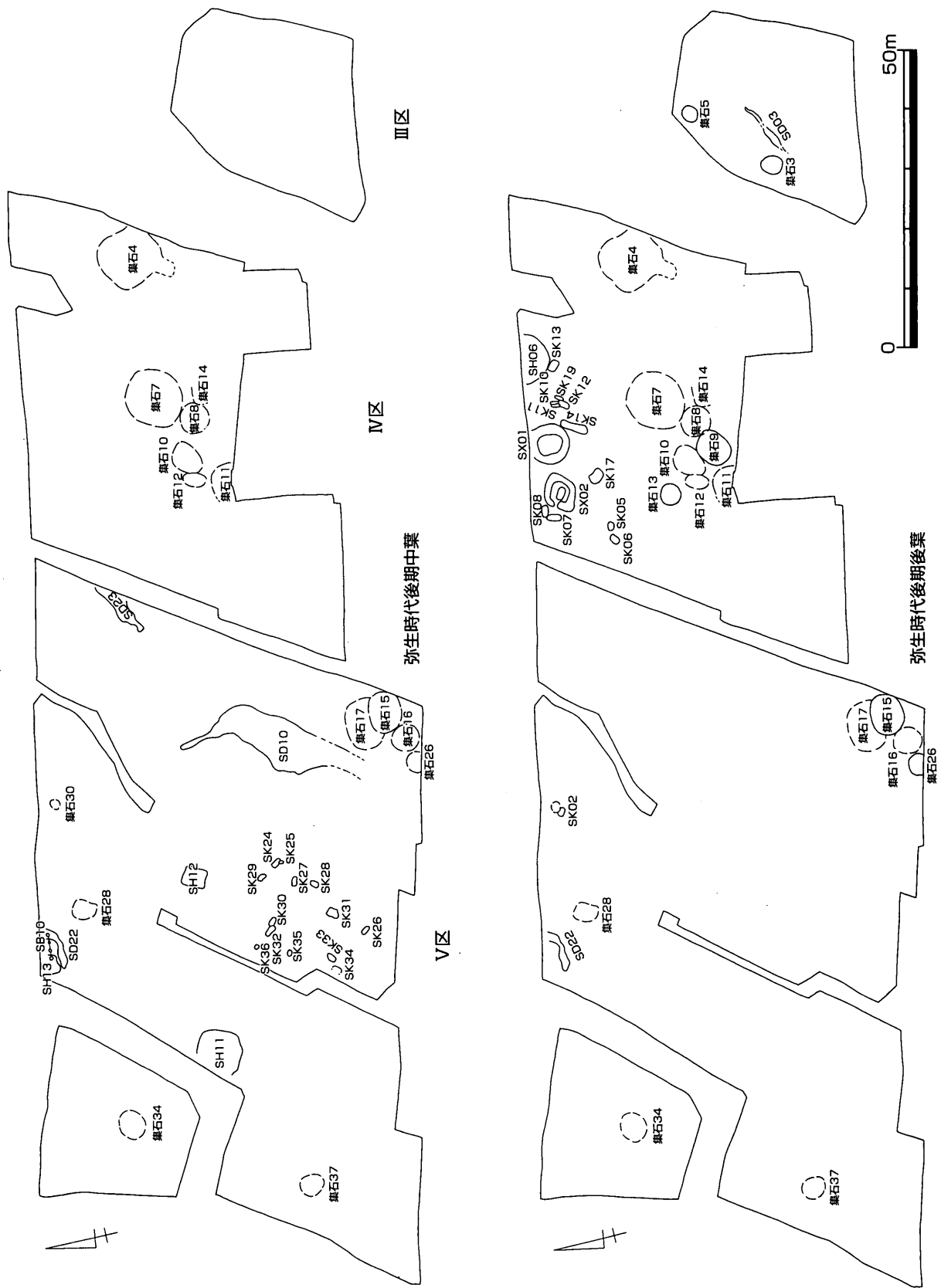
弥生時代中期中葉



弥生時代中期中葉(新)



第525図 III区～V区弥生時代遺構変遷図(1) (1/1000)



第526図 III区～V区弥生時代遺構変遷図(2) (1/1000)

第2節 Ⅲ区集石遺構について

(1) 集石遺構形成の人為性について

事実報告ではⅢ区の集石遺構を人為的に形成された遺構として扱ったが、その根拠について述べる。自然的な条件で多量の遺物が集積する可能性として1つは川による2次的な遺物移動がある。立地的に集石1、2は浅い谷状の地形に位置するためこうした可能性も考慮した。だが多量の遺物を移動させる流量ならば周囲の堆積土は礫だけでなく砂利を多量に含む砂質土であると考えられるが、暗褐色系の粘質土である。よって穏やかな堆積環境にあったと想定される。

遺物についても土器はある程度磨耗し、礫も丸味を帯びるものの地形的に下る西と南へ面を揃えていない。また集石遺構の範囲外にはほとんど遺物が見られない。このため2次的な移動を受けたと考えられない。

なお弥生時代後期遺構面を基準に考えると弥生時代中期の集石遺構の裾は川の落ちのラインとも見える。そう考えれば集石1、2は川の中州状に削り残された弥生時代中期包含層であるという解釈も可能である。だが旧E1区南壁土層、旧F1区南壁土層などで集石遺構のあるⅢ区西部の谷地形からⅢ区東部とⅣ区にかけて微高地へ変わる部分の土層堆積状況を確認すると基本的に集石遺構付近の層序と同様であり、川の埋土は見られない。ここでは弥生時代中期の集石1、2のみ示したが後期の集石3、5についても同様である。以上から人為的な遺構と考える。

(2) Ⅲ区集石1、2とST01～03の関係

ここでは先の事実報告に基づき、他の諸要素も加味して集石遺構と下位の墓との関係について検討する。

〈平面的な配置〉

ST01、02は集石1の中央より北側にある。ST03は集石2のほぼ中央に位置し、それぞれ覆われる。

〈マウンドの高さ〉

ST01～03の底面から集石遺構の頂部までの高さは45～50cmを測る。註1のような構造(第527図)を持つ場合、木棺墓でも棺の収納は可能である。

〈土層断面〉

ST01～03の墓坑掘り込み面はいずれも弥生中期遺構面であり集石遺構形成土でない。ST01、03が木棺墓、ST02が土坑墓であり埋葬施設の種類の相異があるため3基を区分して述べる。

〈墓直上での集石遺構内遺物出土状況〉

墓の直上で集石遺構内の遺物がどのような平面、断面分布を示すかST01、02とST03に区分して述べる。これは先述のとおり墓の深度が木棺墓としては浅く、木棺自体が低いか、あるいは墓坑掘り込み面上位に棺上部が飛び出す構造になると推定されるため以下のような状況が生じる可能性を考慮している。

- ① 集石遺構を構成する遺物が棺痕跡付近でこれを意識した配置を採る。
- ② 本来、棺付近にあった遺物が木棺の腐朽に伴い陥没した結果、平面的な出土位置が棺の内側にある遺物は外側のそれより低位にある。

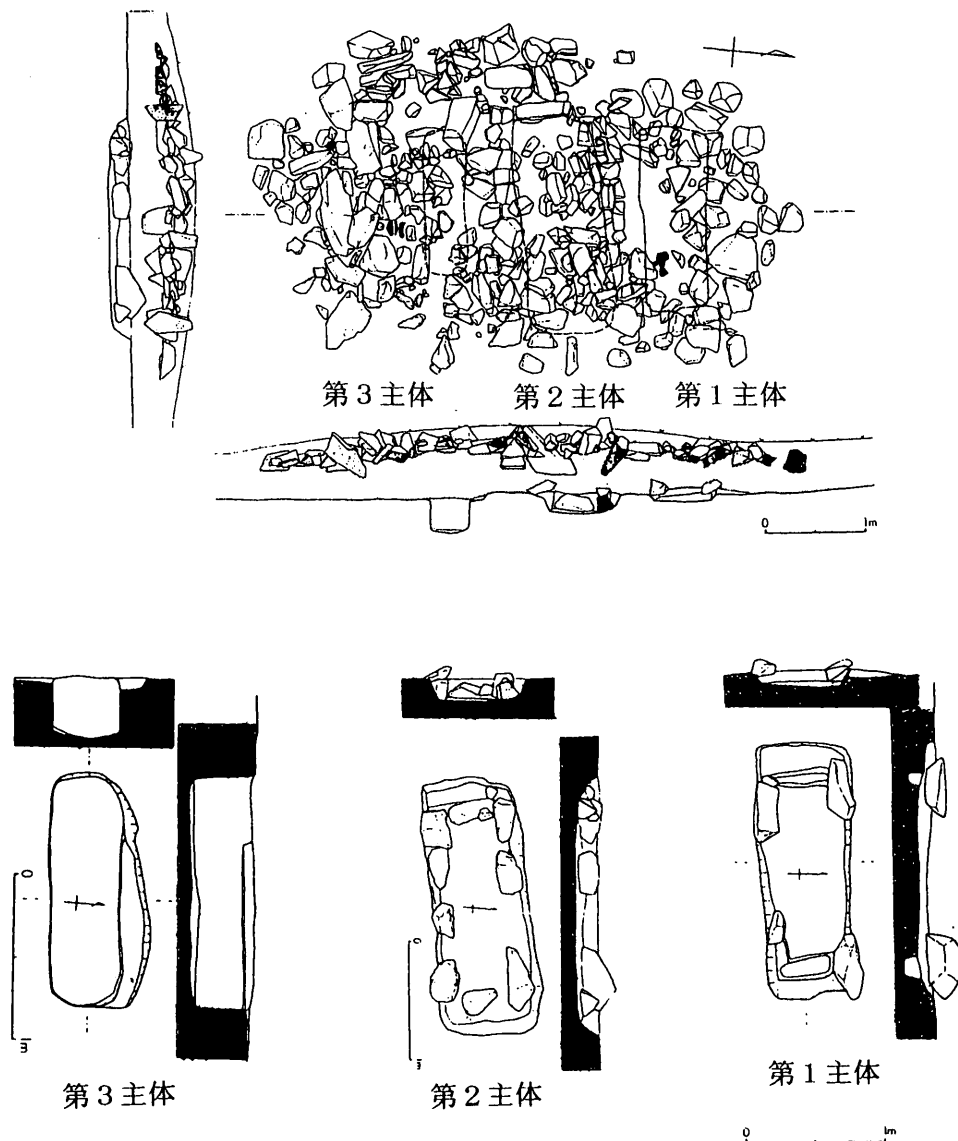
集石1とST01・ST02

ST01

墓坑深度が浅いため集石1と有機的な関係にある場合収納された木棺の高さが20cm以上あれば墓坑内に収まりきらず、棺上部は集石遺構形成土内に突出する(註1)。突出すると考えれば集石遺構はそれを覆うものとして理解できる。逆に単純に低い木棺を考えれば済むことである(註2)。一般的に木棺であれば、木棺の腐朽に伴い形成土が棺内の空間へ崩落することにより棺内埋土と遺構形成土を区分できるか、棺上部の堆積土ラインに乱れが見られることが多い。図化した部分は棺の端部であるが、棺内の空間が上位にある形成土で埋没するという点では他の部分と同じである。しかし低い木棺であれば木棺内の空間も少なく、木棺の腐食による形成土の崩落や、棺上部の堆積土ラインの乱れる率は低くなる。

ST02

土坑墓の場合、集石遺構形成土の陥没は遺体の腐朽に伴う小規模な沈下に留まると考えられる。これは墓坑上面の凹みと矛盾せず、深さも土坑墓ならばありうる。このように考えるとST02は集石1に伴

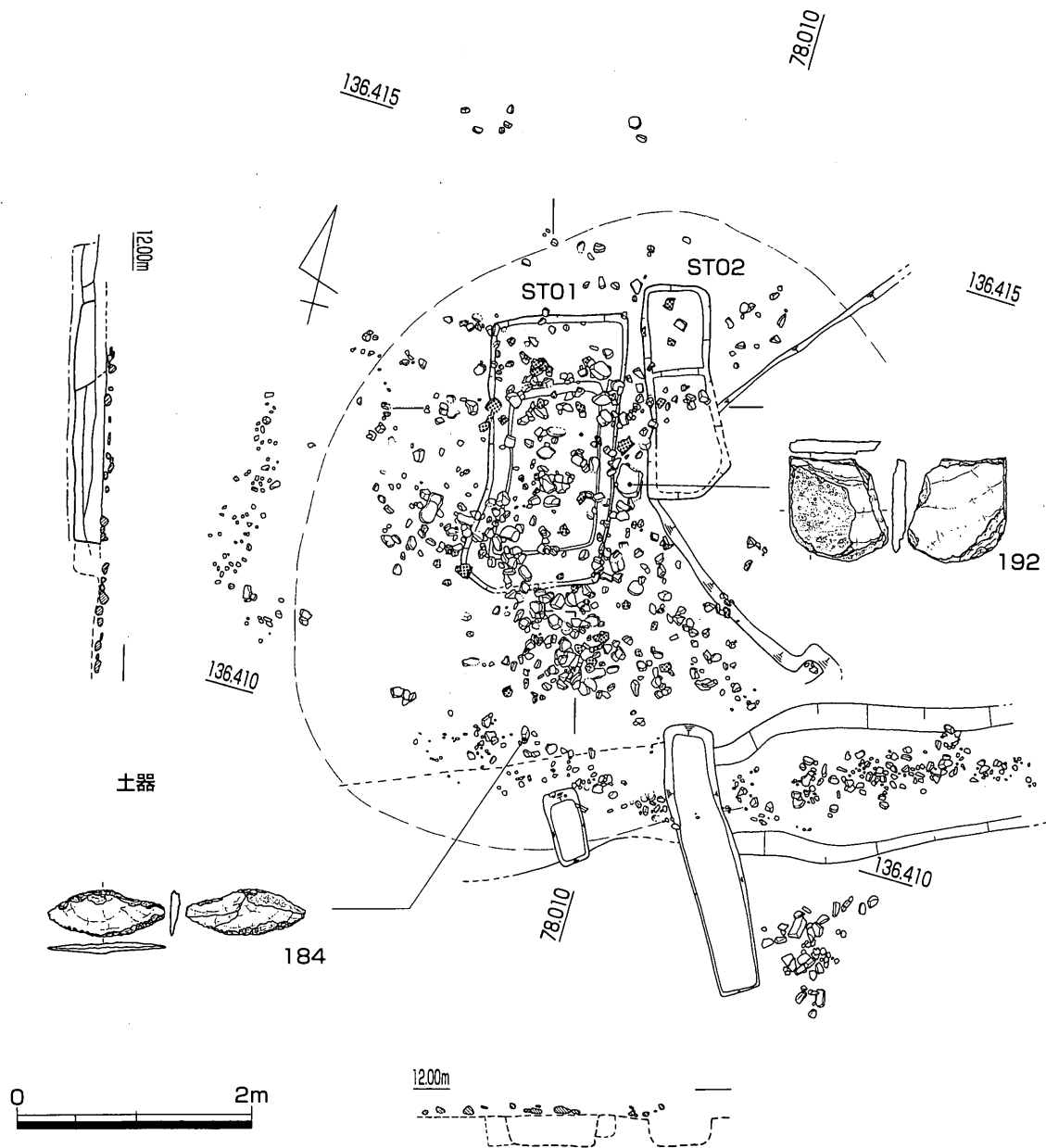


第527図 広島県高平遺跡A号墓平・断面図

い、ST02がST01を意識したと見られる配置を採ることから両者は密接な関係にあると考えられる。

集石1であるが、遺物出土状況①については確認できる掘り込み面の最上端が11.8mであるため11.85mまでに下場がくる遺物の出土状況を確認した。(註3) 遺物分布はST01上位とその南側でややまとまり、ST02を含めたその他では希薄になる。上面が遺物に覆われるST01でも墓坑の主軸方向に合わせて礫が面を揃えるなどこれを意識したような痕跡は見られない。細かく見ても土器は集石1を構成する器種の破片ばかりが礫の分布範囲に散在する。石器は打製石鏃、打製石庖丁、楔形石器、チップ、結晶片岩製板状剥片などがあり、やはり土器、礫と混在している。ただ、打製石庖丁は完形品であること、板状剥片は剥片採取が可能なものでST01、02間の墓坑掘り込み面直上で出土している点は注目できる。

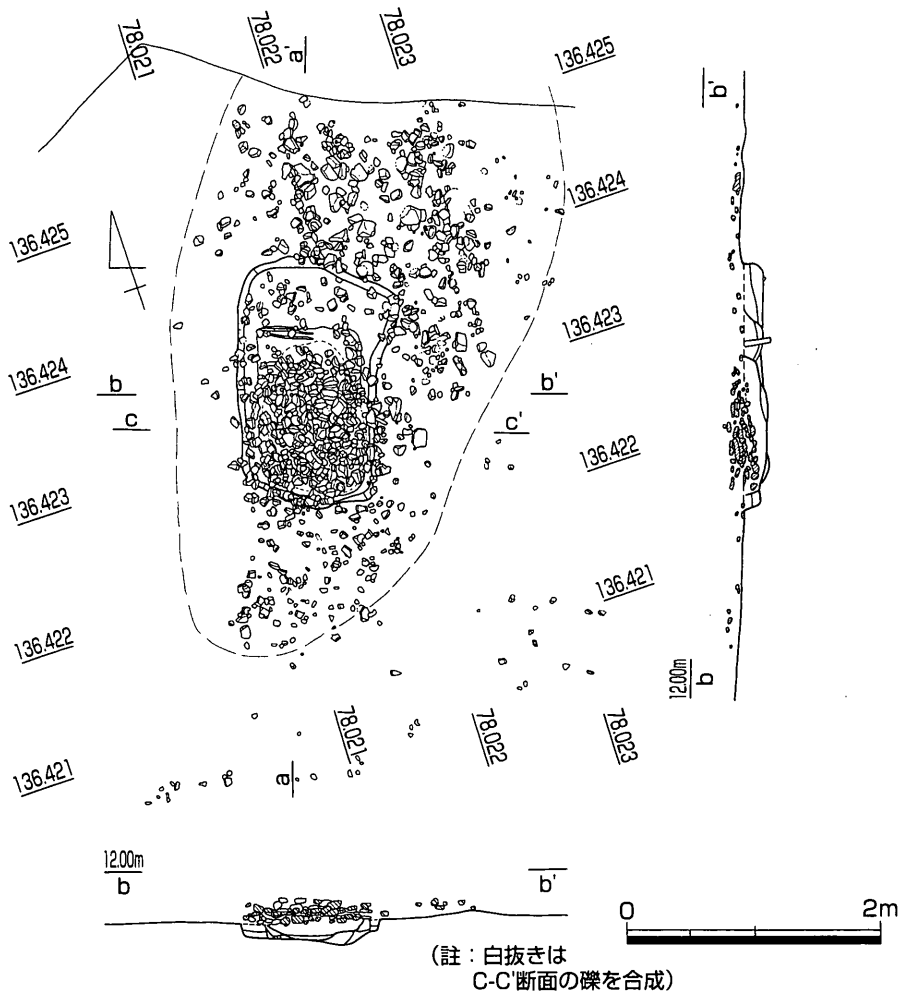
遺物出土状況②については同様に11.85mまでに下場がくる墓坑周辺の遺物出土レベルを確認した。



第528図 Ⅲ区第2面集石1遺物出土状況平・断面図 (ST01・02直上) (1/60)

第529図を見るとST01では棺の内外どちらでも墓坑掘り込み面レベルに礫の下場が留まっており、レベル差がないことが窺える。図は礫が多く見られた部分を選んで作成したがその他の位置でも木棺部分と周辺部でレベル差は見られない。この状況は土層図で陥没が見られない状況と整合的である。なおST02についても掘り込み面レベルより下位に礫は見られない。このようにST01、02の掘り込み面直上レベルの遺物出土状況は集石1全体の様相と同様である。

ST01とST02はこれまで述べたように浅いものである。その掘り込み面は周囲の弥生時代中期の遺構面と同じで、遺構面の状況からST01とST02だけが削平を受けたとは考え難い。そしてこの同じ面、レベルから集石1を構築している。近畿地方に代表される方形周溝墓のように盛土を行い墳丘を完成させてから墓壙を掘削する場合は、埋葬後に埋め戻して墳丘を元に戻し、墳丘埋葬施設が確実に盛土内に隠れる必要がある。そのため墓壙はある程度の深さを用意しておく必要があると考えられる。これに対して埋葬後に盛土を行う場合は、その埋葬施設が覆われればよく、墓壙の深さはさほど重要とはならない。また他の場所に集石遺構を築くだけの場所が多くあるのに、同時期にあえて埋葬遺構であるST01・ST02の上に集石遺構を築くことは単なる偶然とは考え難く、やはり埋葬施設を覆い保護する意味で集石1は築かれたと考えるのが自然である。



第529図 III区第2面集石2遺物出土状況平・断面図 (ST03直上) (1/60)

集石2とST03

集石2であるが先の遺物出土状況②に相当する出土遺物の断面分布については、ST03の事実報告で集石遺構内の礫群がST03の①層へ連続して下がること、これを生じた原因としてST03に埋設された木棺木蓋が腐朽し陥没が生じた、つまり集石2と関係することを述べた。

集石2南北ベルトで確認できる掘り込み面の最上端が11.65mなので11.75mまでに下場がくる遺物の出土状況を図化した第530図を基に補足すると、この礫群は断面的に上位から内部まで密集して連続する。

次に遺物出土状況①の平面的な遺物分布についてであるが、図を見ると木棺部分の上面で極めて高密度に礫が密集することがわかる。こうした状況は他の部分では見られず木棺を意識していると考えられる。(註4) また集石2平面図と比較しレベル差による遺物分布を見ると、第530図では遺物が比較的希薄な北部において高密度となる一方、木棺付近ではさほど変化がなく木棺直上で集中する。こうした平・断面の遺物分布から集石2とST03との強い関連を見て取れる。(註5)

従って集石2とST03は関連する一体のものと考えられる。

(3) III区集石遺構の出土遺物について(補足)

集石遺構出土遺物については事実報告で既に土器、石器、土玉、礫があること、土器は通常見られる器種の破片が大多数を占め、完形に近いものや赤色顔料を塗布したり、穿孔を施したりする非日常品がほとんどないこと、集石1では土器焼成時の失敗品(164)を含むこと、石器も日常的な器種で占められ、概ね破損していること、礫は付近で採取できるものであること、これらは混在して出土し、意図的な配置は見出せないことを述べた。だが土器、石器の器種組成については言及できていないためここで述べたい。

(i) 土器組成

第530図を基に個別の集石遺構ごとに見ていく。

〈集石1〉甕が70%弱と圧倒的に多く壺が20%強と一定量を占める。高杯、鉢はわずかである。なお弥生後期土器がごく少量混入している。

〈集石3〉形成時期である弥生後期の土器以上に多量の弥生中期土器が含まれる。これらは事実報告で述べたとおり集石1からの混入と考えられる。後期土器は量的に乏しいがやはり甕、壺の順が多い。

〈集石1・3付近包含層〉出土位置を集石遺構内に限定できないため名称は包含層としているが集石1、3内で出土した土器を多量に含む。弥生中期土器、後期土器のいずれも甕、壺の順が多い。

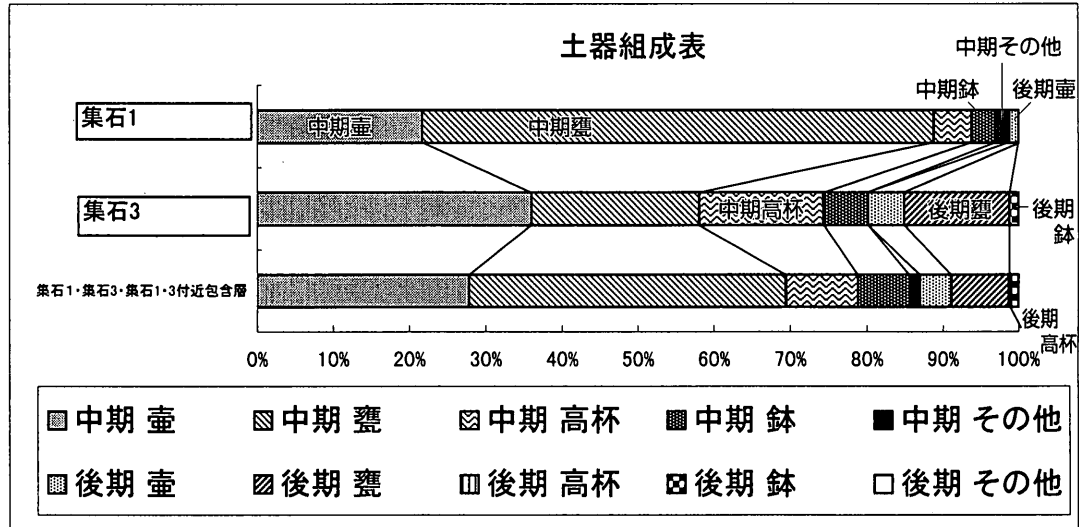
〈集石1、集石3、集石1・3付近包含層〉これらの遺物は本来、弥生中期土器は集石1、弥生後期土器は集石3に属した可能性が高いため時期ごとの状況を見ておく。弥生中期土器は集石1のように甕が圧倒的に多いというわけでないが、40%以上と最も多い。次いで壺が30%弱、高杯、鉢は10%弱ずつとなる。弥生後期土器は甕が8%弱、壺が約4%、高杯、鉢が1%未満と弥生中期土器に比べてずいぶん出土量が少ない。だが甕、次いで壺が多いという状況は同様である。

〈集石2〉甕が50%強、壺が30%強と集石1より壺が多いものの高杯、鉢を含めた組成は類似する。わずかながら弥生後期土器が混入している。

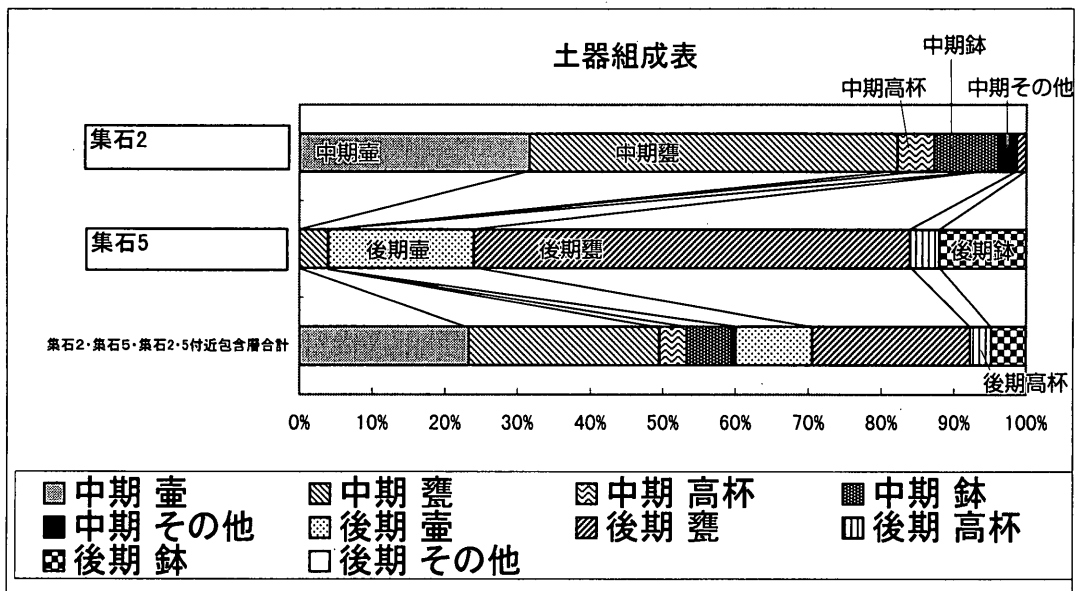
〈集石5〉集石3と同様に弥生後期土器は出土量が少ない。その中で甕が多く、壺が一定量見られる。

〈集石2・5付近包含層〉出土位置を集石遺構内に限定できないため名称は包含層としているが集石2、

	中期					後期					合計
	壺	甕	高杯	鉢	その他	壺	甕	高杯	鉢	その他	
集石1	35	108	8	5	壺3	2	0	0	0	0	161
土器組成	21.7	67.1	5.0	3.1	1.9	1.2	0	0	0	0	
集石3	31	19	14	5	0	4	12	0	1	0	86
土器組成	36.0	22.1	16.3	5.8	0	4.7	13.9	0	1.2	0	
集石1・3付近包含層	102	124	35	31	壺5	19	34	2	5	0	357
土器組成	28.6	34.7	9.8	8.7	1.4	5.3	9.5	0.5	1.4	0	
集石1・集石3・集石1・3付近包含層合計	168	251	57	41	壺8	25	46	2	6	0	604
土器組成	27.8	41.6	9.4	6.8	1.3	4.1	7.6	0.3	1.0	0	



	中期					後期					合計
	壺	甕	高杯	鉢	その他	壺	甕	高杯	鉢	その他	
集石2	25	40	4	7	壺2(蓋2)	0	1	0	0	0	79
土器組成	31.6	50.6	5.1	8.9	2.5	0	1.3	0	0	0	
集石5	0	1	0	0	0	5	15	1	3	0	25
土器組成	0	4.0	0	0	0	20.0	60.0	4.0	12.0	0	
集石2・5付近包含層	48	41	8	12	0	28	52	8	12	0	209
土器組成	23.0	19.6	3.8	5.7	0	13.4	24.9	3.8	5.7	0	
集石2・集石5・集石2・5付近包含層合計	73	82	12	19	壺2	33	68	9	15	0	313
土器組成	23.3	26.2	3.8	6.1	0.6	10.5	21.7	2.9	4.8	0	



第530図 集石1、3、2、5の土器組成

5内で出土した土器を多量に含む。弥生中期土器では壺、甕の、弥生後期土器では甕、壺の順が多い。〈集石2、集石5、集石2・5付近包含層〉これらの遺物は本来、弥生中期土器は集石2、弥生後期土器は集石5に属した可能性が高いため時期ごとの状況を見ておく。弥生中期土器は甕、壺がどちらも20%強と大差ないものの甕が多い。高杯、鉢は合わせて10%程度と少ない。弥生後期土器は甕が20%強、壺が約10%、高杯、鉢を合わせて10%を切る。やはり甕、次いで壺が多い。

〈小結〉以上から出土量に関しては弥生中期の集石1、2で本来集石1に属したと考えられる中期土器が多いこと、弥生後期の集石3、5で後期土器が同程度に出土しているが、その量は中期の集石1、2に比べ乏しいこと、組成についてはいずれも基本的に甕、壺が多数を占め、甕が最も多いことを窺える。こうした組成は成重遺跡をはじめとする集落で一般的に見られる土器の器種組成と違和感がない。

(ii) 石器組成

第531図を基に個別の集石遺構ごとに見ていく。

〈集石1〉定形石器の出土量は17点しかないが器種的には遺跡内で出土するものが概ね見られる。組成的には未製品も混じる打製石鏃が目立ち、スクレイパーも一定量を占める。非定形石器には結晶片岩製板状剥片、サヌカイト製の楔形石器、フレイク、チップがある。楔形石器は小型石器製作の材料と判断されるためこれ以下は石器製作に伴う残滓と考えられる。チップは855点と極めて多量に出土している。

〈集石3〉集石3には集石1から極めて多量の土器が混入している。よって本来集石1に含まれていた石器も多く含まれると考えられる。定形石器で磨石・敲石・砥石が約半数を占める状況は集石1と異質であるが、非定形石器も合わせた器種組成では類似する。

〈集石1・3付近包含層〉ほとんどが集石1、3のどちらに由来するか不明であるが集石3で述べた判断より本来集石1に含まれていたものも多いと考える。定形石器では打製石鏃が多く、スクレイパー、R.F.も少なからず見られる。非定形石器では集石1と同様に多量のチップがある。

〈集石2〉石器の出土量は10点しかなく、器種的にも乏しい。やはりチップが見られる。

〈集石5〉結晶片岩製の打製石庖丁、磨石が1点ずつ見られるのみである。石庖丁が完形品であることが注目できる。集石5では集石2の弥生中期土器との接合関係も見られるため混入した可能性もある。だが、混入土器はわずかで石庖丁は完形品であるため元来、集石5に属すると考える。

〈集石2・5付近包含層〉定形石器では打製石鏃が、非定形石器ではチップが目立つ。

〈小結〉以上から集石1、2では総点数と器種数で多寡がある。だが定形石器が乏しい点、組成に非日常性が見られない点で共通する。また集石1で石器製作に伴う残滓類（石器未製品、楔形石器、敲石、フレイク、チップなど）が多いことが注目される。（註6）

これらのうちフレイク、チップの重量分布を第532図で見ると小型石器製作の材料としても利用不可能な2g以下が集石1、3で92.2%、集石2、5で82.3%を占める。集石2、5は総数で79点しかないので集石遺構の構築時に混入した可能性があるが、集石1、3では1136点（そのほとんどが集石1出土）と極めて多量にある。

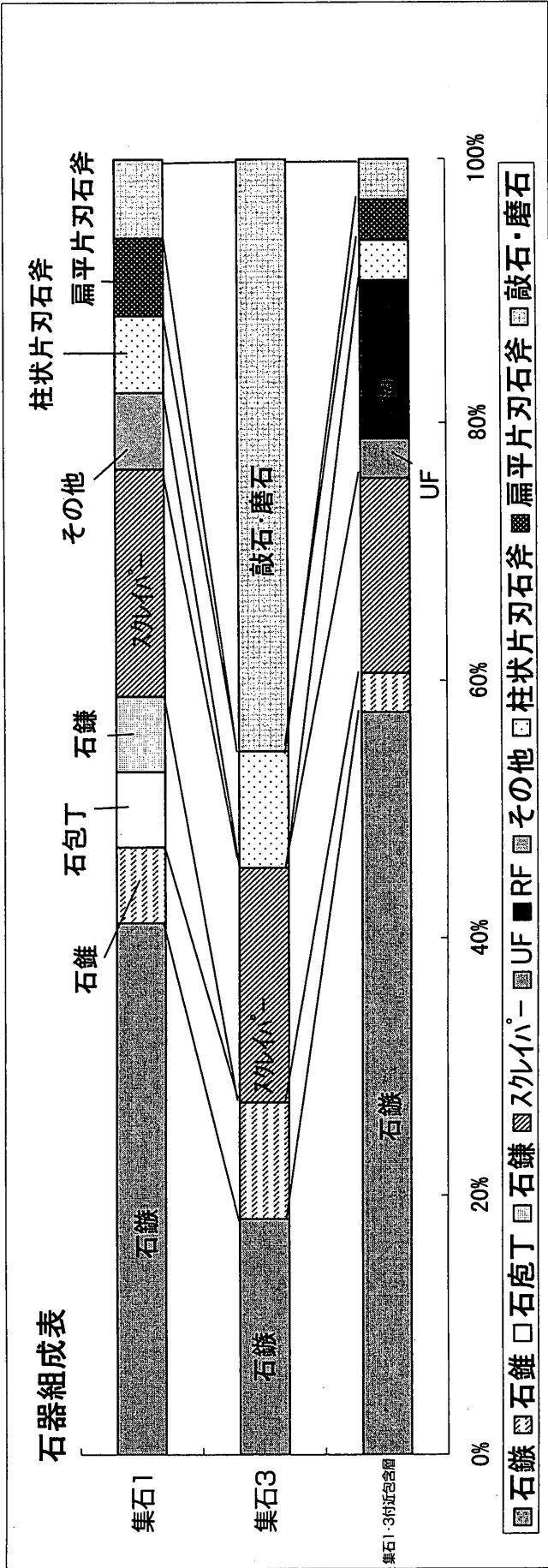
(iii) 結び

ここまでⅢ区集石遺構から出土した土器、石器の器種組成とチップ、フレイクの重量分布について検討した。その結果、土器、石器ともに集落で通常見られる組成であることを確認した。

ただ特殊性を見出せる遺物のごくわずかに存在する。周辺包含層から出土した遺物も含めて列挙する

集石1・2・3・5石器組成表

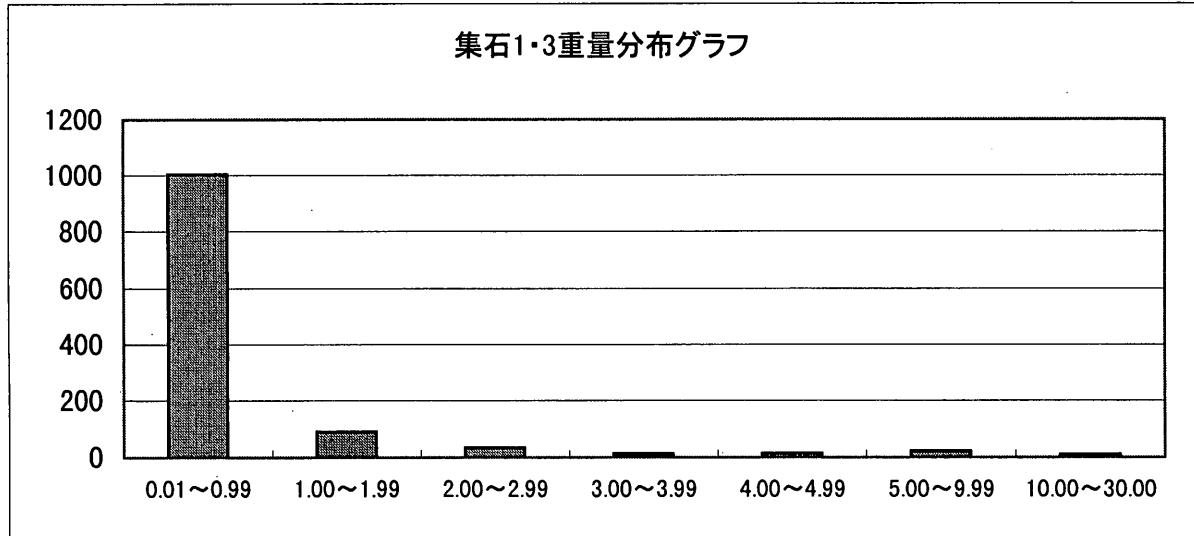
集石	集石1・2・3・5石器組成表											全点数計	チャ/全点数						
	石鏃	石包丁	石鏃	スクレイパー	UF	RF	その他	柱状片刃石斧	扁平片刃石斧	磨石	敲石			小計	椶	フレー	チップ	石材	非定形石器小計
集石1	7(内未製品1)	1	1	3	0	0	不明石器(石包丁専用)1	1	5.8	0	0	1	1	1	855	864	881	97.0	
定形石器組成	41.2	5.8	5.8	17.6	0	0	5.8	5.8	0	0	0	1	1	0	43	43	54	79.6	
集石3	2	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	298	331	86.7
定形石器組成	18.2	9.1	0	18.2	0	0	0	9.1	0	0	0	1	0	0	287	0	331	86.7	
集石1・3付近包層	9(内未製品3)	0	0	5	1	4	0	0	0	12.1	3.0	3.0	0	0	6	0	10		
定形石器組成	57.6	3.0	0	15.2	3.0	12.1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	88.0	
集石5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	83		
定形石器組成	77.8	0	0	0	11.1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	73	74	83	88.0	



第531図 集石1、3、2、5の石器組成

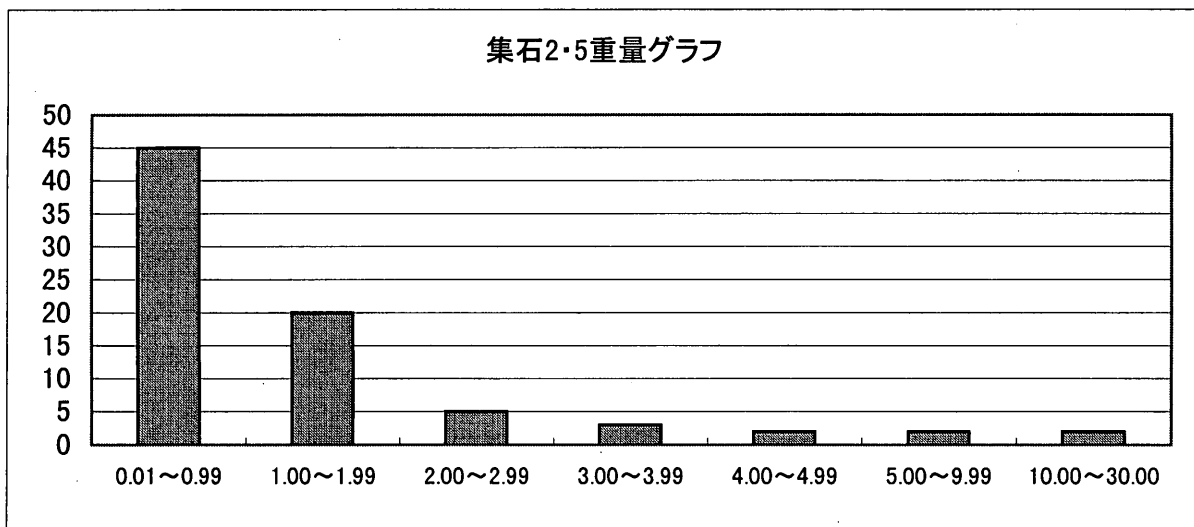
集石1・3石器

g	0.01~0.99	1.00~1.99	2.00~2.99	3.00~3.99	4.00~4.99	5.00~9.99	10.00~30.00	総重量
個数	1003	90	34	13	14	22	10	781.63
%	84.6	7.6	2.9	1.1	1.1	1.8	0.8	

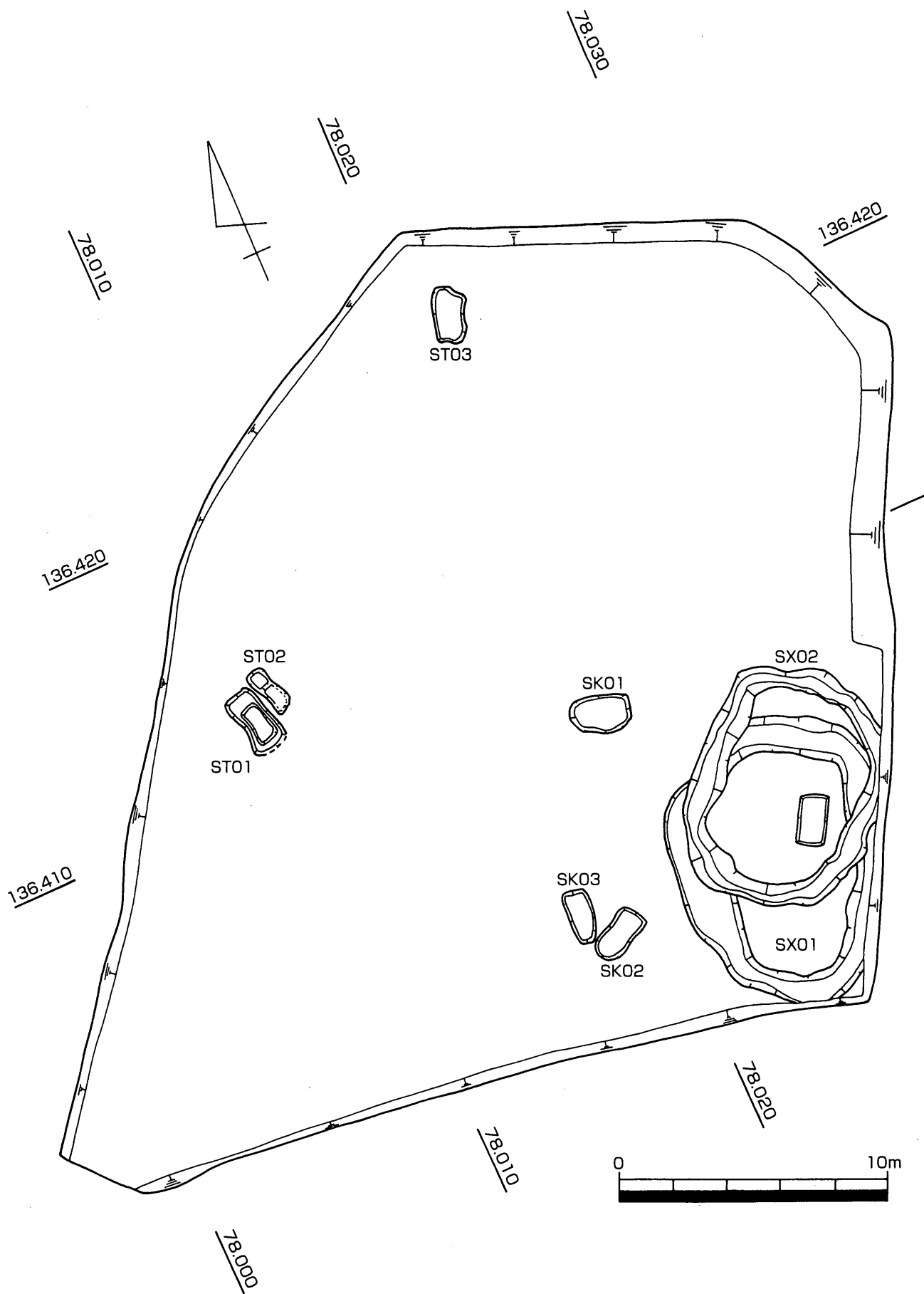


集石2・5石器

g	0.01~0.99	1.00~1.99	2.00~2.99	3.00~3.99	4.00~4.99	5.00~9.99	10.00~30.00	総重量
個数	45	20	5	3	2	2	2	127.8
%	57.00	25.3	6.3	3.8	2.5	2.5	2.5	



第532図 集石1・3、集石2・5出土チップ、フレイクの重量分布



第533図 Ⅲ区第2面の墓域 (1/200)

と土器では集石3と集石2・5付近包含層でスリッパを塗布し赤化させた高杯(296)、甕(490)が、集石2付近包含層で完形に近い壺(440)が、集石2・5付近包含層でミニチュア土器高杯(493)が見られる。いずれも弥生中期に位置づけられる。石器では集石1から完形の打製石庖丁(184)、使用可能な結晶片岩製板状剥片(192)が、集石5から完形の打製石庖丁(476)が出土した。

スリッパ塗布土器はそれぞれの集石遺構に10点ずつもなく、小片である。またミニチュア土器は1点のみで破片である。完形に近い壺は流土内の遺物希薄部から出土しているが、本来は集石遺構に伴っていた可能性は高い。

基本的には日常的な遺物で構成されるが、墳墓であっても日用品を供えることは通常のことである。集石遺構を伴う墳墓は定型的な墓制とは考えがたく、それゆえに特殊性を示す遺物の有無、また日用品の多さが、墳墓か否かの議論には直接には結びつかない。しかし石器製作の残滓と考えられるチップやフレイクが多いのも事実で、このことが示す内容は今後の検討課題としたい。

(4) 周辺遺構との関係

Ⅲ区で弥生中期中葉に位置づけられる遺構は集石1、2とST01～03以外に周溝墓SX01、02があり、墓が目立つ。時期決定できる遺構が少ないものの遺構密度自体が低いこと、ST01、02は相互を意識した配置を採ること、SX01、02は増築されていること、出土土器から見てST01、02よりSX01、02が後出することから一定期間墓域として機能したと考える。なお形態、規模、土層堆積状況から墓の可能性を持つ土坑(SK01～03)が見られる。仮に同時期の墓であれば配置的にSX01、02との関連が深い遺構と考えられるが、下記の内容はさほど変わらない。(第533図)

墓域の様相について少し触れると配置状況から埋葬グループは①ST01、02②ST03+集石2③SX01、02の3群となる。これらは相互の距離が約20mと離れ、構成基数もわずかである。よって墓域でないとする向きもあろうが、存続期間が短かったことによると考える。これは遺跡全体でもⅣ様式まで下る遺構、遺物は極めて希薄であり集落の存続期間が限定的であることに対応すると考えられる。なおこの墓域とセットになる居住域は約30m離れるⅣ区の微高地(Ⅳ区SH01、02を検出。)に広がると推定される。

墓域と集石遺構との関係であるが、墓域の存続期間内に集石遺構も併行して形成されたことが窺える。遺構密度が低い地点で2ヶ所の墓に伴って同時期の集石遺構が2基構築される状況が、集石遺構の性格や近接する墓とどのように関係しているかについては今後の課題である。付け加えると集石1とST01はともに真鍋編年Ⅲ-3(註7)に位置づけられる。

ここで述べた内容は遺構の状況に即した解釈であるが、妥当性を検証するためには集石遺構全体を類型化した上で個別の性格付けや形成要因を考察する必要がある。これについては今後の課題としたい。

(5) 集石遺構の性格とその形成

ここまでⅢ区の集石遺構に限定して形成の人為性、下部遺構との関係、出土遺物の内容などについて検討した。ただ後述する第3節の「集石遺構の特徴について」で指摘された内容の通り他の調査区の集石遺構との共通性は高い。弥生中期の集石遺構のうちⅤ区集石18、Ⅳ区集石21、24は墓の可能性を持つ土坑が下位に位置し、Ⅴ区集石18はⅢ区集石2と同様に伴う。またⅡ区SX01下層はその下位にあるSE01上層を礫などで埋め戻した後、連続して構築されている。Ⅴ区集石33でも土坑状の落ち込みを埋め戻した後、マウンド状に集石を隆起させており、同様な状況である。よって(廃絶)遺構を埋め戻し

でもそこに構築する意味があったか、遺構を埋め戻してさらに集石遺構で被覆することに意味があったと考えられる。いずれにせよ強い人為性が窺える。なお立柱（V区集石29）、立石（V区集石31）を伴うものがあり、低位部以外に立地するものも多い。

弥生後期の集石遺構でも弥生中期の集石遺構上に構築されたものが見られ、標石（集石5）を伴うものがある。とくに弥生中期については集石遺構に墓、祭祀的な遺構が示す非日常性が未分化に包摂された施設ないし、その行為の痕跡と考えられる。

「未分化」とするのは集石遺構の大きな特徴としてマウンドタイプ、土坑タイプという形態差（詳細は後述する）が存在するもののそれぞれは基本的に類似した外観（規模、構造、遺物の内容や出土状況など）をもち、ここに性格や機能差がさほど反映されていないことによる。よって重要なのは共通性の高い外観が日常的な遺物・礫により形成されていることの意味である。これは集石遺構形成における基本原理と見られ、遺構の本質を考える上で鍵になるだろう。

これに関して日常生活の廃棄物に特別な扱いを施す事例としてアイヌのモノ送り遺構が、廃棄物内に埋葬する例として貝塚がある。集石遺構に対しいずれも地域的、時期的な隔りがあり、それに由来して行為の意味、背景も異なるため単純な比較は行えない。だが集石遺構のもつ遺物の日常性と遺構の特殊性（あるいは非日常性）はどれにも確認できる。集石遺構の類型化を図り、性格付けを行う段階でこれらの事例についても検討すれば集石遺構の形成観念について考察する新たな視点が得られると考えられる。ただ現状では未検討であり、今後の課題としたい。

ここでは他遺跡の事例として善通寺市稲木遺跡、徳島県桜ノ岡遺跡・北原遺跡を取りあげ、居住域と集石遺構群の大局的な配置について検討する。また他遺跡の事例については特殊性を持つものを紹介し、通常の遺構に留まらないことを確認する。この作業により集石遺構の性格を考察する一助としたい。

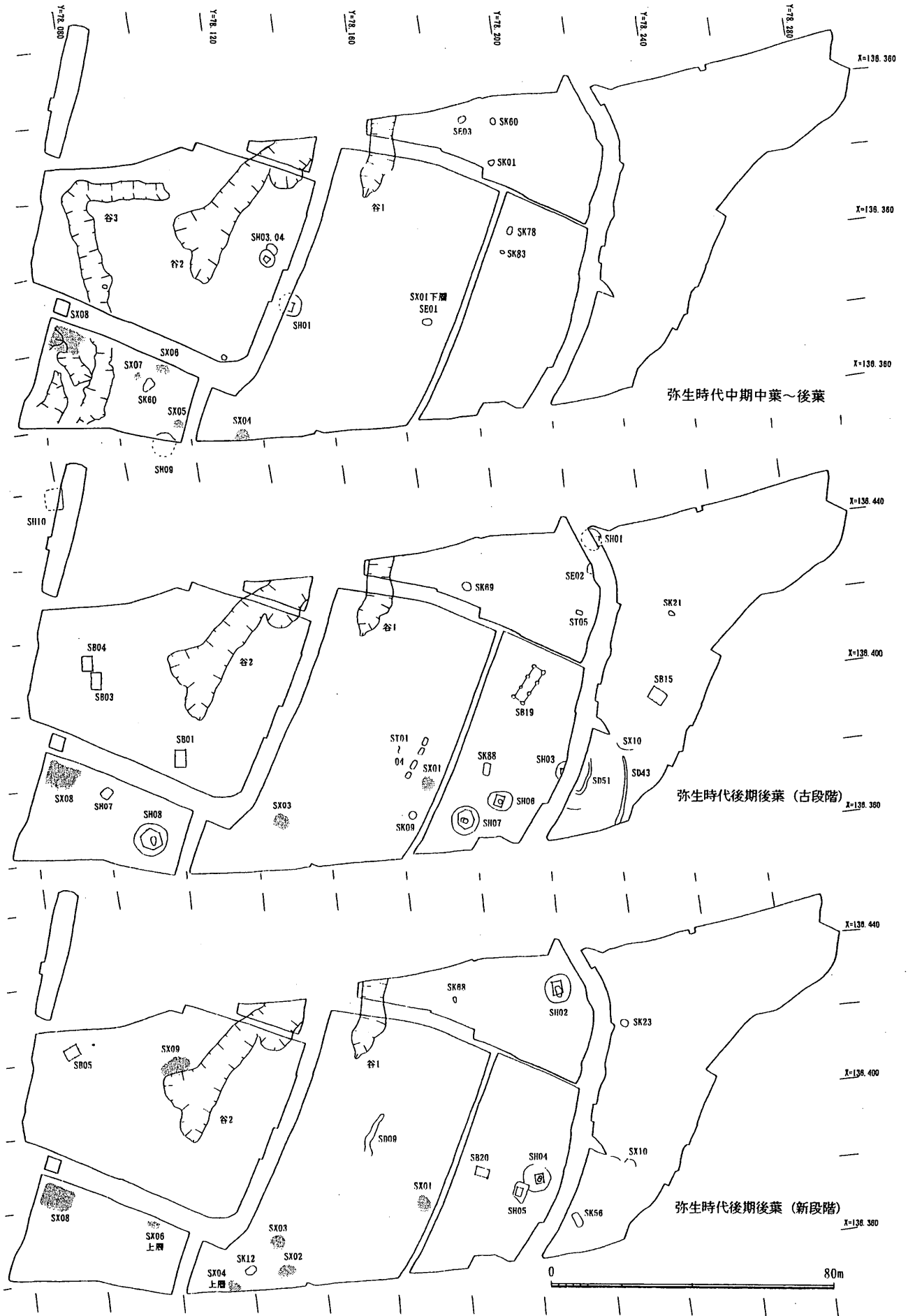
まず成重遺跡であるが「第1節 III区～V区の遺構変遷」で述べられたように東部で弥生中期前葉に居住が開始され、中期中葉に全域へ集落が拡大する。その後中期末～後期前半にかけては希薄になるが、後期後半に再び盛期を迎える。遺跡内では複数の地形単位があり、報告も成重遺跡Ⅰ、Ⅱとして東西で別々にされているため区分して紹介する。まずⅢ区がある西部であるが弥生中期中葉、後期後葉段階でⅢ区とⅣ・Ⅴ区SD01付近が低地でありその間が微高地となる。中期中葉（古）では竪穴住居2基が西側微高地の南部、集石1基が同微高地の北部にある。相互の間隔は30mである。

中期中葉では同時併存しうる竪穴住居が西側微高地で6基、東側微高地で1基検出された。集石遺構は西側微高地で7基、東側微高地の縁辺部で9基、東端の低地で2基ある。西側では南側の住居群からやや外れるV区SH01を共同の石器製作作業場であり通常の居住遺構でないと見れば住居と至近距離にある集石遺構群と約40mと開けるものが見られる。東側微高地の住居から東西に近接する集石遺構までの距離は約20～30mである。

中期中葉（新）では竪穴住居が消滅するがほとんどの集石遺構が継続して形成される。よって近接する調査区外に住居が営まれていると推定される。

後期中葉では西側微高地に再び竪穴住居が形成される。集石遺構は同微高地上の北西部で4基、東側微高地縁辺部においてはV区南東部で4基、Ⅳ区中央部で7基ある。しっかりした構造を持つSH11から最も外れる集石10までの距離は約50mを測る。

後期後葉ではSH06が居住を目的としない住居と見なすと居住遺構は見られない。だが集石遺構はほ



第534図 成重遺跡東部（Ⅰ、Ⅱ区）における弥生時代の遺構変遷

とんど前代から踏襲されており調査区外に居住域が移動していると考えられる。

一方東部にあるⅠ、Ⅱ区（第534図）では弥生中期中葉、後期後葉段階で西側に微高地、東側に緩扇状地がある。

中期中葉では竪穴住居4基、SX（集石遺構）6基を数えるが、緩扇状地の縁辺部にあるⅡ区SX01下層を除き西側微高地で検出された。竪穴住居は北東、南西部の2ヶ所に約50m空けてかたまる。SXはその間で東西方向の帯状に分布する。南西部にあるSHⅡ09とは最大で約30mと近接する。

後期後葉（古段階）では竪穴住居7基、掘立柱建物5基、SX6基がある。西側では微高地の南北端で竪穴住居、南寄りの縁辺部でSXがあり、東側では扇状地の南北端で竪穴住居、縁辺部でSXがある。両者の距離は近接するもの同士で10～30mである。

後期後葉（新段階）では竪穴住居3基、掘立柱建物2基、SX7基がある。同時併存の竪穴住居が前代より減少するが東側扇状地の状況は大差なく、竪穴住居とSX間の距離も同様である。西側では継続するSXが多いが微高地上にも出現する。

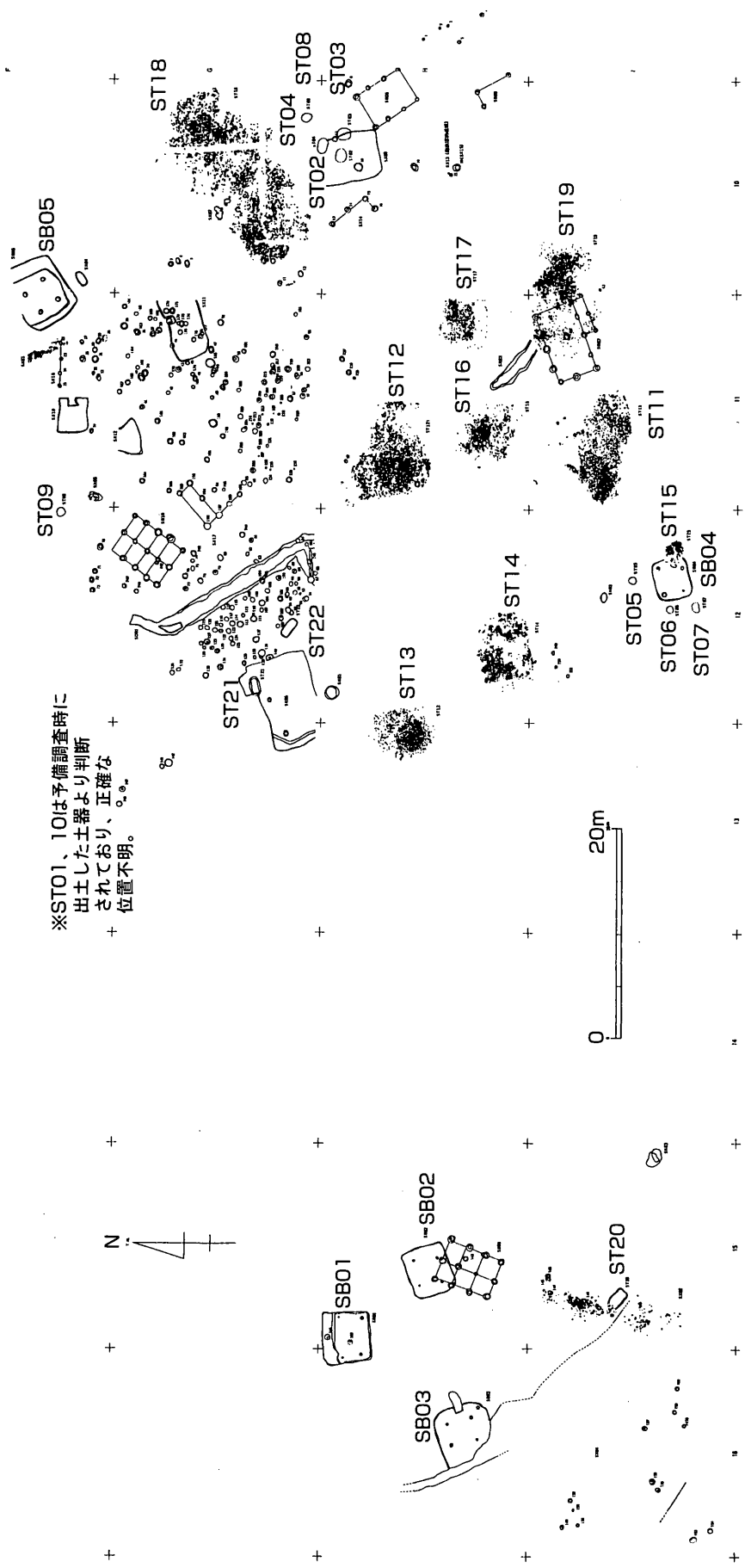
次に稲木遺跡（第535・536図）（註8）であるが緩扇状地の扇端部に位置する。微高地に該当するC地区は西端でやや下がるもののほぼ平坦な地形であり、弥生時代後期後半の竪穴住居5基（SB01～05）、「集石墓」（註9）9基（ST11～19）、土坑墓3基（ST20～22）、土器棺墓10基（ST01～10）などが検出されている。「集石墓」は礫、土器片などを多量に混ぜた土砂を盛り上げて構築しており、下部遺構を持つものも多い。成重遺跡西部にある遺構面上にマウンドを隆起させるタイプの集石遺構（以下、マウンドタイプと仮称。）と規模、形状、日常品を主体とした遺物内容などにおいて類似する。

C地区の遺構分布は西側に空白があるがこれは未調査部分である。よってこの部分にも竪穴住居や「集石墓」が存在すると考えられるが確認できるのは竪穴住居が西端、北東隅、南東部の3ヶ所に見られること、「集石墓」が東側で相互に約5～15mの距離を空けて分布することである。東側に位置する竪穴住居と「集石墓」は重複するものを除くと至近距離にあるものは10m前後しか離れていない。また西側の竪穴住居からも約50mとそれほど間隔を空けない。

特殊性をもつ「集石墓」としてST14がある。5個体の鉢が口縁部を上位に向けて集石の南西隅と南辺部に直線的に並んで出土した。配置的にはL字形を呈する。このうち3個体はほぼ完形品であり、他の2個体も2/3程度が残存し、主に上部が破損している。よって本来は全て完形品であった可能性が高い。このため土器群の人為的な設置および集石の形態として方形が意図されたことが窺える。ただ下部に遺構は存在せず、その他の要素も別の「集石墓」と大きな差異はない。

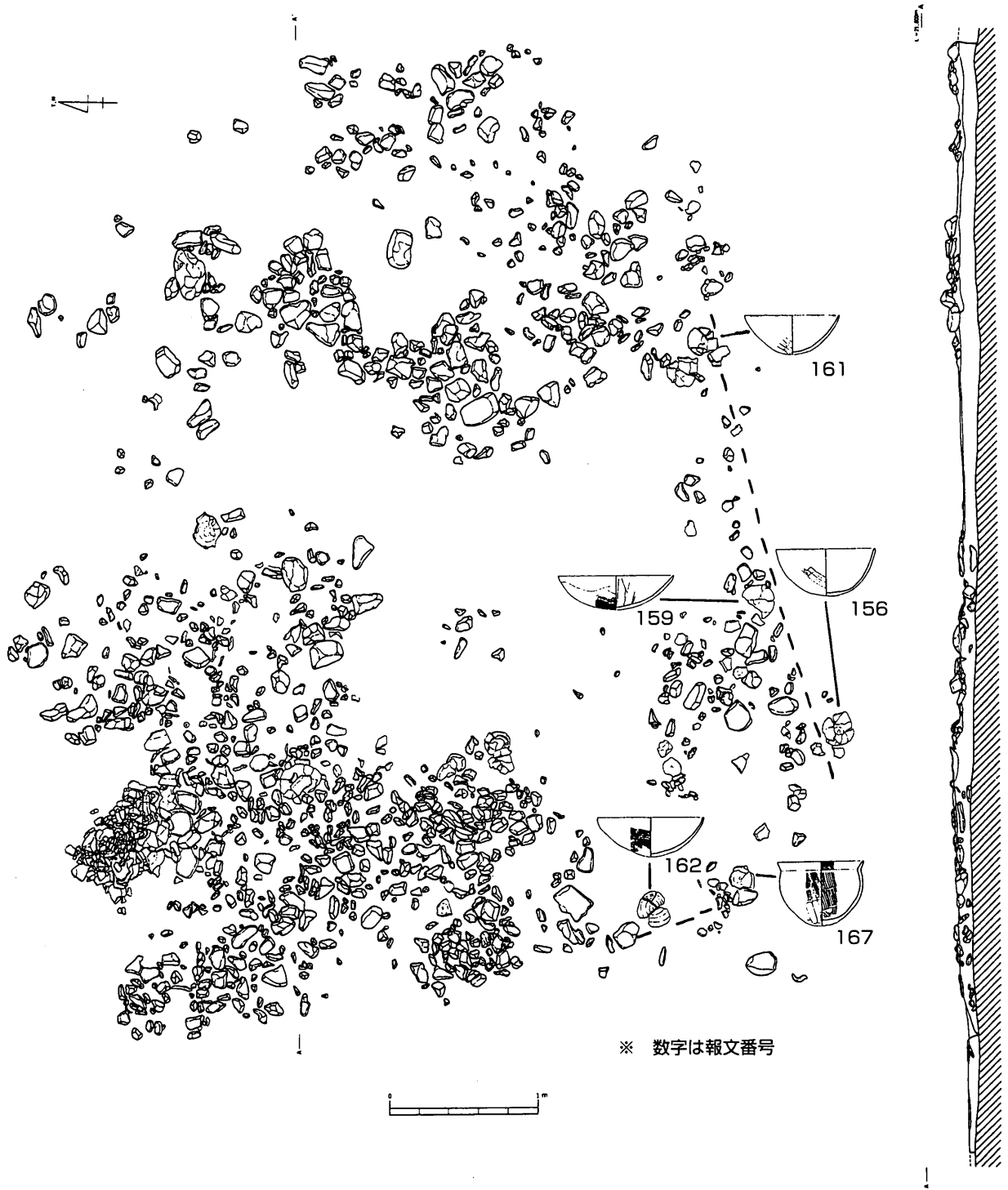
次に桜ノ岡遺跡（第537図）（註10）であるが吉野川下流域に広がる段丘上に立地する。東西を川、谷に挟まれるがその間約200mはほぼ平坦で南北は南側へ向かって緩やかに下る。検出遺構には弥生中期中葉～後葉の竪穴住居が2基の建て替えを含めて13基、掘立柱建物2基、集石土坑10基、土坑、柱穴などがある。中期中葉が遺跡の盛期であり、竪穴住居9基、掘立柱建物1基、集石土坑9基がこの時期に属する。竪穴住居2基、掘立柱建物1基については詳細な時期が不明である。

集石土坑からは多量の日常生活で使用される土器の破片、礫と破損した少量の石器が出土した。その他の特徴として埋土に炭化物や焼土を含むものが多く、床面が被熱したり、炭化材を含んだりするものもあること、黒色・白色礫を含有するものが目立つことがある。マウンドタイプの集石遺構とは形態的に異なるが成重遺跡東部にある同時期の集石遺構にも土坑や落ち込みの内部、上面で多量の礫、日常品を主体とした土器が出土しているもの（Ⅱ区SX01下層、SX04～07。以下、土坑タイプと仮称。）がある。

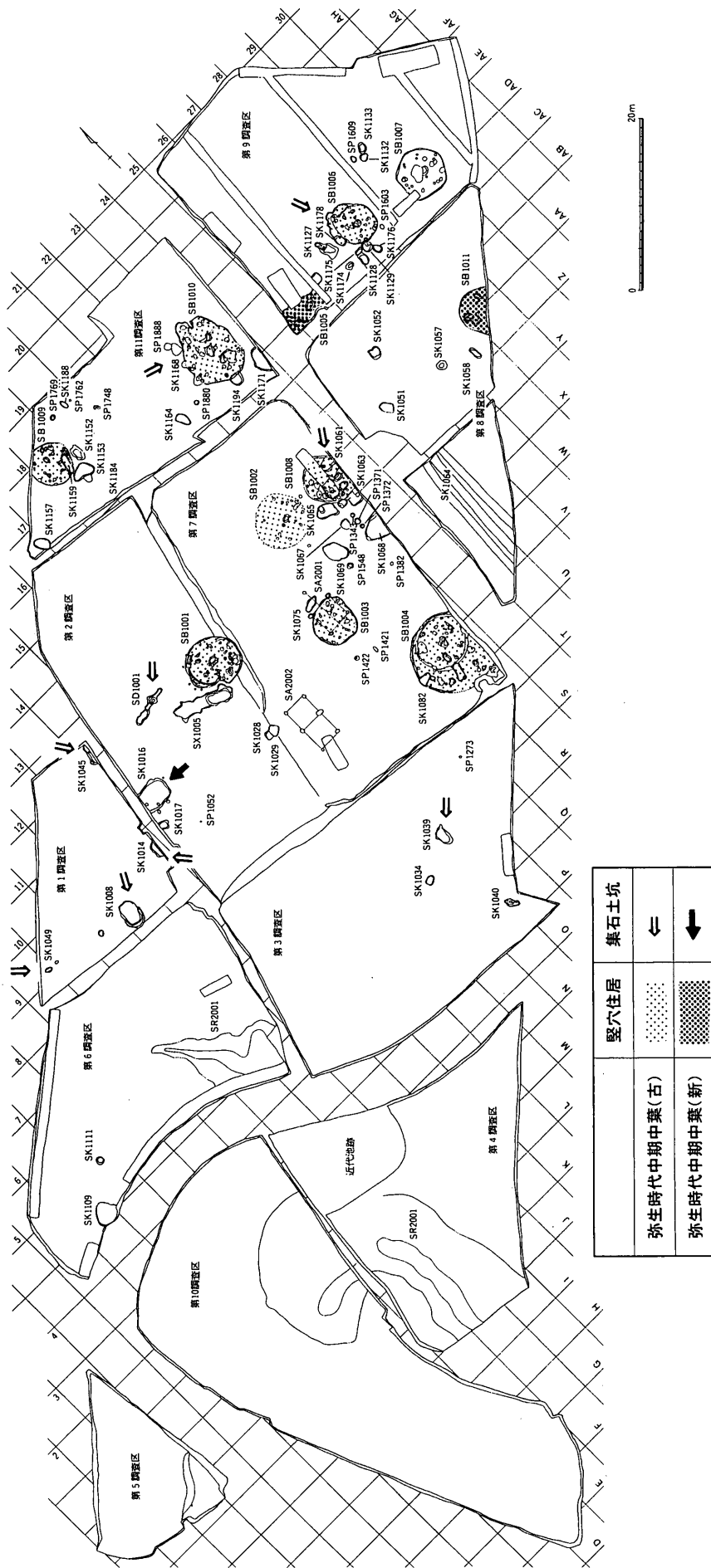


※ST01、10は予備調査時に
出土した土器より判断
されており、正確な
位置不明。

第535図 稲木遺跡C地区遺構配置図



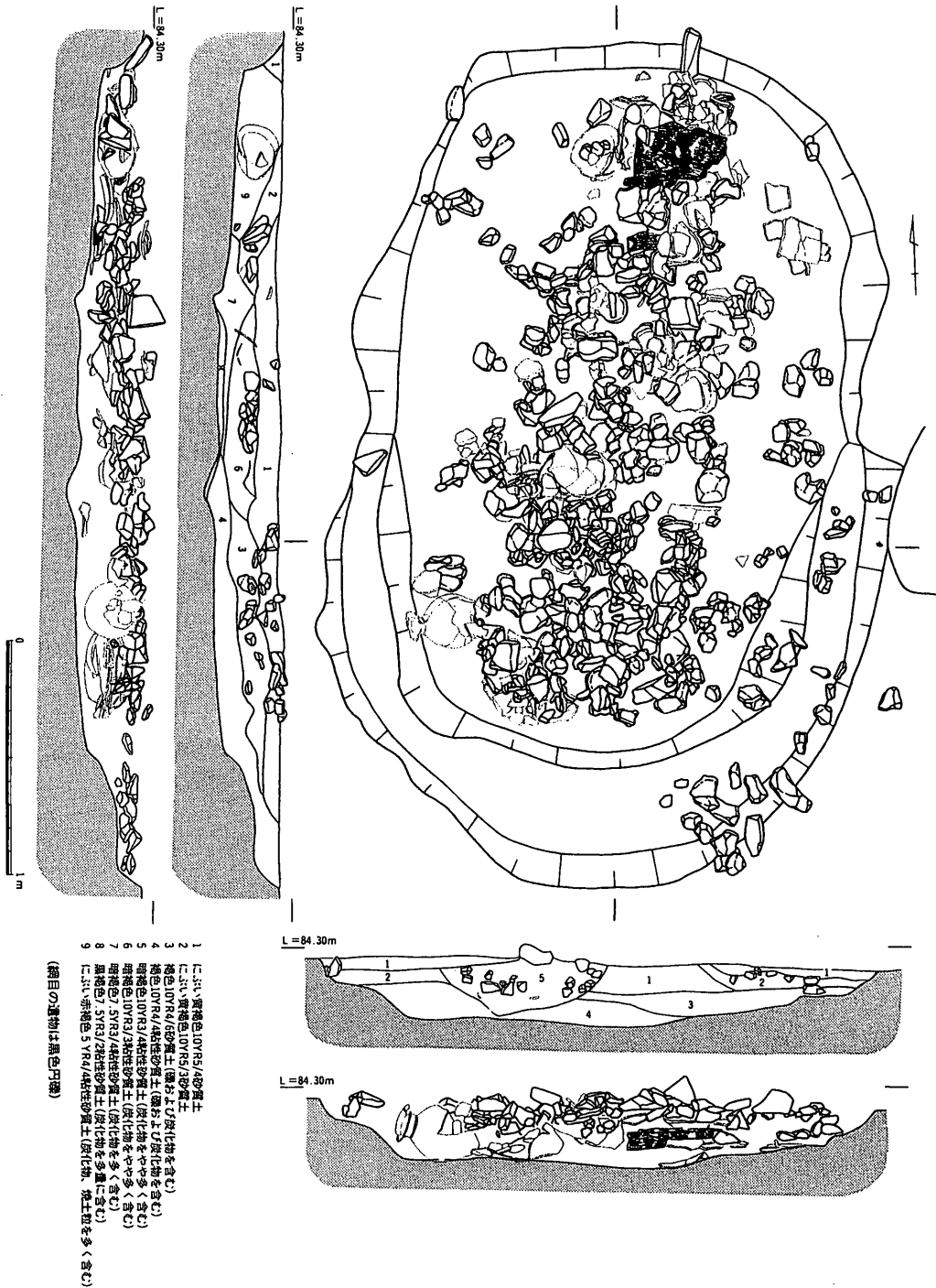
第536図 稲木遺跡C地区第4号集石墓遺物出土状況図 (1/40)



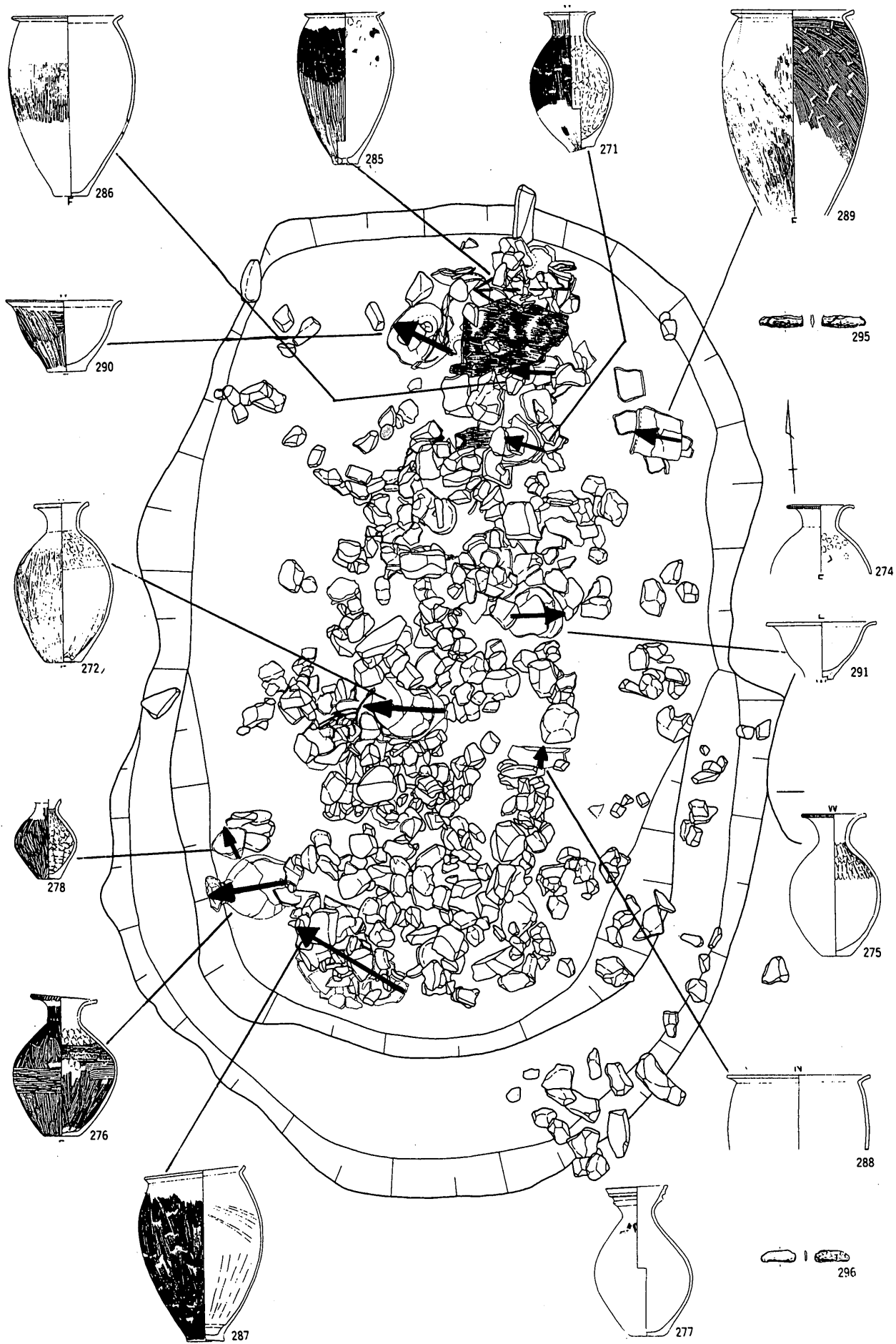
第537図 桜ノ岡遺跡 (I) 遺構配置図 (1/750)

また後述する徳島県土成町の北原遺跡でもマウンド、土坑の2タイプが確認されており、単なる廃棄遺構でないものが見られる点でも共通する。なお地理的にも北原遺跡と同様、成重遺跡と近く当該期の土器（水平口縁の高杯など）、石器（結晶片岩製板状剥片、打製石庖丁など）にはこの地域から搬入されたものが見られる。よって集石遺構と強い関連性を持つと考える。

弥生中期中葉の遺構は竪穴住居群が東側、集石土坑は6基が西側と大きく区分されて分布するが、接



第538図 桜ノ岡遺跡 (I) SK1008平・立・断面図 (1/30)

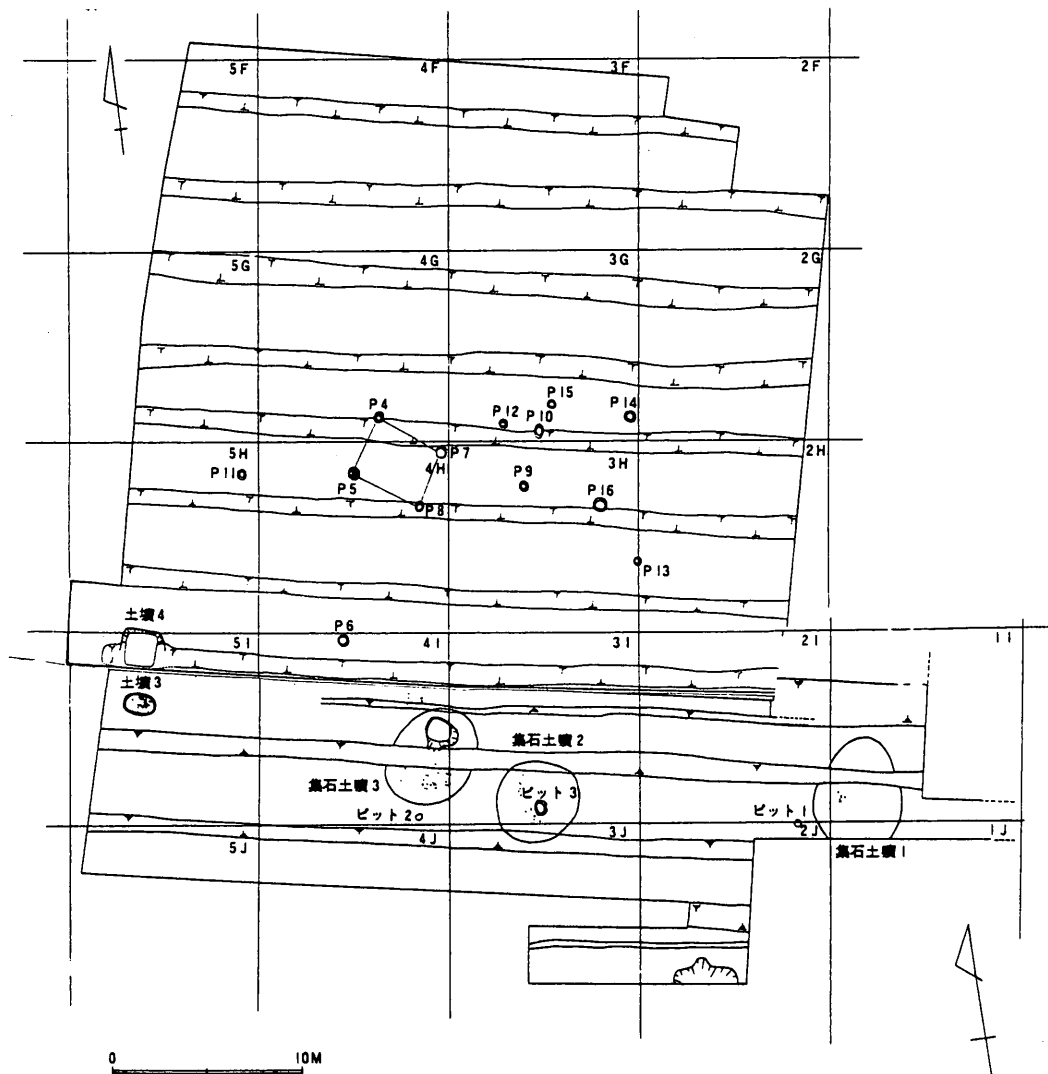


第539図 桜ノ岡遺跡 (I) SK1008遺物出土状況図 (1/20)

した位置にある。また3基の集石土坑は東側の竪穴住居に1基ずつ重複しこれと関連した性格をもつとされる。なお中期後葉の竪穴住居は2基、集石土坑は1基と希薄であるが前代の居住域、集石土坑分布域に位置し、区分は継続される。

特殊性をもつ集石土坑としてSK1008（第538・539図）がある。ここでは床面付近で完形に近い壺、甕、鉢が横位で口縁部を西側に向けて出土し、上位は多量の礫で被覆される。このような出土状況から人為的に配置されたと考えられる。また床面北側が被熱し北端部の埋土中位には炭化材がある。ただし上記以外の土器片も多量に含み、土器溜まり状を呈することは他の集石土坑と同様である。

以上から弥生中期、後期という時期差、遺跡の違いを問わず集石遺構の形成開始時期は居住域の形成と大きな時間差がないこと、両者の分布域は分離されるがその間隔は数十m程度と近接すること、立地的にも同じ地形単位に連続して形成され一般的に廃棄が行われる低位部以外にあるものが多いこと、居住遺構に対し同数程度が形成されたことを窺える。また稲木遺跡、桜ノ岡遺跡でも人為的な土器配置を行う集石遺構が見られ、単なる廃棄行為の痕跡でないものを含むことが確認できる。個別の集石遺構について性格付けできていない現状では結論づけられないが、上記のような居住域との関係は集石遺構に日常生活に伴う遺物が多量に「廃棄」されていることも考慮するとその形成集団にとって集石遺構構築



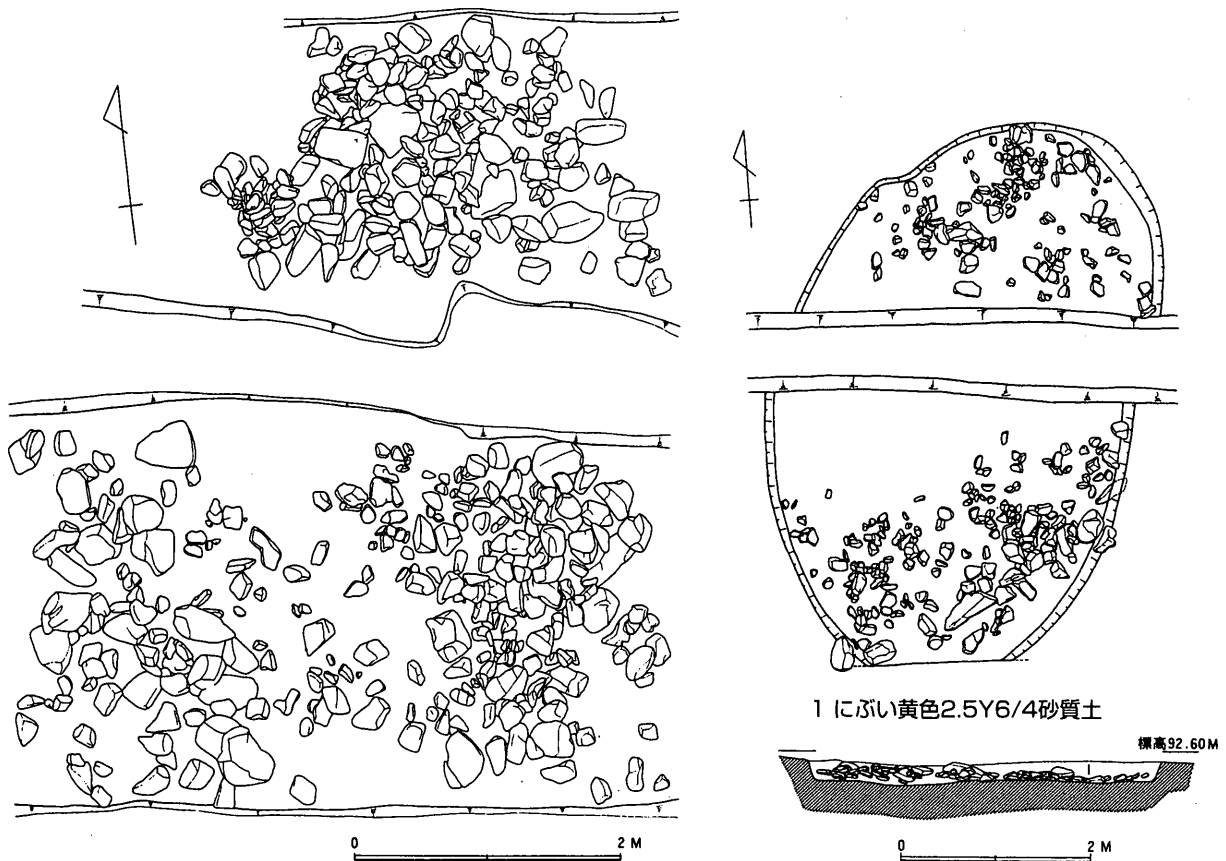
第540図 土成町北原遺跡東地区遺構配置図（1/400）

は比較的的日常性が高い行為であったことを示すと考える。そしてこれは集石遺構の性格とも関連しているよう。

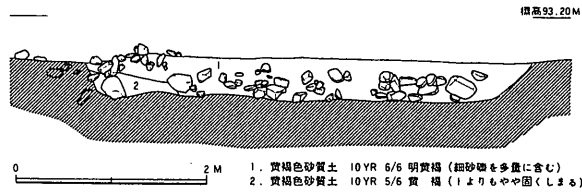
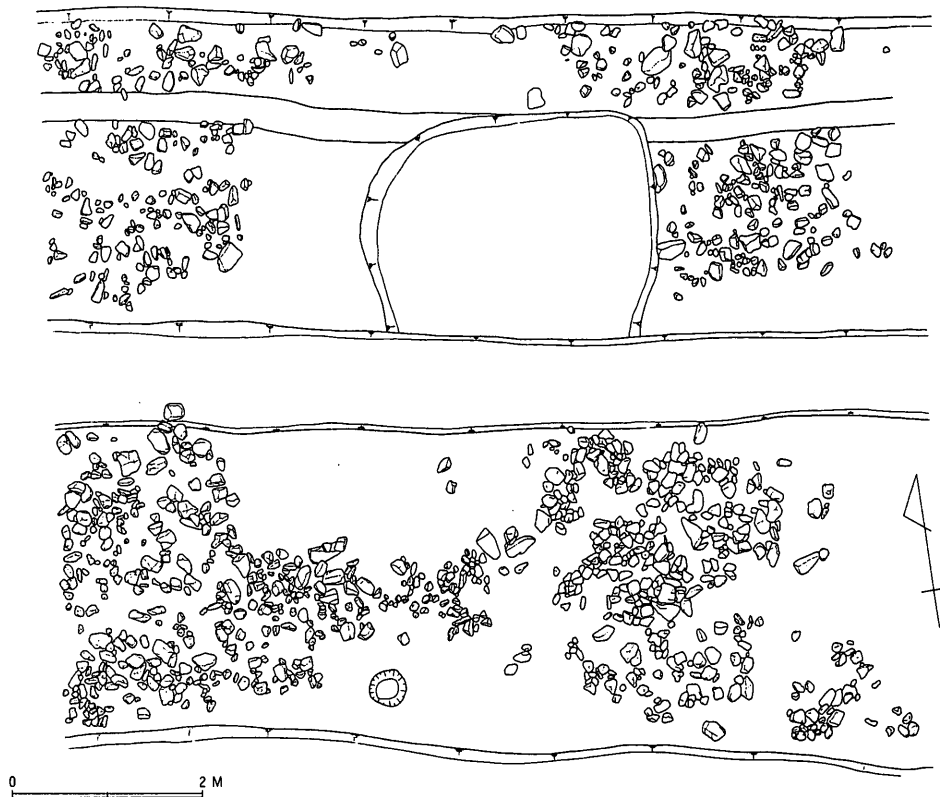
土成町北原遺跡（第540～544図）（註11）は徳島県板野郡に所在する。立地は扇状地の扇央部であり、調査対象地は東、西地区に分かれる。検出遺構には弥生中期後葉～後期初頭の竪穴住居1基、「集石土壙」（註12）3基、「土壙」（註13）、ピットなどがある。竪穴住居は立地、検出数、出土遺物などから単独で存在したと推定されており、集石遺構とは距離が空く。このため集落との関係を論じられる資料ではないが、集石遺構について考えるうえで「集石土壙」、「土壙」の一部が注目される。

まず「集石土壙」であるが、東地区で3基が近接して検出された。著しい削平や攪乱を受けており旧状については不明瞭な点も多いが、構築方法について以下のように推定されている。「まず、地山面に浅い窪み状の土壙を穿つ。次に土壙上に土を盛り上げ、さらにその上に砂岩礫を不規則に積み上げていく。その際に土器片を混入するが、出土した土器片は集石土壙-3の甕棺を除いて、いずれも小破片であり、接合資料にも乏しい。特に集石土壙-3から出土の高杯形土器片は、上下を挟むようにしていた砂岩礫との間に土砂は溜まっておらず、原位置のまま認められる。したがって、集石中に投棄された土器片は、築造当初から破碎されていたものと思われる。」

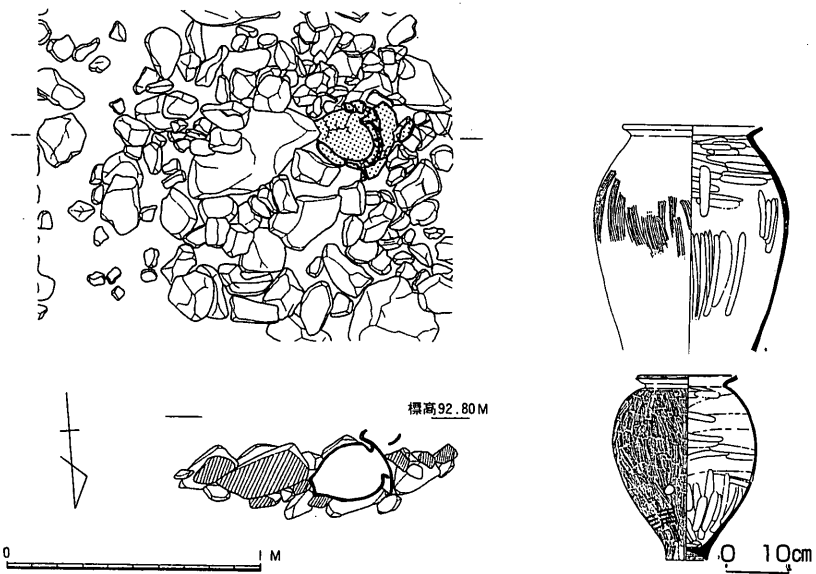
土砂に土器片、礫を混ぜて遺構面上に盛り上げていること、最も残りのよい集石土壙1では隆起した礫群の高さが30～40cmを測ることからマウンドタイプの集石遺構であると考えられる。下部の土坑と上位の集石遺構の関係については集石土壙1で両者の出土遺物に大きな時間差がないこと、調査範囲が



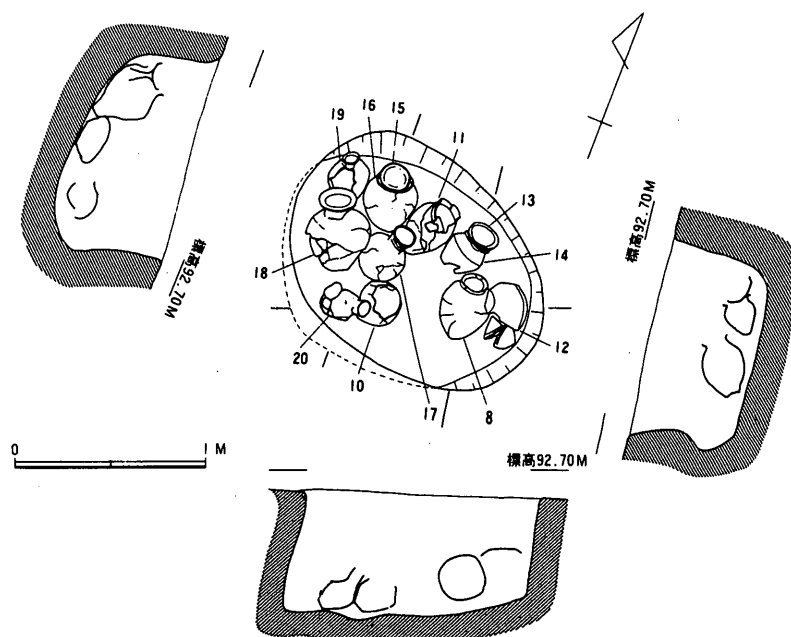
第541図 集石土壙1 上部集石検出状況（1/60）、下部土坑平・断面図（1/80）



第542図 集石土壙3検出状況、断面図 (1/80)



第543図 集石土壙3内土器棺平・断面図、出土遺物 (1/8)



第544図 東地区土壙3平・断面図 (1/40)

狭いものの遺構密度が低い地点で径5 m前後の楕円形と同様な規模、形状の土坑がマウンド下位に存在することから下部遺構の存在を意識して上部遺構が形成された可能性がある。ただこうした特徴より下部の土坑は墓と考えがたい。

先述の集石土壙-3については「甕棺」が注目される。この「集石土壙」については第542図の地山の砂岩礫層空白部分が集石土壙1と同様な遺構の残存部（下部の土坑を意味か?）とされている。その根拠として土坑と同様に土器片が礫層空白部分で多く出土していることが、これと関連し上位の集石遺構の人為性については空白部分の縁辺部で砂岩礫が積み上げられ、「立ち上がり」が認められること、下記の「甕棺」や先述の高杯片が礫群内で出土していることが指摘されている。

「甕棺」は詳細な検出位置が報告書に記載されていないが、この縁辺部の南西部にあり、「礫中に置かれ、上下左右を礫によって固定されていた。」とされる。こうした出土状況から集石遺構に伴うと考えられる。「甕棺」とされる性格については特殊な出土位置であるためそう捉えてよいか、検証する。まず出土状況であるが、「棺」は横位に置かれた完形の甕の口縁部に大型の甕の破片をたてかけ、塞いだ状態で確認された。土器棺であれば前者が身、後者が蓋である。前者は器高30cmを測る。体部には2孔が焼成後に穿たれ、この穿孔が下に向けられている。後者は口縁部を上位に向ける。

四国の弥生時代土器棺墓について集成した研究（註14）を見ると当該期には事例数が乏しいもの存在する。棺身については壺が主体であるが、甕も一定量を占める。埋設角度は横位が多い。規模はやや小振りであるが他地域の事例で確認できる。蓋は完形品やうち欠いた底部、高杯の杯部が多いが、甕の破片を立てかける例もある。（註15）棺身体部の焼成後穿孔は土器棺で一般的に見られる。こうした状況から集石遺構に供献されたのではなく、土器棺であると考えられる。

このように集石土壙-3は集石遺構に墓が伴う事例として評価できる。ただ他の集石遺構において土器棺を伴う例はない。このように集石遺構には木棺墓、土器棺墓といった同時期に見られる定型的な埋葬施設を伴うものが存在するものごく少数に留まる。よって先述のとおり集石遺構は何種類かの性格

を内包し、墳墓遺構はその1つと考えられる。

次に「土壙」であるが土壙3は袋状の断面を呈する。土坑埋土には灰、炭が混じり、焼けた礫も多く含まれるが、土坑の壁は被熱していない。床面付近より完形ないしそれに近い甕5、壺4、鉢1個体が横位で、口縁部をほぼ北向きに揃えて出土した。また2点の高杯（13、15）の杯部を脚部側から甕2点（14、16）に突っ込んでいる。このため人為的に配置されたと見られる。壺（20）は炭化した植物種子で充填されており、土器自体も2次焼成により底部がもろくなっていたためこれに入れて煮沸されたと推定されている。その他の遺物として打製石庖丁1、砥石2、石英の白色礫1がある。

土坑の断面形状、土器内に充填された植物種子から本来は貯蔵穴であった可能性が高い。ただ廃絶後、廃棄土坑に転用されたなら土器を配置し、高杯で蓋をしたものもある状況が説明できないため桜ノ岡遺跡SK1008と同様に特殊性を持つ土坑タイプの集石遺構と考えられる。他の「土壙」にも完形に近い土器、多量の礫などが出土し、床面の被熱、炭化物、焼土が見られる土器溜まり状のものが見られる。これらは桜ノ岡遺跡SK1008以外の集石土坑に類似例がある。よって「土壙」については桜ノ岡遺跡の集石土坑と類似性が強い。

- (註1) 事例として広島県高平遺跡A号墓がある。これは埋葬施設として木棺を使用した配石墓であるが、掘り込み面からの墓壙深度は第1主体が約10cm、第2主体が約20cmしかない。このため木棺を墓壙に据えた段階では遺構面上に飛び出しており、これを配石により被覆したと考えられる。潮見浩他「広島県文化財調査報告」第9集 広島県教育委員会 1971
- (註2) 長崎県佐世保市門前遺跡では弥生時代早期から前期の木棺墓が5基検出されている。このうち1基では蓋板を含めた棺材がほぼ完全な状態で残り、すべてに側板が残っている。側板の高さは20～38cmと短い。なお墓壙の深さについても棺の高さと同程度であり、38cm以下である。この高さについてはほとんど削平を受けていない。未報告の事例であるが、調査担当者である長崎県教育庁佐世保事務所の副島和明氏からご教示を得た。
- (註3) 当初13層に相当する11.9m以下に設定したが棺直上レベルに該当する11.75～11.8mの状況が特に棺付近で上位の遺物により隠れてしまうため変更した。仮に11.9m以下としても棺と関連性を見出せない状況に違いはない。
- (註4) 集石2構築面レベルは北側で約5cm高いため図化された遺物量は木棺がある南側の方が相対的に多い。だが仮に木棺付近の遺物図化を上位5cm分削除しても密集度に差はない。
- (註5) 弥生後期に位置づけられる409はST03の縁辺部に位置し、ST03がこの時期に位置づけられる可能性を示す。だがST03の掘り込み面は事実報告で述べたとおり弥生中期面と考えられる。また出土位置で礫群は頂部がわずかに見える程度であり、内部ではないことから409はST03に伴わないと考える。
- (註6) 集石3、集石1・3付近包含層出土石器の多くが本来は集石1に含まれていたという判断が妥当なら集石1・3付近包含層から出土した石鏃未製品3点、扁平片刃石斧未製品1点と集石3で出土した砥石、磨石・敲石も集石1に伴い、一連の石器製作関連遺物に加えられる可能性がある。
- (註7) 真鍋昌宏「讃岐地域」『弥生土器の様式と編年 四国編』2000
- (註8) 西岡達哉編『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 稲木遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1989
- (註9) 下部で墓の可能性をもつ遺構が検出されたことなどにより「集石墓」として報告されている。これを含む可能性は否定しない。現状では積極的な根拠に乏しいため「」を付けて表現する。理由は以下の3点である。①下部の土坑には規模、形状、深度から墓と考えにくいものも含んでいる。②集石墓とするには上位の集石遺構と下位の土坑（墓）に有機的な

関連を見いだす必要があるが不明瞭である。③土器棺墓10基の検出を集石遺構群が墓域に構築された傍証としているがこれには首肯できない。というのは弥生後期に集落内で土器棺墓群が営まれる例が県内を含めた瀬戸内沿岸地域で広く見られ、これらは5基の竪穴住居群に伴うと考えられるためである。県内の事例では普通寺市旧練兵場遺跡、彼ノ宗遺跡、香南町岡清水遺跡、三木町鹿伏・中所遺跡などがある。なお土坑墓もあるが基数が乏しく土器棺墓とも隣接せずに散在し、墓域を形成していない。

(註10) 湯浅利彦編 『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告3 桜ノ岡遺跡(Ⅰ)』 財団法人徳島県埋蔵文化財センター他 1993

(註11) 林慎二他編 『土成町北原遺跡』 徳島県教育委員会 (1988)

(註12) 後述するとおりマウンドタイプの集石遺構と考えられること、桜ノ岡遺跡の「集石土坑」との混同を避けるため「」を付けた。

(註13) 後述するとおり土坑タイプの集石遺構を含むため「」を付けた。

(註14) 角南聡一郎 「四国地方の土器棺葬」『香川考古』第8号 (2001)

(註15) 四ツ手山遺跡の1号壙棺が該当する。 岡田俊彦 「四国縦断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書」財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター (1984)

第3節 集石遺構について

成重遺跡のⅢ区～Ⅴ区で、最も特徴のある遺構として集石遺構が挙げられる。合計37基の集石遺構が検出されたが、弥生時代中期と後期のものに大別出来る。ここではこれらの集石遺構の特徴とその性格について検討を行う。

(1) 集石遺構の特徴について

検出された集石遺構には次のような特徴がある。

- ①平面的に礫が集中している。
- ②平面形は円形・楕円形が多く、不整形なものも含めてその外部との境界は明瞭である。
- ③平面形は4m前後のものが多い。
- ④大部分が塚状に盛り上がる。
- ⑤高さは概ね60cm以下で、40cm前後のものが多い。
- ⑥明らかに人の手で礫が集められて整えられている。
- ⑦内部は礫と土が混ざっているが、土の割合が多い。
- ⑧礫は表面と内部の上部に多い。
- ⑨礫は圧倒的に砂岩が多く、これに少量の花崗岩を伴っている。
- ⑩被熱赤変した礫を含むものがある。
- ⑪基本的に土器・石器などの遺物を伴うが、大部分は細片・破片である。
- ⑫遺物の出土状況に供献や据えたような状況はなく、集石遺構内で接合関係を持つものは僅かである。
- ⑬出土遺物は基本的に日用品で、特殊な遺物はない。
- ⑭下部に土坑などの遺構を伴うものがある。
- ⑮微高地の縁辺部に立地するものが多いが、中には微高地に立地するものもある。
- ⑯Ⅴ区～Ⅳ区にかけて北東－南西方向に横断するように帯状に分布する一群と、その40～50mほど外側を取り巻くように分布する一群がある。
- ⑰中期の集石遺構と後期の集石遺構が重なっている場合がある。

(2) 弥生時代中期の集石遺構について

弥生時代中期に属する集石遺構は集石1・2・6・18～25・27・29・31～33・35・36の合計18基がある。このうち集石33が中期中葉でも古い段階と考えられ、成重遺跡の集石遺構の中で最も早く築かれたことになる。

中期の集石遺構はその属性から以下のように分類できる。

- (a) 下部遺構を伴うもの・・・集石18・21・24・33
- (b) 遺構を伴うもの(柱穴)・・・集石29
- (c) 立石を伴うもの・・・集石31
- (d) 礫と土を盛り上げただけのもの・・・集石1・19・20・22・23・25・32・35・36
- (e) 頂部だけに礫があるもの・・・集石32

集石6・27については、内部調査を行っていないためにその内容は不明である。

(3) 弥生時代後期の集石遺構について

弥生時代後期に属する集石遺構は集石3・5・7・17・26・28・30・34・37の19基がある。しかしこのうちの集石8・17・26はその上部を検出しただけに留まっており、確実に後期であるとは言い切れない部分があるものである。

後期の集石遺構はその属性から以下のように分類できる。

- (a) 下部遺構を伴うもの・・・集石5
- (b) 土坑状に掘り窪めた中に礫と土を盛り上げるもの・・・集石28
- (c) 頂部に巨石を伴うもの・・・集石4・5
- (d) 礫と土を盛り上げただけのもの・・・集石30・34・37
- (e) 頂部だけに礫があるもの・・・集石7
- (f) 中期の集石遺構と重なるもの・・・集石3・5・28・30
- (g) 礫の量は少ないが遺物の量は多いもの・・・集石34・37

この他に集石4・7・17・26については、内部調査を行っていないためにその内容は不明である。

(4) 集石遺構の性格について

上記のように、集石遺構には多様な特徴が見られるが共通している部分も多い。異なる要素の第1は下部遺構の有無である。内部調査を行った22基のうち中期のもので4基、後期のもので1基については下部遺構が認められた。中期の集石遺構に下部遺構を伴うものが多くなっている。中期の集石遺構について見ると、集石33以外の集石18・21・24の下部には土坑があり、いずれもその集石遺構の盛土に覆われており、検出時にはその外形は見る事が出来ない状態である。

各遺構の説明の部分で詳しく述べているが、集石18と集石24下部のSK01についてはそれぞれの掘り込み面や盛土の状況から集石遺構に伴い、埋葬施設の可能性を指摘した。集石24下部のSK01については箱形の形状で、その規模と木質の痕跡と考えられるものの存在から木棺墓の可能性もある。これに対して集石18の下部土坑SK01は、長さが1.3mと短めで掘り込みの傾斜が緩やかである。しかし埋土には埋め戻し土があることや、この土坑の上部に礫が集中していること、盛土も土坑を覆うように盛り上げていることから、この土坑に特別な意味を持たせて集石遺構を構築している。このような場合、この土坑は埋葬施設と考えるのが自然であろう。集石21の下部土坑は長さ1.35m、幅1.0m前後あるものの深さが17cmと浅いものである。しかしこの土坑だけをまず覆い隠す盛土が2層あり、土坑が隠れた段階で全体に塚状に盛り上げて構築しているものである。この場合も集石18と同様に土坑に特別な意味を持たせて、土を厚く覆い被せている。この集石21の土坑も埋葬施設と考えるのが妥当かも知れない。浅いものであっても上部に土をかけて埋葬部分を覆うことによって墓としての機能は十分に持てよう。

次に集石33とその下部遺構SX12についてである。SX12は4.6m×2.4～4.1mの大形の土坑状の遺構で1mほどの深さをもつ。全体の形状から見ると集石33から大きくはみ出すが、中心の最も深くなる部分は集石33の中に収まっている。SX12は3回の掘削が認められ、焼土・炭化物の存在とともに底部自体も焼けている部分があることから、この場での火の使用が考えられる。そして3回の使用の後に埋められ、整地した後に集石33がSX12の中心部分の上部に火所を封印するように築かれている。集石遺構に被熱赤変した礫が混じることは、火の使用後にそこから取り出された礫が使用されたと考えられないだろうか。この場合の集石33は封印し、その際の儀礼を司る場としての意味があったのではなかろうか。

参考になるのはV区SX11で、SX11自体は井戸の可能性が高いが、ここでも底部で火の使用が認められ、井戸の廃絶時の祭祀行為と考えられるものである。そしてSX11でも最上層に礫群が認められている。この礫群は集石遺構のように盛り上がってはいないが、SX11を封印するような役目を担っている可能性が高く、集石33との共通点が認められそうである。

このように考えると、集石遺構の性格の一つには埋葬施設や火所、あるいは井戸などを覆い隠す=封印するという役割があると考えられよう。もちろん埋葬施設を覆う場合は、集石遺構を含めた総体として墳墓遺構と言えらるであろうし、覆い隠すという意味の中には保護するという意味も含まれてこよう。また集石32と重なるV区ST04・05は集石32に直接伴わないと考えたが、この封印するという意味においてはあながち無関係ではないのかも知れない。

次に盛土の上部から小穴をもつ集石29と下部に立石を持つ集石31について検討する。集石29が一辺1.4mの隅丸方形、集石31が直径0.7mの円形であり、両者とも非常に小規模である。これだけ小さいと先述のように何かを覆い隠すには不適である。集石29の小穴はその規模から柱穴と考えるのが妥当である。すると集石遺構の中央部に1本の柱が立っていたことになる。この柱穴は集石29の構築面より下部に至っており、しっかりとしたものである。集石29を構築後に柱穴を穿ったとすれば礫が邪魔をして掘削しにくいことから、まず柱穴を穿ち柱を立てた後に、そこを中心にして集石遺構を築いたと考えるほうが自然である。一方、集石31も立石を中心にして集石遺構が築かれている。集石31の頂部では立石は見え、立石を据えてからその周囲に集石遺構を築いたことが分かる。この両者の場合は柱と立石に一義的な意味があり、集石遺構はそれらを支えることを含めた副次的な意味をもつものであると考えられる。この柱や立石の意味を象徴=シンボルと考えるならば、縄文時代的な遺構となろう。

では、上記のような下部遺構や関連する施設などを持たない、単に土と礫を塚状に盛り上げただけの集石遺構の性格は何であろうか。中期・後期を含めて全体を調査したもののうちの15基がこのような集石遺構である。特殊な遺物を含まず、日用品である土器・石器の破片を多く含むことから廃棄遺構とも考えられる。しかし廃棄遺構であれば形を整えることの意味が分からないし、礫も廃棄したことになる。

集石遺構を作り出す礫は一部に砥石や台石、敲石などの石器を含むが大部分が自然のものである。遺構を掘削した際に出たものを廃棄した可能性はあるが、Ⅲ区～Ⅴ区にかけてこれだけの礫を含む遺構面は少なくとも調査区内では認められない。また各遺構の掘削面に礫が露出している例は無いに等しい。湊川の氾濫や洪水による砂礫の流出があるかもしれない。Ⅴ区の西端部に弥生時代中期の遺構面を壊す流路があるが、位置的には調査区に僅かに係る程度であり、近接する遺構の埋土には礫は稀少で、また集石遺構は少ない。頻繁に氾濫や洪水の痕跡が認められるのは近世以降である。またⅣ区とⅤ区の境部分を中心として低地部分がある。この部分を利用して水田を作り、その際に出た礫類を廃棄したという考えもあろう。しかし調査によっても水田土壌は認められなかったし、この低地部分のⅣ区・Ⅴ区SD01は集石遺構が形成される弥生時代中期中葉には埋没しており、埋没後に中期中葉であるⅣ区SH03～05、Ⅴ区SB01～03が構築されていることから水田の存在は考えにくい。従ってここから礫が産出したとは考えにくい。以上のことから、集石遺構に含まれる礫は、集石遺構を構築する際にその場に持ち込まれたと考えるのが妥当である。

集石遺構を構築するために礫を持ち込み、土とともに塚状に盛り上げたことになる。この時に日用品である土器や石器の破片が混じることになる。供献したり、その場で意図的に破碎した状況は認められ

ない。土と礫を搬入する際に混入したにしては遺物の量が多い。その集石遺構という場に「廃棄」したような状況である。しかし人為的に形を整えていることから単なる廃棄遺構と考えるのは早急である。あるいはそのような遺物を混ぜることに意味があるのかもしれないが、その意味は不明と言わざるを得ない。

そうすると下部に遺構や付属する施設等を持たない集石遺構は、高低に差はあるものの塚状に盛り上げて礫で覆うということ、あるいはそのように構築された集石遺構という記念物そのものに意味があるのかもしれない。立柱や立石のように集石遺構そのものにも象徴としての機能があったのだろうか。後期の集石遺構のなかで集石3・5・28・30の4基が中期の集石遺構の上に重なって構築されている。またⅣ区の中央部分では後期の集石7～14が検出されたが、隣接する集石6が少し低い部分で検出されたことから、集石7～14の下にはあるいは中期の集石遺構が存在しているかもしれない。すると後期の集石遺構が中期の集石遺構と重なっていることは、あながち偶然ではなく何か意味がありそうである。そこに中期の集石遺構があったということ、あるいは集石遺構が築かれるべき場所であるということが意識されているのかもしれない。このように下部遺構や関連する施設などを持たない集石遺構は形を整えて盛り上げていることから、何かの目的のために作られたことは確かである。しかしその明確な目的は現状では不明と言わざるを得ない。

以上のように、成重遺跡で検出した集石遺構は(1)で示したような特徴をもちながらも、その多様な内容の集合体と言わざるを得ない。

(5) 集石遺構の分布状況について

すでに第1節の遺構の変遷のなかで述べたが、集石遺構の分布には特徴が見られる。つまりⅤ区南東部からⅣ区北西部にかけて北東-南西方向に、全長100mの部分に帯状に分布している点が挙げられる。37基の集石遺構のうち21基がこの部分に築かれている。Ⅳ区の南西部には弥生時代中期中葉の集石遺構が並び、中央から北東にかけては後期の集石遺構が並ぶ。Ⅴ区の部分は主に後期の集石遺構がある。中期・後期全体で見るとこの帯状の分布ラインは幅13m前後と一定になっており、規則的である。最終的な集石遺構は各单位ごとに分かれたが、その検出時には礫が一面に広がり第545図に示したような状況である。後期の集石7～14の下部に中期の集石遺構がある可能性もあるが、現状では後期の集石遺構はこのライン上で中期の集石遺構を避けるように築かれている。集石遺構は集石6の北東側の調査区外に続いてゆくかは不明である。集石6の南東側に集石4が隣接しているが、あるいはこの部分で集石ラインが屈曲してⅢ区集石1～3・5へと続いて行くのかもしれない。

この集石分布ラインを仮に第1集石群とすると、(1)の⑯でも指摘したように第1集石遺構群の外側のⅤ区北側から西側にかけて、40～50mほどの間隔を開けて集石28～37の合計10基の集石遺構が分布している。この一群を第2集石遺構群とする。この第2集石遺構群は第1集石遺構群ほど分布状況は密ではない。そして第2集石遺構群に属する集石遺構は第1集石群のものより一回り小さいものが多い。中には先述した集石29・31のように小型のものもあり立柱や立石を伴っている。また第1集石遺構群との関連を考えたⅢ区の集石1～3・5は第1集石遺構群から40mほど離れており、第1集石遺構群と第2集石遺構群との間隔とほぼ同じである。第1集石遺構群を中心に考えると外側にあるという意味では第2集石遺構群に含めてもよいのかもしれない。そして第2集石遺構群に含まれる後期の集石遺構はⅢ区部分を含めても中期の集石遺構に重なって構築されているという共通点もある。



第545図 集石遺構検出状況図 (1 / 400)

第1集石遺構群・第2集石遺構群ともに立地としては微高地の縁辺部に位置している。Ⅳ区とⅤ区の境部分が調査区全体として見れば低地部分になるが、集石遺構が形成される中期中葉には埋没している。そして低地部分そのものには集石遺構は形成されない。また第2集石群の中には集石35・36のように微高地の部分に形成されている集石遺構もある。

以上のように集石遺構はかなり規則的な配置で構築されていることがわかる。時代的にはかなり隔たりのあるが、縄文時代の「環状列石」を彷彿させるようである。

第4節 成重遺跡の評価

これまで報告してきたように、成重遺跡は弥生時代から近世にかけての集落跡である。なかでも弥生時代中期・後期には遺構・遺物ともに豊富な内容を示している。ここでは弥生時代を中心に成重遺跡の調査結果の意義などをまとめて、報告書の結びとする。

集落を構成する中心となる竪穴住居は弥生時代中期のもので15棟、すでに『成重遺跡Ⅰ』で報告した国道318号より東側の調査区であるⅠ区・Ⅱ区で、弥生時代中期末～後期初頭としたものを含めて6棟ある。成重遺跡全体で21棟の弥生時代中期の竪穴住居が検出された。また後期の竪穴住居は4棟、東側の調査区であるⅠ区・Ⅱ区で10棟、合計14棟が検出されている。さらに弥生時代中期の掘立柱建物跡が9棟とⅠ区・Ⅱ区の中期末～後期初頭の1棟を含めて合計10棟ある。さらに後期の掘立柱建物跡が1棟とⅠ区・Ⅱ区の7棟を加えて8棟検出されている。弥生時代を通して遺跡全体で35棟の竪穴住居と18棟の掘立柱建物跡が検出されたことになる。この数字をみても成重遺跡が県下でも有数の集落跡であることが分かる。そしてこれらの住居は中期・後期とも1箇所集まるのではなく、2～3棟のまとまりを単位として遺跡内に点在している様子が伺える。範囲を規定するのは難しいが、水田経営における耕地や水利などを紐帯としてこれらの基本単位が幾つか集まって集落を形成していたと考えられ、遺跡内で弥生時代における集落のあり方の一端を示せたことは意義深い。

上記のような集落のなかに、成重遺跡の最大の特徴である集石遺構が築かれている。この集石遺構は弥生時代中期のものが18基、後期のものが19基の合計37基に及ぶ。その分布状況はすでに述べたように帯状に配列され、その検出時には夥しい量の礫が一定の幅でつながっている状況であった。そしてこれらの集石遺構は同時期の多数の他の遺構を壊したり壊されたりすることなく構築されている。集落の中で集石遺構を構築する場所というのが認識されていたと考えられるのである。

この集石遺構は同じような特徴をもちながらも多様な内容をもったものが帯状に並び、「環状列石」のような一つの集合体になっている。これら集石遺構群の中に墳墓と考えられるものが5基ある。特にその構造が詳細に調査されたⅢ区集石1と集石2は下部の埋葬施設も明瞭である。この2基はその表面を覆う礫は他の集石に比べて多く、塚状の盛り上がりも顕著である。この上部の墳丘を多数の礫で覆う墳墓は、後の古墳時代前期に香川県の特徴となる積石塚古墳を彷彿させる。この積石塚古墳は古墳時代初頭に突如として出現したものであるが、その起源は外來說・自生説があり決着はついていない。通常古墳の起源が弥生時代後期の墳丘墓に求められることから、積石塚古墳の起源も弥生時代に求められる可能性は高い。このことから成重遺跡の集石遺構の中でも特にⅢ区集石1と集石2は、積石塚古墳の起源を考えるうえで重要となる。類似した墳墓は善通寺市稲木遺跡、徳島県桜ノ岡遺跡、徳島県足代東原遺跡などが知られている。

そして墳墓と考えられる集石遺構の周囲に隣接してその他の集石遺構が築かれている。重要なことはこれらの集石遺構がそれだけで単独であるのではなく、住居がある集落の中に築かれていることである。先に見た積石塚古墳が首長の墓で、集落と離れた山頂や丘陵上に築かれて威厳を見せているのとは対照的である。墳墓以外の集石遺構の性格・内容としては立石や立柱をともなう象徴＝シンボルの意味合いをもつもの、被熱遺構を塞ぐものがある。この被熱遺構を塞ぐ集石遺構には、廃絶した井戸の最上部に集石遺構に似た礫群が見られることから、封印する際の儀礼の場の可能性を考えた。塚状に盛り上がるだけで他に施設等を持たない集石遺構については、先に内容は不明であるが何か目的をもって構築されていることは確実で、あるいはそれ自体が象徴としての意味をもつ可能性を指摘した。この集石

遺構が墳墓や立石・立柱をともなう象徴的なもの、封印に伴う儀礼的なものと並んで構築されているということは、これらと共通する祭祀的な意味をもっていると考えられる。

集石遺構はその特徴のひとつとして遺物が多く含まれることがあげられる。しかもその遺物は細片が多く、その場で供献したような状態ではない。すると他の場所で割れて、あるいは意図的に割ったのかかもしれないが、細片となったものを礫と共に集石遺構を構築する場所に持ち込み、それらを整形して作り上げたのである。そしてそのような祭祀的記念物である集石遺構を構築する場所は、儀礼の場でもあっただろうし、集落の中で聖地と認識されていたと考えられる。また先に第1集石遺構群、第2集石遺構群とした2列の集石遺構群の列の間の部分には、通常の住居とは考えにくい棟持柱をもった大型の掘立柱建物跡が3棟検出されている。この掘立柱建物跡が祭祀・儀礼の場のひとつで、あるいはここで使用して破砕された土器が集石遺構に持ち込まれたのかもしれない。仮に集石遺構が廃棄遺構としても、それは日常生活における廃棄ではなく、祭祀行為に伴う廃棄と考えられよう。集石遺構に伴う礫には被熱赤変しているものも含まれており、祭祀行為の中で火を使用した可能性がある。墳墓は死者を祭る鎮魂の場である。集石遺構の性格の一つに塞ぐという意味を考えたが、まさに魂を塞ぐという意味があるのであろう。そして他に施設を持たない集石遺構は祭祀行為に伴う、あるいはその結果としての構築物で、いわば「もがり塚」のようなものである。

以上のように成重遺跡では堅穴住居などの日常生活の場と、墳墓を含む集石遺構の祭祀・儀礼的な場が同時に検出されたことになる。そしてこれらの場が集落の中で隣り合わせになっているのである。つまり二つの場に象徴される現象は表裏一体のもので、人間そのものを表しているようである。さらに一連の集石遺構とそこから伺える精神生活は縄文時代的ですからある。日常生活では堅穴住居の構造や土器などから弥生時代のものになりながらも、その心のうちでは先祖代々の縄文時代的な流れが残っているというのは考えすぎであろうか。いずれにしてもひとつの遺跡の中でこれだけのことが復元できる例はまさに稀少である。このことからこの集石遺構の構築された中心部分が現状で保存されたことは非常に意義深いことで、文化財保護に携わるものとしてはこのうえもない喜びである。

記録保存と引き換えに消え行く遺跡の代償として我々は、多くの考古学的事実を知ることができ、歴史を再構築することができる。このような中で成重遺跡の重要性を理解していただき、現状保存という英断をしていただいた日本道路公団四国支社に感謝したい。さらに困難な発掘調査を支えて下さった地元の方々の協力を忘れることは出来ない。こうしたことがかつて成重遺跡に暮らした弥生人たちにも大いなる鎮魂となろう。

地区	旧調査区	旧遺構面	旧遺構名	報告書遺構名	備考
Ⅲ	E 1	2面	SD02	SD03	
Ⅲ	E 2	2面	SK01	SK01	
Ⅲ	E 2	2面	SK02	SK02	
Ⅲ	E 2	2面	SK03	SK03	
Ⅲ	E 2	2面	SK04	SK04	
Ⅲ	E 2	2面	SK05	SK05	
Ⅲ	E 2	2面	SK06	SK06	
Ⅲ	E 2	2面	SK07	SK07	
Ⅲ	E 2	2面	SK08	SK08	
Ⅲ	E 2	2面	SK09	SK09	
Ⅲ	E 2	2面	SK10	SK10	
Ⅲ	E 2	2面	SK11	SK11	
Ⅲ	E 2	2面	SK12	SK12	
Ⅲ	E 2	2面	SK13	SK13	
Ⅲ	E 2	2面	SP02	SK14	
Ⅲ	E 2	2面	SP04	SK15	
Ⅲ	E 2	2面	周溝墓 1	SX01、SX-D01	周溝SD01含む
Ⅲ	E 2	2面	周溝墓 2	SX02、SX-D02	周溝SD02含む
Ⅲ	E 1	2面	集石 1	集石 1、集石 3	
Ⅲ	E 1	2面	集石 2	集石 2、集石 5	
Ⅲ	E 1	2面	集石 1	ST01	
Ⅲ	E 1	2面	集石 1	ST02	
Ⅲ	E 1	2面	集石 2	ST03	
Ⅳ	F 2 東橋脚部	2面	SH01	SH01	
Ⅳ	F 2 東橋脚部	2面	SH02	SH02	
Ⅳ	F 2 西橋脚部	2面	SH01	SH03	
Ⅳ	F 2 西橋脚部	2面	SH02	SH04	
Ⅳ	F 2 西橋脚部	2面	SH03	SH05	
Ⅳ	F 1	2面	SH01	SH06	
Ⅳ	F 1 - 2 西橋脚部	2面	SD01	SD01	
Ⅳ	F 1	2面	SK01	SK01	
Ⅳ	F 1	2面	SK02	SK02	
Ⅳ	F 1	2面	SK03	SK03	
Ⅳ	F 1	2面	SK04	SK04	
Ⅳ	F 1	2面	SK05	SK05	
Ⅳ	F 1	2面	SK06	SK06	
Ⅳ	F 1	2面	SK07	SK07	
Ⅳ	F 1	2面	SK08	SK08	
Ⅳ	F 1	2面	SK09	SK09	
Ⅳ	F 1	2面	SK10	SK10	
Ⅳ	F 1	2面	SK11	SK11	
Ⅳ	F 1	2面	SK12	SK12	
Ⅳ	F 1	2面	SK13	SK13	
Ⅳ	F 1	2面	SK14	SK14	
Ⅳ	F 1	2面	SK15	SK15	
Ⅳ	F 1	2面	SK16	SK16	
Ⅳ	F 1	2面	SK17	SK17	
Ⅳ	F 1	2面	SK18	SK18	
Ⅳ	F 1	2面	SK19	SK19	

第5表 新旧遺構名対照表 (1)

地区	旧調査区	旧遺構面	旧遺構名	報告書遺構名	備 考
Ⅳ	F 1	2面	SK20	SK20	
Ⅳ	F 1	2面	SK21	SK21	
Ⅳ	F 1	2面	SK22	SK22	
Ⅳ	F 1	2面	SP01	SK23	
Ⅳ	F 1	2面	SP02	SK24	
Ⅳ	F 1	2面	ST01	ST01	
Ⅳ	F 1	2面	周溝墓 1	SX01、SX01-D01、 SX01-K01	周溝SD01含む
Ⅳ	F 1	2面	周溝墓 2	SX02、SX02-D02、 SX02-K02	周溝SD02含む
Ⅳ	F 1	2面	SX01	SX03	
Ⅳ	F 1	2面	SX02	SX04	
Ⅳ	F 1	2面	中央集石群	旧 F 1 区集石群	
Ⅳ	F 2 西橋脚部	2面	集石群	旧 F 2 区集石群	
Ⅳ	F 1	2面	集石 4	集石 4	
Ⅳ	F 1	2面	集石 6	集石 6	
Ⅳ	F 1	2面	集石 7	集石 7	
Ⅳ	F 1	2面	集石 8	集石 8	
Ⅳ	F 1	2面	集石 9	集石 9	
Ⅳ	F 1	2面	集石 10	集石 10	
Ⅳ	F 1	2面	集石 11	集石 11	
Ⅳ	F 1	2面	集石 仮 12	集石 12	
Ⅳ	F 1	2面	集石 仮 13	集石 13	
Ⅳ	F 1	2面	集石 仮 5	集石 14	
Ⅳ	F 2 西橋脚部	2面	集石 19	集石 19	
Ⅳ	F 2 西橋脚部	2面	集石 20	集石 20	
Ⅳ	F 2 西橋脚部	2面	集石 21	集石 21	
Ⅳ	F 2 西橋脚部	2面	集石 22	集石 22	
Ⅳ	F 2 西橋脚部	2面	集石 23	集石 23	
Ⅳ	F 2 西橋脚部	2面	集石 24	集石 24	
Ⅳ	F 2 西橋脚部	2面	集石 25	集石 25	
V	G 1	2面	SH01	SH01	
V	G 1	2面	SH02	SH01 (古)	
V	G 3	2面	SH01	SH02	
V	G 3	2面	SH03	SH03	
V	G 3	2面	SH04	SH04	
V	G 3	2面	SH05	SH05	
V	G 6・8	3面	SH01	SH06	
V	G 6・8	3面	(SH02)	SH07	
V	G 7	3面	SH03	SH08	
V	G 7	3面	SH02	SH09	
V	G 7	3面	SH04	SH10	
V	G 7	3面	SH01	SH11	
V	G 3	2面	SH02	SH12	
V	G 4	2面	SH01	SH13	
V	G 1	2面	SB01	SB01	
V	G 1	2面	SB02	SB02	
V	G 1	2面	SB03	SB03	
V	G 1	2面	SB04	SB04	

第6表 新旧遺構名対照表 (2)

地区	旧調査区	旧遺構面	旧遺構名	報告書遺構名	備考
V	G 1	2面	SB05	SB05	
V	G 1	2面	SB06	SB06	
V	G 4	3面	SB01	SB07	
V	G 7	3面	SB01	SB08	
V	G 7	3面	SB02	SB09	
V	G 4	2面	SB01	SB10	
V	G 1	2面	SD09	SD01	
V	G 4	3面	SD01	SD02	
V	G 4	3面	SD02	SD03	
V	G 4	3面	SD03	SD04	
V	G 4	3面	SD04	SD05	
V	G 4	3面	SD05	SD06	
V	G 4	3面	SD06	SD07	
V	G 4	3面	SD08	SD08	
V	G 1	2面	SD13	SD09	
V	G 1	2面	SD10	SD10	
V	G 1	2面	SD11	SD11	
V	G 1	2面	SD12	SD12	
V	G 3	2面	SD09	SD13	
V	G 3	2面	SD08	SD14	
V	G 7	3面	SD01	SD15	
V	G 7	3面	SD02	SD16	
V	G 7	3面	SD03	SD17	
V	G 7	3面	SD04	SD18	
V	G 7	3面	SD06	SD19	
V	G 7	3面	SD07	SD20	
V	G 7	3面	SD08	SD21	
V	G 4	2面	SD03	SD22	
V	G 1	2面	SD04	SD23	
V	G 4	3面	SK01	SK01	
V	G 4	3面	SK02	SK02	
V	G 4	3面	SK03	SK03	
V	G 4	3面	SK04	SK04	
V	G 4	3面	SK05	SK05	
V	G 4	3面	SK06	SK06	
V	G 4	3面	SK08	SK07	
V	G 4	3面	SK09	SK08	
V	G 1	2面	SK09	SK09	
V	G 1	2面	SK10	SK10	
V	G 1	2面	SK11	SK11	
V	G 1	2面	SK12	SK12	
V	G 1	2面	SK13	SK13	
V	G 1	2面	SK14	SK14	
V	G 1	2面	SK15	SK15	
V	G 1	2面	SK16	SK16	
V	G 1	2面	SK17	SK17	
V	G 1	2面	SK18	SK18	
V	G 1	2面	SK19	SK19	
V	G 1	2面	SK05	SK20	
V	G 1	2面	SK06	SK21	

第7表 新旧遺構名対照表 (3)

地区	旧調査区	旧遺構面	旧遺構名	報告書遺構名	備考
V	G 3	2面	SK01	SK22	
V	G 3	2面	SK02	SK23	
V	G 3	2面	SK03	SK24	
V	G 3	2面	SK04	SK25	
V	G 3	2面	SK05	SK26	
V	G 3	2面	SK06	SK27	
V	G 3	2面	SK07	SK28	
V	G 3	2面	SK08	SK29	
V	G 3	2面	SK09	SK30	
V	G 3	1面	SK09	SK31	
V	G 3	2面	SK10	SK32	
V	G 3	2面	SK11	SK33	
V	G 3	2面	SK12	SK34	
V	G 3	2面	SP03	SK35	
V	G 3	2面	SP04	SK36	
V	G 7	3面	SK01	SK37	
V	G 7	3面	SK02	SK38	
V	G 7	3面	SK03	SK39	
V	G 7	3面	SK05	SK40	
V	G 7	3面	SK07	SK41	
V	G 6・8	3面	SK01	SK42	
V	G 6・8	3面	SX02	SK43	
V	G 1	2面	SP03	SP01	
V	G 1	2面	SP19	SP02	
V	G 1	2面	SP20	SP03	
V	G 1	2面	SP21	SP04	
V	G 1	2面	SP23	SP05	
V	G 1	2面	SP24	SP06	
V	G 1	2面	SP25	SP07	
V	G 1	2面	SP26	SP08	
V	G 1	2面	SP27	SP09	
V	G 1	2面	SP28	SP10	
V	G 1	2面	SP29	SP11	
V	G 1	2面	SP30	SP12	
V	G 1	2面	SP31	SP13	
V	G 1	2面	SP34	SP14	
V	G 1	2面	SP35	SP15	
V	G 1	2面	SP36	SP16	
V	G 1	2面	SP37	SP17	
V	G 4	3面	SP02	SP18	
V	G 4	3面	SP03	SP19	
V	G 4	3面	SP09	SP20	
V	G 4	3面	SP21	SP21	
V	G 4	3面	SP25	SP22	
V	G 7	3面	SP27	SP23	
V	G 7	3面	SP31	SP24	
V	G 7	3面	SP32	SP25	
V	G 7	3面	SP54	SP26	
V	G 7	3面	SP55	SP27	
V	G 7	3面	SP66	SP28	

第8表 新旧遺構名対照表(4)

地区	旧調査区	旧遺構面	旧遺構名	報告書遺構名	備 考
V	G 7	3面	SP106	SP29	
V	G 4	3面	ST01	ST01	
V	G 4	3面	ST02	ST02	
V	G 4	3面	ST03	ST03	
V	G 4	3面	ST06	ST06	
V	G 4	3面	ST07	ST07	
V	G 6・8	3面	ST01	ST08	
V	G 3	2面	周溝墓 1	SX01、SX01-D01	周溝SD01含む
V	G 3	2面	周溝墓 2	SX02、SX02-D02	周溝SD02含む
V	G 3	2面	周溝墓 3	SX03、SX03-D03	周溝SD03含む
V	G 3	2面	周溝墓 4	SX04、SX04-D04	周溝SD04含む
V	G 3	2面	周溝墓 5	SX05、SX05-D05	周溝SD05含む
V	G 3	2面	周溝墓 6	SX06、SX06-D06	周溝SD06含む
V	G 3	2面	周溝墓 7	SX07、SX07-D07	周溝SD07含む
V	G 1	2面	SX01	SX08	
V	G 1	2面	SX02	SX09	
V	G 4	3面	SX01	SX10	
V	G 6・8	3面	SX01	SX11	
V	G 1	2面	集石群	南東部集石群	
V	G 1	2面	集石15	集石15	
V	G 1	2面	集石16	集石16	
V	G 1	2面	集石17	集石17	
V	G 3	2面	集石18	集石18	
V	G 1	2面	集石仮26	集石26	
V	G 1	2面	集石仮27	集石27	
V	G 4	2面	集石 1	集石28	
V	G 4	3面	集石 2	集石29	
V	G 4	3面	集石 3 上位	集石30	
V	G 4	3面	集石 3 下位	集石31	
V	G 4	3面	集石 4	集石32	
V	G 4	3面	ST04	ST04	集石32下部
V	G 4	3面	ST05	ST05	集石32下部
V	G 4	3面	集石 5	集石33	
V	G 4	3面	SX03	SX12	集石33下部
V	G 5	2面	集石 1	集石34	
V	G 7	3面	集石 1	集石35	
V	G 7	3面	集石 2	集石36	
V	G 6・8	3面	集石 1	集石37	

第9表 新旧遺構名対照表 (5)

写真図版



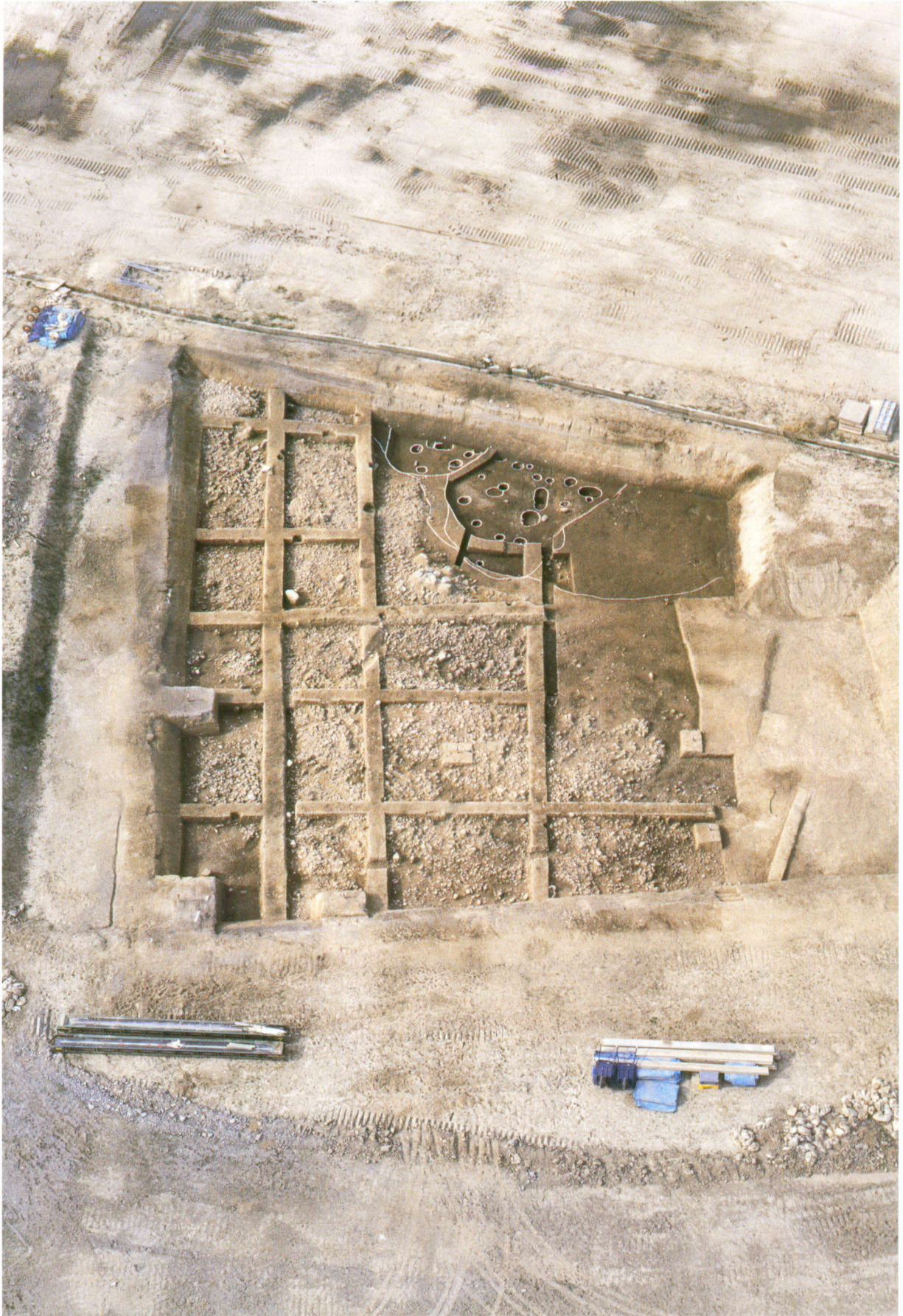
遺跡遠景（南から）



遺跡遠景（東から）



IV区（旧F1区）第2面遠景（東から）



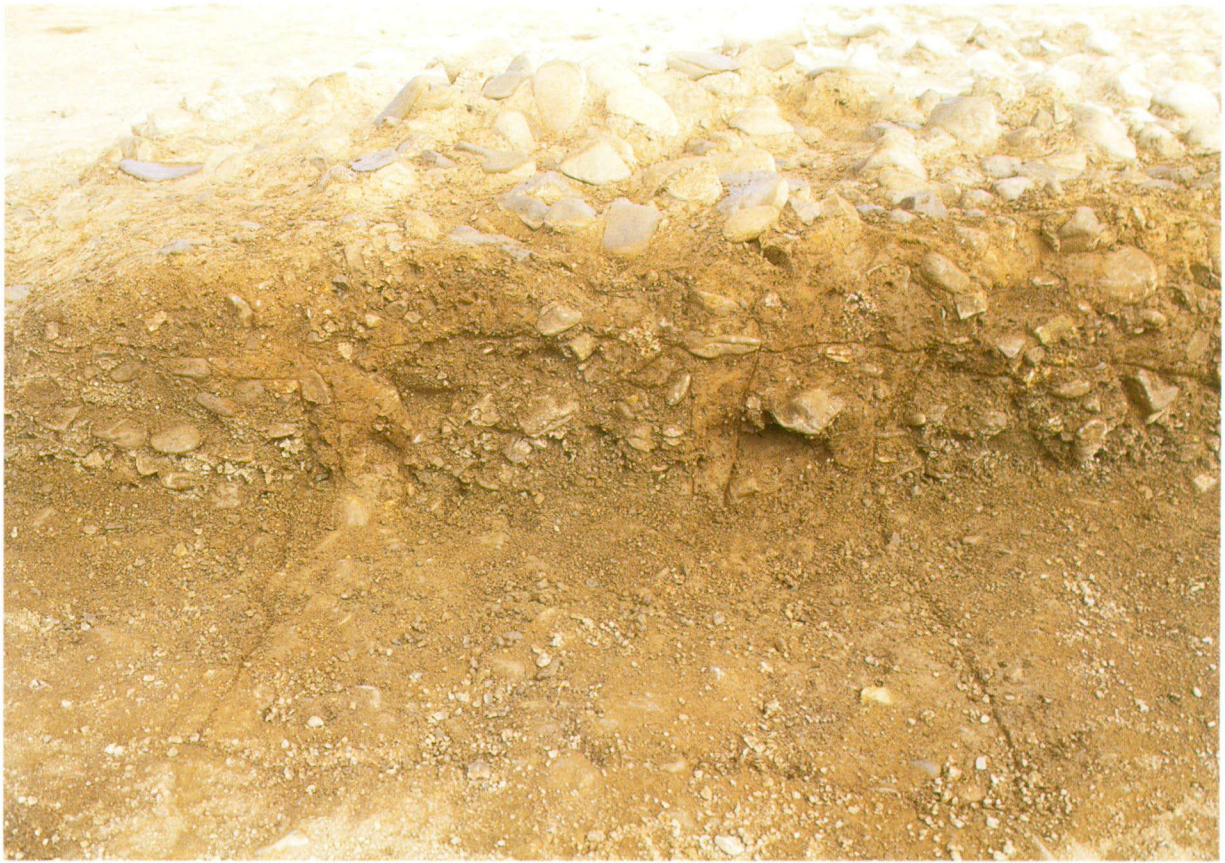
IV区（旧F2区）第2面集石群検出状況（東から）



Ⅳ区（旧F2区）第2面東壁土層（奥の盛り上がりが集石25、西から）



Ⅳ区（旧F2区）第2面南壁土層（隅の盛り上がりが集石19、北から）



IV区第2面集石24下部遺構 (SK01) 断面 (南から)



IV区第2面集石群出土遺物



V区第2面出土遺物



Ⅲ区第2面ST01・02検出状況（南東から）



Ⅲ区第2面集石1・3土層断面（東から）



Ⅲ区第2面ST01土層断面（南東から）



Ⅲ区第2面ST01土層断面（西部、南東から）



Ⅲ区第2面集石1土層断面（東部、北から）



Ⅲ区第2面集石1・3土層断面（北部、東から）



Ⅲ区第2面集石1・3土層断面（南部、東から）



Ⅲ区第2面集石1・3土層断面（西部、北から）



Ⅲ区第2面ST03検出状況（西から）



Ⅲ区第2面ST03検出状況（南西から）



Ⅲ区第2面ST03土層断面（南から）



Ⅲ区第2面ST03南北ベルト除去後土層断面（南から）



Ⅲ区第2面集石2・5土層断面（南部、南東から）



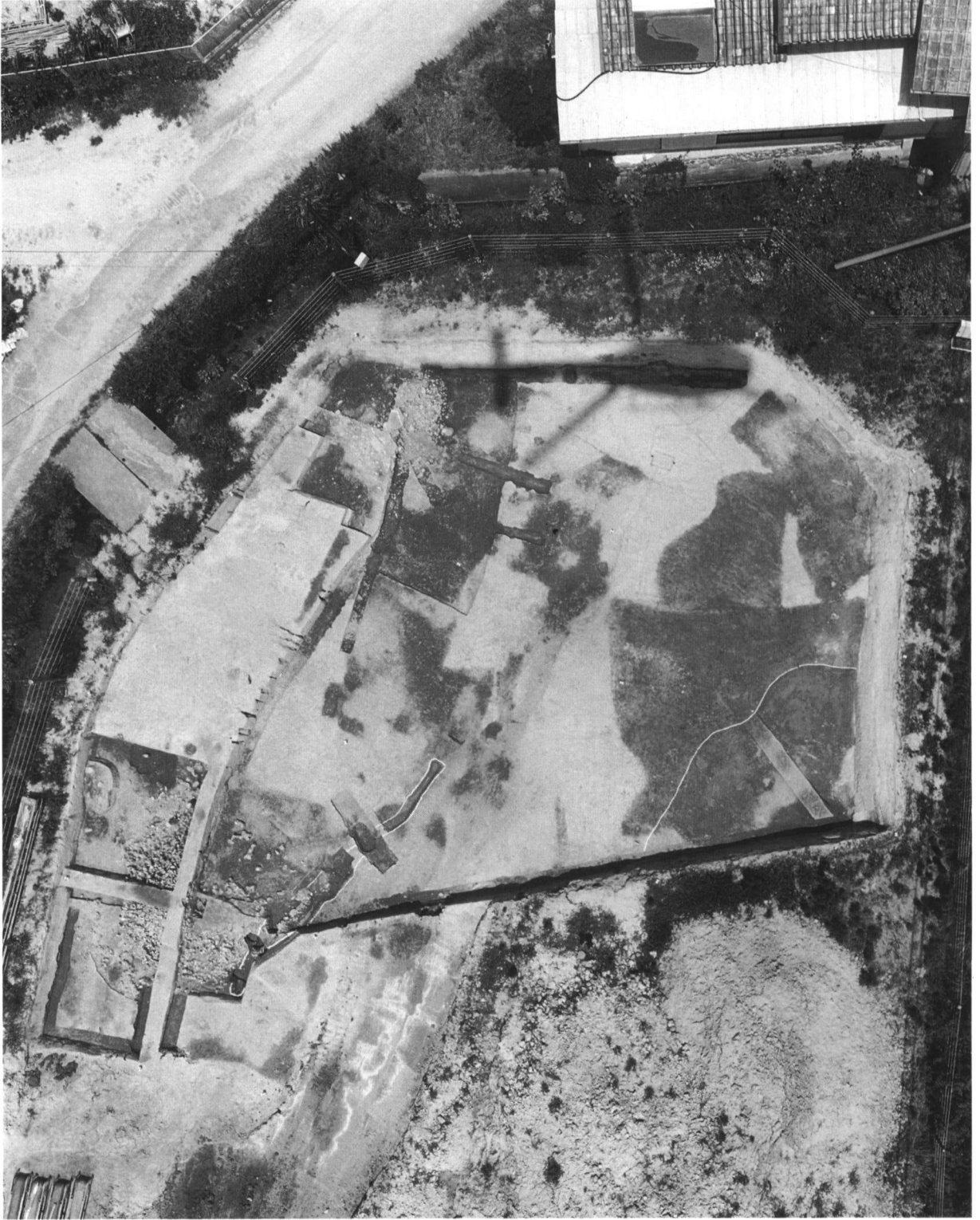
Ⅲ区第2面集石2・5土層断面（北部、東から）



Ⅲ区第2面集石5下位SK01検出状況（西から）



Ⅲ区第2面集石5下位SK01土層断面（南東から）



Ⅲ区（旧E1区）第2面全景



Ⅲ区第2面ST01・02検出状況（北西から）



Ⅲ区第2面ST01・02完掘状況（南東から）



Ⅲ区第2面ST03検出状況（北から）



Ⅲ区第2面ST03検出状況（東から）



Ⅲ区第2面ST03検出状況（南から）



Ⅲ区第2面ST03土層断面（西から）



Ⅲ区第2面集石1・3検出状況（北から）



Ⅲ区第2面集石1・3検出状況（中央に集石3、西から）



Ⅲ区第2面集石1・3検出状況（手前に集石1、土層ベルト内に集石3、東から）



Ⅲ区第2面集石1・3土層断面（東から）



Ⅲ区第2面集石1 遺物出土状況（南から）



Ⅲ区第2面集石1 遺物（184）出土状況（東から）



Ⅲ区第2面集石2・5検出状況（南から）



Ⅲ区第2面集石2・5作業風景（東から）



Ⅲ区第2面集石2遺物出土状況（中央部で土器が集中、東から）



Ⅲ区第2面集石2遺物（440）出土状況（南から）



Ⅲ区第2面集石5中央礫検出状況（南西から）



Ⅲ区第2面集石5検出状況（中央礫の除去後）